

一般国道8号

柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ

東原町遺跡

下沖北遺跡Ⅱ

2005

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道8号

柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ

ひがし はら まち
東原町遺跡
しも おき きた
下沖北遺跡Ⅱ

2005

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団



東原町遺跡 珠洲焼壺と埋納錢



珠洲焼壺と古錢・木蓋

序

一般国道8号は、新潟市を起点として京都市に至る、総延長約590kmの本州日本海側を縦貫する主要幹線道路です。近年、柏崎市周辺では、産業・経済の変化により市街地が大きく郊外に拡大し、商業地、宅地化の進行に伴う交通量が目立って増加してきました。柏崎市街地では、1日24,000台もの交通量になり、ラッシュ時の自動車の走行速度が20km以下という、慢性的な渋滞が多く見られるようになりました。

そこで、柏崎市内の安全で円滑な交通を確保するために、一般国道8号柏崎バイパスの建設が計画されました。このバイパスは、柏崎市大字長崎～大字鯨波間、延長11.0kmで計画され、現道に集中している交通を分散し、柏崎市内の交通混雑を緩和することが目的です。さらに、柏崎バイパスの建設により、観光産業などの地域開発の支援に寄与するものと期待されています。

本書は、この一般国道8号柏崎バイパス建設に先立ち、平成15・16年度に実施した東原町遺跡と、平成16年度に実施した下沖北遺跡の発掘調査報告書です。下沖北遺跡の発掘調査は平成14年度にも実施し、その分については報告書を刊行済みです。

調査の結果、東原町遺跡では、掘立柱建物跡や鍛冶関連遺構、土師質土器が大量廃棄された土坑、珠洲焼の壺に埋納された10,674枚に及ぶ渡来銭、井戸跡や畝状遺構などが検出され、13～14世紀にかけての集落を知る上で、貴重な資料を得ることができました。下沖北遺跡では、古代の調査で、鶴川の自然堤防上に竪穴住居が見つかり、その周辺から製塩土器が出土しています。また、中世の調査では水田跡が見つかりました。水田の時期は13～14世紀頃で、平成14年度に調査した集落跡の年代とほぼ一致します。水田などの生産の場が、集落などの居住の場とともに確認できる遺跡は県内でもあまり多いわけではありません。今後、中世の集落を考える際の貴重な資料になるものと思われます。

今回の調査結果が、地域の歴史を解明するための研究資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大なご協力とご援助を賜った柏崎市教育委員会、ならびに地元住民の方々、また、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別のご高配を賜った国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

新潟県教育委員会

教育長　板屋越　麟一

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県柏崎市東原町字原 19 番地 1 ほかに所存する東原町遺跡及び、新潟県柏崎市大字下方字下沖 38 番地 1 ほかに所存する下沖北遺跡の発掘調査記録である。
- 2 本調査は一般国道 8 号柏崎バイパスの建設に伴い国土交通省から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、発掘調査は調査主体である県教委が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に委託し、東原町遺跡を平成 15（2003）年 4 月 7 日から 10 月 31 日、平成 16（2004）年 4 月 12 日から 6 月 18 日に、下沖北遺跡を平成 16（2004）年 6 月 10 日から 11 月 18 日に実施した。
- 3 出土遺物及び調査・整理作業に係わる各種資料は、一括して県教委が保管・管理している。
- 4 遺物の注記は、東原町遺跡の平成 15 年度分については「ヒハラ」、平成 16 年度分は「04ヒハラ」、下沖北遺跡については調査年度と略記号を合わせ「04 下オキ北」とし、出土地点や層位を続けて記入した。
- 5 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 6 遺構番号は種別に係わりなく通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 7 引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 8 調査成果の一部は、東原町遺跡現地説明会（平成 15 年 10 月 26 日）、遺跡発掘調査報告会（平成 16 年 3 月 7 日・平成 17 年 3 月 6 日）などで公表しているが、本報告書の記述をもって正式な報告とする。
- 9 本報告書の作成にあたり、航空写真撮影・遺構の図化・自然科学分析は、以下の機関に委託した。

| | 航空写真撮影 | 遺構の図化 | 自然科学分析 |
|-------|--------------------------------------|---------|--|
| 東原町遺跡 | 国際航業株式会社（H15 年度） 株式会社イビソク（H16 年度） | 株式会社栄技術 | 株式会社パレオ・ラボ 株式会社パリノ・サーヴェイ 独立行政法人 国立科学博物館 馬場悠男 梶ヶ山真里 |
| 下沖北遺跡 | 株式会社イビソク | 株式会社栄技術 | 株式会社パレオ・ラボ |

- 10 遺構図のトレース及び各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託して編集をした。遺物写真撮影はデジタルカメラ（ニコン D100・D70）で撮影し、デジタル化した遺構写真と合わせて編集した。なお、図版作成・編集作業に係わり、業者に支給した資料は以下のとおりである。

本文・挿図：テキスト形式・Excel 形式のデータ、トレース原図・貼り込み版下

遺構図面図版：原図（修正済）・レイアウト図・文字データ

遺物図面図版：トレース図（個別）・拓影・レイアウト図

写真図版：デジタルデータ（CD）・レイアウト図

- 11 本報告書の執筆は、山崎忠良（埋文事業団調査課 班長）、渡邊弘（同 主任調査員）、河崎昭一（同主任調査員）、高橋知之（同 主任調査員）、清田明子（同 文化財調査員）、近藤慎子（同 文化財調査員）、金内 元（株式会社野上建設興業埋文調査部 調査員）、小村正之（同 調査員）がこれにあたり、編集は山崎が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章 1・第Ⅳ章 1・2A・2B…高橋 第Ⅱ章…近藤・清田 第Ⅲ章 1A・第Ⅳ章 3A・3B…近藤
第Ⅲ章 2C2)・3C2)・3C4)・4C3)…金内 第Ⅲ章 2C4)・3C3)・4C4)…河崎
第Ⅲ章 3B2)・3B3)・4B2)・4B4)…渡邊・山崎・小村 第Ⅲ章 3B5)・4B3)…山崎・小村
第Ⅲ章 3C6)…渡邊 第Ⅲ章 4B5)・第Ⅳ章 2C・3C・5A…小村 第Ⅲ章 5A・第Ⅳ章 4…株式会社
パレオ・ラボ、第Ⅲ章 5B…独立行政法人 国立科学博物館 馬場・梶ヶ山 第Ⅲ章 5C…株式会社パリ
ノ・サーヴェイ、その他…山崎

- 12 発掘調査から本報告書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くのご教示・ご協力を賜った。ここに記して厚くお礼申し上げる。（敬称略　五十音順）

相羽 重徳　五十嵐祐晃　池田 淳子　池田 享　諫山えりか　伊藤 啓雄
伊藤 正敏　大野隆一郎　北原 黙　倉部 繁夫　小林 繁雄　小林 吕二
篠澤 正史　品田 高志　清水 精也　鈴木 公雄　鈴木 一有　関矢 隆
谷川 章雄　田村 大器　鶴巻 康志　三井田忠明　水澤 幸一　矢田 俊文
吉岡 康暢　渡邊三四一　柏崎市教育委員会　国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所

目 次

第Ⅰ章 序 説

| | |
|-----------|---|
| 1 調査に至る経緯 | 1 |
| A 東原町遺跡 | 1 |
| B 下沖北遺跡 | 1 |
| 2 調査と整理作業 | 2 |
| A 調査と体制 | 2 |
| 1) 東原町遺跡 | 2 |
| 2) 下沖北遺跡 | 5 |
| B 整理と体制 | 8 |
| 1) 東原町遺跡 | 8 |
| 2) 下沖北遺跡 | 9 |

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

| | |
|--------------|----|
| 1 遺跡周辺の地理的環境 | 11 |
| 2 遺跡周辺の歴史的環境 | 13 |

第Ⅲ章 東原町遺跡

| | |
|---------------|----|
| 1 調査概要 | 16 |
| A グリッドと調査区の設定 | 16 |
| B 基本層序 | 17 |
| 2 上層の調査 | 17 |
| A 遺構・遺物の検出状況 | 17 |
| B 遺構各説 | 17 |
| 1) 井 戸 | 17 |
| 2) 溝 | 19 |
| 3) 土 坑 | 19 |
| C 遺 物 | 20 |
| 1) 陶磁器類 | 20 |
| 2) 石器・石製品 | 20 |
| 3) ガラス製品 | 21 |
| 4) 木 製 品 | 21 |
| 5) 金 屬 製 品 | 21 |
| 3 中層の調査 | 22 |
| A 遺構・遺物の検出状況 | 22 |
| B 遺構各説 | 22 |
| 1) 掘立柱建物 | 22 |
| 2) 井 戸 | 22 |
| 3) 溝・自然流路 | 25 |
| 4) 盛 土 | 26 |
| 5) 土 坑 | 26 |
| 6) 獣 跡 | 28 |
| 7) 性格不明遺構 | 28 |
| C 遺 物 | 28 |
| 1) 土器・陶磁器 | 28 |
| 2) 石器・石製品 | 30 |
| 3) 木 製 品 | 30 |
| 4) 埋 納 錢 | 31 |
| 5) 金 屬 製 品 | 34 |
| 6) 羽 口 | 34 |
| 4 下層の調査 | 34 |
| A 遺構・遺物の検出状況 | 34 |

| | |
|------------------------|----|
| B 遺構各説 | 35 |
| 1) 挖立柱建物 | 35 |
| 3) 溝 | 36 |
| 5) 水田跡 | 38 |
| C 遺物 | 38 |
| 1) 土器・陶磁器 | 38 |
| 3) 石器・石製品 | 40 |
| 5) 金属製品 | 40 |
| 5 自然科学分析 | 40 |
| A 柏崎バイパス試掘試料のプラント・オパール | 40 |
| 1) はじめに | 40 |
| 3) 分析結果 | 42 |
| B 人骨の分析 | 45 |
| 1) 緒言 | 45 |
| 3) 結語 | 46 |
| C 木製品樹種同定及び鉄滓成分分析 | 47 |
| 1) はじめに | 47 |
| 3) 金属遺物の成分分析 | 49 |
| 6 まとめ | 55 |
| A 土師質土器 | 55 |
| B 遺跡の変遷 | 56 |
| 1) 下層段階 | 56 |
| 3) 上層段階 | 59 |
| C 遺跡の性格 | 60 |

第IV章 下沖北遺跡

| | |
|-------------------|----|
| 1 調査概要 | 61 |
| A グリッドと調査区の設定 | 61 |
| B 基本層序 | 61 |
| 2 上層の調査 | 63 |
| A 遺構・遺物の検出状況 | 63 |
| B 遺構各説 | 64 |
| C 遺物 | 65 |
| 1) 土器・陶磁器 | 65 |
| 3) 木製品 | 65 |
| 2) 石器 | 65 |
| 4) 金属製品 | 66 |
| 3 下層の調査 | 66 |
| A 遺構・遺物の検出状況 | 66 |
| B 遺構各説 | 66 |
| 1) 竪穴住居 | 66 |
| 3) 土坑 | 68 |
| 5) 焼土 | 69 |
| 2) 溝 | 67 |
| 4) ピット | 69 |
| 6) 性格不明遺構 | 70 |
| C 遺物 | 70 |
| 1) 土器 | 70 |
| 3) 石器 | 72 |
| 2) 土製品 | 72 |
| 4 下沖北遺跡のプラント・オパール | 72 |
| A はじめに | 72 |

| | |
|---------------|-----------|
| B 試料と分析方法 | 72 |
| C 分析結果 | 74 |
| D 稲作について | 76 |
| E 遺跡周辺のイネ科植物 | 76 |
| 5 まとめ | 78 |
| A 古代の遺物 | 78 |
| B 中世の水田跡 | 79 |
| 《要 約》 | 82 |
| 《引用文献》 | 83 |
| 《観察表》 | 85 |

挿図目次

| | |
|--|----|
| 第1図 東原町遺跡 調査範囲・トレンチ位置図 | 3 |
| 第2図 下沖北遺跡 試掘・確認調査トレンチ位置図 | 6 |
| 第3図 下沖北遺跡 本発掘調査対象範囲と平成14年度・平成16年度本発掘調査範囲 | 6 |
| 第4図 東原町遺跡・下沖北遺跡の位置と周辺の遺跡 | 12 |
| 第5図 東原町遺跡 グリッド設定図 | 16 |
| 第6図 東原町遺跡 基本層序 | 18 |
| 第7図 柏崎バイパス試掘試料採取位置図 | 41 |
| 第8図 柏崎バイパス試掘A地点のプラント・オバール分布図 | 43 |
| 第9図 柏崎バイパス試掘B地点のプラント・オバール分布図 | 43 |
| 第10図 柏崎バイパス試掘試料のプラント・オバール | 44 |
| 第11図 東原町遺跡 SK012出土人骨 | 46 |
| 第12図 東原町遺跡 検出樹種の顕微鏡写真 | 52 |
| 第13図 東原町遺跡 楕型鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 | 53 |
| 第14図 東原町遺跡 流状滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 | 53 |
| 第15図 東原町遺跡 鍛造薄片の外観と断面マクロ・ミクロ組織 | 53 |
| ミクロ組織 | 54 |
| 第16図 東原町遺跡 湯玉の外観と断面マクロ・ミクロ組織 | 54 |
| 第17図 東原町遺跡 土師質土器の法量分布 | 55 |
| 第18図 下沖北遺跡 土師質土器の法量分布 | 55 |
| 第19図 下沖北遺跡 グリッド設定図 | 61 |
| 第20図 下沖北遺跡 基本層序 | 62 |
| 第21図 下沖北遺跡 試料採取地点付近の土層断面と試料採取層準 | 73 |
| 第22図 下沖北遺跡 試料採取地点位置図 | 73 |
| 第23図 下沖北遺跡 ベルト①のプラント・オバール分布図 | 75 |
| 第24図 下沖北遺跡 ベルト②のプラント・オバール分布図 | 75 |
| 第25図 下沖北遺跡 ベルト③a地点のプラント・オバール分布図 | 75 |
| 第26図 下沖北遺跡 ベルト③b地点のプラント・オバール分布図 | 75 |
| 第27図 下沖北遺跡 ベルト④のプラント・オバール分布図 | 76 |
| 第28図 下沖北遺跡のプラント・オバール | 77 |
| 第29図 下沖北遺跡の中世の遺構配置 | 80 |

表目次

| | |
|---------------------------------|----|
| 第1表 土師質土器皿の分類表 | 28 |
| 第2表 東原町遺跡埋納銭一覧表(1) | 32 |
| 第3表 東原町遺跡埋納銭一覧表(2) | 33 |
| 第4表 柏崎バイパス試掘試料1g当たりのプラント・オバール個数 | 43 |
| 第5表 試料一覧及び調査項目 | 49 |
| 第6表 成分分析結果 | 50 |
| 第7表 SB1203検出の鍛冶関連遺物 | 57 |
| 第8表 SK106出土土師質土器の残存率 | 57 |
| 第9表 SX091出土土師質土器の残存率 | 58 |

図版目次

[図面図版]

- 図版 1 東原町遺跡 上層全体図
 図版 2 東原町遺跡 上層分割図 (1)
 図版 3 東原町遺跡 上層分割図 (2)
 図版 4 東原町遺跡 上層分割図 (3)
 図版 5 東原町遺跡 上層個別図 (1)
 図版 6 東原町遺跡 上層個別図 (2)
 図版 7 東原町遺跡 中層全体図
 図版 8 東原町遺跡 中層分割図 (1)
 図版 9 東原町遺跡 中層分割図 (2)
 図版 10 東原町遺跡 中層分割図 (3)
 図版 11 東原町遺跡 中層個別図 (1)
 図版 12 東原町遺跡 中層分割図 (4)
 図版 13 東原町遺跡 中層分割図 (5)
 図版 14 東原町遺跡 中層分割図 (6)
 図版 15 東原町遺跡 中層分割図 (7)
 図版 16 東原町遺跡 中層分割図 (8)
 図版 17 東原町遺跡 中層分割図 (9)
 図版 18 東原町遺跡 中層個別図 (2)
 図版 19 東原町遺跡 中層個別図 (3)
 図版 20 東原町遺跡 中層個別図 (4)
 図版 21 東原町遺跡 中層個別図 (5)
 図版 22 東原町遺跡 中層個別図 (6)
 図版 23 東原町遺跡 中層個別図 (7)
 図版 24 東原町遺跡 中層個別図 (8)
 図版 25 東原町遺跡 中層個別図 (9)
 図版 26 東原町遺跡 下層・最下層全体図
 図版 27 東原町遺跡 下層分割図 (1)
 図版 28 東原町遺跡 下層分割図 (2)
 図版 29 東原町遺跡 下層分割図 (3)
 図版 30 東原町遺跡 下層分割図 (4)
 図版 31 東原町遺跡 下層分割図 (5)
 図版 32 東原町遺跡 下層分割図 (6)
 図版 33 東原町遺跡 下層分割図 (7)
 図版 34 東原町遺跡 下層個別図 (1)
 図版 35 東原町遺跡 下層分割図 (8)
 図版 36 東原町遺跡 下層分割図 (9)
 図版 37 東原町遺跡 下層個別図 (2)
 図版 38 東原町遺跡 下層個別図 (3)
 図版 39 東原町遺跡 下層個別図 (4)
 図版 40 東原町遺跡 下層個別図 (5)
 図版 41 東原町遺跡 土器・陶磁器 (1)
 図版 42 東原町遺跡 土器・陶磁器 (2)

- 図版 43 東原町遺跡 土器・陶磁器 (3)
 図版 44 東原町遺跡 土器・陶磁器 (4) 士製品
 図版 45 東原町遺跡 石器・石製品 (1)
 図版 46 東原町遺跡 石器・石製品 (2) ガラス製品
 図版 47 東原町遺跡 木製品 (1)
 図版 48 東原町遺跡 木製品 (2)
 図版 49 東原町遺跡 木製品 (3)
 図版 50 東原町遺跡 埋納錢 (1)
 図版 51 東原町遺跡 埋納錢 (2)
 図版 52 東原町遺跡 埋納錢 (3)
 図版 53 東原町遺跡 埋納錢 (4)
 図版 54 東原町遺跡 埋納錢 (5)
 図版 55 東原町遺跡 埋納錢 (6)
 図版 56 東原町遺跡 埋納錢 (7)
 図版 57 東原町遺跡 埋納錢 (8) 金属製品 (1)
 図版 58 東原町遺跡 金属製品 (2) 羽口
 図版 59 下沖北遺跡 全体図
 図版 60 下沖北遺跡 上層分割図
 図版 61 下沖北遺跡 上層個別図
 図版 62 下沖北遺跡 下層全体図
 図版 63 下沖北遺跡 下層分割図 (1)
 図版 64 下沖北遺跡 下層分割図 (2)
 図版 65 下沖北遺跡 下層個別図 (1)
 図版 66 下沖北遺跡 下層個別図 (2)
 図版 67 下沖北遺跡 土器・陶磁器 (1)
 図版 68 下沖北遺跡 土器・陶磁器 (2)
 図版 69 下沖北遺跡 土器・陶磁器 (3) 石器 木製品 錢貨

[写真図版]

- 図版 70 東原町遺跡 遺跡近景 (1)
 図版 71 東原町遺跡 遺跡近景 (2), 基本層序
 図版 72 東原町遺跡 C区 上層 井戸・溝
 図版 73 東原町遺跡 上層 土坑 (1)
 図版 74 東原町遺跡 上層 土坑 (2) ほか
 図版 75 東原町遺跡 中層 B・C区
 図版 76 東原町遺跡 中層 掘立柱建物・井戸 (1)
 図版 77 東原町遺跡 中層 井戸 (2)
 図版 78 東原町遺跡 中層 井戸 (3)
 図版 79 東原町遺跡 中層 井戸 (4)
 図版 80 東原町遺跡 中層 溝 (1)
 図版 81 東原町遺跡 中層 溝 (2), 盛土・土坑 (1)
 図版 82 東原町遺跡 中層 土坑 (2)
 図版 83 東原町遺跡 中層 土坑 (3)

- 図版84 東原町遺跡 中層 土坑(4)
- 図版85 東原町遺跡 中層 土坑(5)・畝跡・SX091
- 図版86 東原町遺跡 下層 B～D区
- 図版87 東原町遺跡 下層 A・B区
- 図版88 東原町遺跡 下層 挖立柱建物・井戸(1)
- 図版89 東原町遺跡 下層 井戸(2)
- 図版90 東原町遺跡 下層 井戸(3)・溝
- 図版91 東原町遺跡 下層 土坑(1)
- 図版92 東原町遺跡 下層 土坑(2)
- 図版93 東原町遺跡 下層 土坑(3)・ビットなど
- 図版94 東原町遺跡 土器・陶磁器(1)
- 図版95 東原町遺跡 土器・陶磁器(2)
- 図版96 東原町遺跡 土器・陶磁器(3)
- 図版97 東原町遺跡 土器・陶磁器(4) 土製品
- 図版98 東原町遺跡 石器・石製品 ガラス製品
- 図版99 東原町遺跡 木製品
- 図版100 東原町遺跡 埋納錢
- 図版101 東原町遺跡 金属製品 羽口
- 図版102 下沖北遺跡 遺跡近景 上層 3区
- 図版103 下沖北遺跡 基本層序 上層 水田
- 図版104 下沖北遺跡 下層 3・4区
- 図版105 下沖北遺跡 下層 竪穴住居・溝(1)
- 図版106 下沖北遺跡 下層 溝(2)
- 図版107 下沖北遺跡 下層 溝(3)
- 図版108 下沖北遺跡 下層 土坑(1)
- 図版109 下沖北遺跡 下層 土坑(2)・ビット
- 図版110 下沖北遺跡 下層 焼土・性格不明遺構
- 図版111 下沖北遺跡 土器・陶磁器(1)
- 図版112 下沖北遺跡 土器・陶磁器(2)
- 図版113 下沖北遺跡 土器・陶磁器(3)・その他

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯

現在、一般国道8号が通過する柏崎市中心部は、市街化の進展と交通量の増加に伴い、慢性的な交通渋滞を引き起こしている。一般国道8号柏崎バイパスの建設は、交通渋滞の緩和とそれに伴う都市機能の活性化を目的に柏崎市大字長崎～大字鯨波間、延長11.0kmで計画されたものである。

A 東原町遺跡

国土交通省は一般国道8号柏崎バイパスの着工に向けて、県教委に柏崎市東原町～茨目地内における埋蔵文化財の分布調査を依頼した。県教委の委託を受けた埋文事業団が平成14（2002）年7月1日に分布調査を実施したところ、調査範囲内9か所から古代・中世・近世の遺物が採取された。この結果、全域にわたり、試掘調査による遺跡の存在確認が必要であると県教委に報告した。

国土交通省の依頼を受けて、県教委は埋文事業団に調査を委託し、埋文事業団は平成14年11～12月・平成15年3月の2回にわたり、柏崎市下原地区の45,970m²を対象に確認調査を実施した。調査の結果、鰐石川左岸の自然堤防上で古代・中世の遺物・遺構を確認し、平成14年9月の柏崎市教育委員会（以下、市教委）の試掘調査〔柏崎市教育委員会2002a〕で周知された「東原町遺跡」の広がりと判断し、鰐石川左岸の自然堤防上を中心とした面積14,000m²について本発掘調査が必要であると県教委に報告した。

国土交通省・県教委・埋文事業団の三者で調査工程について協議し、平成15（2003）年4月より本発掘調査を行うことを決定した。

B 下沖北遺跡

建設省（現、国土交通省）は平成12（2000）年11月、一般国道8号柏崎バイパスの着工に向けて、県教委に柏崎市元城町字宮川～大字剣野字香積寺沢地内における埋蔵文化財の分布調査を依頼した。県教委の委託を受けた埋文事業団が平成12年12月19日に分布調査を実施したところ、鶴川右岸の広範囲で古代・中世・近世の遺物が採取された。この結果、鶴川右岸から横山川までの間にわたり、試掘調査による遺跡の存在確認が必要であると県教委に報告した。

国土交通省の依頼を受けて、県教委は埋文事業団に調査を委託し、埋文事業団は平成13（2001）年8～9月に約21,888m²を対象に試掘調査を実施した。支障物件により調査できなかった範囲もあったが、多くのトレーンチから古代・中世を中心とする遺物が出土し、溝・土坑・ピットなどの遺構が検出されたトレーンチもあった。この結果、調査対象地の東側の一部を除いて本発掘調査が必要となり、さらに47～52トレーンチでは、上層で古代・中世、下層で古墳時代・古代の2層調査が必要であると県教委に報告した。なお、新遺跡の名称は、小字名が「下沖」であったが、既に「下沖遺跡」が周知されているため、市教委と協議の結果「下沖北遺跡」とした。平成14年度の本発掘調査（調査面積6,500m²）に並行して10月に、平成13年度に支障物件により調査できなかった範囲3,100m²を対象に試掘調査を実施した。その結果、

2 調査と整理作業

遺物・遺構が認められなかつたため本発掘調査を要しないと県教委に報告した。平成13・14年度の2年にわたる試掘調査の結果、一部で2層調査(47～52トレンチ)が必要となり、最終的に本発掘調査必要面積は延22,190m²と県教委に報告した。

国土交通省・県教委・埋文事業団の三者で調査工程について協議し、埋文事業団は、調査区東側15,690m²について、道路法線センター杭No.375～385より北側を平成16年度に、南側を平成17年度に本発掘調査を実施する予定となつた。平成16年度の本発掘調査は6月より開始した。調査中に遺物・遺構が希薄であることが確認されたため、平成17年度調査予定範囲について確認調査を実施した(A～Mトレンチ)。調査の結果、遺物・遺構とともに希薄であったことから、県教委と埋文事業団で協議し、平成17年度本発掘調査予定範囲を限定した上で、平成16年度に本発掘調査を実施することになった(調査面積9,010m²)。

2 調査と整理作業

A 調査と体制

1) 東原町遺跡

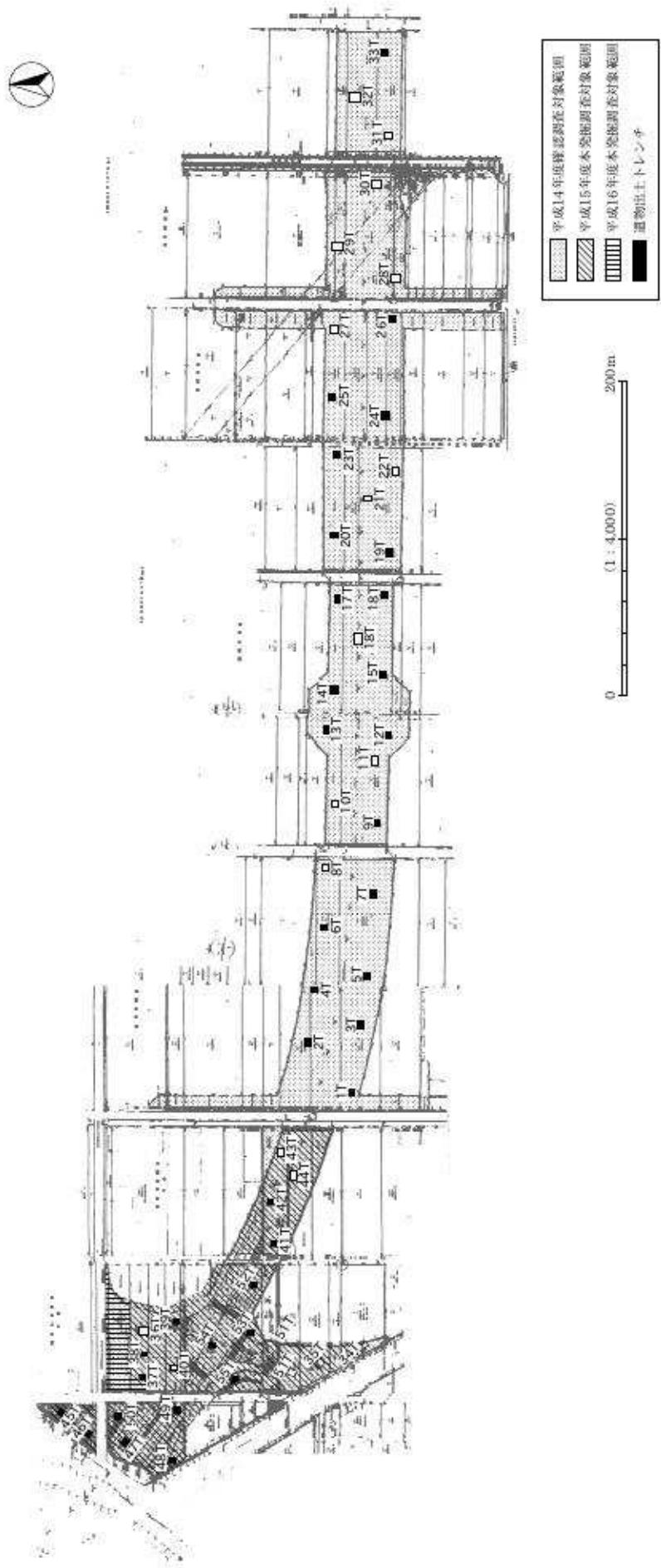
確認調査(第1・6図)

平成14(2002)年11月11日～12月6日・平成15(2003)年3月3日～3月7日に埋文事業団が実施した。対象範囲45,970m²に任意にトレンチを設定し、重機及び人力で徐々に掘り下げ、遺構・遺物の有無を精査する方法が採られた。調査の結果、鮎石川の自然堤防上の現地表下0.6～1.1mで中世の遺物包含層、同1.2mで古代の遺物包含層を確認した。出土した遺物は土師質土器と珠洲焼がほとんどで、45・49トレンチでは中世の溝状遺構やピットが検出された。また41トレンチでは現地表下0.7mで土師質土器、同1.2mで古代の土師器が出土し、部分的に遺物包含層が2層存在する可能性が指摘された(41～44トレンチ)。確認調査の結果、本発掘調査必要範囲は14,000m²となつた。

本発掘調査(第1図)

平成15年度 平成15年度の遺構番号は、ピットについては大グリッドごとの通し番号、その他の遺構については全て通し番号とした。4月7日から基本層序の確認を行つた。4月22日から0.4m³の重機を使用し、調査員の指示のもと、A区から表土除去を開始した。その後B区・D区・C区の順に表土除去を行い、作業員は5月6日から本格的に投入した。調査が進むにつれ、III層からも遺物が出土し、遺構が確認できることが判明した。さらにIV層上面でも遺構が検出できることが判明したことから、IV層検出の遺構を上層、V層検出の遺構を中層、VI層検出の遺構を下層とした。またD区(41～44トレンチ)ではVII層が古代の遺物包含層、VIII層がその確認面となつてることから、VIII層検出の遺構を最下層とした。

上層は5～6月にかけて近世の墓坑と考えられるSK011・012などの調査を行つた。中層は5～6月にかけてSK069・090・109・SX091の調査を行つた。このうちSK090の中には10,674枚の錢貨が納められており、SX091は土師質土器を廃棄した遺構である。8～9月にはSE155などの井戸やSD213などの区画溝の調査を行つた。また9月には歟跡の調査を行つた。下層は9月下旬～10月にSD510などの区画溝、10月に井戸の調査を行つた。最下層の調査は下層の調査と並行して、10月に行つた。遺構はSD830など4基と少ない。比較的浅い遺構が多く、遺物は出土していない。包含層からは磨耗した土師器が少量出土している。そのため以下では、最下層の調査は扱わないこととする。10月26



図位置・トレント調査範囲・跡遺町原東第1

2 調査と整理作業

日には現地説明会を行い、10月31日には調査を終了した。

平成16年度 平成16年度調査区は支障物件により平成15年度調査できなかった範囲で、遺跡東側に当たる。ここには平成15年まで建物が位置していたため、Ⅲ層まで搅乱されている地点も確認された。なお平成16年度の遺構番号は、調査年04と遺構略号を合わせた上で、種別に関係なく通し番号とし、中層は001～050、下層は051以降を使用した。なお、上層と最下層で遺構は確認できない。

4月12日から基本層序の確認を行った。4月19日から0.4m³の重機を使用し、調査員の指示のもと、Ⅱ層までの表土除去を開始した。4月22日からは作業員を投入し、包含層（Ⅲ層）掘削を開始した。中層の調査では、5月に入り、盛土や井戸などが検出されたが、調査区東側は自然流路（SD108）が位置し、遺構は確認できなかった。5月下旬には中層の調査は終了した。6月上旬には包含層（Ⅳ層）掘削を開始し、下層の調査に着手した。下層の調査では井戸やピットなどが検出されたが、中層同様調査区東側はSD108が位置し、遺構は確認できない。6月下旬には調査は終了した。

調査体制

試掘調査

調査期間 平成14（2002）年11月11日～12月6日・平成15（2003）年3月3日～3月7日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総 括 黒井 幸一（埋文事業団事務局長）

管 理 長谷川司郎（ 同 総務課長）

庶 務 高野 正司（ 同 主任）

調査総括 岡本 郁栄（ 同 調査課長）

調査指導 高橋 保（ 同 国土交通省担当課長代理）

調査担当 尾崎 高宏（ 同 班長）

調査職員 田中 一穂（ 同 嘱託員）

本発掘調査（平成15年度）

調査期間 平成15（2003）年4月7日～10月31日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総 括 黒井 幸一（埋文事業団事務局長）

管 理 長谷川二三夫（ 同 総務課長）

庶 務 高野 正司（ 同 主任）

調査総括 藤巻 正信（ 同 調査課長）

調査指導 田海 義正（ 同 国土交通省担当課長代理）

調査担当 山本 肇（ 同 班長）

調査職員 渡邊 弘（ 同 主任調査員）

河崎 昭一（ 同 主任調査員）

清田 明子（ 同 文化財調査員）

金内 元（株式会社野上建設興業埋文調査部調査員）

細谷 隆（ 同 4月～6月）

小村 正之 () 同 6月～10月)

本発掘調査(平成16年度)

調査期間 平成16(2004)年4月12日～6月18日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 板屋越麟一)

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総 括 黒井 幸一(埋文事業団事務局長)

管 理 長谷川二三夫(同 総務課長)

庶 務 高野 正司(同 主任)

調査総括 藤巻 正信(同 調査課長)

調査指導 田海 義正(同 本発掘調査担当課長代理)

調査担当 山崎 忠良(同 班長)

調査職員 河崎 昭一(同 主任調査員)

近藤 慎子(同 文化財調査員)

小村 正之(株式会社野上建設興業埋文調査部調査員)

2) 下沖北遺跡

試掘調査(第2図)

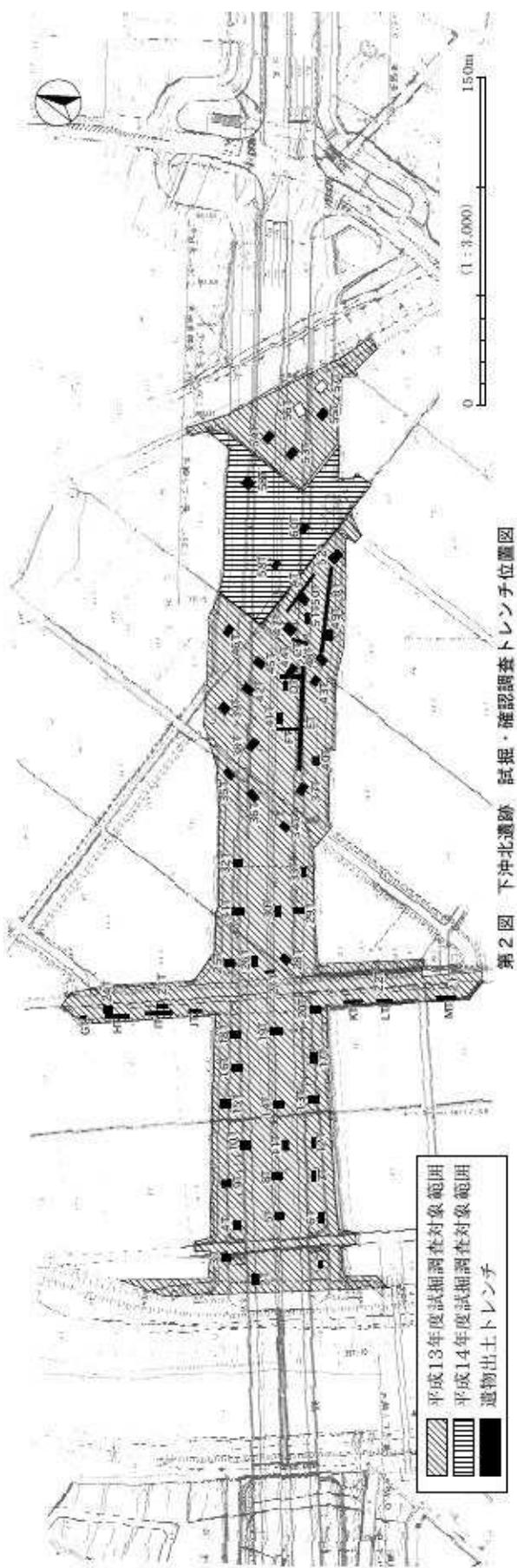
平成13年度 平成13(2001)年8月21日～9月7日に埋文事業団が実施した。対象範囲21,888m²に任意にトレーナーを設定し、重機及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認する方法が採られた。調査の結果、現地表下0.2～0.3mで古代・中世の遺物包含層が確認された。遺物は対象範囲のほぼ全域で出土したが、西側(1～27トレーナー)での出土が多い。出土した遺物は須恵器や土師質土器、珠洲焼で、土坑やピットなどの遺構も確認された。49・50・52トレーナーでは、現地表下0.6～1.0mで古墳時代・古代の遺物包含層が確認でき、47～52トレーナーでは遺物包含層が2層存在する可能性が指摘された。試掘調査の結果、遺物出土量の少ない東側(53～57トレーナー)を除く延22,190m²を本発掘調査必要範囲とした。

平成14年度 平成14(2002)年10月3・4日にかけて、平成13年度に支障物件により試掘調査ができなかった範囲3,100m²を対象に埋文事業団が実施した。対象範囲に任意にトレーナーを設定し、重機及び人力で徐々に掘り下げ、遺構・遺物の有無を精査する方法が採られた。調査の結果、遺構・遺物は認められず、本発掘調査必要範囲からは除外された。

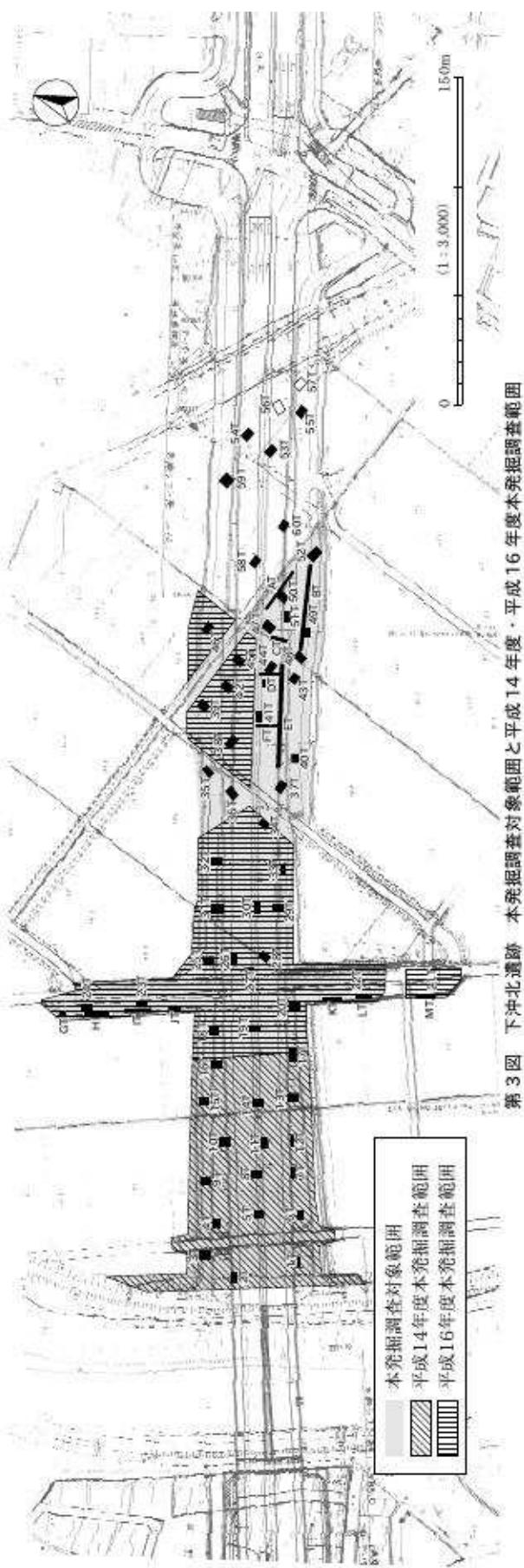
本発掘調査(第3・20図)

本発掘調査は平成14年度に西側部分が終了し、平成16年度に中央北側、平成17年度に中央南側を調査する予定であったが、平成17年度調査予定範囲については範囲を限定した上で、平成16年度に合わせて調査を行った。ここでは平成16年度調査について記述する。なお遺構番号は調査年04と遺構略号を合わせた上で、遺構の種別に関係なく通し番号とした。

6月10日から0.4m³の重機を使用し、調査員の指示のもと、2区・1区・3区・4区・5区の順に表土除去を開始した。6月24日から作業員を投入し、2区・1区から包含層掘削を開始した。7月に入り、2・3区で中世の水田跡が検出されたものの、遺構・遺物の希薄な状況が確認できた。そこで平成17年度調査予定範囲も調査することを前提にして、遺構・遺物の状況を把握するため、8月16日～20日・9



第2図 下沖北遺跡 試掘・確認調査トレンチ位置図



第3図 下沖北遺跡 本発掘調査対象範囲と平成14年度・平成16年度本発掘調査範囲

月1日～3日にかけて確認調査を実施した（A～Mトレント）。その結果A～Fトレントでは遺構は確認できず、遺物も土師器が数点出土したのみであるため、本発掘調査必要範囲からは除外した。G～MトレントではG・Mトレントで溝状遺構が検出され、少量ながら古代・中世の遺物が確認された。そこでG～Mトレント部分は本発掘調査を行うこととした。8月以降4・5区の調査に入り、古代の竪穴住居や溝などが検出されるとともに、須恵器や製塙土器も出土した。9月22日に2・3区の航空写真を、11月11日に3～5区の航空写真を撮影した。

調査体制

試掘調査（平成13年度）

調査期間 平成13（2001）年8月21日～9月7日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総 括 須田 益輝（埋文事業団事務局長）

管 理 長谷川司郎（ 同 総務課長）

庶 務 椎谷 久雄（ 同 主任）

調査総括 岡本 郁栄（ 同 調査課長）

調査指導 高橋 保（ 同 国土交通省担当課長代理）

調査担当 澤田 敦（新潟県教育庁文化行政課主任調査員）

調査職員 後藤 孝（埋文事業団調査課主任調査員）

渡邊 弘（ 同 主任調査員）

田中 一穂（ 同 嘱託員）

試掘調査（平成14年度）

調査期間 平成14（2002）年10月3日～10月4日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総 括 黒井 幸一（埋文事業団事務局長）

管 理 長谷川司郎（ 同 総務課長）

庶 務 高野 正司（ 同 主任）

調査総括 岡本 郁栄（ 同 調査課長）

調査指導 高橋 保（ 同 国土交通省担当課長代理）

調査担当 尾崎 高宏（ 同 班長）

調査職員 田中 一穂（ 同 嘱託員）

本発掘調査（平成16年度）

調査期間 平成16（2004）年6月10日～11月18日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総 括 黒井 幸一（埋文事業団事務局長）

管 理 長谷川二三夫（ 同 総務課長）

庶 務 高野 正司（ 同 主任）

2 調査と整理作業

調査総括 藤巻 正信 (同 調査課長)
調査指導 田海 義正 (同 本発掘調査担当課長代理)
調査担当 山崎 忠良 (同 班長)
調査職員 河崎 昭一 (同 主任調査員 6月～9月)
近藤 慎子 (同 文化財調査員)
高橋 知之 (同 主任調査員 9月～11月)
小村 正之 (株式会社野上建設興業埋文調査部調査員)

B 整理と体制

1) 東原町遺跡

平成15年度

遺構図面の整理及び出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業は、調査現場で本発掘調査と並行して行った。遺物は図化できる最低限の復元を行い、実測・拓本作業は6月～翌2月に行った。11月から図版作成、遺物の写真撮影、原稿執筆を行った。

| | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|--------|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| 図面整理 | | | | | | | | | | |
| 水洗・注記 | | | | | | | | | | |
| 接合・復元 | | | | | | | | | | |
| 実測・拓本 | | | | | | | | | | |
| 図版作成 | | | | | | | | | | |
| 遺物写真撮影 | | | | | | | | | | |
| 原稿 | | | | | | | | | | |

整理体制

整理期間 平成15(2003)年11月1日～平成16(2004)年3月31日

整理主体 新潟県教育委員会(教育長 板屋越嶺一)

整理 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 黒井 幸一 (埋文事業団事務局長)
管理 長谷川二三夫 (同 総務課長)
庶務 高野 正司 (同 主任)
整理総括 藤巻 正信 (同 調査課長)
整理指導 田海 義正 (同 国土交通省担当課長代理)
整理担当 山本 肇 (同 班長)
整理職員 渡邊 弘 (同 主任調査員)
河崎 昭一 (同 主任調査員)
清田 明子 (同 文化財調査員)
金内 元 (株式会社野上建設興業埋文調査部調査員)
小村 正之 (同)

平成16年度

遺構図面の整理及び出土遺物の水洗・注記・接合・復元・実測・拓本作業は、調査現場で本発掘調査と

並行して行った。遺物は図化できる最低限の復元を行った。11月下旬から原稿執筆、編集校正を行った。

| | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|-------|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| 図面整理 | | ■ | | | ■ | | | | | | |
| 水洗・注記 | | ■ | ■ | | | | | | | | |
| 接合・復元 | | ■ | ■ | | | | | | | | |
| 実測・拓本 | | | ■ | ■ | | | | | | | |
| 原稿 | | | | | | | ■ | ■ | | | |
| 編集・校正 | | | | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | |

整理体制

整理期間 平成16(2004)年11月19日～平成17(2005)年3月31日

整理主体 新潟県教育委員会(教育長 板屋越嶺一)

整理 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 黒井 幸一(埋文事業団事務局長)

管理 長谷川二三夫(同 総務課長)

庶務 高野 正司(同 主任)

整理総括 藤巻 正信(同 調査課長)

整理指導 田海 義正(同 本発掘調査担当課長代理)

整理担当 山崎 忠良(同 班長)

整理職員 高橋 知之(同 主任調査員)

近藤 慎子(同 文化財調査員)

小村 正之(株式会社野上建設興業埋文調査部調査員)

2) 下沖北遺跡

遺構図面の整理及び出土遺物の水洗・注記・接合・復元・実測・拓本作業は、調査現場で本発掘調査と並行して行った。遺物は図化できる最低限の復元を行った。11月下旬から図版作成、遺物の写真撮影、原稿執筆を行った。

| | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|--------|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| 図面整理 | | | ■ | ■ | | | | | |
| 水洗・注記 | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | | |
| 接合・復元 | | ■ | ■ | ■ | | | | | |
| 実測・拓本 | | ■ | ■ | ■ | | | | | |
| 図版作成 | | | | | ■ | ■ | | | |
| 遺物写真撮影 | | | | | | | ■ | | |
| 原稿 | | | | | | ■ | ■ | | |
| 校正 | | | | | | | | ■ | |

整理体制

整理期間 平成16(2004)年11月19日～平成17(2005)年3月31日

整理主体 新潟県教育委員会(教育長 板屋越嶺一)

整理 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 黒井 幸一(埋文事業団事務局長)

管理 長谷川二三夫(同 総務課長)

庶務 高野 正司 (同 主任)
整理総括 藤巻 正信 (同 調査課長)
整理指導 田海 義正 (同 本発掘調査担当課長代理)
整理担当 山崎 忠良 (同 班長)
整理職員 高橋 知之 (同 主任調査員)
近藤 慎子 (同 文化財調査員)
小村 正之 (株式会社野上建設興業埋文調査部調査員)

第二章 遺跡の位置と環境

1 遺跡周辺の地理的環境

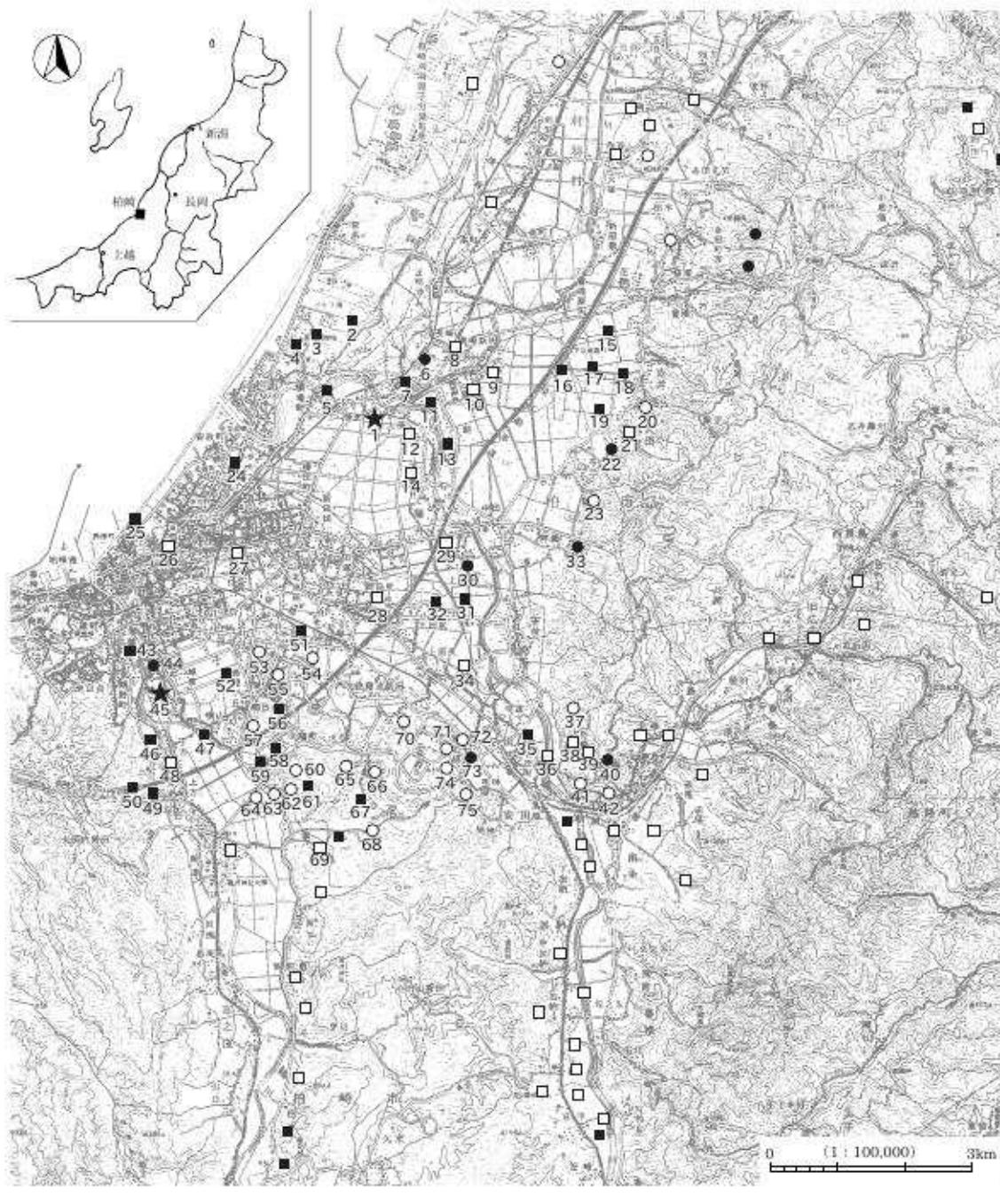
東原町遺跡・下沖北遺跡の立地する柏崎平野は、新潟県南西部に位置する小規模な臨海沖積平野である。主要河川である鮭石川や鶴川は、顕著な扇状地を形成せず、平野内を蛇行して流れている。平野部は、刈羽三山と称される米山・黒姫山・八石山を頂点とする山地や東頸城丘陵によって囲まれ、北西部を日本海に開口する。沿岸部は荒浜砂丘が形成され、その後背地をなす沖積地は特に湿地性の低地となっている。砂丘形成の顕著な時期に河口部が閉ざされると湛水し、「鏡ヶ沖」などと称される湖沼と化した。丘陵縁辺は、中・高位の河岸段丘が分布している。

柏崎平野の成立を辿って行くと、第三紀における褶曲運動により、背斜部分が魚沼丘陵や西山丘陵となり、向斜部分が柏崎平野の基盤となる固く低平な地層となった。最終氷期後は気候の温暖化により海面が上昇し、現在の柏崎平野付近は丘陵に囲まれた入り江のようになった。その後、湾の部分は河川や沿岸流により、土砂が堆積して平坦な地形になり、寒冷期には海面が下降し、その部分が地上に現れ平野となった。そのような状況が2回繰り返され、現在の柏崎平野となる下部柏崎面、上部柏崎面が形成された。また上部柏崎面の形成の際には、荒浜砂丘の古砂丘による堆積も行われ、砂が西山丘陵や柏崎平野の海岸部に堆積し、緩やかな丘陵を形成した。同時に鶴川や鮭石川の上流における侵食、運搬作用により、土砂が河口付近で堆積して最上部柏崎面が形成された。

柏崎平野を取り巻く丘陵・山地は、東頸城丘陵の一部に相当し、米山・黒姫山・八石山の刈羽三山を個々の頂点として北流する鶴川と鮭石川によって分割した、東部・中央部・西部の三区分で考えることができる。東部は、南南西-北北東方向の背斜軸に沿って西山丘陵・曾地丘陵・八石丘陵といった3丘陵が北側から規則的に並び、向斜軸に沿って別山川や長鳥川などの鮭石川の支流が南南西に流路をとる。中央部の地形は、黒姫山を頂点に北へ緩やかに高度を下げ、沖積地に接する一帯には広い中位の河岸段丘が形成されている。西部は、米山を頂点とした傾斜の強い山地が海岸部まで張り出して断崖を形成し、低位・中位・高位の各海岸段丘の形成が顕著である。米山は、今もわずかながら隆起しており、東部・中央部とは異なる地形的な景観を持っている。市街地が広がる沖積平野部の北西面は、日本海の荒波にさらされ、海岸線に沿って柏崎砂丘・荒浜砂丘が横たわっている。この砂丘から丘陵部に至る沖積地は、砂丘後背地としてかなり湿地性が強い低地となり、鮭石川や鶴川などの河川による自然堤防の形成が顕著である。

東原町遺跡は、柏崎平野北西部、鮭石川と別山川の合流地点から約1km下流の鮭石川左岸に位置する。新潟県の河川は上流に地すべり地帯が多く、侵食、運搬作用が盛んである。さらに下流には灌漑用の取水施設が多いため、河川の流れが下流近くで緩やかになり、その結果天井川が形成されやすくなっている。鮭石川もこの例にもれず、平野の形成、遺跡の形成に大きな影響をもたらしている。最上部柏崎面が完成された後も河川の下刻は続き、完成した柏崎面を侵食していった。また、洪水の際の蛇行により平野部では側方侵食が行われ、中流から下流にかけて柏崎面を破壊し、新たに鮭石川面と呼ばれる沖積面を作り出していく。この鮭石川面は鮭石川流域の幅約1kmの狭い範囲にのみ分布する面であるが、この面により鮭石川流域の氾濫原が形成され、両岸の自然堤防にはいくつかの古代及び中世の遺跡が立地している。

1 遺跡周辺の地理的環境



| 番号 | 遺跡名 | 番号 | 遺跡名 | 番号 | 道路名 | 番号 | 遺跡名 | 番号 | 道路名 | 番号 | 遺跡名 |
|----|-----------|----|-------|----|----------|----|--------|----|--------|----|----------|
| 1 | 東原町遺跡 | 14 | 境川原遺跡 | 27 | 四谷遺跡 | 40 | 北条城 | 53 | 谷地樂跡堂塚 | 66 | 大善寺の塚 |
| 2 | 糸浜小学校裏日遺跡 | 15 | 行琢遺跡 | 28 | 小児石遺跡 | 41 | 小坂の塚 | 54 | 平田塚群 | 67 | 蛭井川南道路群 |
| 3 | 糸浜小学校裏A遺跡 | 16 | 野附遺跡 | 29 | 中田久保田原遺跡 | 42 | 宮の入の塚 | 55 | 平田一ツ塚群 | 68 | 下ヶ久保の塚 |
| 4 | 沙鷗山遺跡 | 17 | 壹場遺跡 | 30 | 藤井城 | 43 | 三島神社遺跡 | 56 | 由池古窯跡 | 69 | 谷地製鉄道跡 |
| 5 | 間連橋遺跡 | 18 | 戸口遺跡 | 31 | 前田遺跡 | 44 | 琵琶嶋城 | 57 | 庚申塚の経塚 | 70 | 十三仏塚遺跡の塚 |
| 6 | 岩野城 | 19 | 樺田街道跡 | 32 | 不退寺遺跡 | 45 | 下沖北遺跡 | 58 | 朝田瀬遺跡 | 71 | 明神桜塚 |
| 7 | 宮の浦遺跡 | 20 | 吉井百塚 | 33 | 野屋城 | 46 | 下沖遺跡 | 59 | 藤橋向山遺跡 | 72 | 明神馬塚 |
| 8 | 土合殿屋敷遺跡 | 21 | 本村遺跡 | 34 | 大新田遺跡 | 47 | 茅原遺跡 | 60 | 京ヶ峰の塚 | 73 | 安田城 |
| 9 | 中才見遺跡 | 22 | 矢田城 | 35 | 中道遺跡 | 48 | 鶴屋敷遺跡 | 61 | 香作遺跡 | 74 | 上軒井川経塚 |
| 10 | 下才見遺跡 | 23 | 出口の塚 | 36 | 門田遺跡 | 49 | 鶴巻田遺跡群 | 62 | 香作の塚 | 75 | 長者塚 |
| 11 | 角田遺跡 | 24 | 桜木町遺跡 | 37 | 今熊の百塚 | 50 | 西田遺跡 | 63 | 香作の塚 | | |
| 12 | 上原遺跡 | 25 | 糸浜遺跡 | 38 | 堂の浦遺跡 | 51 | 小峯遺跡 | 64 | 藤橋辻の塚 | | |
| 13 | 鶴下川原遺跡 | 26 | 柏崎街遺跡 | 39 | 今熊榮跡草薙遺跡 | 52 | 茂輪遺跡 | 65 | 西大善寺の塚 | | |

東原町遺跡・下沖北遺跡 ★

古代の道路

中世の道路

城館・山城

塚 ○

第4図 東原町遺跡・下沖北遺跡の位置と周辺の遺跡
(国土地理院 1 : 50,000 「柏崎」平成7年・「岡野町」昭和60年を縮小)

さらに、鯖石川の蛇行を作り出しているものに荒浜砂丘の新砂丘が挙げられる。新砂丘は平安時代以降西山丘陵の南側、鯖石川右岸に大規模な砂丘を作り出し、土砂崩れをしばしば起こして河道の蛇行にさらに拍車をかけていた。東原町遺跡の北側には荒浜砂丘により形成された丘があるが、砂丘が土壤化しているために右岸の破堤は少ない。しかし、左岸には鯖石川と荒浜、柏崎両砂丘により形成された後背湿地が広がり、また別山川と鯖石川の合流地点では水が集中するため、洪水により破堤したり、河道がしばしば替えられていた。合流地点からほど近い東原町遺跡も、河川の氾濫による影響を受けたことが想定される。

下沖北遺跡は、柏崎平野南部の丘陵の縁に沿った沖積地に立地し、柏崎平野の西側を北流する鶴川の河口から約3km上流の右岸に位置する。鶴川は、流域面積112.4km²、全長24.6kmの二級河川である。鶴川はその源を尾神岳に発し、阿相島川・折居川を合わせ、清水谷を経て野田地内で田屋川、さらに芋井川・輕井川とを合わせて、柏崎市街地を貫流し日本海へと注ぐ。かつては複雑な蛇行が見られ、大雨のたびに氾濫し、水害の歴史を繰り返してきた。河口からおおむね3kmほどの範囲を占める鶴川下流域は、東岸域と西岸域とでは対照的な環境にある。東岸は、中位段丘が浸食され島状に沖積地内に浮かぶ地形もあるが、大半は標高が2~4mと低く、湿地性の強い水田地帯となっている。近年では、宅地化も進んでいる。また鶴川沿いには自然堤防が形成され、丘陵や台地の縁辺とともに集落立地の適地となっている。西岸は、米山山塊、前川などのいくつかの小河川によって分断されるが、奥の深い丘陵が広がる。下沖北遺跡付近における鶴川は、昭和期に行われた河川改修により川幅も広くほぼ直線的に緩やかに流れているが、以前は複雑な蛇行が認められる。流路は、遺跡を中心に西方向（丘陵側）に緩やかに湾曲しており、北側約500m程の地点では、北西—南東方向に大きな蛇行が認められる。ここには、越後宇佐美氏の居城である市指定史跡琵琶嶋城跡（現在、柏崎総合高校が位置する）がある。鶴川と横山川の合流点に築城された平城で、西側の鶴川本流と東側から北側へ回り込んで合流する支流の横山川を堀とする。本丸、二の丸、三の丸の区分けに鶴川の蛇行部が利用されている。本遺跡の西側部分で蛇行の振幅は小さくなるものの、南東方向の上流部分では南西—北東方向に不規則な蛇行が再び繰り返されている。これらの蛇行は、更に中流域に広がっている。

2 遺跡周辺の歴史的環境

東原町遺跡は鯖石川左岸、下沖北遺跡は鶴川右岸の自然堤防上及び後背低地にそれぞれ立地する。そこで、鯖石川流域と鶴川流域について、古代から中世までの遺跡を以下で概観する。

鯖石川流域の古代の遺跡としては角田遺跡（11）が挙げられる。この遺跡は鯖石川の自然堤防上に立地し、13棟の掘立柱建物跡や1000基もの柱穴が検出された。さらに、井戸と土坑合わせて38基、須恵器や箸状木製品が出土している〔品田ほか1999〕。また角田遺跡は、古墳時代から中世まで断続的に遺物が出土しており、古くから鯖石川の自然堤防上が集落として利用されていたことがうかがえる。一方、曾地丘陵沿いの段丘や開析谷において多くの遺跡が見られ、吉井遺跡群と総称される〔品田ほか1990a〕。その中で、行塚遺跡（15）では土坑、ピット、溝などの遺構が検出されるとともに、土師器や須恵器が出土した。また古墳時代前期の玉作関連の資料も出土している〔品田ほか1992〕。また、萱場遺跡（17）では、奈良時代の住居跡と考えられる大型の竪穴を検出し、墨書き器なども出土している。同じく吉井遺跡群に属する戸口遺跡（18）では、5棟の建物跡や畝状の小溝群が検出され、奈良・平安時代の須恵器、土師器も出土した。

中世の遺跡としては、東原町遺跡と近接している上原遺跡（12）を始めとして、鯖石川の中流の鶴下川原遺跡（13）、境川原遺跡（14）などが挙げられる。現在の柏崎市の市街地に位置する柏崎町遺跡（26）では、中国染付や鎬蓮弁文の青磁などが出土し、当時、交易が行われたことを物語る。また、小児石遺跡（28）は中世の墓地として機能し、石塔や経が書かれた墨書碟が出土した【品田ほか1991】。城館としては、佐橋荘の毛利氏が築城した北条城（40）や畔屋城（33）、鯖石川を挟んで佐橋荘の毛利氏から分立した鶴河荘の安田毛利氏の居城である安田城（73）などが挙げられる。また塚では、曾地丘陵沿いに吉井百塚（20）、出口の塚（23）、沖積地に半田塚群（54）などが見られる。東原町遺跡の周辺の遺跡は、荘園、官衙の中心から離れており、鯖石川、別山川の自然堤防上に築かれる。これらの遺跡は古代、中世の集落と考えられるものが多い。一方、荒浜砂丘と刈羽山地の境界付近には岩野城（6）や土合殿屋敷遺跡（8）といった城や館と関連した遺跡も存在している。

次に、下沖北遺跡周辺の遺跡について鶴川流域に位置する遺跡を概観する。鶴川上流域には遺跡は少なく、わずかに宮原A遺跡などが確認できているのみである。宮原A遺跡は柏崎市街地から南へ約14kmの鶴川地区に所在し、国指定重要無形民俗文化財「綾子舞」の伝承地として有名な地区でもある。

鶴川中・下流域では遺跡が多く確認されており、ほとんどが自然堤防上や丘陵沿いなどの微高地に集中している。これらの遺跡の性格を見てみると、集落跡が約7割を占める。集落遺跡は未調査の遺跡が多く、古代と中世の両時期の遺物が採集される場合が一般的なことから、古代と中世の明確な区分が難しいのが現状である【品田ほか1997】。そのため以下では、古代・中世の遺跡を遺跡ごとにまとめて記述する。下沖北遺跡の南方約1.5kmの丘陵沿いに位置する鶴巻田遺跡群（49）では、平安時代の製鉄関連の遺物が多量に出土するとともに、鎌倉時代の井戸などが検出され、珠洲焼、青磁及び土師質土器などが出土した【藤巻ほか1988】。鶴川右岸の丘陵に広がる千古塚遺跡では、鎌倉時代から室町時代中期頃の墓地が確認された【品田ほか1990b】。鶴川左岸の台地上に位置する剣野B遺跡では、平安時代の小鍛冶に伴う遺構・遺物群が検出され、出土した土器群は少ないので、時期的なまとまりを持つものであった【品田ほか2000】。鶴川右岸の自然堤防上に位置する前掛り遺跡では、掘立柱建物や柵列、溝、水田跡などの古代集落が確認された【品田ほか1997】。鶴川右岸の沖積地に位置する箕輪遺跡（52）では、9世紀後半から10世紀初頭の平安時代の遺構・遺物が検出され、郡もしくは郷などと関わりを持つ中枢施設の存在が濃厚とされた【小野塚ほか2002】。このほか、弥生時代中期後半の遺構・遺物も検出されている。近年では、柏崎平野南部丘陵に広がる藤橋東遺跡群や横山東遺跡群、軽井川南遺跡群（67）などの大規模調査が実施された。新潟工科大学建設に伴い調査された藤橋東遺跡群では、奈良・平安時代の大規模な鉄生産関連施設が発見され、柏崎平野南部丘陵に広がる大規模な製鉄遺跡群の存在が浮き彫りにされるとともに、中世でも農家の屋敷跡と推定される建物跡や井戸、墓地が検出された【柏崎市教育委員会1995】。また、横山東遺跡群では、鉄生産や窯業など、古代の手工業などに関連する遺構が発見されている【品田ほか2000】。さらに、平成15（2003）年から柏崎平野南部丘陵で、軽井川南遺跡群（67）の発掘調査も行われている。軽井川南遺跡群（67）は、鶴川上流域の軽井川地区に位置し、大小さまざまな32遺跡の総称である【柏崎市・柏崎市教育委員会2004】。これらのうち、19遺跡が奈良・平安時代から鎌倉時代の鉄生産に関連する遺跡であり、製錬から鍛造、鋳造まで、鉄と鉄製品の生産に関連する全ての工程を確認することができる遺跡群として注目を集めた。特に、古代の鋳造遺構は東日本で3例目の発見であり、その重要性が指摘されている。また、下沖北遺跡から約200m鶴川上流には下沖遺跡（46）があり、土師器、須恵器、珠洲焼などが出土している。集落以外の遺跡としては、鶴川東側丘陵部に網田瀬遺跡（58）、京ヶ峰の塚

(60)、呑作の遺跡群 (61～63)、西大善寺の塚 (65) など奈良・平安時代の鉄生産関係施設や中世の屋敷跡と推定される建物跡や井戸、墓地、窯跡が調査されている。

次に城館については、中世の鶴川流域は古代の三嶋郡三嶋郷をほぼ踏襲した鶴川荘の荘域であった。古代の三嶋郡一帯は、中世では鶴河荘、佐橋荘、比角荘といった荘園名で標記される。鶴川流域はほぼ古代の郷単位のまま鶴河荘となり、中流域もその中に含まれていた。そうした中、宇佐美氏が14世紀頃に鶴川下流の一角を占める琵琶嶋城 (44) に自らの一族や被官を配置した。さらに、上条上杉氏が15世紀前半に鶴川中流から上流にかけて位置する上条城に、宇佐美氏と同じく一族を配置した。宇佐美氏と上条上杉氏のこれらの行動は、佐橋荘一帯から鶴河荘の一部に勢力を伸ばす毛利（北条・安田）氏を牽制するためであった。これ以後、鶴川流域一帯は主にこの3勢力によって分割されたまま戦国時代を迎えることになる。

琵琶嶋城 (44) は、越後守護上杉氏の被官であった宇佐美氏の居城である。琵琶嶋城は鶴川の蛇行部分の自然堤防上に構築された平城で、鶴川と横山川（本陣川）を堀とし、本丸、二の丸（東曲輪）、三の丸（金曲輪）からなる。現在、本丸跡に県立柏崎総合高校が建っている。宇佐美氏は越後守護上杉龍命丸（三代房方）の附家老として、応安元（1368）年に琵琶嶋城に入城した。神徳（宇佐美）祐益の築城以来、宇佐美定秀、孝忠、定満（定行）らが在城した。その後、琵琶嶋城は、宇佐美孝忠、定満が上杉氏の忠臣として、上杉謙信の父である長尾為景に抗したが落城した。続いて琵琶嶋城主となった琵琶嶋弥七郎も、天正6（1578）年に御館の乱で滅ぼされ、天正12（1584）年に琵琶嶋城は桐沢具繁の居城となった。

平成14（2002）年に実施された琵琶嶋城の発掘調査では、幅3～4mの溝が検出され、溝の中から中世の土師質土器を中心に、青磁・白磁の破片、瀬戸焼、美濃焼、珠洲焼、越前焼などの陶磁器が出土した。また、井戸が15基、建物の柱穴が1400基検出され、琵琶嶋城の三の丸跡に相当するものと考えられている【柏崎市教育委員会2002b】。

第III章 東原町遺跡

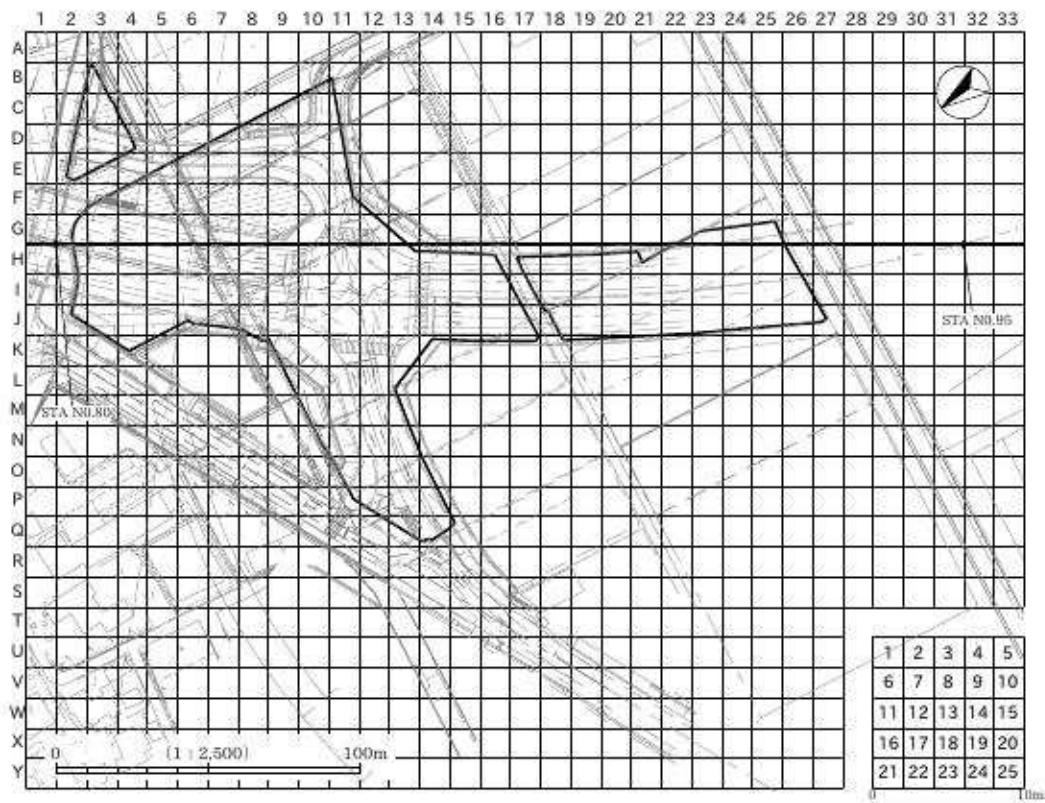
1 調査概要

A グリッドと調査区の設定（第5・6図）

グリッドの設定は、道路建設予定地内のセンター杭2点を基準に行った。まず、調査区外の東側にあるセンター杭No.80を起点とし、その西側のセンター杭No.95を結んだラインを基線X軸とした。また、この基線とセンター杭No.80で直交するラインをY軸とし、10m方眼を組んで大グリッドを設定した。さらに、大グリッドを2m四方に25分割したものを小グリッドとした。

大グリッドの呼称は、北から南を算用数字、東から西をアルファベットの大文字を用い、両者の組み合わせで「7F」などと表した。なお、杭の呼称は、各大グリッドの北西隅の杭に、その大グリッドの呼称を付した。小グリッドは各大グリッドの北西隅を1、南東隅を25となるように番号を付し、「7F20」などと表した。調査区については、東側をA区、北側をB区、中央部をC区、南側をD区とした。

調査区の座標は、10J杭が「世界測地系X = 154086.3929m, Y = 8054.4436m」を、また20J杭が「世界測地系X = 154003.7230m, Y = 7998.1829m」を示す。



第5図 東原町遺跡 グリッド設定図

B 基本層序(第6図)

遺跡は鮫石川の自然堤防上及びその後背低地に位置する。そのため調査区の微地形も北東から南西に緩やかに傾斜する。層厚は北側・東側がやや薄いものの、それ以外ではおおむね安定した堆積をする。なおVII層(古代の遺物包含層)はD区で確認できる。そのため遺構確認面はD区で4面、それ以外で3面となる(以下、上層・中層・下層・最下層)。なお、上～下層は間層を挟まない。以下に基本層序を示す。

I層…明青灰色粘土。粘性あり。しまりややあり。耕作土。

II層…暗青灰色粘土。粘性あり。しまりややあり。床土に相当する。

III層…緑灰色～暗青灰色シルト。粘性あり。しまりややあり。上層(近世)確認面。中層(中世)遺物包含層。層厚は5～45cmを測る。土質や混入物によりa層(やや粘質)、b層(やや砂質)、c層(黒褐色粘土を含む)に分けられる。

IV層…黒褐色粘土。粘性あり。しまりややあり。中層(中世)確認面。下層(中世)遺物包含層。層厚は10～40cmを測る。

V層…緑灰色シルト。粘性ややあり。しまりややあり。下層(中世)確認面。

VI層…暗灰色シルト。粘性ややあり。しまりややあり。

VII層…黒褐色シルト。粘性ややあり。しまりややあり。最下層(古代)遺物包含層。層厚は約20cmを測る。

VIII層…緑灰色シルト。粘性ややあり。しまりややあり。最下層(古代)確認面。

2 上層の調査

A 遺構・遺物の検出状況

上層の遺構は調査区北側にまとまる傾向があるが、全体的に分布は希薄である。北側にまとまるのは、北側が鮫石川の自然堤防で微高地となるためであろう。主な遺構は土坑やピット、溝であるが、土坑の中には墓坑と考えられる遺構が3基(SK011・012・111)確認できる。上層の遺構はIII層中で検出され、IV層上面で検出される中層の遺構とは覆土の色調や土質が異なる。上層検出の遺構は出土遺物などから近世の所産と考えられる。近世の遺物出土量は多くはなく、特にまとまって出土する地点も確認できなかつたが、遺構からの出土がやや多い傾向にあろうか。

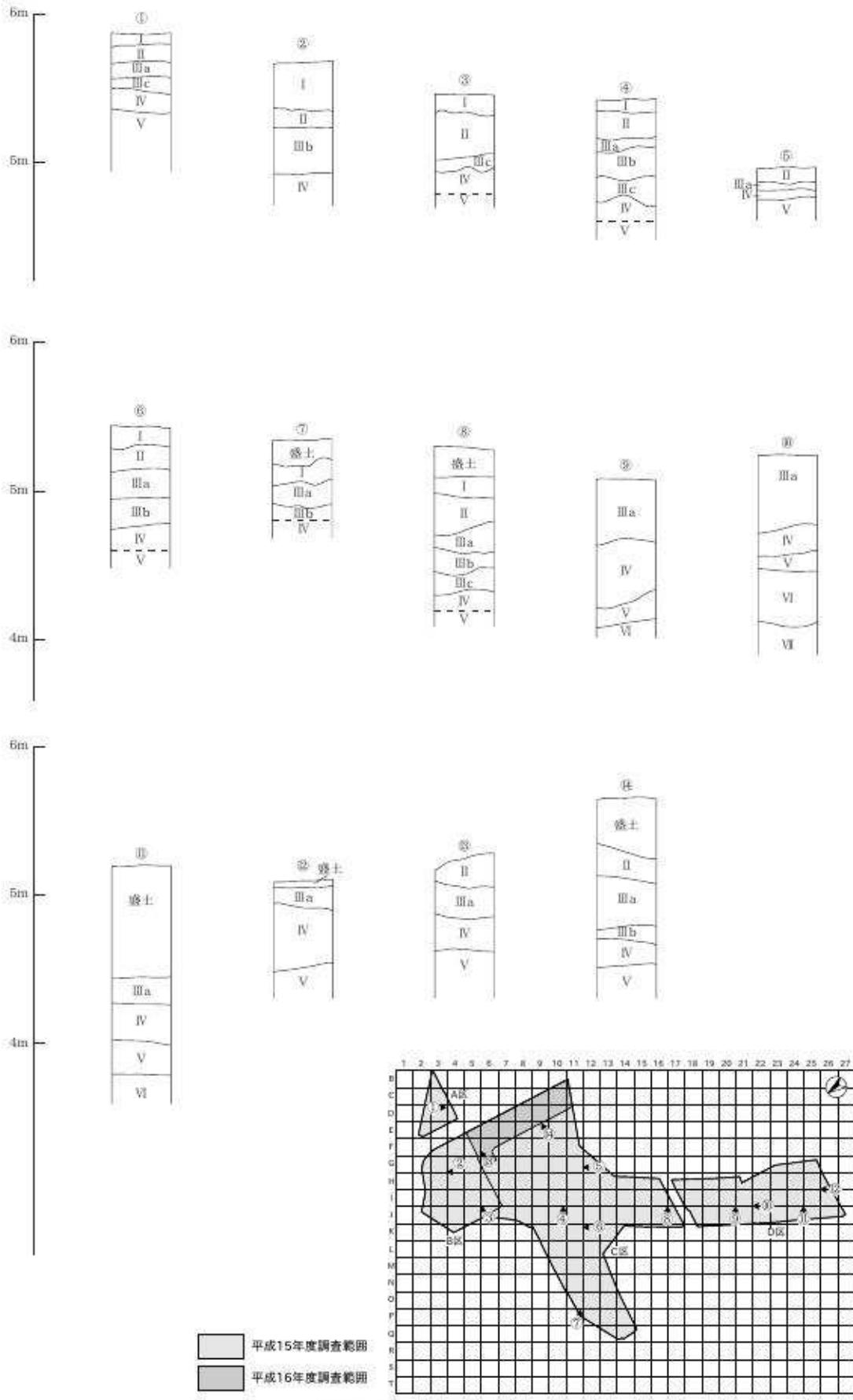
B 遺構各説

陶磁器の編年などは第Ⅲ章2C1)を参照していただきたい。

1) 井 戸(図版5・72)

SE124 6113・14に位置する。平面形は梢円形で、断面形は台形状に近い。長径106cm、短径88cm、深さ113cmを測る。新旧関係は6IP101の方が新しい。覆土は8層に分層できる。2・6層が褐色系覆土で、それ以外は灰色系覆土であるが、5層がレンズ状に堆積し、7層が地山と考えられることから、6層は中層の遺構覆土と考えられる。出土遺物は木製品(杭・柱)2点などで2・3層から出土した。

2 上層の調査



第6図 東原町遺跡 基本層序

2) 溝 (図版3・4・72)

SD177 8J12～14・18～20・24・25に位置する。断面形は台形状に近く、規模は全長6.1m、幅125cm、深さ38cmを測る。覆土は2層に分層でき、1層には灰色シルト、2層には褐灰色粘土が堆積する。周辺にはSK180・SE197が位置する。出土遺物は肥前系陶磁器(2～6)である。II～III期(17世紀代)の所産で、時期的なまとまりが認められる。

SD457 11N～12Pの東西方向の溝と11N・12Nの南北方向の溝からなる。断面形は弧状に近く、規模は全長40m、幅35～57cm、深さ24cmを測る。方向は11N～12PではN-83°-W、11N+12NではN-7°-Eを指す。覆土は2層に分層できる。1層は褐灰色粘土、2層は青灰色粘土である。南北溝は12NでSD460に切られおり、SD460の方が新しい。東西溝はSD460・461と平行する。

3) 土 坑 (図版5・6・73・74)

SK011 3C19・20・24・25に位置する。平面形は長方形で、断面形は台形状を呈すると思われる。長さ126cm、幅89cmを測る。覆土は1層が青灰色粘土、2層が灰色粘土である。2層には桶(169)が横位で据えられ、桶内部には側板が入り込んでいる。桶の口縁は南側を向く。桶外の東側には蹴形木製品(185)が置かれていた。土坑の規模や形態はSK012・111と共通する。このほかの出土遺物は桶などの蓋ないし底板(170・171)2点、漆器椀1点(172)、数珠玉(163～168・173～184)、錢貨12枚(217～227)である。錢貨(寛永通寶)は六道銭と考えられる。被熱はしていない。このほか幼児の歯も検出された。出土遺物から墓坑と判断できる。所属時期は出土遺物から判断して、18世紀以降である。

SK012 3C25、3D5に位置し、南西側は排水溝に切られる。平面形は長方形を呈すると思われ、断面形は台形状を呈する。長さ100cm程度、幅90cm程度、深さ31cmを測る。北側は3DP101と重複し、3DP101の方が新しい。覆土は2層に分層でき、1層は灰褐色粘土、2層は褐灰色粘土である。1層には半截された状態の桶が内側を上に向けて据えられている。土坑の規模や形態はSK011・111と共通しており、被熱した人骨も検出されたことから、墓坑と考えられる。出土遺物は錢貨(228・229)などで、錢貨は破片状態のものを含めると、数枚ほどが出土した。錢貨は劣化が著しく明確ではないが、被熱している可能性もある。所属時期は出土遺物から判断して、18世紀以降である。

SK052 5H23・24、5I3・4に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状を呈する。長径148cm、短径146cm、深さ48cmを測る。覆土は3層に分層できる。1・2層が青灰色粘土、3層が黒色粘土で、3層は炭化物を含む。出土遺物は肥前系陶磁器(III～IV期)、越前焼などで、3層からの出土が多い。

SK095 3G25に位置する。平面形は楕円形で、断面形は半円状に近い。長径120cm、短径98cm、深さ45cmを測る。覆土は2層に分層できる。1層は緑黒色粘土、2層は褐灰色粘土である。出土遺物は土師質土器である。

SK111 2G10に位置する。長径138cm、短径117cmを測る楕円形の掘り形の中に、長さ93cm、幅74cmを測る長方形の掘り形を設け、桶(187)が据えられていた。内側の掘り形の覆土内からは側板が検出された。検出状況はSK011と類似する。内側の掘り形の覆土はいずれも灰色系シルトである。土坑の規模や形態がSK011・012と共通しており、墓坑と考えられる。出土遺物は錢貨(230～234)で、2層から出土した。所属時期は出土遺物から判断して、18世紀以降である。

SK139 5J9・10・14・15に位置する。平面形は楕円形で、断面形は台形状を呈する。長径

222cm、短径180cm、深さ69cmを測る。覆土は4層に分層できる。2層が灰色粘土である以外は褐色粘土で、4層は青灰色シルトを含む。出土遺物は肥前系陶磁器(7~10)、木製品などである。陶磁器の時期にはばらつきがあるが、Ⅲ~Ⅳ期の所産が多い傾向にある。

SK146 5I12・17~19・22~24、5J3・4に位置する。平面形は不整形で、断面形は弧状に近い。長さ508cm、幅356cm、深さ57cmを測る。覆土は4層に分層できる。1・2・4層は褐色系粘土、3層は黒褐色粘土である。出土遺物は肥前系陶器(11・12)、木製品で、陶器の時期はⅠ~Ⅱ期である。

SK458 11N19に位置する。平面形は梢円形で、断面形は台形状を呈する。長径108cm、短径94cm、深さ12cmを測る。覆土は炭化物を含む灰色粘土である。

C 遺 物

1) 陶 磁 器 類 (図版41・94)

肥前系陶磁器の編年などは『九州陶磁の編年』[九州近世陶磁学会2000]に、越中瀬戸の編年などは宮田進一氏の論考[宮田1997]に準拠する。

SE197 (1) 1はⅡ期の溝縁皿で、灰釉が施釉される。見込みには4か所砂目が残る。

SD177 (2~6) 2・3はⅡ期の唐津で、器種は皿である。いずれも灰釉が施釉され、見込みには砂目が残る。4~6は伊万里の染付皿で、Ⅱ~Ⅲ期の所産である。4・5の見込みには、花卉文と獅子文がそれぞれ描かれる。6の文様は丸文であろうか。

SK139 (7~10) 7・8は唐津の皿である。7はⅠ~Ⅱ期の所産で、見込みに胎土目が残る。灰釉が施釉される。8はⅢ~Ⅳ期前半の所産で、内面は銅緑釉が施釉され、見込みには蛇ノ目釉剥ぎが認められる。9は京焼風陶器の碗で、Ⅲ期の可能性が高い。10は秉燭で、鉄釉が施釉される。口縁部と芯立を欠損する。18世紀後半~19世紀の所産であろう。

SK146 (11・12) 11は唐津の鉄絵皿で、Ⅰ期の所産である。口縁内側には鉄絵が遺存し、見込みには胎土目が確認できる。12は唐津の片口で、Ⅰ~Ⅱ期の所産である。内外面に灰釉が施釉される。

SK180 (13) 13は唐津の皿で、Ⅲ~Ⅳ期前半の所産である。銅緑釉が施釉され、見込みには蛇ノ目釉剥ぎが認められる。割れ口には黒色付着物が確認でき、漆接ぎの可能性がある。

9KP1 (14・15) 14は越中瀬戸の端反皿で、鉄釉が施釉される。内面には釉止めの段は設けられない。17世紀後半~18世紀前半に位置づける。15は唐津の鉄絵皿で、Ⅱ期の所産である。内側面に草花文が描かれ、内外面に灰釉が施される。見込みには砂目が残る。被熱が認められる。

9JP12 (16) 16も15同様Ⅱ期の唐津の鉄絵皿である。内側面に草花文が描かれた後、灰釉が施釉される。見込みには砂目が残る。被熱し、釉薬はざらついている。

包含層 (17・18) 17は唐津の皿で、Ⅱ期の所産である。灰釉が施され、見込みには砂目が3か所残る。その内1か所には、焼成時に重ねられた製品の高台が溶着している。18もⅢ期頃の唐津の皿である。釉薬はざらついており、被熱している可能性がある。

2) 石器・石製品 (図版45・98)

上層出土の石器・石製品は4点図示した(138~141)。いずれも包含層出土である。砥石の形態は角柱状のA類と板状のB類とに大別でき、A類は中央部が直線的なA1類と括れるA2類とに分類できる。なお第Ⅲ章3・4、第Ⅳ章2・3も同様である。

138の石臼は約1/4が残存しており、磨面は摩耗している。欠損面に炭化物の付着が認められる。中央の孔の内側は摩耗していない。139は砥石A1類に分類できる。正裏面と両側面、下端に磨面を持ち、正裏面には線条痕が認められる。石材は流紋岩である。140は石錘で、上端及び下端には溝が設けられる。溝に紐を掛けて漁網の錘として使用したものと考えられる。石材は凝灰岩である。141は磨石類で、正面と上端に凹痕、裏面と両側面、上下端に敲打痕が確認できる。裏面にわずかに炭化物の付着が認められる。

3) ガラス製品（図版46・98）

墓坑（SK011）からガラス製の数珠玉が6点出土した（163～168）。径は4～5mmであるが、168のみが3.7mmとやや小ぶりである。高さは2～5mm、重量は0.04～0.17gで、ともにややばらける。色調は透明（163～165）、緑色（166）、黒褐色（167）、オリーブ灰色（168）が確認できる。

4) 木 製 品（図版47・99）

SK011（169～185） 169はいわゆる早桶で、棺として利用された。厚さは0.9cmで、3分板である。樹種はスギである。170・171は桶や樽などの蓋ないし底板である。いずれも約1/2を欠損する。172は漆器椀である。比較的身が浅く、高台は欠損する。体部に描かれる文様は植物文と思われる。173～184は数珠玉で、径0.8～1.0cm程度のもの（173～177・179～183）と径0.4～0.5cmのもの（178・184）が確認できる。いずれも平面形は楕円形である。樹種は特定できなかった。185は鍵形木製品で、169の脇に置かれていた。全体に華奢な作りで、実用品ではないが、木製の楔も打たれていた。刃部に相当する部分には墨が塗られ、刃先が表現されている。樹種はスギである。

SK012（186） 186は桶や樽などの蓋ないし底板で、1/2を欠損する。

SK111（187） 187は早桶で、棺として利用された。厚さは169と同じ0.9cmで、3分板である。長さ71cm、上端の幅57cmで、169より大きい。樹種はスギである。

SK180（188・189） 188は曲物の側板、189は曲物の底板である。189には止具痕が残る。

9KP4（190） 190は柱根で、丸材を使用している。断面形は楕円形である。

9KP5（191） 191も柱根であろうか。枝状の丸材を使用し、下端には接ぎ手状の痕跡が確認できる。

9KP8（192） 192は柱根で、丸材を使用する。下端には縄などを掛ける孔が認められる。

5) 金 属 製 品（図版57）

金属製品には銭貨・煙管・剃刀がある。そのうち銭貨を18枚図示する。いずれも寛永通寶で、墓坑から出土した遺物である。六道銭であろう。

SK011（217～227） SK011からは12枚出土した。そのうち、破損している1枚を除く11枚を図示する。このうち217～222が古寛永、223～227は新寛永である。223は摩耗が著しい。いずれも被熱はしていない。

SK012（228・229） 2枚を図示する。いずれも遺存状況は悪く、被熱している可能性がある。228は古寛永で、229は判別できない。このほかSK012から銭貨の破片も出土しており、破片分を加えると、数枚程度納められていたと思われる。

SK111（230～234） SK111からは5枚出土した。このうち230・231が古寛永、232～234は新寛永である。234は文銭である。

3 中層の調査

A 遺構・遺物の検出状況

中層の遺構はIV層上面で検出される。中層の遺構は調査区のほぼ全域に分布し、SD213を境に北側の居住域・生産域と南側の生産域に分けられる。SD213周辺が自然堤防と後背低地の地形の変換点に位置したためと考えられる。居住域を区画する溝の方向は東西方向が多く、掘立柱建物も桁行を東西に合わせる。居住域には井戸も確認できるが、掘立柱建物や歓跡の周辺に分布する傾向にあろうか。このほか珠洲焼の壺を埋めた土坑も3基(SK069・090・162)検出され、このうちSK090の壺の中には10,674枚の錢貨が入れられていた。これらの土坑は居住域、特に掘立柱建物内や建物周辺に位置する。生産域には歓跡や溝などが位置する。生産域の歓跡の方向は、おおむね東西方向、南北方向で、区画溝と平行ないし直交する。

遺物は土師質土器や珠洲焼、輸入陶磁器、石器・石製品、木製品、金属製品などが出土した。分布は遺構配置を反映して、居住域は多く、生産域は少ない傾向にある。具体的には盛土の北側が多く、特にSD407以北に多く分布する。一方SD213以南は分布が希薄である。

B 遺構各説

土器・陶磁器の編年などは第Ⅲ章3C 1)を参照していただきたい。

1) 掘立柱建物(図版18・76)

SB1201 5G、6G、5H、6Hに位置する。桁行3間(6.24m)×梁行1間(3.60m)の側柱構造で、方向(桁行)はN-89°-Eを指す。柱間寸法は桁行が2.16m、梁行3.60mで、面積は22.46m²である。柱穴は径30~66cmの円形や楕円形を呈し、深さは20~30cmを測る。覆土はおおむね灰色系覆土が堆積する。東側でSK137と重複しており、SB1201の方が新しい。周辺にはSE155・183、歓跡などが位置する。このほかSK090が建物の北東約2mに、SK162が建物の南約2mに位置する。

SB1202 4H、5H、4I、5Iに位置する。規模は桁行4間(7.05m)×梁行1間(2.55m)で、南側に1間(1.02m)の廊が付く。方向(桁行)はN-89°-Eを指す。柱間寸法は桁行が1.86m、梁行2.55mで、廊部を含めた面積は25.17m²である。柱穴は径27~66cmの円形や楕円形を呈し、深さは24~54cmを測る。覆土はおおむね灰色系覆土が堆積する。北側でSD072と重複しており、SB1202の方が新しい。建物内にはSK069が位置し、周辺にはSE155・156、SD074などが位置する。また北側にピットが15基位置し、廊が付く可能性もある。

2) 井 戸(図版19~21・76~79)

SE155 5I4・5・9・10に位置する。平面形は楕円形で、断面形は台形状を呈する。長径270cm、短径180cm、深さ113cmを測り、遺跡内では比較的大型の井戸である。覆土は10層に分層できる。1・2・4・8層は褐色系覆土、3層は灰褐色シルト、5~7・9・10層は灰オリーブ色粘土で、レンズ状に堆積する。出土遺物は土師質土器(19)、青磁(20)、珠洲焼、磨石類(142)などで、2~7層を中心に出土した。また7層からは炭化米が検出された。所属時期は出土遺物から判断して14世紀前半頃である。

SE183 6H9に位置する。平面形は円形で、断面形は漏斗状を呈する。径72cm、深さ117cmを測り、

遺跡内でも比較的小型の井戸である。覆土は3層に分層できる。いずれも灰色系シルトで、ほぼ水平に堆積する。

SE209 9K5に位置する。平面形は楕円形で、断面形は箱形を呈する。長径97cm、短径89cm、深さ92cmを測る。覆土は3層に分層でき、1層は灰色シルト、2層は黄灰色粘土、3層は黒褐色粘土である。3層は腐植物を含む。出土遺物は土師質土器、石器（143・144）などである。

SE216 10K10・15、11K6・11に位置する。平面形は楕円形で、断面形は漏斗状を呈する。長径107cm、短径100cm、深さ108cmを測る。覆土は3層に分層できる。1層は青灰色シルト、2層は暗青灰色粘土、3層は黒褐色シルトで腐植物を含む。いずれもレンズ状に堆積する。

SE293 11L11・12・17に位置する。平面形は隅丸方形に近く、断面形は台形状を呈する。長さ100cm、幅90cm、深さ107cmを測る。覆土は4層に分層できる。1・2層は青灰色シルトで、3層は暗灰色粘土、4層は黒褐色粘土である。3・4層は腐植物を含む。覆土上位ではレンズ状に、下位では水平に堆積する。

SE297 11L18・23に位置する。平面形は楕円形で、断面形は台形状を呈する。長径100cm、短径97cm、深さ71cmを測る。覆土は4層に分層でき、1・3層は灰色系覆土、2層は褐灰色粘土、4層は黒褐色粘土で、4層は腐植物を含む。覆土上位ではレンズ状に、下位では水平に堆積する。

SE401 10M8に位置する。平面形は隅丸方形で、断面形は台形状を呈する。長さ・幅とも110cm、深さ83cmを測る。覆土は4層に分層できる。1層は青灰色シルト、2・3層は灰色粘土、4層は黒褐色シルトで、レンズ状に堆積する。4層は腐植物を含む。

SE402 10L11に位置する。平面形は隅丸方形で、断面形は台形状を呈する。長さ100cm、幅84cm、深さ58cmを測る。覆土は4層に分層できる。1・2層は灰色系粘土、3・4層は黒褐色シルトで、3層は炭化物と腐植物を含む。出土遺物は土師質土器と木製品で、覆土上層から出土した。

SE403 10L17に位置する。平面形は楕円形で、断面形は台形状を呈する。長径116cm、短径100cm、深さ87cmを測る。覆土は4層に分層できる。1～3層は灰色系粘土、4層は黒褐色シルトで、覆土上位では水平に、下位ではレンズ状に堆積する。出土遺物は土師質土器、珠洲焼（甌・壺）、木製品（195）で覆土上層から出土した。

SE404 9L10・15、10L6・11に位置する。平面形は円形で、断面形は台形状を呈する。径105cm、深さ89cmを測る。覆土は4層に分層できる。1・2層は灰色系粘土、3層は黒褐色シルト、4層は黒褐色粘土で、覆土上位ではレンズ状に、下位では水平に堆積する。出土遺物は土師質土器、珠洲焼（甌・片口鉢）で、3層から出土した。

SE405 10L21・22に位置する。平面形は楕円形で、断面形は箱形を呈する。長径112cm、短径98cm、深さ97cmを測る。覆土は3層に分層できる。1・2層は灰色系粘土、3層は腐植物を含む黒褐色シルトで、ほぼ水平に堆積する。遺物は土師質土器、珠洲焼などで、3層から出土した。

SE451 11L20に位置する。平面形は楕円形で、断面形は台形状を呈する。長径98cm、短径89cm、深さ72cmを測る。覆土は4層に分層できる。1層は褐灰色粘土、2層は暗灰色粘土、3層は灰色シルト、4層は黒褐色シルトで、レンズ状に堆積する。出土遺物は土師質土器、珠洲焼（21・22）、木製品（196～204）で、4層を中心に出土した。所属時期はIV期の珠洲焼が出土したことから、14世紀前半である。

SE501 12H17・22に位置する。平面形は楕円形で、断面形は台形状を呈する。長径96cm、短径90cm、深さ93cmを測る。覆土は4層に分層できる。1・2層は褐灰色粘土、3層は灰色粘土、4層は腐植物を含

む極暗褐色シルトで、ほぼレンズ状に堆積する。出土遺物は石器（145～147）と木製品（205）である。

SE513 11H17・22・23に位置する。平面形は隅丸方形に近く、断面形は台形状を呈する。長さ114cm、幅110cm、深さ94cmを測る。覆土は4層に分層でき、1・4層は青灰色シルト、2・3層は灰色系粘土で、4層は腐植物を含む。覆土上位ではレンズ状に、下位では水平に堆積する。

SE514 11H22・23、11I2・3に位置する。平面形は梢円形で、断面形は台形状を呈する。長径119cm、短径115cm、深さ102cmを測る。覆土は4層に分層できる。1・2層は褐色系シルト、3層は暗青灰色粘土、4層は灰色シルトである。3・4層は炭化物を含み、3層は西側に傾斜する。出土遺物は珠洲焼（甕・片口鉢）、木製品（206）で、3・4層から出土した。

SE515 11I6・7に位置する。平面形は隅丸方形に近く、断面形は台形状を呈する。長さ108cm、幅100cm、深度119cmを測る。覆土は5層に分層でき、1・2層は青灰色シルト、3・4層は灰色系粘土、5層は黒褐色粘土である。4・5層は腐植物を含み、おおむねレンズ状に堆積する。

SE520 10I1・2に位置する。平面形は梢円形で、断面形は漏斗状を呈する。長径78cm、短径72cm、深さ72cmを測る。覆土は4層に分層できる。1・4層は灰色粘土、2層は青灰色シルト、3層は黒色粘土で、いずれもレンズ状に堆積する。新旧関係はSD213の方が古い。

SE523 10I3に位置する。平面形は梢円形に近く、断面形は漏斗状を呈する。長径91cm、短径80cm、深さ105cmを測る。覆土は4層に分層できる。1・2層は褐灰色粘土、3層は灰色粘土、4層は腐植物を含む黒褐色シルトで、いずれもレンズ状に堆積する。出土遺物は珠洲焼（甕・壺・片口鉢）で、いずれも2層から出土した。

SE550 11N6に位置する。平面形は隅丸方形で、断面形は漏斗状を呈する。長さ・幅とも65cm、深さ78cm以上を測る。覆土は3層に分層できる。1層は緑灰色シルト、2・3層は灰色粘土で、いずれもレンズ状に堆積する。

SE579 8H2・3に位置する。平面形は梢円形で、断面形は台形状を呈する。長径94cm、短径74cm、深さ94cmを測る。覆土は3層に分層できる。1・2層は灰色系粘土、3層は腐植物を含む黒褐色粘土で、いずれもレンズ状に堆積する。出土遺物は珠洲焼（23）で、1層から出土した。所属時期はIV-2期の珠洲焼が出土したことから、14世紀前半である。

SE912 8I24、8J4に位置する。平面形は梢円形で、断面形は台形状を呈する。長径98cm、短径93cm、深さ109cmを測る。覆土は7層に分層できる。1・5層は褐灰色シルト、2層は明青灰色粘土、3層は青灰色シルト、4層は腐植物を含む灰色シルト、6層は褐灰色粘土、7層は腐植物を含む黒褐色シルトで、覆土上位ではレンズ状に、下位では水平に堆積する。出土遺物は土師質土器（24）、珠洲焼（25・壺）、金属製品（235）、木製品で、1・2・4・6層から出土した。

SE916 10I16に位置する。平面形は梢円形で、断面形は台形状を呈する。長径80cm、短径76cm、深さ137cmを測る。覆土は4層に分層でき、1層は褐灰色シルト、2・3層は灰色系シルト、4層は黒褐色シルトである。2・3層は炭化物を、4層は腐植物を含む。出土遺物は土師質土器、珠洲焼、青磁、木製品（207）、金属製品（236・237）で、1・4層などから出土した。所属時期はIV期の珠洲焼が出土したことから、14世紀前半である。

3) 溝・自然流路 (図版9~13・17・22・80・81)

ここでは区画溝と自然流路 (SD108) を扱う。

SD072 3G~5Jの東西方向の溝と4J・5Jの南北方向の溝からなる。断面形は台形状で、規模は全長54m、幅170~300cm、深さ64cmを測り、遺跡内では比較的大型の溝である。方向は3G~5JではN-83°-W、4J・5JではN-6°-Eを指す。底面標高は東側が高いものの、南北方向ではほとんど差はない。覆土は5層に分層できる。1層は褐灰色シルト、2・4層は灰色系シルト、3・5層は褐灰色粘土で、1・5層は炭化物を含む。新旧関係はSB1202、SD074・075の方が新しく、3GでSD108に合流する。出土遺物は土師質土器(26・27)や珠洲焼(28)、青磁、木製品、鉄滓などである。所属時期はIV期の珠洲焼が出土したことから、14世紀前半である。

SD108 2G~10Dに位置し、断面形は半円状を呈する。全長92m、深さ252cmを測る自然流路で、下層段階から中層段階まで流れていたようである。方向はおおむね南北方向を指す。覆土は12層に分層できる。8・12層は褐色系粘土、それ以外は灰色系覆土である。なお8層は基本層序IV層で7・9・12層は腐植物を含む。下層段階では9D・10D周辺で水田畦畔を切っていること、西側の壁際にはIV層が堆積していることから、下層段階にSD108が流路を変えて遺跡内を流れ、その後IV層が堆積し始め、SD108の流路が安定してから集落が営まれたものと考えられる。出土遺物は陶磁器などで、覆土上層から少量出土した。

SD213 7E~13Pの東西方向の溝と12P~14Oの南北方向の溝からなる。断面形は台形状に近く、規模は全長143m、幅160~198cm、深さ44cmを測る。方向は7E~13PではN-83°-W、12P~14OではN-5°-Eを指す。底面標高は東西溝では西側に、南北溝では南側に緩やかに傾斜する。覆土は7層に分層できる。灰色系シルト・砂質土が主体で、レンズ状に堆積しており、覆土中に砂が堆積する。このことから水路としての機能も考えられる。新旧関係はSE451・520、SD519、SX518の方が新しく、SD862の方が古い。7EでSD108に合流する。出土遺物は土師質土器、珠洲焼、金属製品(238)などである。

SD214 8E~10Jに位置する。断面形は台形状で、規模は全長51m、幅90cm、深さ8cmを測る。方向はN-82°-Wを指す。覆土は灰黄褐色粘土が堆積する。新旧関係はSK522・652、10HP1の方が新しい。またSD213の東西溝に平行し、SD214の西約2.5mにSD215が位置する。

SD215 10J~11Kに位置する。断面形は台形状で、規模は全長6.7m、幅85cm、深さ9cmを測る。方向はN-83°-Wを指す。覆土は灰褐色粘土が堆積する。SD213の東西溝に平行し、SD215の東約2.5mにSD214が位置する。

SD303 20H~22Jに位置する。断面形は弧状で、規模は全長26m、幅100~407cm、深さ20~28cmを測る。方向はN-89°-Wを指す。覆土は3層に分層できる。1・2層は灰色シルト、3層は黒褐色粘土である。周辺には軌跡が位置する。出土遺物は土師質土器、木製品(208)などである。

SD407 6E~9Jに位置する。断面形は台形状に近く、規模は全長53m、幅168~196cm、深さ36~46cmを測る。方向はN-81°-Wを指す。覆土は5層に分層できる。1層は青灰色砂質土、2・3・5層は青灰色シルト、4層は褐灰色粘土である。新旧関係は04SK002の方が新しい。SD213の東西溝に平行する。出土遺物は土師質土器(34・35)、珠洲焼、青磁、金属製品(239・240)、錢貨(元祐通寶)などで、覆土上層から出土した。

SD593 7E～8Gに位置し、断面形は台形状を呈する。規模は全長24m、幅29～234cm、深さ8～34cmを測り、特に7E・7Fでは幅が広い。方向はN-84°-Wを指す。覆土は2層に分層できる。1層はオリーブ灰色シルト、2層は暗オリーブ灰色シルトで、いずれも炭化物を含む。SD213の東西溝に平行し、SD593の西約15cmにSD595が位置する。

SD595 8G～9Hに位置する。断面形は台形状で、規模は全長7.9m、幅34cm、深さ4cmを測る。覆土は黄褐色粘土が堆積する。SD213の東西溝におおむね平行し、SD595の東約15cmにSD593が位置する。また8GでSD588と8HでSD596と合流する。

4) 盛 土 (図版10・11・81)

7E～8Gに位置し、SD213とSD593・595に挟まれる。特に7E周辺で遺存状況が良好である。盛土は2層に分層できる。1層はオリーブ黒色粘土、2層は灰オリーブ色粘土で、いずれも酸化鉄を含む。構築法は、溝の掘削時に排出された土をそのまま積んで整形したと考えられ、その土量からSD213掘削時の堆土を利用したものと思われる。SD213はIV層を掘り込んで掘削され、盛土はIV層の上に構築されることから、IV層堆積後盛土が構築される。III層堆積後の地形はおおむね平坦になることから、盛土の機能は失われたと考えられる。盛土の機能していた期間は、IV層堆積後からIII層堆積前に限定できる。

5) 土 坑 (図版23～25・81～85)

SK069 4H23・24に位置し、SB1202内に位置する。平面形は梢円形で、断面形は漏斗状に近い。長径66cm、短径58cm、深さ52cmを測る。覆土はにぶい褐色粘土で、炭化物を含む。土坑内には、底面から約5cm浮いたところに珠洲焼の壺(36)が正位で据えられていた。口縁は欠損していたが、割れ口が比較的古く、調査区内からは接合する破片が確認できなかったことから、埋める段階で既に欠損していた可能性が高い。36の時期はIII期である。36内部の土からは炭化米が検出された。

SK090 5G23に位置する。平面形は梢円形で、断面形は台形状に近い。長径56cm、短径50cm、深さ50cmを測る。覆土は3層に分層でき、1層は灰白色シルト、2層は黄褐色シルト、3層は暗灰色粘土である。土坑内には、底面から約14cm浮いたところに珠洲焼の壺(37)が正位で据えられ、スギの板材が蓋(209)として載せられていた。37の内部には、10,674枚の銭貨(北宋銭など)が縦の状態で詰められていた。37の時期はIV-1期である。SK090の南西約2mにSB1201が位置する。

SK109 4G12・17に位置する。平面形は梢円形で、断面形は箱形に近い。長径80cm、短径76cm、深さ50cmを測る。覆土は3層に分層でき、1層は浅黄橙色シルト、2・3層は明褐灰色粘土である。底面付近から、珠洲焼の甕(38)が横倒しの状態で検出された。38は縦方向に割れ、割れ口を上に向けていた。1/2程度を欠損する。38の上には樹皮が載っていたが、腐蝕が進んでおり、樹種を確認することができなかった。38の時期はIV-1期である。このほかの出土遺物は鉄滓や羽口片である。

SK110 4G13に位置する。平面形は円形で、断面形は箱形を呈する。径88cm、深さ56cmを測る。覆土は5層に分層でき、1・2層は褐灰色シルト、3層は緑灰色シルト、4層は黒色シルト、5層は緑灰色粘土である。5層以外は炭化物を含み、レンズ状に堆積する。出土遺物は土師質土器である。

SK125 6I7・8・12・13に位置する。平面形は長方形で、断面形は弧状を呈する。長さ250cm、幅204cm、深さ55cmを測る。覆土は6層に分層できる。1・6層は灰色系シルト、2～4層は灰色粘土、5層は黒褐色シルトで、レンズ状に堆積する。出土遺物は土師質土器、珠洲焼などである。

SK126 6I11・12・16・17に位置する。平面形は長方形で、断面形は弧状を呈する。長さ150cm、幅110cm、深さ10cmを測る。覆土は暗青灰色シルトが堆積する。出土遺物は土師質土器などである。

SK138 5I19・20・24・25、5J4・5、6I21、6J1に位置する。平面形は不整形で、断面形は弧状ないし台形状を呈する。長さ390cm、幅314cm、深さ25cmを測る。覆土は2層に分層でき、1層は暗青灰色シルト、2層は褐灰色粘土である。新旧関係はSK153の方が新しい。出土遺物は土師質土器、鉄滓などである。

SK162 6G16・21に位置する。平面形は円形で、断面形は台形状ないし漏斗状を呈する。径53cm、深さ42cmを測る。覆土は2層に分層でき、1層は灰色シルト、2層は青灰色粘土である。土坑内には、底面から約4cm浮いたところに珠洲焼の壺(39)が正位で据えられていた。39内部の底面付近から銭貨が2枚(元祐通寶・紹聖元寶)出土しており、埋納容器として機能していた可能性もある。39の時期はIV-1期である。SK162の北約2mにSB1201が位置する。

SK198 7I11・12・16・17に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状を呈する。径160cm、深さ20cmを測る。覆土は灰色シルトが堆積する。新旧関係はSK184の方が新しい。出土遺物は土師質土器、珠洲焼である。

SK199 6I10・15、7I6・11に位置する。平面形は長方形で、断面形は弧状を呈する。長さ144cm、深さ24cmを測る。覆土は2層に分層でき、いずれも灰色シルトである。新旧関係はSK184の方が新しい。

SK420 9J17・21・22に位置する。平面形は不整形で、断面形は台形状を呈する。長さ217cm、幅129cm、深さ16cmを測る。覆土は2層に分層できる。1層は暗青灰色粘土、2層は褐灰色粘土である。出土遺物は土師質土器である。

SK432 16J16・21に位置する。平面形は楕円形で、断面形は台形状を呈する。長径70cm、短径61cm、深さ12cmを測る。覆土は2層に分層でき、1層は灰黄褐色シルト、2層は褐灰色粘土である。

SK508 11I14・15に位置する。平面形は長方形に近く、断面形は弧状を呈する。長さ61cm、幅37cm、深さ7cmを測る。覆土は灰色粘土が堆積する。

SK509 11I8に位置する。平面形は楕円形で、断面形は台形状を呈する。長径77cm、短径68cm、深さ20cmを測る。覆土は2層に分層できる。1層は灰色粘土、2層は暗褐色粘土で、レンズ状に堆積する。

SK512 11H12に位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状ないし台形状を呈する。長径67cm、短径61cm、深さ10cmを測る。覆土は2層に分層できる。1層は灰色粘土、2層は褐灰色粘土で、レンズ状に堆積する。新旧関係はSK655の方が古い。

SK652 10H22・23、10I2・3に位置する。平面形は長方形、断面形は台形状を呈する。長さ176cm、幅170cm、深さ47cmを測る。覆土は3層に分層できる。1層は灰黄褐色粘土、2層は褐灰色シルト、3層は暗褐色粘土である。新旧関係はSD214の方が古く、10HP1の方が新しい。

SK655 11H7・12に位置する。平面形は不整形で、断面形は台形状を呈する。長さ121cm、幅87cm、深さ21cmを測る。覆土は2層に分層でき、1層は褐灰色シルト、2層は灰色粘土である。新旧関係はSK512の方が新しい。

SK671 9F3に位置する。平面形は楕円形で、断面形は台形状を呈する。長径90cm、短径81cm、深さ22cmを測る。覆土は灰色粘土が堆積する。

SK672 9F2・3・7・8に位置する。平面形は楕円形で、断面形は台形状を呈する。長径147cm、短径129cm、深さ20cmを測る。覆土は灰色粘土が堆積する。

6) 犬 跡 (図版7・14・85)

犬跡は20I・16I・13I・12J・12P・12O・11N・6H周辺で検出された。このうち遺存状況が良好な11N・12O周辺の犬跡について記述する。

11N周辺の犬跡 SD531～538・559・560で構成される。SD531～537・559・560は東西方向にはほぼ等間隔に並び、SD538はSD531などと直交する。断面形は、SD531が台形状を呈する以外、弧状を呈する。全長はSD538が17mと長いものの、そのほかは6.5～7.4m程度を測る。幅は20～50cm、深さは6～8cmを測る。方向はSD538がN-79°-Wを指し、そのほかはN-12°-E (SD560)を指す。覆土はいずれも共通で、緑灰色シルトが堆積する。周辺にはSE550・563・451が位置する。またSD559の西約2.4mに12O周辺の犬跡が位置し、12O周辺の犬跡とは直交する。SD213とも直交する。

12O周辺の犬跡 SD551～557で構成され、南北方向にはほぼ等間隔に並ぶ。SD556とSD557の間隔は3m程度開くが、本来は2条程の犬が位置していたものと思われる。断面形はいずれも弧状を呈する。全長はSD557が6.4mと短いものの、そのほかは10.4～11.0m程度を測る。幅は30～60cm、深さは4～8cmを測る。方向はSD557がN-85°-Wを指す。覆土はいずれも共通で、灰色粘土が堆積する。周辺にはSE462・550が位置する。またSD556などの東約2.4mに11N周辺の犬跡が位置し、11N周辺の犬跡とは直交する。

7) 性格不明遺構 (図版9・85)

SX091 3I～3Jに位置する。平面形は不整形で、長さ約10m、幅約9mを測る。明確な掘り込みは確認できなかった。土師質土器を集積した遺構で、廃棄した結果であると思われる。土層は3層に分層した。1層(IV上層)は暗灰色粘土、2層(IV中層)は黄褐色粘土、3層(IV下層)は黒褐色粘土で、1・3層は比較的安定した堆積状況がうかがえる。4層はV層である。出土遺物は土師質土器(41～72)、青磁、鉄滓、羽口(244～247)などである。土師質土器は1層から出土する傾向が強く、3I8・13で完形品の出土が多い。鉄滓、炉壁は3層から出土したが、3層は下層包含層とした方が適当である。

C 遺 物

1) 土器・陶磁器 (図版41～44・94～97)

土器・陶磁器の器種分類・編年については以下の各氏の論考に準拠する。土師質土器…品田高志氏【品田1997】、珠洲焼…吉岡康暢氏【吉岡1994】、瀬戸美濃…藤澤良祐氏【藤澤2002】、青磁…山本信夫氏【山本1995】・上田秀夫氏【上田1982】、白磁…横田賢次郎氏・森田勉氏【横田・森田1978】である。土師質土器の分類については下沖北遺跡での分類に準拠する【山本ほか2003・図版扉・第1表】。なお第Ⅲ章4・6、第Ⅳ章2・5も上記に準拠する。

SE155 (19・20) 19は土師質土器C I b ②類で、内面にはスス状の炭化物が付着する。全体的に摩耗が認められる。

20は鎌蓮弁文が施文される青磁の碗で、B-I類に分類でき

| 製作技法 | 法型 | 器形など |
|------|-----------------|---|
| A型 | | |
| 柱状高台 | | |
| B型 | I : 口径大 手づくね | a : 口縁滑部面取り b : 口縁が大きく開き、身がやや浅い |
| | II : 口径小 | b : 口縁が大きく開き、身がやや深い |
| C型 | I : 口径大 手づくね | a : 條脚明 (① : 脚堅牢い・丸みあり) b : 條不鮮明 (② : 脚堅牢い・やや浅い) |
| | II : 口径小 | a : 條脚明 (③ : 外底面凹みあり) b : 條不鮮明 (④ : 外底面凹みなし) |
| D型 | I : 口径大 余切り | |
| | II : 口径小 | |

第1表 土師質土器皿の分類表

る。13世紀末～14世紀初頭に位置づける。

SE451 (21・22) 21・22はともに珠洲焼で、21はIV期の甕である。22は壺T種で、内面には炭化物が付着する。

SE579 (23) 23は珠洲焼の片口鉢で、IV-2期に位置づける。口縁端部はほぼ水平で、御目は5条である。内外面には炭化物が付着する。

SE912 (24・25) 24は土師質土器で、C I b②類に分類できる。内面には釘状の鉄片が付着する。25は珠洲焼の甕で、IV期に位置づける。

SD072 (26～28) 26・27は土師質土器で、C I b②類、C II a類に分類できる。26の内外面には炭化物が付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。28はIV期頃の珠洲焼の甕である。

SD074 (29～33) いずれも京都系の土師質土器で、29～31はB II b類、32・33はB I b類に分類できる。B II b類は口径11～12cm、底径6cm前後、器高2cm前後、B I b類は口径13cm強、底径7cm強、器高2cm強で、規格性が高く、胎土も精良である。15世紀末～16世紀に位置づける。このほかの遺物として珠洲焼なども出土している。

SD407 (34・35) いずれも土師質土器で、C I b②類に分類できる。ともに摩耗が認められ、34の内外面には炭化物が付着する。

SK069 (36) SK069はSB1202内に位置し、内部に36が正位で据えられていた。36は珠洲焼の壺T種A類で、III期の所産である。口縁部は欠損していたが、割れ口が比較的古く、調査区内からは接合する破片が確認できなかったことから、埋める段階で欠損していた可能性が高い。体部に残る綾杉状のタタキ目は比較的しっかりしている。36内部の土を水洗したところ、炭化米が検出された。

SK090 (37) SK090はSB1201の北西約2mに位置し、内部に37が正位で据えられていた。また37内部には銭貨（北宋錢など）が縫の状態で詰められていた。37は珠洲焼の壺T種A類で、IV-1期の所産である。口縁部の一部を欠損するものの、ほぼ完形である。接合する破片が確認できないことから、破損した後に埋納容器として利用されたものと考えられる。口縁部は外傾し、体部のタタキは底部側から口縁部側に向かって行われる。体部上位には刻線文が確認できる。

SK109 (38) SK109の内部には38が横倒しの状態で埋められていた。38は珠洲焼の甕A類で、IV-1期の所産である。底部は遺存するが、口縁部と体部の過半を欠損する。体部のタタキ目はやや粗い。底部外面には焼成時の横転を防止するために当てた石の痕跡、底面には溶着防止の砂の痕跡が確認できる。底部内面にも溶着痕が認められ、焼成時内部に他の製品が入れられていたことが判明する。

SK162 (39) SK162はSB1201の南約2mに位置し、内部には39が正位で据えられていた。39は珠洲焼の壺T種A類で、IV-1期の所産である。口縁部を欠損するが、接合する破片が確認できない。内部底面付近から銭貨が2枚（元祐通寶・紹聖元寶）出土しており、埋納容器としての利用も考えられる。

10LP1 (40) 40は内面に蓮弁文が施文される青磁の盤である。器形は底部から緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部でくの字に外反し、端部は直立する。14世紀前半に位置づける。

SX091 (41～72) 土師質土器が多く出土した。明確な掘り込みは確認できないが、遺物は層位ごとに取り上げた。中でも1層からの出土量が多い。41～65が1層出土で、66～72がIV層出土である。

1層出土ではC I a①類(41・42)、C I a②類(43～45)、C I b②類(46～49)、C II a類(50～61)、C II b類(62～65)、青磁碗が確認できる。C I a類とC I b②類は、数量的には稜が不鮮明なC I b②類の方が多い。C II類もb類の方が多い傾向にあるが、a類との差はわずかである。41・47・56・

61・64・65には炭化物が付着するが、灯明皿と判断できるものは確認できない。

IV層出土ではC I a①類(66)、C I b②類(67)、C II a類(68~70)、C II b類(71・72)を図示した。C I a①類の66は灯明皿で、炭化物が付着する。

包含層(73~75) 73は瓦器の円形浅鉢I類で、14世紀代に位置づける〔水澤1999〕。口縁に沿って、菊花文が4個以上押印される。74は越前焼の鉢で、13世紀後半~14世紀前半の所産であろうか。外面には炭化物が付着する。75は珠洲焼で、II~III期の所産であろう。外面には格子目状のタタキが確認できる。器種は壺と思われるが、径がやや大きくなる。

2) 石器・石製品(図版45・46・98)

中層出土の石器・石製品は10点図示した(142~151)。

SE155(142) 142は磨石類で、正面中央に敲打痕が確認できる。敲打痕の周辺と両側面、上端には炭化物が付着する。石材は安山岩である。

SE209(143・144) 143は磨石類で正裏面に敲打痕が認められる。正面上面に炭化物の付着が確認できる。144は石皿類で正面に敲打痕が認められる。

SE501(145~147) 145は正裏面と下端に敲打痕が確認でき、全面に炭化物が付着する。146は金床石であろうか。正面には敲打痕が認められ、炭化物の付着は正面から側面で顕著である。側面から裏面にかけて鉄分が多く付着する。石材は安山岩である。147は石皿類で、炭化物がほぼ全面に付着する。

SD247(148) 148は硯で、外面形態は長方形を呈する可能性が高く、側面は上方に向かって開く。縦方向のひびの部分で漆継ぎがなされる。また海側の正裏面に溝状の切れ込みが確認できる。左側にも同様の痕跡が確認でき、切断面は磨られ縦方向の擦痕が認められることから、海側の切れ込みも切断を意図したものであろう。形態から判断すると15世紀の所産である可能性がある〔水野1985〕。

包含層(149~151) 3点とも砥石A2類で、149・150には線条痕が確認できる。また149には炭化物が付着する。石材は149が砂岩である以外は流紋岩である。

3) 木製品(図版48・99)

SE156(193・194) 193はやや身が深いが、漆器の皿としておく。内外面に黒漆が塗布され、高台が付く。14世紀代の所産であろうか〔春日2001〕。194は箸で、断面は丸く面取りされる。上端を欠損する。

SE403(195) 195は箸で、断面形は長方形である。上端を欠損する。

SE451(196~204) 196~199は身の浅い漆器の小皿で、内外面に黒漆が塗布される。13世紀後半~14世紀前半に位置づける〔春日2001〕。200~202は曲物の側板で、203は箱物の部材であろうか。203には木釘穴が残る。204の上下端には抉りが確認できる。付札の類であろう。

SE501(205) 205は曲物の底板で、上端に2か所木釘穴が残る。

SE514(206) 206はしゃもじで、柄の先端は焦げている。樹種はスギである。

SE916(207) 207は柄杓である。身の部分は箱物で、木釘で止められる。身の中ほどやや上側に、柄を通す孔が穿たれる。柄の断面形は長方形である。樹種はスギである。

SD303(208) 208は曲物の底板で、上下端を欠損する。

SK090(209) 209は珠洲焼壺(37)の上に載せられていた。209はスギの板材を利用した蓋で、内

面には土圧で付いたと思われる37の口縁の凹痕が認められる。凹痕の深さは約5mmである。なお37の中には銭貨が納められていた。

4HP3 (210) 210は丸材を用いた柱根で、下半は加工され、幅約15cmでベルト状にわずかに凹む。断面は円形に近い。

6IP41 (211) 211は丸材を用いた柱根で、断面は楕円形である。

4) 埋 納 銭 (図版50~57・100)

SK090検出の珠洲焼壺(37)の中に10,674枚の銭貨(以下、埋納銭)が納められ、37の口縁にはスギの板材が蓋(209)として載せられていた。後世の搅乱は受けておらず、埋納銭の一部が後世流失した可能性は低いと考えられる。埋納銭のうち、ばらの銭は54枚を数えるにすぎず、残りは縒紐に通した状態で検出された。壺の中でとぐろをまくような状態で、底部から口縁部付近まで8段にわたって納められていた。また、ばらの銭は37内の6か所で確認され、最小で1枚、最大で27枚それぞれにまとまった状態で検出された。縒紐の腐食に伴い銭が散乱したためと考えられる。

縒は合計で33本確認され、壺から取り上げた順番に1~33の番号をつけた。そのうち縒28と縒29、縒32と縒33は縒紐同士が結ばれている状態で検出された。縒ごとの銭貨の枚数は最小で69枚(縒19)、最大で684枚(縒33)である。連結された縒32と縒33を1本の縒と考えると、銭貨の枚数は1072枚となる。33本の縒の中で97枚の縒が最も多く、4本確認された(縒7・12・13・17)。次いで多いのは194枚の縒である。

縒紐には結び目が見られるものがあり、ここでは縒の中における結び目ごとの単位を「節」と呼称する。縒における節は1~6節まで確認された。節の結び目は縒紐の状態が全体的に良くないこともあり、はつきりとはしないが、1本の紐を玉結び状にしたものが大部分と考えられる。縒ごとに見ると、1節は6本、2節は7本、3節は6本、4節は6本、5節は5本、6節は3本それぞれ確認され、節の数は105となる。段ごとに見ると、1~3節は壺(37)における口縁部付近から体部上半に位置する1~3段に多く見られ、逆に4~6節は体部下半から底部付近に位置する4~8段に多く見られる。節ごとの銭貨の枚数は、最小で11枚(縒5の1節目)、最大で196枚(縒3と縒33の2節目)である。その中で最も多いものは97枚のもので、65本と全体の約6割を占めており、97枚という単位を意識していたものと考えられる。次いで多いのは97の2倍の194枚のもので、5本確認された。その他では96枚(4本)、17・80・100・103・117・196枚(各2本ずつ)のものが目立っている。また縒における節と銭の枚数との間には際だった関連性は見受けられなかった。

銭貨の種類は71種類確認された。そこで、島銭を含む全ての銭種を図示し、同じ銭種でも書体の相違や裏面の文字が異なるものもそれぞれ図示した。図示した銭貨は220枚である。埋納銭は島銭を除くと全てが渡来銭で、皇朝十二銭は確認されなかった。初鋳年の最古の銭貨は五銖銭(後漢・24年)で、9枚確認された。最新のものは紹豊元寶(陳・1341年)で、1枚確認されている。埋納銭の納められた珠洲焼壺(37)の年代も考え合わせれば、埋納銭は14世紀中葉頃埋められたものと考えられる。埋納銭の種類を国別・王朝別に見ると、後漢1種9枚、唐3種1,050枚、前蜀4種7枚、後周2種6枚、南唐2種26枚、北宋30種9,193枚、南宋18種306枚、金1種18枚、元1種2枚、高麗1種1枚、陳1種1枚、日本(島銭)5種7枚、不明48枚である。北宋銭の割合が約86%、唐銭が約10%、南宋銭が約3%を占める。中国銭以外の渡来銭は朝鮮銭である東國通寶(高麗・1097年)とベトナム銭である紹豊元寶(陳・

3 中層の調査

第2表 東原町遺跡埋納錢一覽表（1）

第3表 東原町遺跡埋納銭一覧表（2）

1341年) がそれぞれ1枚ずつ確認される。紹豊元寶は前述の通り埋納銭の中で初鋳年が最新である。埋納銭の銭種の中で枚数が多いものを順に挙げると、皇宋通寶(北宋・1038年)が1,344枚で12.6%、元豊通寶(北宋・1078年)が1,303枚で12.2%、元祐通寶(北宋・1086年)が993枚で9.3%、開元通寶(唐・621年)が963枚で9.0%、熙寧元寶(北宋・1068年)が945枚で8.9%となる。これらの銭種は日本国内で出土した埋納銭数の上位5種類と符合する。またこれらだけで埋納銭全体の半数以上を占める。島銭は5種7枚確認された。淳化元寶・皇宋通寶・開元通寶・天聖元寶・元豊通寶をそれぞれ模したもので、書体が崩れしており不明瞭である。14世紀中葉頃鋳造されたものと考えられる。

5) 金属製品(図版58・101)

SE912 (235) 235は甲冑を構成する鉄製の札が施着したものである。その形態から、甲冑にする前の札が鋲びて施着したものと考えられる。1つの札の法量は長さ6.1~6.6cm、幅3.0cm、厚さ0.4~0.5cm程度である。緒を通す孔は2行確認できる。一般的には2行13孔である。

SE916 (236・237) 236は包丁である。両刃で、木製の柄が残る。柄は2枚の板で構成され、1か所目釘穴が確認できる。また柄の柄頭に近い箇所には、溝状の抉りが1条設けられる。237は刀子で、茎に目釘穴が残る。

SD213 (238) 238は鍔で、全体の1/2と刃部先端の一部を欠損する。

SD407 (239・240) 239は鉄板をU字状に曲げたもので、種別は不明である。下端に2か所釘穴と思われる孔が認められる。240は上端が幅広で、断面形は角柱状に近い。縦方向に2条の溝が認められることから、3本の釘が鋲びて付着したものかと思われる。

6) 羽口(図版58・101)

SX091出土の4点を図示する(244~247)。いずれも破損しており、外径8cm前後、内径3cm前後の比較的小型のものが多い。胎土は比較的精良である。

4 下層の調査

A 遺構・遺物の検出状況

下層の遺構はV層上面で検出され、調査区全域に分布する。中層同様、SD922を境に北側の居住域と南側の生産域に分けられるが、居住域を区画する溝の数は中層と比較して少ない。掘立柱建物は2棟確認でき、そのうち1棟(SB1203)は鍛冶関連工房と考えられる。このほかSB1203付近に位置するSK106からは土師質土器が大量に出土し、一括廃棄された可能性が高い。生産域では水田跡が断片的に検出されるとともに、区画溝と思われる溝(SD510・904・944)も確認できる。この3条の溝はSD922と方向が異なり、SD922以北の居住域とは時期が異なると考えられる。また、これらの溝は水田跡と切り合う形で検出されたが、水田跡との新旧関係は明確にしえなかった。19Jでは足跡も検出されたことから、この周辺にも水田跡が位置する可能性が高い。

遺物は土師質土器や珠洲焼、輸入陶磁器、石器・石製品、木製品などが出土した。分布傾向も基本的に中層と同様で、SD922の北側に多く、南側に少ないとある。

B 遺構各説

土器・陶磁器の編年などは第三章3C 1) を参照していただきたい。

1) 挖立柱建物 (図版37・88、第5表)

SB1203 2I、3Iに位置する。桁行1間(2.55~2.85m)×梁行1間(2.64m)の側柱構造で、3IP15と3IP8・9は棟持柱であろう。方向(桁行)はN-72°-Wを指す。柱間寸法は桁行が2.55~2.85m、梁行2.64mで、面積は7.13m²である。柱穴は径18~36cmの円形や梢円形を呈し、深さは18~57cmを測る。覆土は黒色系覆土や褐色系覆土が堆積する。

建物内にはSK094・107が位置する。SK107は建物内中央やや東側に位置する。平面形が不整形で、断面形が弧状を呈する。長さ90cm、幅54cm、深さ7cmを測る。覆土からは楕円形溝が出土し、床や壁には被熱した痕跡が確認できる。建物内での位置や楕円形溝が出土したことから、鍛冶炉と考えられ、SB1203は鍛冶関連工房と判断できる。SK094は建物内中央やや西側に位置する。平面形が長方形で、断面形が台形状を呈する。長さ90cm、幅28cm、深さ6cmを測り、覆土は4層に分層できる。形状や位置から、調査時には爐が据えられていた可能性を考えていた。しかし、床や側壁が著しく被熱し、赤く硬化している点、また金床石が出土している点で疑問が残る。SK094は位置関係からSB1203に伴う土坑ではあるが、その性格・機能については不明としておく。覆土からは鉄滓や砂鉄、鍛造薄片などが出土した。

SK097は建物内南西隅に位置する。平面形が梢円形に近く、断面形が台形状を呈する。長径110cm、短径90cm、深さ16cmを測る。覆土は4層に分層できる。1・4層が褐灰色粘土、2・3層が橙色系粘土で、4層は貼り床の可能性がある。調査時にはSB1203の付属施設と判断した。しかし、貼り床が確認できる点、炭化物が縞状に含まれる点、鉄滓や炉壁などが出土した点から、鍛冶炉の地下構造の可能性が考えられる。また南側が建物の柱筋からはみ出すことを考え合わせれば、SK097はSB1203に付属しない可能性が高い。2層からは鉄滓などのほか、砂鉄や鍛造薄片なども出土した。

SB1203の周辺にはSK096・106などが位置する。SK096は井戸の可能性もある。

SB1204 5Gに位置する。桁行2間(4.32m)×梁行1間(3.42m)の側柱構造で、方向(桁行)はN-88°-Wを指す。柱間寸法は桁行が2.16m、梁行3.42mで、面積は14.77m²である。柱穴は径30~42cmの梢円形を呈し、深さは25~72cmを測る。覆土はおおむね褐色系覆土が堆積する。周辺にはSE735、04SE051、SD108などが位置する。

2) 井 戸 (図版38・39・88~90)

SE103 3H20・4H16に位置する。平面形は梢円形で、断面形は漏斗状に近い。長径100cm、短径90cm、深さ80cmを測る。覆土は6層に分層できる。1・2層は褐灰色シルト、3層は浅黄橙色粘土、4層は灰白色粘土、5・6層は褐灰色粘土でレンズ状に堆積する。出土遺物は土師質土器である。

SE735 5H9に位置する。平面形は円形に近く、断面形は台形状を呈する。径は112cm、深さ85cmを測る。覆土は2層に分層でき、1層は黒褐色粘土、2層は青灰色粘土である。出土遺物は土師質土器、木製品で2層から出土した。新旧関係はSX749の方が古く、5HP38の方が新しい。

SE764 6I9に位置する。平面形は梢円形で、断面形は漏斗状に近い。長径95cm、短径85cm、深さ

108cmを測る。覆土は3層に分層できる。1層は褐灰色粘土、2・3層は黒褐色粘土で、ほぼ水平に堆積する。出土遺物は土師質土器、珠洲焼、白磁、木製品で3層から出土した。

SE771 7H14に位置する。平面形は楕円形で、断面形は漏斗状に近い。長径121cm、短径80cm、深さ80cmを測る。覆土は3層に分層できる。いずれも灰色粘土で、おむねレンズ状に堆積する。出土遺物は土師質土器である。

SE774 7I7に位置する。平面形は楕円形で、断面形は漏斗状を呈する。長径150cm、短径112cm、深さ108cmを測る。覆土は3層に分層できる。1層は黒色シルト、2・3層は黒色系粘土で、ほぼ水平に堆積する。出土遺物は土師質土器、木製品(212・柱など)で3層から出土した。

SE775 7I23、7J2・3に位置する。平面形は楕円形で、断面形は箱状を呈する。長径72cm、短径68cm、深さ102cmを測る。覆土は3層に分層でき、いずれも灰色粘土が堆積する。出土遺物は木製品で3層から出土した。

SE778 8I22・23、8J2・3に位置する。平面形は楕円形で、断面形は漏斗状を呈する。長径134cm、短径122cm、深さ164cmを測る。覆土は7層に分層できる。1層は褐灰色シルト、2層は灰褐色シルト、3~5層は灰色系粘土、6・7層はオリーブ黒色粘土で、覆土下位では水平に、上位ではレンズ状に堆積する。出土遺物は木製品、金属製品(241)などで5~7層から出土した。

SE799 6I19に位置する。平面形は円形で、断面形は箱状に近い。径84cm、深さ97cmを測る。覆土は3層に分層できる。1層は褐灰色シルト、2層は黒褐色粘土、3層は黒褐色シルトで、ほぼ水平に堆積する。

SE902 8I14・19に位置する。平面形は楕円形、断面形は台形状に近い。長径94cm、短径91cm、深さ104cmを測る。覆土は5層に分層できる。1層は褐灰色粘土、2・3・5層は黒色系粘土、4層は暗灰色粘土で、いずれもレンズ状に堆積する。1・4・5層は炭化物を含む。出土遺物は土師質土器、木製品で1・2層から出土した。

SE911 9I25に位置する。平面形は楕円形、断面形は台形状に近い。長径77cm、短径66cm、深さ90cmを測る。覆土は4層に分層でき、1層は褐灰色粘土、2・3層は暗灰色粘土、4層は黒色シルトである。1・3層は灰色系粘土を含み、2・3層は炭化物を含む。

SE983 12M16に位置する。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。長径77cm、短径70cm、深さ82cmを測る。覆土は炭化物を含む黒褐色粘土が堆積する。

04SE051 6F21に位置する。平面形は円形、断面形は台形状を呈する。径100cm、深さ100cmを測る。覆土は4層に分層できる。1層は暗青灰色粘土、2層は青灰色シルト、3層は黒色粘土、4層は青灰色砂で、レンズ状に堆積する。出土遺物は土師質土器で3層から出土した。

3) 溝(図版11・39・90)

ここでは区画溝を扱う。なおSD108は第III章3で記述したので割愛する。

SD510 11F~10Mに位置し、断面形は台形状を呈する。規模は全長74m、幅66~282cm、深さ38~65cmを測り、11Iでは幅がやや広い。方向はN-47°-Wを指し、北西(10M)から南東(11F)にかけて緩やかに傾斜する。覆土は11層に分層できる。6・7層が黒褐色粘土であるが、それ以外はおむね灰色系覆土で、レンズ状に堆積する。新旧関係はSD1047、SX1077の方が新しい。なお水田跡との切り合いは明確にはしえなかつた。出土遺物は土師質土器、珠洲焼(77)、木製品などである。当初

はIV層上面で検出したため、中層遺構として調査を行った。しかし6・7層がIV層に起因する黒褐色粘土であるため、下層遺構とする。所属時期はⅢ期頃の珠洲焼が出土したことから、13世紀後半頃である。

SD904 9H～8Kに位置し、断面形は弧状や台形状を呈する。規模は全長27m、幅60～96cm、深さ8～14cmを測り、L字状にめぐる。方向はN-52°-W、N-32°-Eを指す。覆土は3層に分層できる。1層は黒褐色粘土、2・3層は明青灰色粘土である。新旧関係はSD918・1076より新しく、SE901より古い。

SD909 9H～10Jに位置し、断面形は弧状を呈する。便宜上SD909・925・945に分けたが、切り合があるわけではなく、本来は1条の溝であろう。以下3条まとめて記述する。規模は全長27m、幅60～96cm、深さ6～13cmを測る。SD909・945部分は弧状にめぐり、SD925部分は直線的となる。SD909部分の覆土は3層に分層できる。1層は褐灰色粘土、2層は黒色シルト、3層は灰色粘土で、2層は炭化物を多く含む。新旧関係はSD944・1075より新しく、SE911、SK910より古い。出土遺物は土師質土器で、数点出土した。

SD922 7E～8Hに位置し、断面形は半円状を呈する。規模は全長32m、幅30～120cm、深さ21～46cmを測り、8F以西で幅が狭くなる。方向はN-81°-Wを指す。覆土は暗オリーブ灰色シルトで、7EでSD108に合流する。新旧関係はSD928・929、SX941・942より新しく、SD921より古い。出土遺物は土師質土器で、2～3点出土した。

SD944 10K～11Hに位置し、断面形は台形状を呈する。規模は全長69m、幅40～96cm、深さ12cmを測り、コの字状にめぐる。方向はN-47°-W、N-28°-Eを指す。覆土は2層に分層でき、1層は褐灰色粘土、2層は青灰色粘土が堆積する。新旧関係はSE933、SD909より古い。

4) 土坑・ピット(図版39・40・91～93)

SK096 2I5・10に位置し、SB1203の北側に近接する。平面形は梢円形で、断面形は箱状を呈する。長径95cm、短径80cm、深さ59cmを測る。覆土は2層に分層できる。1層は褐灰色シルト、2層は灰褐色粘土で、レンズ状に堆積する。出土遺物は土師質土器で1層から出土した。井戸の可能性がある。周辺にはSB1203、SK106などが位置する。

SK106 3I3・4・8・9に位置する。平面形は梢円形で、断面形は弧状を呈する。長径290cm、短径260cm、深さ52cmを測る。覆土は6層に分層できる。1層は浅黄橙色シルト、2層は灰褐色シルト、3・5層は褐色系粘土、4・6層は黒色系覆土で、覆土下位ではレンズ状に、上位では水平に堆積する。出土遺物は土師質土器(83～112・114～116)、白磁(113)、鉄滓である。このうち土師質土器は2・4・6層から121点出土し、そのうち7点は灯明皿である。完形の割合が高く、覆土の堆積に沿った出土状況を示す。また鉄滓は6層から出土した。周辺にはSB1203、SK096などが位置する。

SK604 8J16・17・21・22に位置する。一部は調査区外となる。平面形は梢円形を呈すると思われ、断面形は台形状に近い。径90cm前後、深さ30cmを測る。2層以下が覆土で、4層に分層できる。2層は青灰色砂、3層は褐灰色シルト、4・5層は黒色系シルトである。底面付近から土師質土器(117～122)が出土した。

SK744 8J11・12に位置する。平面形は梢円形で、断面形は台形状を呈する。長径90cm、短径80cm、深さ15cmを測る。覆土は褐灰色シルトが堆積する。出土遺物は土師質土器(123～125)である。

SK754 6H16・21に位置する。平面形は梢円形で、断面形は台形状を呈する。長径100cm、短径

95cm、深さ44cmを測る。覆土は2層に分層できる。いずれも褐灰色粘土である。出土遺物は土師質土器で1層から出土した。

SK756 7H19・20・24に位置する。平面形は梢円形だが、南北方向が少し伸びておりやや菱形に近い。断面形は台形状を呈する。長径134cm、短径102cm、深さ45cmを測る。覆土は2層に分層できる。1層は褐灰色粘土、2層は1層を含む青灰色シルトである。

SK759 7I9・10・14・15に位置する。平面形は梢円形で、断面は弧状に近い。長径93cm、短径74cm、深さ12cmを測る。覆土は黒色シルトが堆積し、炭化物を多く含む。出土遺物は土師質土器(126・127)である。

SK770 8I22・23に位置する。平面形は梢円形を呈すると思われ、断面形は台形状を呈する。長径200cm以上、短径130cm、深さ40cmを測る。覆土は3層に分層できる。1層は褐灰色シルト、2・3層は灰色粘土である。新旧関係はSE778より古い。

SK915 9I20に位置する。平面形は梢円形、断面形は台形状を呈する。長径70cm、短径60cm、深さ69cmを測る。覆土は4層に分層できる。1・4層は黒褐色シルト、2・3層は灰色シルトでレンズ状に堆積する。1層は淡黄色砂を含み、4層は腐植物を含む。井戸の可能性も考えられる。

SK972 11O3・4に位置する。平面形は梢円形、断面形は台形状を呈する。長径112cm、短径96cm、深さ20cmを測る。覆土は黒褐色粘土が堆積する。

4JP18 4J17に位置する。平面形は梢円形で、断面は半円状を呈する。長径48cm、短径42cm、深さ18cmを測る。覆土は褐灰色シルトで、灰白色粘土を含む。底面から土師質土器(129～132)が出土した。

6IP90 6I11に位置する。平面形は方形に近く、断面はU字状を呈する。長さ・幅とも42cm、深さ33cmを測る。覆土は2層に分層できる。いずれも黒褐色粘土である。底面付近から土師質土器が出土した。

6JP100 6J11に位置する。平面形は円形で、断面は弧状を呈する。径14cm、深さ3cm前後を測る。出土遺物は土師質土器(133)である。133の外側には漆の塗膜が残存している。

5) 水田跡(図版26・33～35)

9D～12H及び19Jで検出された。このうち、9D～11Hで検出された水田跡は、お互いが直交する2本の畦畔と、それによって区画された4枚の水田面SX1030～1033からなる。北東～南西に伸びる畦畔(方向N-34°-E)は長さ10m以上、幅1.7～3.2m、水田耕作面からの高さは10～20cmである。北西～南東に伸びる畦畔(方向N-57°-W)は長さ19m以上、幅1.2～2.1m、水田面からの高さは15～20cmである。水田面SX1030は長軸8.1m、短軸4.0m、SX1031は長軸10.0m、短軸4.7m、SX1032は長軸5.5m、短軸4.9m、SX1033は長軸9.5m、短軸2m以上である。平面形はいずれも長方形を基調とするが、他の遺構との切り合いにより、変形している。19J付近の水田跡は、畦畔を確認することができなかつたが、足跡が検出された。

C 遺 物

1) 土器・陶磁器(図版43・44・96・97)

SD113(76) 76は錦蓮弁文が施される青磁の碗で、B-I類に分類できる。13世紀末～14世紀初頭の所産である。

SD510(77) 77は珠洲焼の片口鉢で、III期頃の所産であろうか。12条の卸目が施され、内面には炭

化物が付着する。割れ口は内側から加熱され、打ち割られる。

SK086 (78~82) 土師質土器が出土している。78~80はC I a①類、81はC I a②類、82はC I b②類に分類でき、a類の方が多い傾向にある。78・82は摩耗が認められる。

SK106 (83~116) SK106は2・4・6層から土師質土器が出土した。そのうち4層からの出土が多く、白磁(113)も出土した。

2層出土では、C I a①類(83・84)、C I a②類、C I b②類、C II a類(85)、C II b類が確認できる。大型品はC I b②類が、小型品ではC II a類が多い傾向にある。84には炭化物が付着しており、灯明皿として使用されたことがわかる。

4層出土では土師質土器C I a①類(86~91)、C I a②類(92~95)、C I b②類(96~100)、C II a類(101~109)、C II b類(110~112)のほか、白磁(113)が確認できる。土師質土器の大型品はC I b②類が多いが、C I a類と量比的に大差はない。小型品ではC II a類が多い傾向にある。86・87・102・105・111の内外面には炭化物が付着し、灯明皿として使用されたことがわかる。このほか89・94・100・110にも炭化物が付着するが、灯明皿とは認められない。113は口禿の白磁碗で、IX類に分類できる。13世紀中葉~14世紀初頭の所産である。

6層出土ではC I b②類(114)、C II a類(115)、C II b類(116)が確認できるが、2・4層に比べ遺物の出土量は少ない。いずれも炭化物の付着は認められない。

SK604 (117~122) いずれも土師質土器で、117~120はC I a②類、121・122はC II a類に分類できる。大型、小型とも稜の鮮明なa類が目立つ傾向にある。117は灯明皿である。118~120にも炭化物が付着するが、灯明皿とは認められない。121・122は炭化物が付着しない。

SK744 (123~125) いずれも土師質土器で、123はC I a②類、124はC I b②類、125はC II a類に分類できる。123には炭化物が付着する。灯明皿である。124は摩耗が著しい。

SK759 (126・127) いずれも土師質土器で、126はC I a①類、127はC II b類に分類できる。126にはスヌ状の炭化物が付着する。

3CP19 (128) 128は青磁の碗である。鎌蓮弁文が認められ、B-I類に分類できる。13世紀末~14世紀初頭の所産である。

4JP18 (129~132) いずれも土師質土器で、129・130はC I a①類、131はC II a類、132はC II b類に分類できる。大型、小型ともa類が目立つ傾向にあろうか。130には摩耗が認められ、131の内外面には炭化物が付着する。

6JP100 (133) 133は土師質土器C I a②類で、外面に漆が付着する。漆の外側にナデ調整が観察できることから、133に重ねられていた土師質土器内面に塗られていた漆が付着したものと考えられる。

SX040 (134・135) 134・135とともにⅢ期頃の珠洲焼で、134の器種は甕である。135は片口鉢で、鉢口は14条である。底部外面には指押さえ痕が残る。

包含層 (136) 136は須恵器の無台坏で、9世紀前半の所産である。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。

2) 土 製 品 (図版44・97)

管状土錐を1点図示する(137)。137は15H20 V層から出土した。長さ4.15cm、径4.10~4.40cmで、円柱状を呈する。中央には径0.72~0.83cmの貫通孔が認められる。

3) 石器・石製品(図版46・98)

SE933(152~154) 152は磨石類で、正面に磨痕と敲打痕、側面に敲打痕が確認できる。上端から右側面には炭化物が付着する。153・154は石皿類で、炭化物が付着する。

SK954(155・156) 155・156はいずれも石皿類で、155の正面には磨痕と敲打痕が確認できる。156の正面には炭化物が付着する。石材はともに安山岩である。

包含層(157~162) 包含層出土の石器として、IV層出土の砥石を6点図示した。砥石は全部で18点出土しているが、その全てが包含層(II~IV層)からの出土である。IV層からは7点(A類3点、B類4点)が出土している。157~159はA2類で、157・159には線条痕が認められる。158の正面には炭化物が付着し、159の下端には敲打痕が確認できる。石材は158が砂岩で、それ以外は流紋岩である。160~162はB類に分類できる。石材は160が流紋岩で、それ以外は凝灰岩である。

4) 木製品(図版49・99)

SE774(212) 212はこけし状の人形で、刃物で削り、顔が作出される。比較的丁寧に仕上げられ、頬の部分はこけている。井戸祭祀に関連するものであろう。

SE933(213) 213は曲物の底板で、黒漆が塗布される。外面には「六」の線刻が認められる。

SK743(214) 214は丸材を使用した柱根で、下端には縄などを掛ける孔が認められる。

SK935(215) 215は箸で、断面は丸く面取りされる。

5JP30(216) 216は鍔先である。中央に柄を着ける孔が穿たれる。側縁から下端にかけては凹みが認められ、この部分に鉄製の刃先が着けられたと考えられる。

5) 金属製品(図版58・101)

SE778(241) 241は完形の刀子で、長さ27.0cm、刃部の長さ17.1cmを測る。刃部は両刃で、両区である。鎬は認められず、茎には目釘穴が1か所残る。

包含層(242・243) 242も239同様鉄板を使用したもので、種別は不明である。243は完形の鎌で、長さ12.6cm、幅3.0cmを測る。上半に柄を通す孔があり、大きさは2.5cm×2.0cm程度である。上下端はつぶれている。鍛冶に使用されたものであろう。

5 自然科学分析

A 柏崎バイパス試掘試料のプラント・オパール

1) はじめに

イネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ、根より吸収した珪酸分を葉や茎の細胞内に沈積させることが知られている。こうして形成された植物珪酸体(機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など)については藤原[1976]や藤原・佐々木[1978]など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。この植物珪酸体が、植物が枯れるなどして土壤中に混入して土粒子となったものをプラント・オパールと呼んでおり、機動細胞珪酸体については藤原[1976]や藤原・佐々木[1978]など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壤中より検出されるイネのプラント・オパール個



第7図 柏崎バイパス試掘試料採取位置図

数から稲作の有無についての検討も行われている〔藤原 1984〕。このような研究成果から、近年プラント・オパール分析を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で行われている。

柏崎バイパス試掘調査においては水田などの遺構が明確にとらえられなかったことから、本地域における土地利用を知る目的でプラント・オパール分析を行い、その結果・考察を以下に示す。

2) 試料と分析方法

分析用試料はA地点（試掘39トレンチ）及びB地点より採取された14試料である（第7図）。各試料について、A地点の試料1（I層）は水田耕作土、2（II層）は黒褐色シルト、3（III層）は青灰色シルト、4（IV層）は黒褐色シルトで、中世の遺物包含層である。5（V層）は灰色シルト、6・7はIV層を覆土とする遺構？試料である。B地点の試料1（I層）は水田耕作土、2（II層）は黒褐色シルトで、中・近世の遺物が含まれる。3（III層）は黄灰色シルト、4（IV層）は青灰色シルト、5（V層）は暗青灰色砂質シルト、6（VI層）は灰色シルト、7（VII層）は褐灰色シルト（腐植物層）である。これら14試料について下記の方法にしたがってプラント・オパール分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスピーブ（直徑約40 μm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10 μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定及び計数は機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについてガラスピーブが300個に達するまで行った。

3) 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスピース個数の比率から試料1g当たりの各プラント・オパール個数を求め(第2表)、それらの分布を第8図(A地点)、第9図(B地点)に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当たりの検出個数である。なお、イネの穎部(糊殻)の珪酸体がバラバラの状態で観察されたことから、他のプラント・オパールと同様にその破片数を計数して図表に示した。

A地点：土層試料の上位3試料からイネのプラント・オパールが検出され、最上部試料1では非常に高い検出個数が示された。またこの最上部試料からはイネ穎部珪酸体の破片が若干観察される。

イネ以外について、試料5においてヨシ属とウシクサ族が突出した検出個数28,000個を示し、他はヨシ属が2,000個前後、ウシクサ族が3,000個前後である。クマザサ属型は上部2試料を除きおむね3,000個前後、ネザサ節型は最上部で他の試料に比べやや多く得られている。その他キビ族は土層試料において2,000個前後を示し、シバ属が試料2より若干検出されている。

B地点：上位3試料と下部の試料6よりイネのプラント・オパールが検出された。個数的には上位2試料で20,000個前後を示し、試料6でも5,000個を越えている。またイネの穎部破片が上位2試料から若干検出されている。

イネ以外ではクマザサ属型が全試料から検出されており、試料4で約20,000個を示す以外は上部に向かい減少から増加傾向を示している。ヨシ属は最下部で突出した検出個数を示しており、他は2,000個前後である。ウシクサ族は上部で多くなる傾向がみられ、ネザサ節型も最上部でやや突出した個数を示している。キビ族は半数以上の試料から得られているが、個数的には1,000個を越えた程度で、その他シバ属が最上部で若干検出されている。

4) 稲作について

上記したようにA地点では上部試料のみ、B地点では上部と下部の試料よりイネのプラント・オパールが検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、イネのプラント・オパールが試料1g当たり5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている〔藤原1984〕。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。

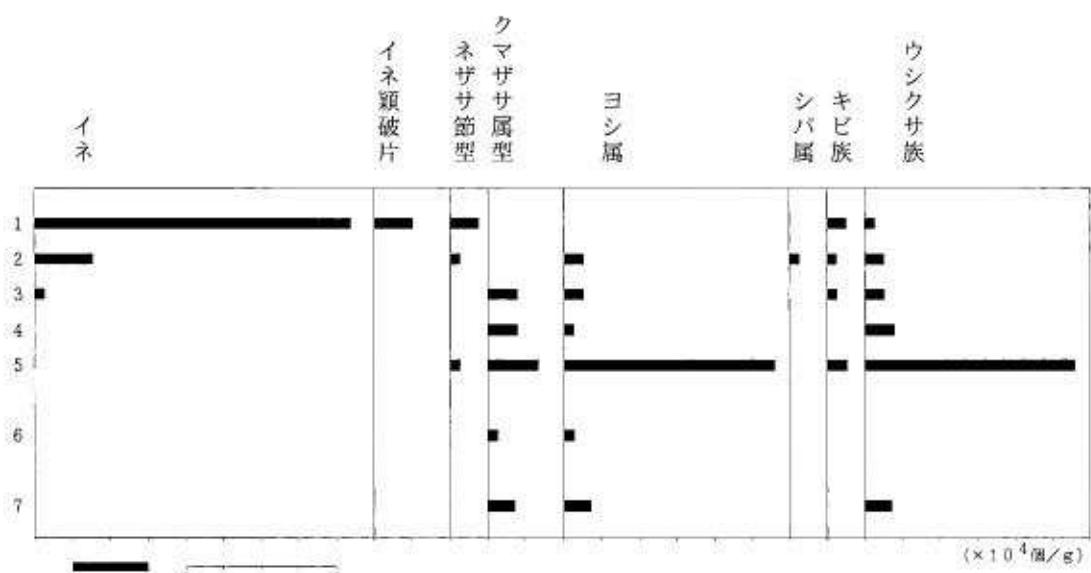
A地点においては最上部I層試料1より大量のイネが検出されており、このI層は現水田耕作土であることから当然ながらそれを支持する結果が示している。II層試料2においても上記の5,000個を越えるイネのプラント・オパールが検出されており、検出個数のみからは稲作が行われていた可能性は高いと判断される。さらに下位のIII層試料3においてもイネのプラント・オパールが検出されているが、個数は1,300個と5,000個にはかなり遠い個数である。よって個数のみからは本層における稲作の可能性はかなり低いと判断され、上位水田層の搅乱などによりもたらされたのではないかと推測されよう。

以上のようにA地点ではII層堆積期より水田稲作が営まれるようになったと考えられる。また畝状遺構が考えられている試料6・7においてイネのプラント・オパールは検出されず、プラント・オパール分析からはこれら2試料採取地点付近における稲作の可能性は低いと判断される。

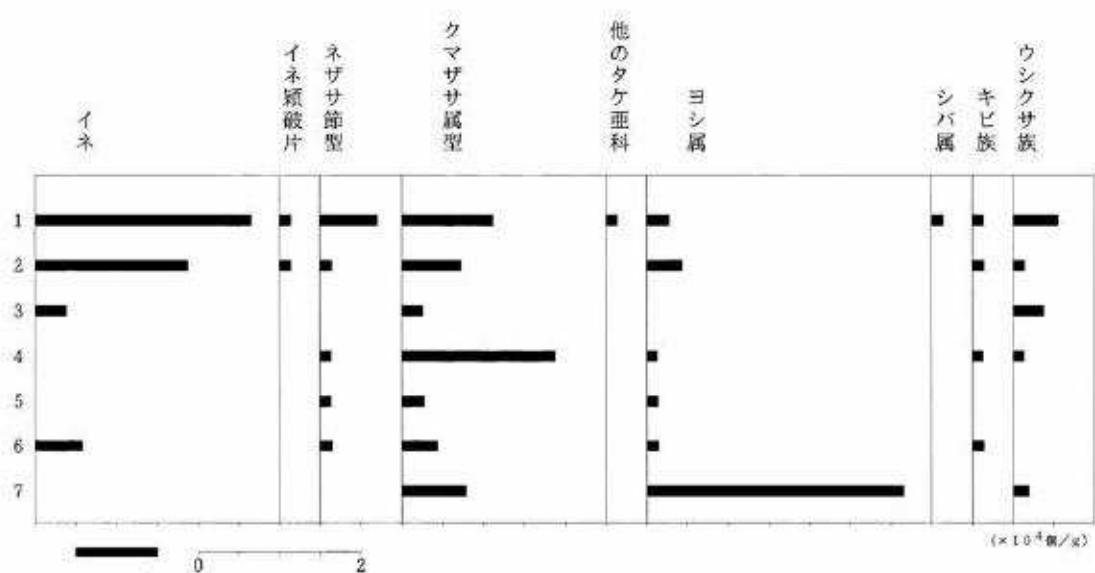
B地点においても現水田耕作土である最上部I層試料1において大量のイネのプラント・オパールが検

| 試料番号 | イネ (個/g) | イネ頸破片 (個/g) | ネザサ節型 (個/g) | クマザサ属型 (個/g) | 他のタケ亜科 (個/g) | ヨシ属 (個/g) | シバ属 (個/g) | キビ族 (個/g) | ウシクサ族 (個/g) | 不明 (個/g) |
|------|-------------|----------------|----------------|-----------------|-----------------|--------------|--------------|--------------|----------------|-------------|
| A-1 | 41,900 | 1,500 | 3,800 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2,500 | 1,300 | 5,100 |
| -2 | 7,700 | 0 | 1,300 | 0 | 0 | 2,600 | 1,300 | 1,300 | 2,600 | 6,400 |
| -3 | 1,300 | 0 | 0 | 3,900 | 0 | 2,600 | 0 | 1,300 | 2,600 | 6,500 |
| -4 | 0 | 0 | 0 | 3,900 | 0 | 1,300 | 0 | 0 | 3,900 | 2,600 |
| -5 | 0 | 0 | 1,300 | 6,700 | 0 | 28,000 | 0 | 2,700 | 28,000 | 10,700 |
| -6 | 0 | 0 | 0 | 1,300 | 0 | 1,300 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| -7 | 0 | 0 | 0 | 3,600 | 0 | 3,600 | 0 | 0 | 3,600 | 1,200 |
| B-1 | 26,500 | 1,400 | 7,000 | 11,200 | 1,400 | 2,800 | 1,400 | 1,400 | 5,600 | 1,400 |
| -2 | 18,700 | 1,400 | 1,400 | 7,200 | 0 | 4,300 | 0 | 1,400 | 1,400 | 2,900 |
| -3 | 3,800 | 0 | 0 | 2,500 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3,800 | 2,500 |
| -4 | 0 | 0 | 1,300 | 18,800 | 0 | 1,300 | 0 | 1,300 | 1,300 | 1,300 |
| -5 | 0 | 0 | 1,400 | 2,800 | 0 | 1,400 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| -6 | 5,800 | 0 | 1,500 | 4,400 | 0 | 1,500 | 0 | 1,500 | 0 | 1,500 |
| -7 | 0 | 0 | 0 | 7,900 | 0 | 31,600 | 0 | 0 | 2,000 | 2,000 |

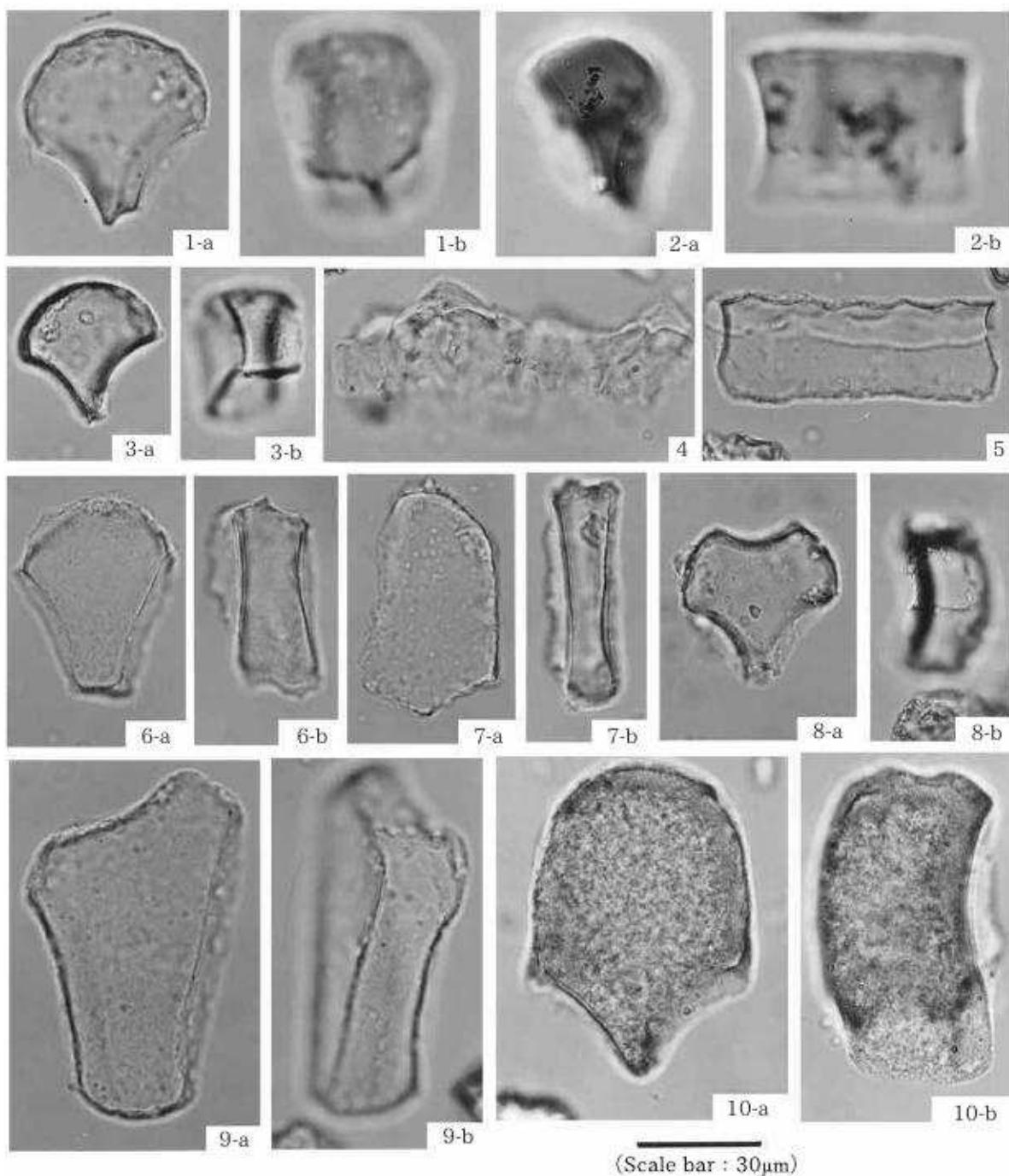
第4表 柏崎バイパス試掘試料 1 g当たりのプラント・オバール個数



第8図 柏崎バイパス試掘A地点のプラント・オバール分布図



第9図 柏崎バイパス試掘B地点のプラント・オバール分布図



1~3 : イネ (a : 断面、b : 側面)

1 : A地点 I 層、2 : B地点 I 層、3 : B地点 VI 層

4 : イネ穎部破片 A地点 I 層

5 : キビ族 (側面) B地区 II 層

6 : ネザサ節型 (a : 断面、b : 側面) B地点 I 層

7 : クマザサ属型 (a : 断面、b : 側面) A地点 IV 層

8 : シバ属 (a : 断面、b : 側面) B地点 I 層

9 : ウシクサ族 (a : 断面、b : 側面) A地点 III 層

10 : ヨシ属 (a : 断面、b : 側面) B地点 VII 層

第10図 柏崎バイパス試掘試料のプラント・オパール (Scale bar : 30μm)

出され、これは当然の結果と判断される。中・近世の遺物を含むⅡ層試料2においてもイネのプラント・オパールが多く得られており、稻作が行われていた可能性は高いと判断される。さらに下位のⅢ層試料3では3,800個と5,000個にはやや足りず、A地点同様に水田ではなく上位層からの落ち込みの可能性が考えられる。一方仙台市の富沢遺跡における古墳時代の水田跡のプラント・オパール分析結果をみると、同じ水田区画内で1,000個～9,500個などかなりばらつきが認められる〔古環境研究所1991〕。Ⅲ層試料もこうしたばらつきによる可能性も考えられ、Ⅲ層における稻作についてはさらに検討が必要であろう。本地点においては下部のⅥ層試料6からも5,000個を越えるイネのプラント・オパールが検出されており、Ⅵ層でも稻作が行われていた可能性は高いと判断される。

以上のことからB地点においては、最下部Ⅶ層において大量に検出されているヨシ属が初め大群落をみせていたが、Ⅵ層堆積期にこのヨシ原を切り開き一部で水田稻作が行われるようになったと推測される。その後一時期（IV、V層及びⅢ層？堆積期）稻作は中断されたと推測され、Ⅱ層あるいはⅢ層堆積期に再び稻作が行われるようになったと考えられる。

B 人骨の分析

1) 緒 言

東原町遺跡は平成15～16年度にかけて、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団により発掘調査された古代～近世（江戸時代）の遺跡である。人骨は、2地点（SK011・SK012）から検出され、SK012から検出された人骨は焼骨の破片である。

2) 出土人骨

SK011 わずかな骨片を含む永久歯と乳歯、左錐体が保存されている。骨片と乳歯はやや青みがかつた色に変色している。頸骨中に埋伏していた永久歯は変色がみられない。土壤に含まれていた何らかの化学物質によるものと推測できるが詳細は不明である。歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

乳歯は傷みが強く、エナメル質は確認できない。永久歯の中切歯、側切歯は中程度のシャベル形である。萌出状態から3～5才の幼児と思われる。性別は不明である。

| | | | | | |
|----|-----|-----|-----|-----|----|
| 3 | 2 | 1 | 1 | 2 | 3 |
| dc | di2 | di1 | di1 | di2 | dc |
| 1 | 1 | | | | |

数字は永久歯、アルファベットと数字は乳歯

SK012 大部分が1cm四方の骨片である。骨はいずれも灰白色を呈するほどよく焼かれており、大多数は小さい破片になっている。全部で約100点程であり、総重量は0.15kgである。

先に述べたように、本遺跡の骨は完全に灰化しており、収縮・変形・亀裂が著しい。したがって、これらの骨は、およそ800℃以上の温度で長時間焼かれたと考えられる。また、晒された骨が焼かれた場合には変形や亀裂が少ないが、比較的新鮮な骨が焼かれた場合には変形や亀裂が激しいことから判断すると、これらの骨は軟部の付着した状態で焼かれ、当土坑に埋められたと思われる。成人男性1体分を火葬した

場合の人骨の総重量は2~3kgといわれていることを考えると、非常に少ない分量である。

左右不明の橈骨骨頭が確認できる。関節に Lipping はなく、特に経年変化は見られない。

上顎骨歯槽の一部、脛骨骨体片、中足骨破片が同定できる。性別を判断できる部分が保存されていないため性別は不明である。

したがって、本地点出土の人骨は、性別不明の成人1体と判断される。しかし、1体分の人骨としては非常に少量であることから、分骨された可能性も考えられる。

3) 結 語

東原町遺跡のSK011から3才~5才の幼児、SK012から性別不明の成人が出土した。SK011においては萌出している歯の傷みが強く変色し、保存状態が非常に不良である。また、SK012はわずかな火葬骨である。江戸時代において御府内及びその近隣周辺においては数多くの人骨が出土し、江戸時代人の形態的特徴が示されてきている。しかし、本遺跡周辺を含む中越地域での出土人骨の類例はきわめて少数で、人骨についての特徴を示す段階ではない。今後、出土人骨の類例の増加を期待したい。



1 橋骨近位端 2~5 四肢骨片 6 焼骨全体

第11図 東原町遺跡 SK012出土人骨

C 木製品樹種同定及び鉄滓成分分析

1) はじめに

新潟県柏崎市東原町に所在する東原町遺跡は、鰐石川左岸の自然堤防上に立地している。本遺跡の発掘調査では、中世の掘立柱建物跡や井戸跡、土坑、鍛冶遺構、近世の墓坑や溝などの遺構などが検出されている。

本報告では、上記した遺構から出土した住居構築材と考えられる部材や木製品の樹種、木材利用の傾向を調査するため樹種同定を行う。また、鍛冶遺構や包含層などから出土した金属遺物や、土坑覆土の水洗などで採取された鍛造薄片を対象に分析調査を行い、当時の鍛冶操業などに関わる資料を作成する。

2) 木製品の樹種

試料

試料は木製品50点である。185・SE501出土の曲物は、それぞれ2点の部材から構成され、各部材より試料採取を行ったことから、試料数は計52点である。

試料採取は、調査担当者と協議・検討し、1) 接合部がある場合に接合面より採取する、2) 接合部のない場合は、木製品の破損部などをを利用して木片を採取する、3) 木片の採取も困難な場合は、現地で切片採取を行う、こととした。これらの点を考慮し、調査担当者立会いのもと、試料採取を行った。

なお、これらの試料の分類及び年代観などは、遺物整理中であったため試料採取段階での観察所見を基づいている。したがって、結果及び考察は、これらの試料の最終的な考古学的所見を含め、改めて検討する必要がある。

分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・粧目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

結果

試料は、針葉樹2種類（スギ・ヒノキ）、広葉樹8種類（ハンノキ属ハンノキ亜属・ブナ属・クリ・エノキ属・モクレン属・サクラ属）に同定された。このうち、173～184・7JP10出土の杭は、散孔材の道管配列を有する広葉樹材と判断されたが、7JP10出土の杭は保存状態が悪く、組織も収縮していたため、種類の同定に必要な組織観察は不可能であった。一方、173～184は、現生標本中に該当種が見つからず、現時点では種類不明の散孔材に留めた。なお、SK109出土の試料は樹皮であったが、樹種の特定には至らなかった。以下に、各種類の解剖学的特徴などを記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は晩材部にのみ認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は

滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ハンノキ属ハンノキ亜属 (*Alnus* subgen. *Alnus*) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2～4個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1～30細胞高のものと集合放射組織がある。

・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は單穿孔及び階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性～異性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は1～4列、孔圈外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・エノキ属 (*Celtis*) ニレ科

環孔材で孔圈部は2～3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～10細胞幅、1～50細胞高で精細胞が認められる。

・モクレン属 (*Magnolia*) モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独及び2～4個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は单穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～40細胞高。

・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2～8個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管は单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、2～3細胞幅、1～30細胞高。

考察

中世及び近世と考えられる木製品からは、針葉樹2種類（スギ・ヒノキ）、広葉樹8種類（ハンノキ属ハンノキ亜属・ブナ属・クリ・エノキ属・モクレン属・サクラ属）の10種類の樹種が認められた。これらの樹種の材質は、針葉樹のスギ・ヒノキは、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で比較的耐水性が高い特徴を有する。一方、広葉樹のクリ・ハンノキ亜属・サクラ属・エノキ属は比較的重硬で強度が高いといった特徴をもち、ブナ属・モクレン属は中程度の強度であり、加工が容易な種類である。このうち、クリは高い耐朽性を有しており、ブナ属は保存性が低い種類とされる。これらの樹種は、いずれも本地域の沖積地や山地に生育する種類であることから、本遺跡周辺や山地などから入手することは可能であったと考えられる。また、樹種の割合は、針葉樹のスギが最も多く、次いでクリ・ヒノキが多い傾向が認められ、ハンノキ亜属・ブナ属・モクレン属・サクラ属の点数は少なく、全体に占める割合も低かった。器種別の樹種構成では、柄杓（207）、底板、蓋、包丁（236）、しゃもし（206）、桶側板、板など、曲物側板などはスギ・ヒノキが主体であり、出土状況や木製品の形状から副葬品と推測される鍔形木製品（185）もスギであった。これらの製品の用途・形状などを考慮すると、スギ・ヒノキの割裂性や加工性、耐水性が考慮され、利用されたと考えられる。本遺跡周辺の下沖北遺跡の中世と考えられる木製品の分析事例では、板状の加工を施す製品はスギを主体としており、本分析結果と調和的である。

柱材はいずれもクリであり、上述した強度や耐朽性に優れている点で利用されたと考えられる。新潟県内では、古代～中世の遺跡から出土した柱材の調査では、スギとともにクリが多用される傾向が認められている〔越路町教育委員会・パリノ・サーヴェイ株式会社1992；パリノ・サーヴェイ株式会社1997・2000・2001・2002〕。ただし、当該期の資料は少なく、さらに分析事例を蓄積し検討する必要がある。

挽物の皿（漆器皿193・196～199）は、ブナ属やクリが認められ、針葉樹は検出されなかった。ブナ属やクリは、挽物の木地として利用例があり、挽物用材の研究では、木地は組織から環孔材系と散孔材系に分類され、散孔材ではさらに材質によってサクラ・カエデ系、ブナ・トチノキ系、エゴノキ系の3種類に分類されており〔橋本1979〕。本分析で対象とした挽物の樹種は、クリは環孔材系、ブナ属は散孔材のブナ・トチノキ系に分類される。環孔材系は、堅硬であるが韌性もあり、薄手物に適することは特徴とされており、散孔材のブナ・トチノキ系は、加工は容易で大量に入手できることから使用量も多いが、乾燥が難しく狂いが大きいことが特徴とされている。なお、前述の下沖北遺跡の中世と考えられる漆椀の分析調査では、ブナ属が多く認められ、新潟県内の遺跡から出土した各時代の皿・椀の分析調査においても、ブナ属やケヤキが多く確認される傾向にあり、クリの利用はほとんど認められない。本遺跡における挽物用材にクリ材が利用される点は注目される。

3) 金属遺物の成分分析

試料

試料は、14世紀と考えられるSX091から出土した椀型鉄滓・流状滓各1点と、SK097覆土の水洗によって抽出された鍛造薄片類1点の合計3点である。なお、鍛造薄片は、肉眼及び実体顕微鏡観察の結果、鍛造薄片とともに湯玉が確認されたことから、分析は鍛造薄片・湯玉の2点を分析試料とした。

分析

分析・解析は、日鐵テクノリサーチ株式会社・伊藤薫氏の協力を得ている。以下に、試料採取及び分析の工程を記す。

1 試料採取

椀型鉄滓・流状滓は、外観的特徴を記録後、

第5表 試料一覧及び調査項目

| 試料名 | 出 土 位 置 | 試 料 の 大 き さ | 調査項目 | | |
|------|------------|---------------------|------|----|----|
| | | | 外観 | 組織 | 成分 |
| 椀型鉄滓 | SX091 IV層 | 120×110×55mm, 730gr | ○ | ○ | ○ |
| 流状滓 | SX091 IV上層 | 50×45×30mm, 19gr | ○ | ○ | ○ |
| 鍛造薄片 | SK97 覆土一括 | 1-3mmの薄片; 180gr | ○ | ○ | ○ |
| 湯玉* | SK97 覆土一括 | 0.5-1.5mm φ, 薄片中に数% | ○ | ○ | × |

*湯玉は鍛造薄片中より分離・採取した試料

2 外観観察

装置：デジタルカメラ Finepix F401型（フジフィルム写真工業製）

実体顕微鏡 SZ-30（オリンパス光学工業製）

3 断面マクロ組織観察

装置：投影器 V-II型（日本光学製）

4 断面ミクロ組織観察

装置：金属顕微鏡 HFX-II型（日本光学製）

5 成分分析

分析元素 : T-Fe、M-Fe、FeO、Fe₂O₃、SiO₂、Al₂O₃、CaO、MgO、TiO₂、MnO

分析方法 : T-Fe、M-Fe、FeO … JIS 容量法 (8212、8213)

その他の元素 … ICP 発光分光分析法

装置 : ICP 分析装置 ICAP757 型 (日本ジャーレルアッシュ製)

結果

第4表に鉄滓・流状滓・及び鍛造薄片の平均成分を示す。以下に、各試料の分析結果を記載する。

1 鉄滓

第13図に外観及びマクロ・ミクロ断面組織を、第4表に成分分析結果を示す。茶褐色で所々に大きな空孔を有し、楕型形状をした重量感のある鉄滓である。第13図2の断面マクロ組織をみると、大小の丸い空孔とともに、鉄鋳（符号 : r、元は半溶融状態の金属鉄）も多く存在する。構成鉱物は若干の金属鉄（符号 : Me）・微細なウスタイト（化学組成 FeO、符号 : W）・長柱状のファヤライト（化学組成 2FeO-SiO₂、符号 : F）及びマトリックスは微細針状結晶を析出しているガラス（符号 : S）からなり、チタン化合物は存在しない。また、大きな空孔の内壁には鉄鋳が存在している。一方、第4表の平均組成では全鉄 (T-Fe) が43%、酸化第二鉄 (Fe₂O₃) が34%及び造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO) が33%と多い。外観上の特徴や成分構成からみて、半溶融状態になった金属鉄と炉材との反応で生成した鉄滓、すなわち精練操作過程で生成したものと考えられる。

2 流状滓

第14図に外観及びマクロ・ミクロ断面組織を、第4表に成分分析結果を示す。濃灰色で一部は薄茶色を呈する発泡スラグである。第14図2～6に示したように、マトリックスはガラスになっており(非結晶)、大小の空孔が多く存在する。第4表の平均組成でも全鉄は7%と低く、ほぼ炉材成分に近い組成である。恐らく、被熱を強く受けた鍛冶炉の一部が反応したものと考えられる。

| 試料 | T-Fe | M-Fe | FeO | Fe ₂ O ₃ | SiO ₂ | Al ₂ O ₃ | CaO | MgO | TiO ₂ | MnO | 造滓成分 |
|-----|-------|------|-------|--------------------------------|------------------|--------------------------------|------|------|------------------|------|-------|
| 鉄滓 | 42.72 | 0.27 | 24.07 | 33.95 | 24.10 | 6.13 | 1.25 | 0.89 | 0.90 | 0.06 | 33.30 |
| 流状滓 | 6.93 | 0.85 | 1.33 | 7.22 | 62.90 | 17.90 | 3.42 | 0.83 | 0.83 | 0.08 | 87.30 |
| 薄片 | 68.65 | 0.42 | 47.77 | 44.47 | 2.90 | 1.02 | 0.12 | 0.26 | 0.26 | 0.04 | 4.53 |

凡例 T-Fe : 全鉄、M-Fe : 金属鉄、FeO : 酸化第一鉄、Fe₂O₃ : 酸化第二鉄、SiO₂ : 酸化珪素、Al₂O₃ : 酸化アルミニウム、CaO : 酸化カルシウム、MgO : 酸化マグネシウム、TiO₂ : 酸化チタン、MnO : 酸化マンガン
造滓成分 : SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+MnO を表す。

第6表 成分分析結果 (単位: 重量%)

3 鍛造薄片

第15図に外観及び断面マクロ・ミクロ組織を、第4表に成分分析結果を示す。幅1～3mmで厚さ0.2～0.5mmの薄片である。薄片の最表面は厚さ1μm以下のヘマタイト層（化学組成 Fe₂O₃、符号 : H）が形成されており、その下は20μm程度のマグネタイト層（化学組成 Fe₃O₄、符号 : M）が、またその下層にはウスタイト層（化学組成 FeO、符号 : W）が形成している（第15図3・4）。この薄片は、高温度で酸素分圧の低い環境下で金属鉄の表面に生成した酸化層が剥離したものである。一方、第15図5・6は別の薄片の断面組織を示したものである。最表面には前記と同様のヘマタイト層が形成しているが、下層はマグネタイトになっている。また、最下層には一部にスラグが存在する。加熱過程で金属鉄表面に存在していた薄い粘土成分と、酸化鉄層との反応で生成したものと考えられる。したがって、この薄片類は高温の加

熱過程において金属鉄表面に生成した酸化鉄層が剥離したもので、金属鉄を加熱・鍛打した時に生成したものと考えられる。

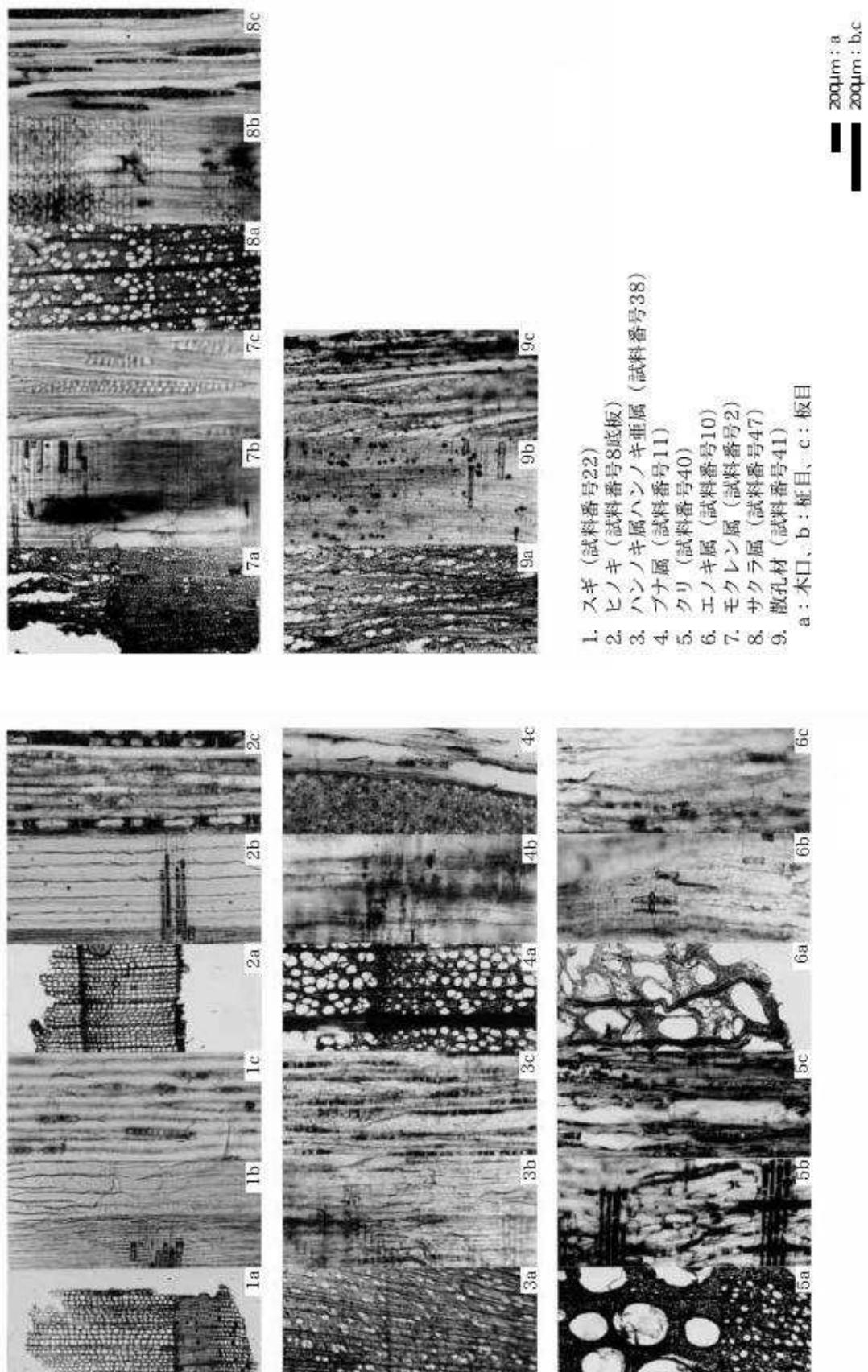
4 湯玉

当試料は、前記の鍛造薄片中に混在していたもので、肉眼及び実体顕微鏡下で選別したものであり、存在割合は鍛造薄片中の数%と見られる。第16図に外観と断面マクロ・ミクロ組織を示した。黒褐色及び茶褐色を呈し、直径が0.5～1.5mmの球状粒子である。マグнетライト結晶を主体としたものと（第16図3・4）、ウスタイトとファヤライトの微細結晶からなるもの（第16図5・6）とが存在する。加熱されている金属鉄表面で半溶融状態となって生成した酸化鉄層が、発生したガスによって球状化したものである。したがって、この湯玉も前記の鍛造薄片と同様の過程で生成したものと考えられる。

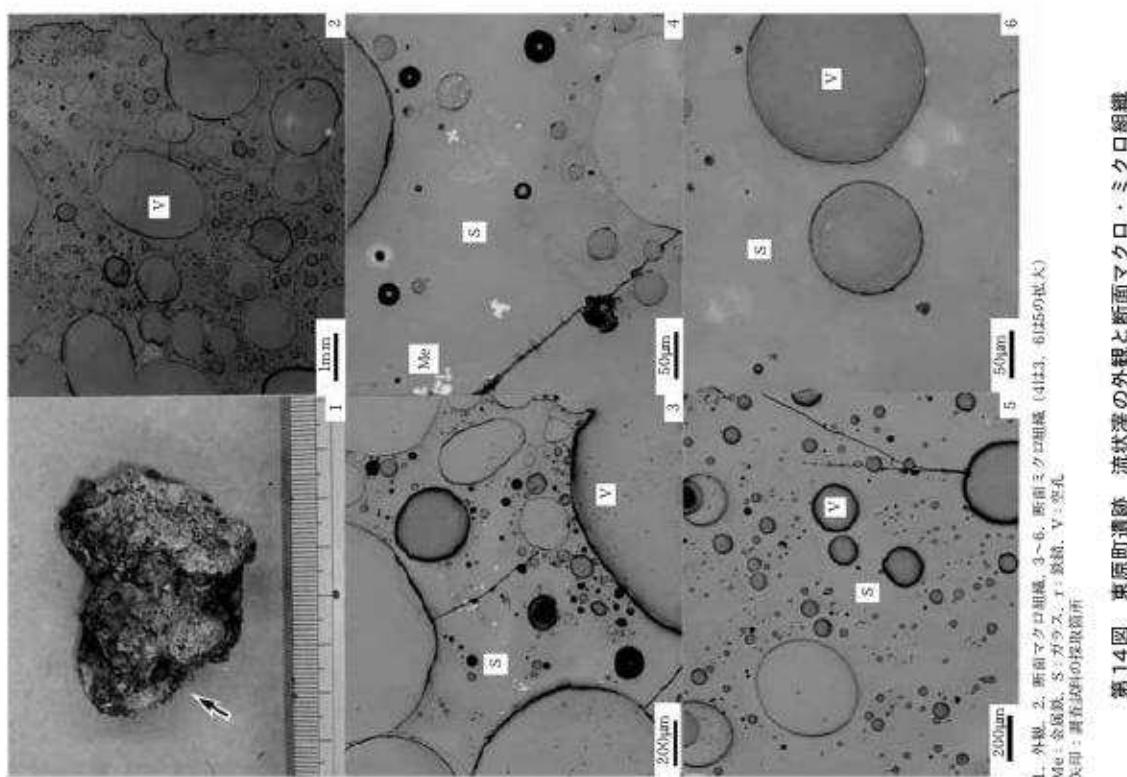
5 まとめ

上記した4試料の金属学的調査結果をまとめると、以下の点が指摘される。

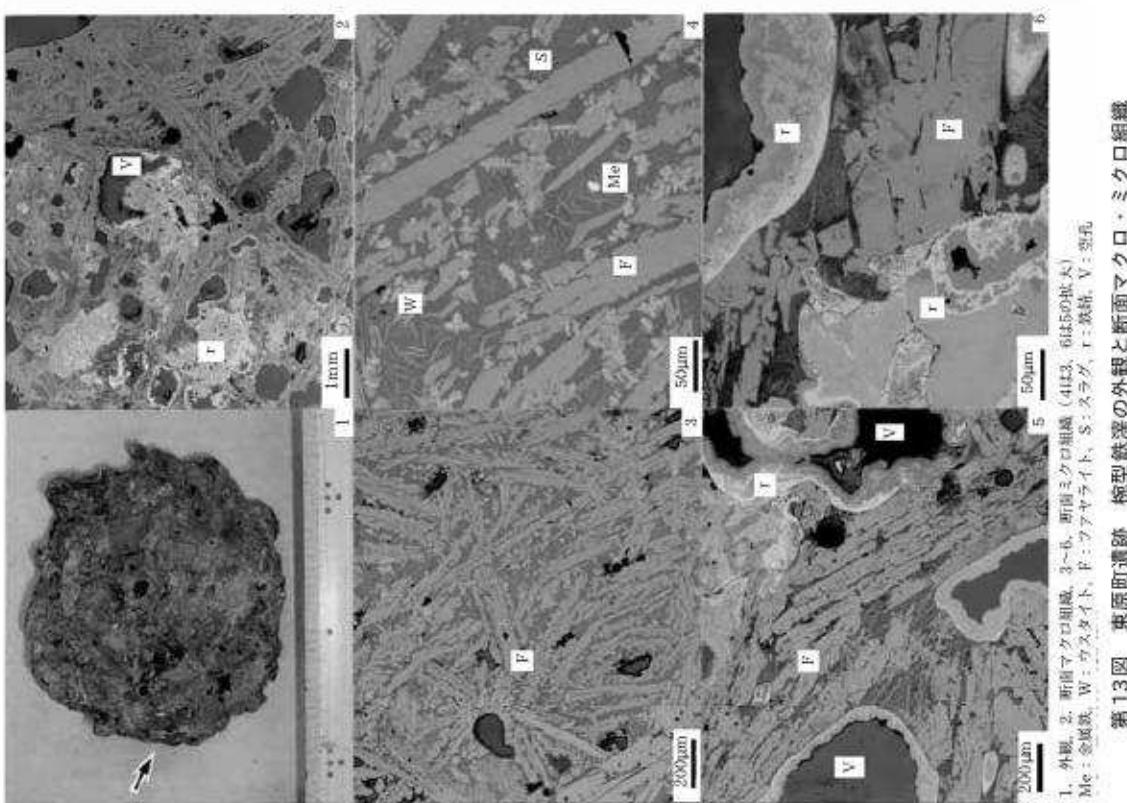
- ①鉄滓は椀型形状を示し、多くの鉄鋸（元は半溶融状態の金属鉄）を伴つたもので、チタン分は極僅かであることから、砂鉄を原料としたものと言及することはできない。形状・大きさ・構成鉱物からみて、小規模な精練的操作過程で生成したものと推測される。
- ②流状滓は、鍛冶炉の一部が被熱により溶融して生成した発泡スラグであった。構成成分からみて、①の鉄滓生成における炉材の一部と推測される。
- ③鍛造薄片・湯玉は、小鍛冶過程において金属鉄を加熱・鍛打時に生成した酸化鉄に由来すると判断される。
- ④鉄滓・流状滓と鍛造薄片・湯玉との相関関係は、本分析結果からは見出すことはできないが、これら遺物が出土、あるいは採取されたことから、少なくとも小規模な精練作業及び小鍛冶作業が行われていたことが推測される。



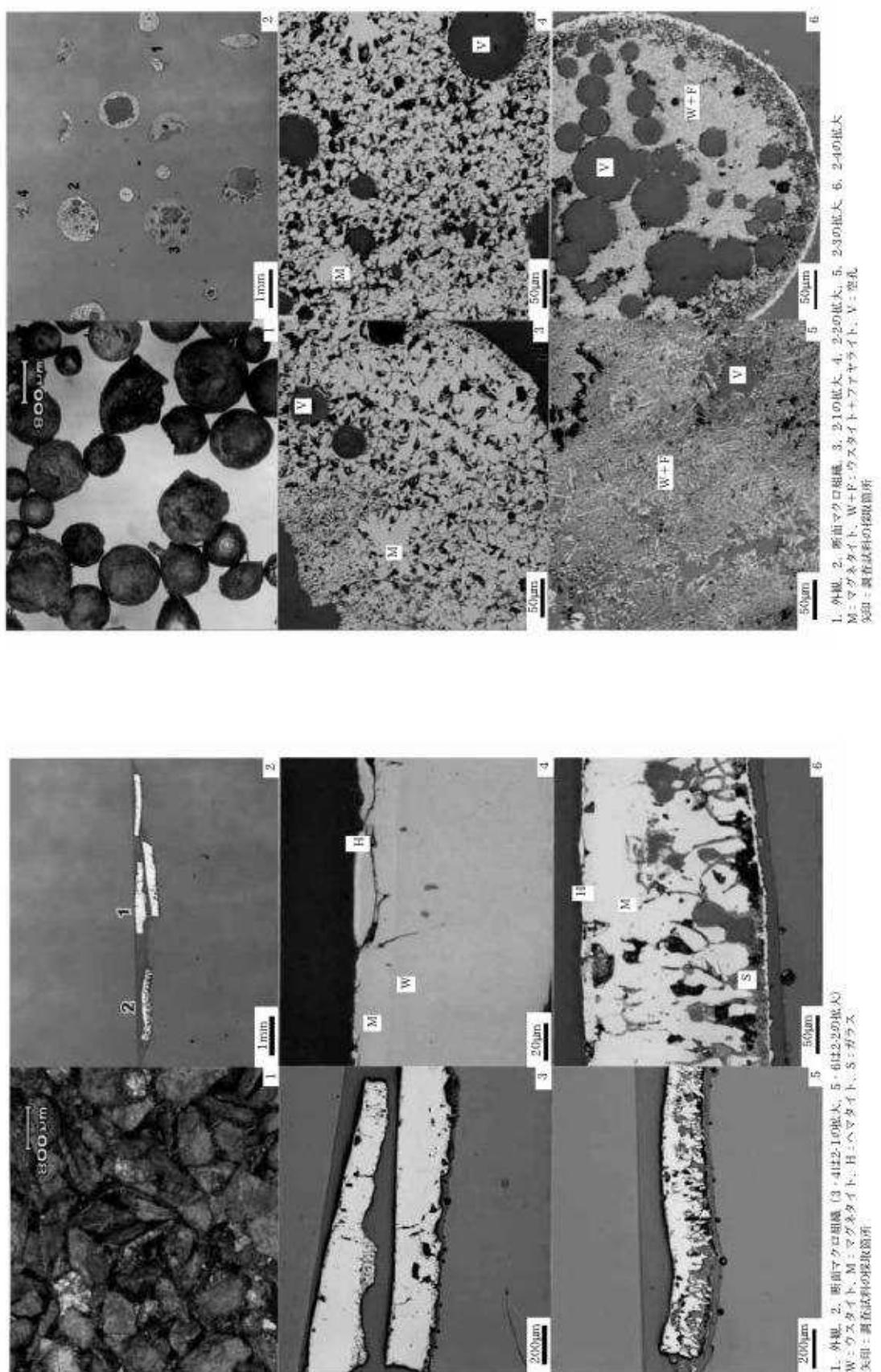
第12図 東原町遺跡 検出樹種の顕微鏡写真



第14図 東原町遺跡 流状洋の外観と断面マクロ・ミクロ組織



第13図 東原町遺跡 桶型鐵洋の外観と断面マクロ・ミクロ組織



第16図 東原町遺跡 湯玉の外観と断面マクロ・ミクロ組織

6 まとめ

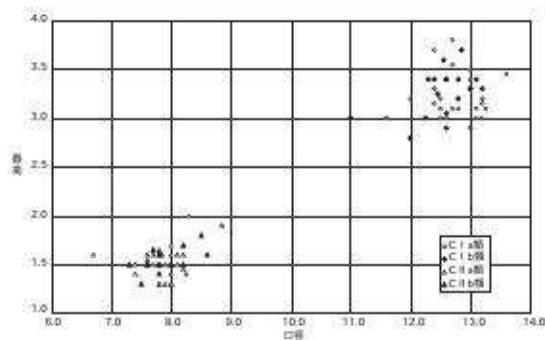
A 土師質土器

東原町遺跡では多くの土師質土器が出土した。形態は手づくね成形のものがほとんどである。ここでは手づくね成形のC類について、下沖北遺跡のものと比較を行うことでまとめたい。

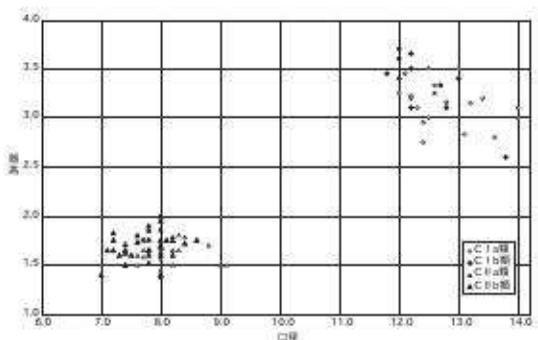
C類は刈羽三島型〔品田1997〕と称されるもので、法量や器形をもとに分類している。東原町遺跡と下沖北遺跡を比較した際、C I b類の差が明瞭である。C I b類は外底面に凹みのある①類と凹みのない②類に分けられる。底部が確認できる個体のうち、下沖北遺跡では凹みのないC I b②類は平成14年度にごく少量出土したに過ぎず(H14年度報告番号99)、それ以外のC I b類は凹みのある①類である。一方東原町遺跡の場合、凹みのあるC I b①類は確認できない。この凹みは指を強く押し込むことで作出し、土器の座りを良くし、安定させることを意図していると思われる。C I b類の形態差が時期差なのか地域差なのかは不明だが、同じ柏崎平野の東と西に位置する遺跡で、差異が認められることに注意したい。またC II類について、下沖北遺跡では外底面に凹みがあるもの、上げ底状のもの、平坦なものが確認できる。東原町遺跡では上げ底状のものと平坦なものは確認できるが、凹みがあるものは少ない。数量的には平坦なものが多い。

次に種別ごとの法量を第17・18図に示す。両遺跡で法量の分布域に大差は認めにくい傾向にあるが、C I類については、東原町遺跡の多くが口径12.0～13.5cmの幅に収まるのに対し、下沖北遺跡では口径12.0～14.0cmとなる。また口径の大きな個体は下沖北遺跡で確認でき、小さな個体は東原町遺跡で確認できる傾向にあり、全体的に東原町遺跡のものの方が小ぶりの個体が多い傾向が見て取れる。C II類の口径も両遺跡とも7.0～9.0cmであるが、器高は下沖北遺跡が1.5～2.0cmに、東原町遺跡が1.3～1.7cmに主体があり、東原町遺跡の方が器高の低い個体が多い。

最後に年代的なことに触れておく。下沖北遺跡では13世紀後半から14世紀前半にかけてa類からb類へ変遷すると想定した〔山崎2003〕。東原町遺跡では、中層でb類を主体とするSX091とIV期の珠洲焼を埋めた遺構が検出されたこと、下層ではIII期の珠洲焼が主体で、a類主体のSK106が検出されたことから、中層の年代は14世紀前半以降、下層の年代は13世紀後半以降と考えられ、下沖北遺跡で想定した年代とも大きな齟齬はない。



第17図 東原町遺跡 土師質土器の法量分布



第18図 下沖北遺跡 土師質土器の法量分布

B 遺跡の変遷

東原町遺跡は遺構確認面の相違、遺構の切り合いから5時期に区分することが可能である。ここでは各層の概略を記述し、遺跡の変遷をまとめておく。なお、最下層の時期は古代であるが、出土遺物は摩耗した土師器などで、詳細は不明である。そのため以下では扱わない。

1) 下層段階(図版26)

下層の遺構はV層上面で検出されるが、遺構の切り合いや主軸方向から2時期に分けられる。

①期 主軸が北西—南東方向を向く遺構で、SD510・904・909・944、10F周辺の跡などが該当する。水田畦畔の方向もどちらかというと北西—南東方向を向くと判断し、12H周辺の水田跡も①期に含める。また19J周辺では足跡が検出されており、この周辺にも水田が位置した可能性が高い。①期においては、8・9列以南の低地部で水田が行われ、生産域として機能していたと想定される。その一方で11・12列周辺には水田跡と切り合う形で溝が位置する。水田跡と溝の切り合い関係は明確にはしえなかつたが、溝のうちのいくつかは水路としての機能を果たしたものもあると思われる。

またSD944・1045の間隙は出入り口のような機能を想定することが可能で、区画溝としての性格が考えられる。SD944・1045と平行する位置関係にあるSD510・904・440なども区画溝の可能性がある。ただし、これら区画溝に囲まれた中に、区画溝と柱筋を合わせる掘立柱建物や柱穴列は確認できない。

①期の遺構出土の遺物は多くなく、時期を決定できる遺物も多くない。後述の②期が13世紀後半以降と考えられるので、①期はそれ以前としておく。

②期 主軸が東西方向・南北方向を向く遺構である。SD108・922のほか、掘立柱建物も基本的には東西棟である。8・9列以北の土坑・ピットなどの多くもこの時期に所属しよう。SD108は南北方向の自然流路で、9Dで①期の水田畦畔及びそれに伴う溝(04SD054・056)を切る。またSD108とSD922は切り合い関係ではなく、両者は同時存在と考えられる。つまり、②期になってSD108が遺跡内を流れ、①期の水田が被害を受ける。その後IV層が堆積し始め、SD108の流路がある程度安定してから②期の集落が営まれるという変遷が想定できる。

②期の建物は東西棟で、中層段階の建物にも引き継がれる要素である一方、規模は中層段階の建物の方が大きい。ただしSB1203は鍛冶関連工房で、同規模のSB1204も作業場のような機能を想定すれば、居住用の建物がこれ以外に存在する可能性も考えられる。それに関連して、3J周辺や7J周辺にもピットが多数位置することから、この周辺にも建物が位置することが想定される。

SB1203は鍛冶関連工房と考えられる建物である。第5表にSB1203内の遺構覆土及び周辺の包含層を水洗した結果、検出された鍛冶関連遺物の出土量を示す。SK097では他の遺構に比べ、全ての項目で高い出土量を示す。特に鉄滓や炭、炉壁が多く出土していることからも、鍛冶炉と考えた方が妥当であろう。またSK094も砂鉄・鍛造薄片・鉄滓で高い出土量を示す一方、炭や炉壁の出土はあまり多くはない。SK094出土の鍛造薄片が包含層出土のものよりかなり多いことから、SK094出土の鍛造薄片は埋没過程における流れ込みとは判断できない。すなわち鍛冶が行われていた時点で、SK094は何らかの機能を果たしていた、あるいは開口していたと考えられる。位置関係からはSK107に伴う土坑と判断できるものの、その機能は明確にしえない。

生産域と居住域あるいは居住域内を区画する溝にはSD922などが該当し、中層段階に比べ数も少なく、

| 出土地点 | 砂 鉄 | 鍛造薄片 | 鉄 淬 | 含鉄淬 | 炭 | 羽 口 | 炉 壁 |
|------|---------|---------|---------|---------|--------|--------|--------|
| 遺構 | SK094 | 1559.00 | 355.60 | 1245.00 | | 0.10 | 1.00 |
| | SK097 | 2011.00 | 601.10 | 3512.00 | 350.00 | 85.90 | 36.60 |
| | SK107 | 1.90 | | 213.00 | | | 4.20 |
| | 2IP1 | | | 1.30 | | 0.10 | |
| | 2IP2 | 2.50 | 0.30 | 0.60 | | 1.10 | |
| | 2IP3 | 0.10 | 0.05 | 0.10 | | | |
| | 2IP4 | 0.10 | | | | | 0.30 |
| | 3IP8 | | | | | 4.50 | 0.60 |
| | 3IP15 | 8.80 | 1.60 | 39.30 | | 0.10 | |
| | 3IP17 | 0.40 | | 8.20 | | 0.80 | |
| | 3IP18 | 0.05 | | | | | |
| | 3IP24 | | | 2.30 | | | |
| 包含層 | 212.10 | 29.75 | 3844.00 | | 178.20 | 322.80 | 185.40 |
| 合 計 | 3795.95 | 988.40 | 8865.80 | 350.00 | 270.80 | 360.00 | 203.10 |

鉄淬には鍛冶淬とガラス質淬を含む 単位：g

第7表 SB1203検出の鍛冶関連遺物

規模も小さい傾向にある。3IにはSK106が位置し、覆土下位から土師質土器が121点出土した。そのうち7点は灯明皿で、明かりを灯して行われた饗宴の後、使用された土師質土器が一括廃棄されたものであろう。出土状況は良好である。

SK106出土の土師質土器は、2層ではC I b②類・C II a類の割合が高く、4層ではC I a②類・C II a類の割合が高い（第6表）。SK106出土の土師質土器が一括廃棄されたものと理解できることから、SK106全体での割合を示すと、C I a類37.7%、C I b類26.8%、C II a類21.1%、C II b類14.4%となる。a類の方が割合は高いものの、b類も一定の割合を占める。下沖北遺跡の土師質土器はa類からb類へ変遷し、その変遷の年代を13世紀後半から14世紀前半と想定できること〔山崎2003〕、後述のSX091より古い様相を示すこと、下層の珠洲焼がⅢ期を主体とすることなどから、SK106は13世紀後半を中心とする時期に位置づけられる。よって下層②期段階の年代も13世紀後半以降に相当する。

| 層位 | 種別 | B I b | C I a① | C I a② | C I b② | C II a | C II b |
|----|--------|-------|------------|-------------|-------------|-------------|------------|
| 2層 | 口縁部残存率 | | 29 (5.7) | 83 (16.3) | 180 (35.4) | 138 (27.1) | 79 (15.5) |
| | 破片数 | | | | 91 | | 19 |
| 4層 | 口縁部残存率 | | 885 (12.9) | 1699 (24.8) | 2001 (29.2) | 1373 (20.0) | 905 (13.2) |
| | 破片数 | | | | 881 | | 248 |
| 6層 | 口縁部残存率 | | | | 36 (33.3) | 36 (33.3) | 36 (33.3) |
| | 破片数 | | | | 32 | | 3 |

第8表 SK106出土土師質土器の残存率（/36・括弧内は層位ごとの%）

2) 中層段階（図版7）

中層の遺構はIV層上面で検出でき、主軸が東西方向・南北方向を向く遺構である。下層②期段階の集落を継承する集落である。この段階にはSD108はIV層まで完全に埋没し、SD108に接続する形で区画溝（SD072・213）が掘削される。またSD213の堆土を北側に盛ることで、盛土を設け、居住域・生産域と生産域の区画を明瞭にしている。

建物は東西棟で下層②期段階より規模は大きい。SB1202は片面廻建物で、北側にもピットが位置することから、北側にも廻が付く可能性がある。このSB1202内にはSK069が位置し、Ⅲ期の珠洲焼壺（36）が埋められていた。SB1202の南約10mに位置するSB1201周辺でも、SK090・162で珠洲焼の壺

(37・39) が埋められている。時期はいずれもIV-1期である。SK090は銭貨埋納遺構で、SK162も39の中に銭貨が2枚残っていたことから埋納遺構の可能性がある。そしてSK090はSB1201の北東約2m、SK162はSB1201の南約2mと建物から等距離に位置する。建物とその外側の境界に埋納されている可能性がある〔戸根1999〕。

区画溝は下層②期段階より数が多く、規模が大きいものも増える。そしてSD213・593間に盛土が構築される。井戸は、SE155を除き、径70~120cm、深さ60~130cm程度の小型のもので占められ、井戸枠などは確認できない。井戸は主に建物や歴跡周辺に位置する傾向にある。31周辺にはSX091が位置する。SX091は土師質土器を集積した遺構で、掘り込みは確認できないが、饗宴などで使用した土師質土器を一括して廃棄したものであろう。またSX091の位置する調査区北側は、下層②期段階にはSK106が位置する。SK106も土師質土器の廃棄遺構で、31周辺の調査区北側が廃棄場として機能していたことが判明する。このSX091・SK106の存在から、東原町遺跡が土師質土器を使用した饗宴を執り行う立場にある集落であることが判明する。

9列以南の低地部には歴跡が位置する。低地部の歴跡は20I・16I・13I・12J周辺で確認できる。20I・12J周辺の歴跡はおおむね東西方向・南北方向を向くが、16I・13I周辺の歴跡の主軸はややぶれる。このほか12P・12O・11N・6H周辺でも歴跡が確認できる。6H周辺の歴跡はSB1201に近接しており、これらの歴跡は基本的に居住域内に位置する。居住域内の歴跡は屋敷地に付随する畠地と考えられる。またこの居住域内自体も小規模な溝で区画され、建物と歴跡は分けられる。

出土遺物には土師質土器、珠洲焼、木製品などがある。SX091からは多くの土師質土器が出土した。層位ごとの個体数は第7表のようになる。大型品のC I a類とC I b類に関しては、1・2層ではC I b類の割合はC I a類の2倍である。下層包含層と考えられる3層では、両者の割合に大差は認めにくい。つまりC I類は、3層と1・2層間ではC I a類の割合は減少し、C I b類は増加する傾向が認められる。小型品のC II a類とC II b類は、2・3層でC II b類の割合がC II a類の2倍、1層では両者の割合が縮小する傾向がある。全体としては、各層ともC I b②類とC II b類が卓越するが、C I a類・C II a類が15~20%で、一定量存在することも事実である。下沖北遺跡の土師質土器の年代観からSX091は14世紀前半を中心とする時期に比定できよう。珠洲焼ではSB1202内のSK069から出土した36、SB1201周辺のSK090・162から出土した37・39、SK109出土の38が特筆され、36・37・39は建物に伴うと判断できよう。36はⅢ期の所産であるものの、そのほかはIV-1期の所産である。また37内部に納められた銭貨のうち、初鋳年が最新のものは紹豊元寶の1341年である。甕・壺の耐用年数やSX091の年代を考慮すると、中層段階は14世紀第3四半期を主体とする。一方SD074からは京都系土師皿(29~33)が出土した。29~33には15世紀末~16世紀の年代が与えられ、東原町遺跡の中世における活動の下限を示している。

| 層位 | 種別 | B I b | C I a① | C I a② | C I b② | C II a | C II b |
|--------------|--------|----------|----------|------------|------------|------------|------------|
| 1層 (IV上層) | 口縁部残存率 | | 98 (5.3) | 267 (14.6) | 679 (37.0) | 351 (19.1) | 439 (23.9) |
| | 破片数 | | | | 1597 | | 280 |
| 2層 (IV中層) | 口縁部残存率 | 13 (1.7) | | 121 (15.7) | 237 (30.7) | 116 (15.0) | 285 (36.9) |
| | 破片数 | 13 | | | 404 | | 274 |
| 3層 (IV下層) | 口縁部残存率 | | | 13 (18.3) | 17 (23.9) | 13 (18.3) | 28 (39.4) |
| | 破片数 | | | | 2 | | 2 |
| IV層 | 口縁部残存率 | | 18 (4.8) | 42 (11.1) | 125 (33.1) | 138 (36.5) | 55 (14.6) |
| | 破片数 | | | | 18 | | 13 |

第9表 SX091出土土師質土器の残存率(/36・括弧内は層位ごとの%)

3) 上層段階 (図版1)

上層の遺構はⅢ層で検出でき、主軸が東西方向・南北方向を向く遺構である。9J周辺で土坑やピットがまとまるものの、全体として遺構は分散する傾向にある。遺構では溝や土坑が確認できるが、このうち墓坑と判断できる3基の土坑 (SK011・012・111) が特筆される。この3基の墓坑はSK111が2Gに位置し、ほかの2基とは離れている。なおSK011からは幼児の歯、SK012からは火葬骨が検出された。

SK011・012・111はいずれも桶を使用した埋葬形態で、桶は横転した状態で土坑内に納められる。土坑の法量は長さ93～126cm、幅74～90cmで、平面形は長方形を呈する。断面形は台形状を呈する可能性が高く、形態の規格性がうかがえる。埋める桶の法量に規制された結果であろう。覆土は2層以上に分層でき、おおむね灰色系覆土が堆積することが共通する。またSK011では、横転した状態で納められた桶の上側の側板が内部に落ち込んで検出され、土圧で側板が落ち込んだ可能性が考えられる。同じ状況はSK111でも確認できる。SK011・012・111の埋葬形態は、遺体を納めた桶を正位に埋めるという近世に一般的な埋葬形態とは異なる。また火葬骨が出土していることから、遺体が火葬にされたことがわかり、棺に利用された桶 (169・187) の大きさでは骨にしなければ遺体は納めにくいである。

墓坑の出土遺物には漆器椀 (172)・鍼形木製品 (185)・数珠玉 (163～168・173～184)・寛永通寶 (217～234) などが確認できる。このうち寛永通寶はSK011から12枚、SK111から5枚出土し、SK012でも数枚程度出土した。SK011では6枚が古寛永 (217～222)、5枚が新寛永 (223～227)、1枚が破片のため不明であった。SK012では図示した2枚のうち、1枚が古寛永 (228) で、もう1枚は判読不能 (229) で、SK111では2枚が古寛永 (230・231)、3枚が新寛永 (232～234) である。SK011・111で新寛永が出土していることから、墓の造営は18世紀以降となる。

同様の埋葬形態の墓坑は小国町の浦田遺跡〔山崎ほか2000〕でも確認できる。浦田遺跡では39基検出され、墓坑内から骨片や歯も検出されたが、骨片については分析されていない。副葬品として漆器椀・六道錢・数珠がセットで副葬される場合が多く、東原町遺跡SK011と共に通する。このほか煙管や櫛などの副葬品は死者の生前の嗜好品と判断し、また墓坑や包含層から出土する陶磁器は墓の盛土上の供獻具と考えている。出土した陶磁器や錢貨から江戸時代中期～明治30年代 (17世紀末～19世紀末) に造営された墓坑としている。東原町遺跡の墓坑の造営年代と近い。浦田遺跡の所在する小国町は柏崎市に隣接し、浦田遺跡と東原町遺跡の距離は直線で約16kmである。東原町遺跡は鰐石川流域、浦田遺跡は渋海川流域で水系を異なる。小国町は地形的に見ると魚沼地方との結びつきが考えられるが、桶を横転した埋葬形態に代表される葬制などは地形的な制約を超えて共通する要素であることが判明する。

近世の出土遺物は、陶磁器や石器・木製品、錢貨などで、陶磁器は墓坑以外の遺構や包含層から出土し、錢貨 (寛永通寶) は墓坑から出土する傾向にある。陶磁器は肥前系がほとんどで、Ⅱ～Ⅲ期 (17世紀代) のものが主体となる。前述の通り、墓坑出土の寛永通寶には新寛永が確認できることから、墓の造営を18世紀以降と考える。包含層からは3枚錢貨が出土し、2枚が新寛永、1枚が不明である。以上のように、主体となる肥前系陶磁器の年代と墓の造営年代には時期差が認められる。一方、墓坑周辺の包含層からは陶磁器はごく少量しか出土していないことから、包含層出土の陶磁器を墓の供獻具とは考えにくい。以上から、Ⅱ～Ⅲ期 (17世紀代) には墓坑以外の遺構が位置し、18世紀以降は主に墓地として利用されたと思われる。

C 遺跡の性格

平成15・16年度の調査で、古代・中世・近世の遺跡であることが判明した。そのうち主体となるのは中世で、古代に関しては前述の通り遺構・遺物が希薄で詳細は不明である。東原町遺跡は、平成14(2002)年9月の市教委による試掘調査【柏崎市教育委員会2002】で周知された。その際も中・近世の遺物とともに古代の遺物（土師器）が出土したが、出土量は多くはない。

中世では2時期（下層段階②期・中層段階）で集落が確認できる。集落は基本的に居住域と生産域からなり、両者は溝などで区切られる。建物数は4棟と少ないものの、建物として認識しえなかった柱穴も多数存在することから、建物数は増加することが考えられる。東原町遺跡から鰐石川の上流700m、別山川の合流付近には角田遺跡が位置する。調査面積は狭いものの、遺構密度が高く、中世前期（13世紀後半）には水上交通を意識した小領主の屋敷としての性格が想定されている【品田ほか1999】。中世の角田遺跡は13世紀後半を主体とすることから、東原町遺跡の下層段階②期と同時期である。東原町遺跡では饗宴に使用された土師質土器が一括廃棄された遺構が検出され、土師質土器の出土量が多いことが特徴の1つである。角田遺跡では食膳具における土師質土器の比率が98%と高く、貯蔵具・調理具では珠洲焼の比率が非常に高い【品田ほか1999】。東原町遺跡でも、食膳具に占める土師質土器の比率を計量してはいないが、同様の傾向が想定できる。土師質土器は「儀礼的あるいは宗教的な共食の場あるいは日常生活でも主にハレの場で使用し、1回限りで捨てるもの」【宇野1997】で、この種の「食事の機会や集る人数が多い格上の遺跡（中略）において土器食膳具の出土が多い」【宇野1997】という宇野氏の研究【宇野1997】によれば、土師質土器の比率が高い東原町遺跡・角田遺跡は、周辺集落の中で中心的な役割を果たした集落と考えられる。

一方遺物の出土状況は、東原町遺跡では土師質土器の廃棄遺構や珠洲焼埋納遺構が検出され、遺構から一定量出土する傾向にある。角田遺跡は、東原町遺跡と比較して調査面積が狭いため注意する必要があるが、「中世土師器を含めた中世遺物の出土状況は、土器溜まりのような一括出土ではなく、遺構あるいは遺物包含層に少量ずつ、しかも小片で分布」【品田ほか1999】しており、両遺跡で出土状況に差異が認められる。また角田遺跡は13世紀後半が主体、東原町遺跡は13世紀後半から14世紀が主体で、存続期間にも差異が認められる。東原町遺跡・角田遺跡は鰐石川流域で中心的な役割を果たした集落である可能性が高いものの、遺物出土状況と存続期間に違いがあり、中心的な集落の中での性格の差異を反映しているのかもしれない。このほか鰐石川流域には上原遺跡や境川原遺跡が位置し、境川原遺跡付近には五輪塔・宝篋印塔が立つ。東原町遺跡や角田遺跡を含めたこれら遺跡の動向は中世における鰐石川流域の開発の一端をうかがわせる。

近世では、17世紀以降から井戸や溝など活動の痕跡が見られるようになる。その後18世紀以降、墓が造営されるようになると、それ以外の活動の痕跡は確認できなくなる傾向にある。検出された墓坑と同じ構造のものは小国町浦田遺跡で確認できる。小国町は八石山地を介し柏崎市鰐石川流域と接することから、鰐石川伝いに交流が行われたことが想定できる。

第IV章 下沖北遺跡

1 調査概要

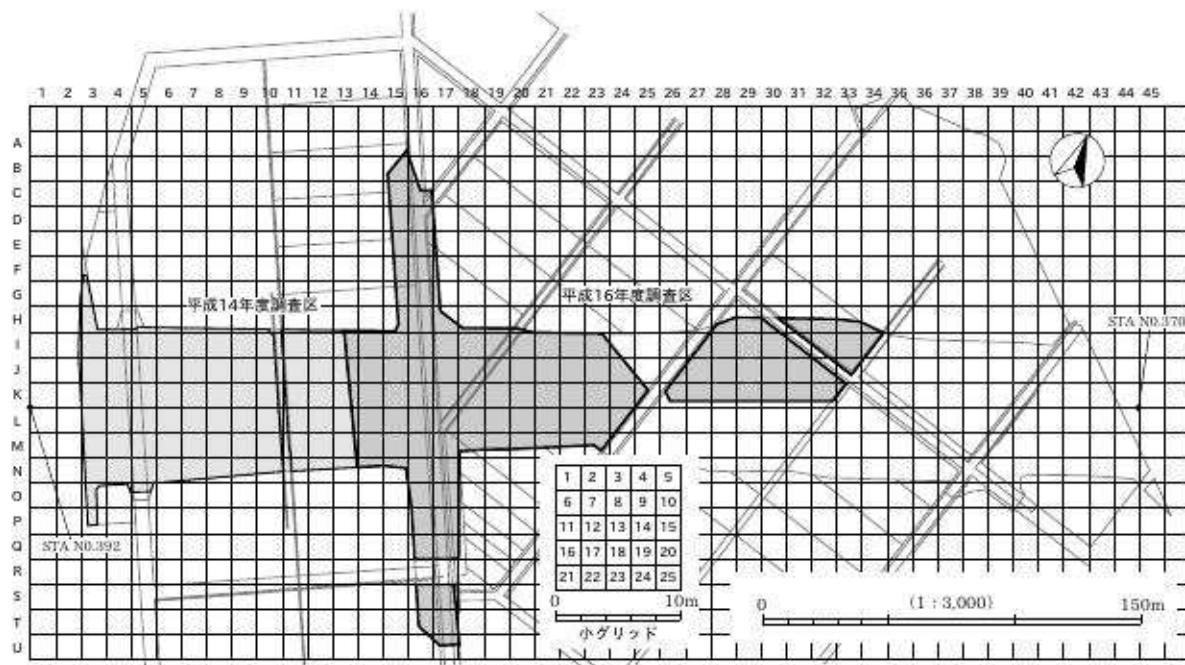
A グリッドと調査区の設定（第19図）

グリッドの設定は、道路建設予定地内のセンター杭2点を基準に行った。まず、遺跡の西側鶴川の堤防にあるセンター杭No.392を起点とし、遺跡の東側のセンター杭No.370を結んだラインを基線X軸とした。また、この基線とセンター杭No.392で直交するラインをY軸とし、10mの方眼を組み大グリッドとした。さらに大グリッドを2m四方に25等分したものを小グリッドとした。大グリッド名は、X軸に算用数字1～34、Y軸にアルファベットA～Uとし、両者の組み合わせで「5D」などと表した。杭の呼称は、各大グリッドの北西杭にその大グリッドの呼称を付した。小グリッドは大グリッドの北西隅を1、南東隅を25となるように番号を付し、「5D15」と表した。今年度の調査区では、平成14年度の基準杭及び呼称をそのまま踏襲した。また調査区内は農道や水路などによって分断されることから、それに基づいて東から順に1～5区と呼称した（第20図）。

座標値は22L杭が「世界測地系X = 149740.4448、Y = 4791.1884」を示す。

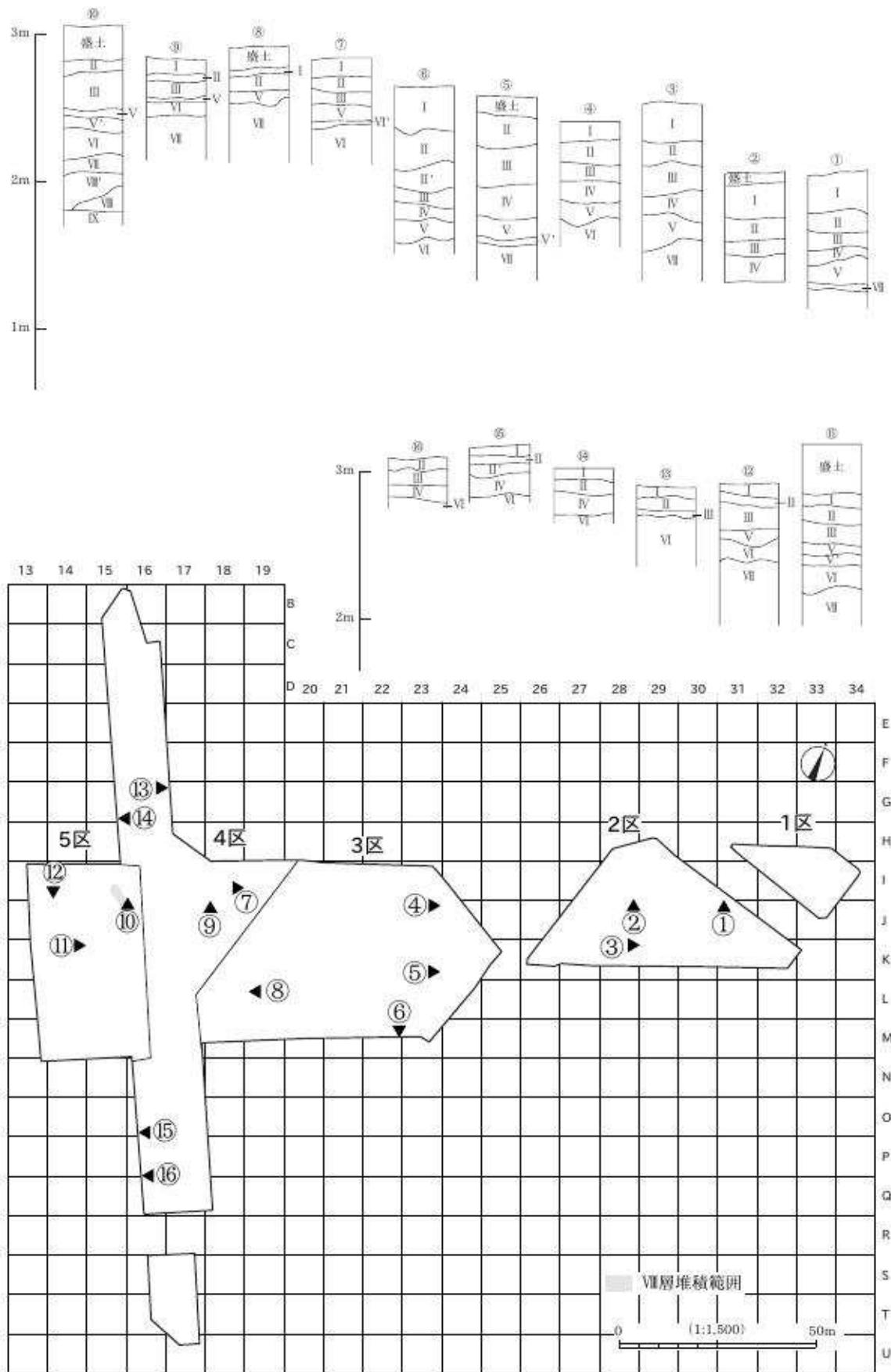
B 基本層序（第20図）

調査区周辺は比較的平坦地で、現状は水田として利用されている。21列以東では中世の遺跡が確認できる。確認面はIV層で、V層は中世の水田面となる。V層の標高は1.3～2.6mを測り、西から東へ傾斜する。また21列以西で古代の遺跡が確認できる。遺構確認面はVI層である。標高は1.2～2.8mを測り、南から北、西から東へ傾斜する。V・VI層とも東に緩やかに傾斜することがわかる。



第19図 下沖北遺跡 グリッド設定図

1 調査概要



第20図 下冲北遺跡 基本層序

この遺跡内の微地形を反映して21列より東側はV層が10～25cmと安定した堆積を示すのに対して、西側では3～13cmと薄くなる。また、21列以西ではIV層が安定して堆積せず、地表からVI層上面までの堆積も浅くなることから、VI層では古代の遺構とともに近世の遺構（04SD006・007・045・048）も検出された。近世の遺構は覆土が黄褐色～赤褐色を呈し、遺物（肥前系陶磁器）も出土することから古代の遺構とは区別できる。また15J周辺ではVII層が部分的に堆積し、古代の遺物が出土するとともに、V層の堆積は浅く不安定である。なお、18L周辺では攪乱が著しくVI層に及ぶ場合も確認された。

今年度の調査では、表土から地山までを12層に分層し、中世の遺構確認はIV層、古代の遺構確認はVI層とした。また、1区から調査を開始したが、平成14年度調査区とは約220m離れているため、基本層序はあえて一致させていない。

以下に基本層序を示し、層序の対応を第8表に提示する。

I層…褐色粘土。粘性あり。しまりあり。酸化鉄を全面に含む。耕作土に相当する。

II層…黄灰色粘土。粘性あり。しまりあり。酸化鉄をまばらに含む。水田の床土に相当する。

II'層…灰オリーブ色粘土。粘性あり。しまりあり。酸化鉄を多く含む。炭化物をまばらに含む。II層より灰色。

III層…黄褐色粘土。粘性あり。しまりあり。酸化鉄を全面に含む。炭化物をまばらに含む。中世～近世（上層）の遺物包含層。

IV層…灰オリーブ粘土。粘性あり。しまりややあり。酸化鉄をまばらに含む。

中世（上層）の遺構確認面。

V層…オリーブ黒色粘土。粘性あり。しまりややあり。酸化鉄をまばらに含む。

古代～中世（下層）の遺物包含層。中世の水田面。

V'層…明黄褐色粘土。V層とVI層の漸移層。粘性あり。しまりあり。酸化鉄を少量含む。

VI層…にぶい黄色土。粘性あり。しまりややあり。炭化物を少量含む。古代の（下層）遺構確認面。

VII層…灰色粘土。粘性あり。しまりなし。酸化鉄をまばらに含む。

VIII層…暗緑灰色土。粘性あり。しまりややあり。炭化物をごく少量含む。

VII層…暗緑灰色土。粘性あり。しまりややあり。酸化鉄を少量含む。炭化物を多く含む。

古墳時代～古代の遺物包含層。

IX層…青灰色シルト～細砂土。粘性なし。しまりなし。暗灰色砂を少量含む。

| 平成16年度 | 平成14年度 |
|--------|--------|
| I層 | I層 |
| II層 | II層 |
| II'層 | — |
| III層 | III層 |
| IV層 | IV層 |
| V層 | V層 |
| V'層 | — |
| VI層 | VIa層 |
| VII層 | VIb層 |
| VIII層 | — |
| VII層 | VII層 |

第10表 層序対応表

2 上層の調査

A 遺構・遺物の検出状況

上層の検出状況について、平成14年度の調査分も含めて記述する。平成14年度の調査では2～5列に遺構が集中する傾向が認められる。区画となる溝の西側には掘立柱建物や井戸、棚列などが位置するとともに、いくつかの遺構群が認められる。遺物は土器・陶磁器（土師質土器・珠洲焼・陶磁器など）、木製品、石製品、金属製品などが出土した。土器・陶磁器は集落の位置する5列以西で多く出土し、木製品では漆器や箸、曲物などで井戸から出土する傾向にある。石製品も5列以西にややまとまる傾向があろうか。出土した遺物から13～14世紀の集落と考えられる。

平成16年度の調査では、21～29列で水路（04SD020）と畦畔が検出され、水田が位置することが確認された。水田部分から遺物の出土は少ないが、わずかに土師質土器や珠洲焼などが出土した。土師質土器は平成14年度の調査で出土したものと形態が共通する。出土遺物から判断して、13～14世紀の水田と考えられ、また土師質土器の形態が共通することから、平成14年度に調査した集落に伴う水田である可能性が考えられる。

B 遺構各説（図版60・61・102・103）

上層の遺構は、1区検出のピット5基と水田跡である。ピットはいずれも径15cm前後、深さ15～20cmの規模で、遺物は出土していない。以下では水田跡について記述する。

水田跡は2・3区に位置し、水路（04SD020）と畦畔からなる。遺存状況は3区で良好である。04SD020は21I～22Mに位置し、鶴川右岸の自然堤防とその東側の後背低地との地形の変換点に構築される。方向はおよそ北西～南東に向いており、緩やかに曲がっており、南北両方向とも調査区外に延びる。調査区内での長さは約42m、幅約145～370cm、深さ約16～39cmを測る。幅は一定でなく、21L周辺で広くなる。覆土は2層に分層でき、1層がにぶい黄褐色粘土、2層が暗青灰色シルトである。断面形は弧状で、緩やかに立ち上がる。底面の標高は1.8～2.0mを測るが、傾斜はほとんど認められない。また04SD020の西側に盛土し、大畦畔を形成するとともに地盤を高め、水田面との比高差を顕著にしている。一方、東側にも盛土することで04SD020の堤防のような機能を持たせている。

小畦畔はIV層で検出され、南北方向に6本、それにはほぼ直交する形で東西方向に5本確認された。小畦畔はV層を盛土、成形して構築し、しまりはやや強くなっている。断面形は台形で、下端の幅は40～160cm、水田面からの高さは7～20cmを測る。22J10・23J12・23I3の小畦畔からは杭（140・141）も検出された。いずれの杭も、畦畔と水田面の間に打設されており、畦畔を保護する施設の一部と思われ、水田耕作が行われていた当時はより多くの杭が打設されていたものと推測される。

水田は一辺が約17～20mの方形を呈する大型のものと、約8～12mの方形・長方形を呈する小型のものに大別され、V層が水田面となる。大型の水田は、小畦畔がV層で構築されているため、一部で小畦畔を検出できなかった可能性も考えられる。水口施設については確認されなかった。水田には、北西隅の21J～22J付近でIV層の堆積が部分的な箇所も見られるが、他所ではおおむねIV層が一様に覆っている。また水田部分のV層は水平堆積ではなく、起伏に富み、鉄やマンガンの明瞭な沈殿は確認されなかった。

遺跡周辺の現水田は昭和30年代前後に圃場整備を受けており、畦畔の方向は、中世の水田とは一致していない。また現水田の標高は鶴川右岸の自然堤防から東側の後背低地に向かって低くなっているが、中世水田面の標高も3区で1.7～2.1m、2区で約1.6mと西から東へ緩やかに傾斜しており、圃場整備の前後で地形の大幅な改変は認められない。04SD020（水路）には傾斜がほとんど認められないものの、現在の用排水路は南から北へ流れていることから、04SD020も南から北へ流れていたと推測される。

04SD020の出土遺物は珠洲焼の片口鉢（1）や青磁碗（2）で、1層から出土した。水田からはIII層・IV層・V層上面で遺物が出土している。III層では土師質土器（3～7）や瀬戸美濃（8）、永樂通寶（156）などが出土している。III層は瀬戸美濃・永樂通寶の出土から15世紀以降と考えられる。IV層からは、土師質土器（10～31）、珠洲焼（32・33）、青磁碗（34・35）などが出土し、水田耕作面であるV層上面からは、土師質土器（36～43）、珠洲焼（44～48）などが出土している。V層出土の遺物から判断して、水田時期は13～14世紀と考えられる。

C 遺 物

1) 土器・陶磁器 (図版 67・111)

土器・陶磁器類の分類及び編年については第III章 3C 1) を参照していただきたい。

04SD020 (1・2) 珠洲焼の片口鉢 (1) と青磁の碗 (2) が確認できる。1の片口鉢は体部下半片であるため、卸目の単位は不明である。また内面と断面の一部に炭化物が付着する。被熱した可能性もある。2は外面に雷文が施され、C-II類に相当する。14世紀末～15世紀初の所産である。

包含層 (3～50) III層出土では土師質土器 (3～7)、瀬戸美濃 (8)、青磁 (9) を図示した。3・4はC I a①類で、炭化物が付着する。5はC I b類である。6・7はB II b類で、いわゆる「京都系」である。このタイプはIII層より下層で出土しておらず、平成14年度調査を通じてみても個体数は少ない。15世紀末～16世紀代の所産と考えられる。8は瀬戸美濃の卸皿で、口縁部内外面に施釉される。卸目には摩耗が認められる。大窯第1～2段階の所産である。9は青磁の碗で外面に蓮弁文が施され、B-III類に相当する。15世紀中葉頃に位置づける。

IV層出土では土師質土器 (10～31)、珠洲焼 (32・33)、青磁 (34・35) を図示した。10～15はC I a①類である。このうち11と12は、体部と底部を沈線で区切る。16～21はC I a②類、22～24はC I b②類である。23は底部が丸みを帯びると考えられ、さらに体部がやや大きく開いている。25～27はC II a類である。特に25と27は底部がはっきりと張り出している。28～31はC II b類である。32・33は珠洲焼甕である。32は口頸部がコの字形を呈してIII期に相当するのに對して、33の口頸部はくの字形を呈してIV期に相当する。34・35は青磁碗である。34は内面に画花文が施される龍泉窯系の碗I-2a類と判断できる。12世紀中葉～後半に位置づけられよう。35は口縁部がくの字に屈曲する端反碗で、外面に錦蓮弁文が施される。B類に相当する。13世紀末～14世紀初に位置づけられる。

V層上面（水田面）出土では土師質土器 (36～43)、珠洲焼 (44～48) を図示した。36～39はC I a①類、40はC I a②類、41・42はC II a類、43はC II b類である。このうち36～38・43は水田耕作面に接する状況で出土した。次に珠洲焼であるが、44・45は壺R種の体部片で、外面には櫛描波状文が施される。46は壺R種の底部片で、切り離し技法は静止糸切りである。47・48は片口鉢の口縁部片で、口縁部の形状から47はII～III期、48はV期に相当する。

49・50は表土掘削の際出土した遺物である。49は珠洲焼の片口鉢である。口縁内端面は面取りされ、卸目は摩耗する。V期に相当する。50は青磁の碗で、外面に雷文が施される。C類に分類される。14世紀末～15世紀初に位置づける。

2) 石 器 (図版 69・113)

III層出土の砥石を1点図示する (138)。138はA2類で、上端部は欠損する。砥面は4面で、正面と右側面は使用頻度が高く、弓状になる。左側面は下端部付近に線条痕が残る。石材は凝灰岩である。

3) 木 製 品 (図版 69・113)

杭を2点図示する (140・141)。杭は水田跡の小畦畔に伴って3点出土した。140・141はそのうちの2点である。いずれも枝状の丸材を利用している。140は3方向から、141は2方向から削り、先端を作出する。図示していない1点も3方向から削る。141には樹皮が残る。

4) 金属製品(図版69・113)

142～157は銭貨である。このうち16F5のⅡ層下面もしくはⅢ層上面からは6枚が一括で出土している。このうち1枚は種別が判別しなかったため、142～146の5枚を図示した。初鋲年は142・143の開元通寶(621年)が最古で、144の元符通寶(1098年)、145の政和通寶(1111年)と続き、最も新しいのは146の宣徳通寶(1433年)である。

147～156はⅢ層中から出土しており、うち148～154の7枚は32I9の一括出土である。初鋲年が最も古いのは147の開元通寶(621年)で、以下148の淳化元寶(990年)、149の祥符元寶(1008年)、150・151の皇宋通寶(1038年)、152の嘉祐通寶(1056年)、153の元豐通寶(1078年)、154の紹聖元寶(1094年)、155の元符通寶(1098年)、156の永樂通寶(1408年)となる。

157はV層上面(水田面)出土で、開元通寶(621年)である。

3 下層の調査

A 遺構・遺物の検出状況

下層の遺構はVI層で検出され、出土遺物から古代に所属すると判断できる。検出された遺構は竪穴住居・溝・土坑などである。これらは、3区西側～5区の、鶴川右岸の自然堤防上に立地し、標高は約2～3mを測る。3区西側では2条の平行する溝が検出された。04SD036と04SD039は互いに平行しながら、直線的になつたり、直角に曲がつたりする。また、18Mから20Kの周辺では、04SD035や04SD089、04SD093などの遺構も入り組んだ状態を確認することができる。04SD035・036・039からは須恵器・土師器・製塙土器が出土した。3区西側での包含層からの遺物の出土は低調である。

4区では、鶴川の自然堤防上の17Jと18Jにまたがり、竪穴住居(04SI013)が1軒検出された。時期は出土した須恵器から8世紀末～9世紀前葉で、西側に竈を有する。この周辺には溝や焼土が位置し、覆土中からは須恵器や製塙土器が出土した。また4区の包含層からも比較的多くの遺物が出土した。

5区では溝や土坑が検出された。土坑の中には、製塙土器がまとまって出土した土坑(04SK055)も確認できる。また、16K～16Tにかけては全長90m、幅340cmの溝(04SD063)が検出され、須恵器・土師器・製塙土器が出土した。このほか、細片も含めれば多くの遺構から遺物が出土している。また5区のうち、4区に接する16J周辺では包含層から多くの遺物が出土した。これらの下層の遺構は、04SI013を除き、確認面からの深さが数cm～10cmと浅いものが多い傾向にある。

B 遺構各説

土師器・須恵器の編年などは第IV章3C1)を参照していただきたい。

1) 竪穴住居(図版65・105)

04SI013 17J～18Jに位置する。西壁には竈も確認できた。平面形は方形で、竪穴部の長さは4.2m、幅は3.6m、深さは44cmで、竈を含めた長さは4.5m、方位はN-70°-Wを指す。断面形は半円形、立ち上がりは緩やかで、東側の掘り方はあまり明瞭ではない。竪穴部の覆土は11層に分層でき、上位は褐色系覆土、下位は灰色系覆土で、壁際には黒色系覆土が堆積する。竈の長さは1.0m、幅は88cmで、

断面形は箱形、立ち上がりはやや急である。竈の覆土は6層に分層でき、①～③層が竈内覆土で、④～⑥層が構築材である。竈に炉石はなく、④～⑥層には砂質土を混ぜている。04SI013の周辺からは製塙土器・須恵器・土師器が出土しており、04SI013内でも覆土5層から製塙土器がややまとまって出土している。なお柱穴は確認できていない。南側は04SD011に切られる。また、04SI013周辺では、北側で04焼土018・019、南側で04SD008・009などが検出されている。出土遺物は須恵器(51～61)・土師器(62・63)・製塙土器(64～70)である。所属時期はIV～V期の須恵器が出土したことから、8世紀後葉～9世紀中葉である。

2) 溝(図版62～64・105～107)

鶴川右岸の自然堤防上で、40条の溝が検出された。溝の中には、04SD036や04SD039のように全長が25m以上で、区画などの機能を有していたと思われるものもある。これらの溝は2条一組で平行しながら、直線的になったり、直角に曲がったりしている。なお、20I～20M、16D・16E、15B・15Cで検出された04SD006・007・045・048は近世の溝なので扱わない。

04SD008 17J～18Kに位置する。全長6.4m、幅132cm、深さ32cmの規模である。断面形は台形状である。方位はN-59°-Wを指す。覆土は3層に分層でき、いずれも黄褐色系覆土が堆積する。北西側を04SD009に切られており、04SD009の方が新しい。

04SD009 17J・18Jに位置する。全長5.8m、幅80cm、深さ8cmの規模である。断面形は弧状である。方位はN-70°-Eを指す。覆土は単層で、炭化物を少量含む黒褐色粘土である。新旧関係は04SD008より新しい。

04SD015 18I・19Iに位置する。全長12.2m、幅80cm、深さ8cmの規模である。断面形は弧状である。方位はN-65°-Eを指す。覆土は単層で、炭化物を少量含む暗灰黄色粘土である。西側は04焼土019に切られるようである。出土遺物は須恵器・土師器・製塙土器である。

04SD035・04SD036・04SD039 04SD035は19K・20K・20L・20M、04SD036・039は18K・19K・18L・19Lに位置する。全長は25～39m、幅は46～134cm、深さは10～24cmの規模である。断面形はいずれも弧状で、緩やかに立ち上がる。覆土は主に褐色系覆土が堆積する。04SD036と04SD039はそれぞれ、東西方向部分は平行し、南北方向部分は04SD089と平行する。なお、04SD036・039の内側で遺構は検出されていない。04SD035・036からは須恵器・土師器・製塙土器などが出土している。また、04SD039からは須恵器(71・72)・土師器・製塙土器などが出土した。所属時期はV期の須恵器が出土したことから、9世紀前葉～中葉である。

04SD040 16G・16Hに位置する。全長21.2m、幅58cm、深さ8cmの規模で弧状にめぐる。覆土は2層に分層でき、1層は暗褐色粘土、2層は黒褐色粘土である。新旧関係は04SD054より古く、04SK044・055より新しい。出土遺物は須恵器・土師器・製塙土器である。

04SD042 16H・16I・16J・17Hに位置する。全長21.2m、幅100cm、深さ10cmの規模である。断面形は弧状で、緩やかに立ち上がる。覆土は単層で、黄褐色土をブロック状に含む黒褐色粘土である。新旧関係は04SD072より新しい。出土遺物は須恵器(73)・土師器・製塙土器などである。所属時期は、V期の須恵器が出土したことから9世紀前葉～9世紀中葉である。

04SD054 16F21～25を横断する形で位置する。全長13.6m、幅80cm、深さ12cmの規模である。断面形は弧状で、緩やかに立ち上がる。方位はN-60°-Eを指す。覆土は3層に分層でき、いずれも灰

3 下層の調査

色系シルトである。新旧関係は04SD040より新しい。周辺には04SX066が位置し、方向は04SX066の南端と平行する。出土遺物は須恵器・土師器・製塙土器である。

04SD056 16H18に位置する。全長2.4m、幅280cm、深さ8cmの規模である。方位はN-75°-Wを指す。覆土は単層で、黒褐色粘土である。出土遺物は須恵器(74)・土師器である。所属時期はIV期の須恵器が出土したことから、8世紀後葉～9世紀初頭である。

04SD063 16K～16Uに位置する。全長90.0m、幅340cm、深さ12cmの規模である。断面形は弧状で、緩やかに立ち上がる。方位はN-20°-Wを指す。覆土は単層で、黄灰色粘土である。新旧関係は04SD074より古い。遺構内17Q2では04P064が検出された。調査前は農道部分であった。V層から掘り込んでおり、道路に関連する機能を有していた可能性も考えられる。出土遺物は須恵器(75)・土師器(76)・製塙土器などである。所属時期はIV期の遺物が出土したことから8世紀後葉～9世紀初頭である。

04SD074 16S～17Tに位置する。全長12.4m、幅74cm、深さ18cmの規模である。断面形は台形状で、緩やかに立ち上がる。方位はN-80°-Wを指す。覆土は2層に分層でき、1層は褐灰色粘土、2層は青灰色粘土である。04SD063より新しい。出土遺物は須恵器・土師器・製塙土器である。

04SD089・04SD090 いずれも18K～18Mに位置する。全長は7.0～18.8m、幅は94～100cm、深さは6～8cmの規模である。方位はN-20°-Wを指す。覆土は褐色粘土である。04SD036・039の南北方向部分と平行するため、それらの溝とともに、区画の機能を有している可能性も考えられる。04SD090は北側を04SD039に切られる。04SD089からは土師器が出土した。

04SD093 19Mに位置する。全長20.4m、幅120cm、深さ10cmの規模である。断面形は弧状で、緩やかに立ち上がる。覆土は単層で、暗褐色粘土である。新旧関係は04SD039より古い。出土遺物は須恵器と土師器である。

04SD097 15D・16D以北に位置する。幅20.0m以上、深さ90cmの規模である。断面形は弧状で、緩やかに立ち上がる。覆土は2層に分層できる。1層にはV層があり、2層には黒褐色シルトと青灰色粘土の混合層が堆積する。自然流路と考えられる。遺物は出土していない。

3) 土 坑 (図版65・66・108・109)

鶴川右岸の自然堤防上で、9基の土坑が検出された。規模は、径が120～280cm、深さは20cm以下のものが主体であるが、長さが400cm、深さが40cmを超えるものも検出されている。平面形は、楕円形と円形が多く、その他不整形もみられる。断面形は、弧状が最も多く、中には台形状もみられる。

04SK016 18I7に位置する。平面形は不整形で、断面形は弧状を呈する。長さ184cm、幅144cm、深さ14cmの規模で、緩やかに立ち上がる。覆土は2層に分層でき、いずれも灰色系覆土が堆積する。出土遺物は須恵器・土師器である。

04SK022 13I10・14I6に位置する。平面形は方形に近く、断面形は台形状を呈する。長さ204cm、幅168cm、深さ52cmの規模で、立ち上がりは急である。覆土は3層に分層でき、1層は黄褐色粘土、2層はオリーブ黒色粘土、3層はオリーブ灰色粘土である。新旧関係は04SD026より新しい。出土遺物は土師器片数点と製塙土器である。

04SK025 15I12・13に位置する。平面形は円形で、断面形は弧状を呈する。径140cm、深さ8cmの規模で、緩やかに立ち上がる。覆土は単層で、暗緑灰色粘土である。東側に隣接して、04P024と04SK023が検出された。出土遺物は須恵器(77)・土師器・製塙土器である。所属時期は、IV期の須恵器である。

器が出土したことから8世紀後葉～9世紀初頭である。

04SK049 16G・16H・17G・17Hに位置する。平面形は長方形で、長さ400cm、幅220cm以上、深さ24cmの規模で、東側は調査区外に延びる。立ち上がりは緩やかである。覆土は単層で、にぶい褐色粘土である。遺構内から04P051・052・053、焼土が検出されたことなどを考慮すると、竪穴住居の可能性も否定できない。なお、遺構内から検出された04P051・052・053の平面形はいずれも楕円形である。04P051と04P053の断面形は弧状を呈し、それぞれ径40～64cm、深さ4～10cmの規模である。04P052の断面形は箱状を呈し、径28cm、深さ30cmの規模で立ち上がりは直立である。覆土はいずれも灰黄色～黄灰色シルトで04P052・053は2層に分層できる。焼土は堆積がほとんど確認されず、V層が被熱し、赤橙色を呈する状態で検出された。新旧関係は04P058・04SD067より古い。出土遺物は須恵器・土師器・製塙土器である。

04SK055 16H3に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状を呈する。径160cm、深さ16cmの規模で、緩やかに立ち上がる。覆土は3層に分層でき、1層は灰黄褐色シルト、2層は褐灰色シルト、3層は黒褐色シルトと灰黄褐色シルトの混合層である。3層上面から製塙土器(78～83)がまとまって出土した。3層は炭化物を非常に多く含んでいるが、土坑の壁や床は焼けていないこと、器台が出土していないことなどから、現時点で炉跡とは判断していない。新旧関係は04SD040より古い。所属時期は、出土した製塙土器(78～83)が04SI013出土の製塙土器(64～70)と形態が共通することから、8世紀後葉～9世紀中葉であろう。

04SK076 16S20・17S16に位置する。平面形は円形で、断面形は弧状を呈する。径212cm、深さ10cmの規模である。覆土は単層で、暗褐色粘土である。北側に隣接して、04P077が検出された。

4) ピット(図版66・109)

04P058 17H6に位置する。平面形は楕円形で、断面形は漏斗状を呈する。長径68cm、短径52cm、深さ28cmの規模で、立ち上がりは急である。覆土は2層に分層でき、1層は灰黄褐色シルト、2層は褐灰色シルトである。新旧関係は04SK049より新しい。

04P077 16S15・17S11に位置する。平面形は円形で、断面形は弧状を呈する。径116cm、深さ6cmの規模である。覆土は単層で、暗褐色粘土である。南側に隣接して、04SK076が検出された。出土遺物は須恵器と土師器である。

5) 焼土(図版66・110)

ここでは、住居や土坑などの遺構に伴わず、地面が焼土化している単独の遺構を扱う。

04焼土018 17I15に位置する。平面形は不整形で、断面形は弧状を呈する。長さ152cm、幅100cm、深さ10cmの規模である。覆土は3層に分層でき、1層は黒色土で炭化物を多く含む。2・3層は灰白色粘土である。出土遺物は土師器と製塙土器である。

04焼土019 17I15・20に位置する。平面形は不整形で、断面形は弧状を呈する。長さ256cm、幅240cm、深さ8cmの規模である。覆土は3層に分層でき、1層はオリーブ黒色土、2層はオリーブ色土、3層はオリーブ黄色土である。いずれも炭化物を含むが、特に1層はブロック状に含む。

6) 性格不明遺構 (図版 63・110)

04SX066 15E・15F・16E・16Fに位置する。明確な掘り込みは確認できず、非常にしまった黒色粘土(2層)が堆積する遺構である。平面形は長方形に近いといえようか。規模は長さ 6.5m、幅 4.7m、深さ 16cm を測る。出土遺物は土師器・製塙土器(84)で、2層から少量出土した。

C 遺 物

土師器・須恵器の器種分類及び編年は春日真実氏の論考〔春日 1999〕に準拠する。なお出土遺物の主体となるⅣ期は8世紀後葉～9世紀初頭、Ⅴ期は9世紀前葉～中葉である。

1) 土 器 (図版 67～69・111～113)

04SI013 (51～70) 須恵器や土師器、製塙土器が出土した。出土層位は 55・57 がトレンチ内、56 が覆土 2 層、67 がカマド①層、62 がカマド②層の他はいずれも覆土最下層の 5 層から出土した。時期はⅣ期の所産が 51・52・54～57・59～63、Ⅴ期の所産は 53・58 である。

51～61 は須恵器である。このうち 51～53 は無台環で、底部はいずれも丸みを帯び、回転ヘラ切りによる切り離しである。体部から口縁部は 51 と 52 がまっすぐ開くのに対して、53 が外反ぎみに開く。54～58 は有台環である。このうち 54～56 は器壁が薄く、高台の幅が細い。55 は口縁部が外反ぎみで、身が浅い。57・58 は、器壁が底部で厚くなり、高台が方形で内端部が接地している。57 は口縁部が外反ぎみで、底部にヘラ記号が施されている。59・60 は环蓋である。いずれも天井部が削られ、口縁端部は下へ折り曲げられている。61 は短頸壺の蓋である。焼成は極めて堅緻で、外面に自然釉が掛かる。

62 と 63 は土師器環である。このうち 62 は器形が共伴する須恵器(52)に相似している。64～70 は製塙土器である。いずれも外面は輪積み痕を残し、内面には横方向のハケ目調整が確認でき、二次焼成を受けている。このうち 64～66 は口縁部片で、体部からまっすぐに開く。67～70 は底部片である。67・68 は体部下端から底部にかけて丸みがあり、69 は直角に曲がる。70 は底部が外へ張り出す。

04SD039 (71・72) 71・72 はいずれも須恵器である。このうち 71 は有台環である。身が深く、高台は小さい。時期はⅤ期で小泊産の可能性がある。72 は瘦で、外面には縦方向のタタキ目、内面は同心円状當て具による青海波紋がある。出土層位はいずれも覆土 2 層である。

04SD042 (73) 73 は須恵器の小形短頸壺である。口縁部は短く開きぎみに立ち上がる。蓋がついていたと考えられる。焼成はやや軟質である。出土層位は覆土 1 層で、時期はⅤ期頃と考えられる。

04SD056 (74) 74 は須恵器有台環である。外底面は回転ヘラ切りによる切り離しで、「××」のヘラ記号がある。出土層位は覆土 1 層で、時期はⅣ期と考えられる。

04SD063 (75・76) 75 は須恵器有台環である。外底面は回転ヘラ切りによる切り離しで、「×」のヘラ記号がある。76 は土師器環である。体部は大きく開く。ともに覆土 1 層から出土し、時期はⅣ期と考えられる。

04SK025 (77) 77 は須恵器有台環である。体部はまっすぐ伸び、身が深めである。出土層位は覆土 1 層で、時期はⅣ期と考えられる。

04SK055 (78～83) 製塙土器がまとまって出土している。いずれも口縁部を中心とした破片で、二次焼成を受けている。外面は輪積み痕を残しており、内面は横方向にナデている。器形は 80～82 がま

つすぐ開くのに対して、78・79・83は外反ぎみに開いている。口縁端部は、79の断面が方形であるのに対して、78・80～82の断面幅は細くなっている。この中で78は最も遺存状況が良好で、外面の輪積み痕や内面の横方向のハケ目が明瞭である。底面は残っていないが、平底である可能性が高い。出土層位はいずれも炭化物を主体とする3層の上面である。製塙土器は形態的には8世紀以降見られるものだが、04SI013で供伴する須恵器の年代を参考にすると、IV～V期と考えられようか。

04SX066 (84) 84は製塙土器の底部である。底部の立ち上がりは直角になる。内面の調整痕は確認されなかつたが、外面の輪積み痕は比較的明瞭である。出土層位は2層である。

包含層 (85～136) V層からは須恵器 (85～89) と土師器 (90・91) が出土した。85・86は無台坏である。いずれも外底面を回転ヘラ切りしているが、85は底部に丸味があるのに対して、86は比較的平坦である。時期はともにIV期と考えられる。87・88是有台坏である。いずれも高台の断面は方形である。87は口縁部が外反ぎみに大きく開き、身が浅く、高台は外端部が接地する。88は口縁部がまっすぐに開き、高台は内端部が接地する。時期は87がIV期、88がV期と考えられる。89の坏蓋は器高がやや高く、つまみは擬宝珠形で大ぶりである。天井部は回転ヘラケズリ、端部は下に折り曲げている。時期はV期と考えられる。90の器種は坏もしくは高坏である。体部外面は上半が赤彩され、内面も一部赤彩の痕跡が確認できる。古墳時代後期の可能性があり、洪水などによる流れ込みと考えられる。91は土師器坏である。底部の切り離し技法は回転糸切りである。V期と考えられる。

VII層からは須恵器 (92・93) と土師器 (94・95)、製塙土器 (96・97) が少量出土した。92は無台坏で、底部はやや丸みを帯びる。時期はIV期である。93是有台坏で、高台部は方形で内端部が接地している。時期はIV期で、末野窯跡群産と考えられる。94・95の器種はいずれも坏である。94は底径が大きく、器壁も厚い。95は底径が小さく、体部は口縁部に向かって大きく開く。器壁は薄い。時期は94がIV期、95がV期と考えられる。96は口縁端部外面が面取りされる。97の底部は立ち上がりが直角になる。

VIII層からは須恵器 (98～121)、土師器 (122・123)、製塙土器 (124～131)、手づくね成形の土器 (132) が出土した。98～106は底部回転ヘラ切りの無台坏である。このうち98～101は、口縁部がまっすぐに伸び、底部が丸底に近い。胎土の色調も灰白色で、軽く、軟質である。特に98は胎土が精製されておらず、マーブル状になる。また101の体部には漆の付着が確認される。時期はいずれもIV期で、末野窯跡群産と考えられる。102は底部が平らで、体部はまっすぐに伸びる。時期はIV期と考えられる。103～105は口縁部がまっすぐに伸び、外底面は中心部がやや凹み、内底面はやや盛り上がる。特に104は体部が箱形になる。また105は内底面に墨書（「□（丁カ）」）が認められる。時期は105がIV期、103と104がV期で、小泊産と考えられる。106は体部外面に明瞭なロクロ目が残り、その水挽技法から東海系の技術の影響が考えられる。口縁部は外反ぎみに開く。時期はV期と考えられる。107・108は底部回転糸切りによる無台坏である。いずれも回転ヘラ切りの無台坏と比較して、口径に対して底径が小さい。このうち107には外底面に漆痕が確認できるが、文字の可能性も残る。109～118是有台坏である。このうち109～114は体部がまっすぐに伸び、高台の断面は方形である。109・113の外底面にはヘラ記号が施される。109の内底面には重ね焼の際に、上に重ねられた須恵器の高台が付着している。115は口縁部が外反ぎみで、116の高台は外端部がつまみ出されている。117はどっしりとしており、高台径が小さい。胎土中に石英・白色粒子が多く混じる。笛神丘陵で生産されたと考えられる。118は身が深く、まっすぐに伸び、箱形を呈する器形である。有台坏の時期はいずれもIV期と考えられる。119～121は坏蓋である。このうち119は口径が大きく、全体的に扁平で、内面に墨痕が確認される。120は全体的に扁平で、つまみは擬宝珠形で

ある。121は口径が小さいのに対して、器高が高く、つまみは環状である。時期はいずれもIV期と考えられる。122・123は土師器の坏で、ともに体部はやや内湾ぎみに立ち上がる。また122は体部下端が張り出さないのに対して、123は体部下端が張り出しげみになり、底部回転糸切りである。時期はともにV期である。124～128は製塙土器の口縁部片である。このうち127・128は口縁端部外面が面取りされているのに対して、124～126は口縁端部が丸みを帯びる。129・130は底部片である。129は底部下端が張り出しげみであるのに対して、130は張り出さない。131は器台である。円筒状で、体部の同じ高さのところに3か所円孔が穿たれている。底部は肥厚し、口縁部は斜めになる。外面には縦方向のハケ目調整が一部確認され、内面には横方向のハケ目調整が施されている。132は手づくねで成形され、体部の外側には成形の際に残った製作者の指紋が残る。

次に層位不明の土器について記述する。133の須恵器無台坏は底部中央が凹み、体部はまっすぐ伸びる。時期はIV期と考えられる。134の須恵器有台坏は、外底面に墨痕が残っているが、転用硯のような磨痕は確認できなかった。時期はIV期と考えられる。135の坏蓋は天井部の平らな部分が狭く器高はやや高めである。時期はIV期と考えられる。136は須恵器の小型壺で、口頸部はくの字に緩く湾曲し、口縁端部は平らに面取りされる。

2) 土 製 品 (図版69・113)

土錘を1点図示する(137)。137は管状土錘で、両端がややすぼまる形となる。内面は黒色化しており、貫通孔が確認される。焼成は土師質である。

3) 石 器 (図版69・113)

包含層から出土した砥石を1点図示する(139)。139はV層下位から出土し、A1類に分類できる。砥石は2面、各側面には線条痕がある。石材は凝灰岩で、鉄分の付着によって、全体的に赤味を帯びる。

4 下沖北遺跡のプラント・オパール

A はじめに

プラント・オパールとは、根より吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたもの（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体などの植物珪酸体）が、植物が枯れるなどして土壤中に混入して土粒子となったものと/orい、機動細胞珪酸体については藤原[1976]や藤原・佐々木[1978]など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壤中より検出されるイネのプラント・オパール個数から稻作の有無についての検討も行われている[藤原1984]。このような研究成果から、近年プラント・オパール分析を用いて稻作の検討が各地・各遺跡で行われている。

下沖北遺跡では水田に伴うと推測される大畦畔が認められるなど、水田面と考えられる遺構面が検出されている。こうしたことから下沖北遺跡においてもこの遺構面が水田遺構面であるかについて検討することを中心にプラント・オパール分析を行い、その結果・考察を以下に示す。

B 試料と分析方法

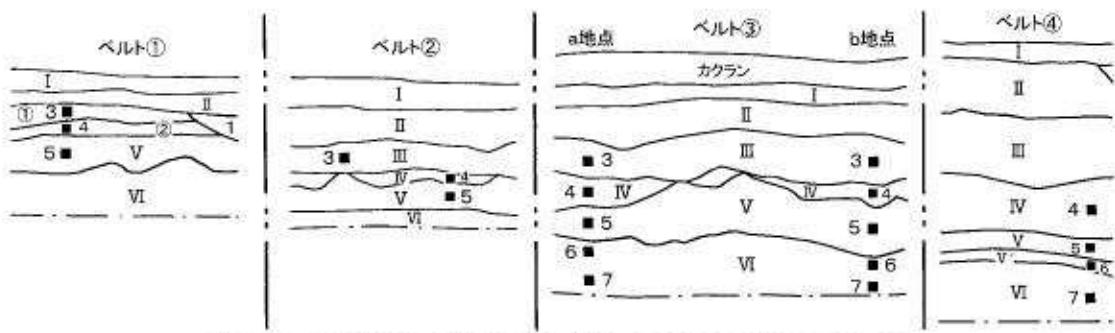
分析用試料はベルト①～④より採取された20試料である。以下に基本土層(I～VII層)について簡単に

記す。

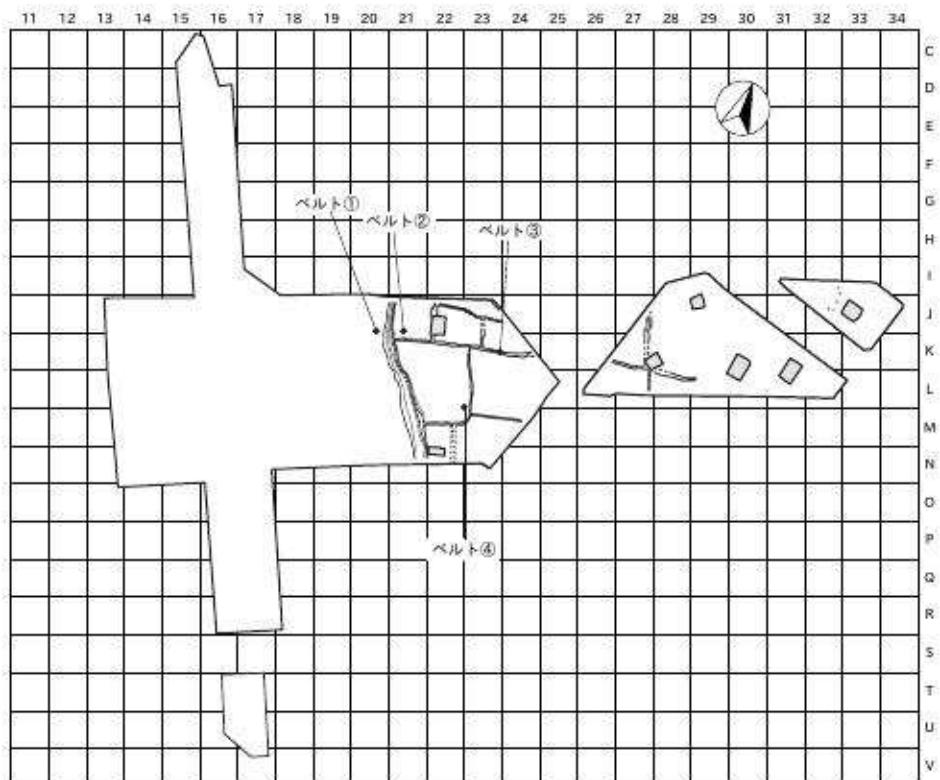
I層は褐灰色シルトで、現耕作土である。II層は灰黄褐色シルト～粘土で、水田の床土である。III層はにぶい褐色シルト～粘土の遺物包含層で、赤褐色酸化鉄の集積が多く認められる。IV層は灰黄褐色シルト～粘土で、水田跡の覆土である。V層は黒褐色粘土～シルトで、水田面と考えられている。V'層はにぶい黄橙色粘土が混じる黒褐色シルトで、V～VI層の漸移層である。VI層はにぶい黄橙色粘土、VII層は青灰色粘土である。またベルト①の①層は褐灰色シルト～粘土、②層は①層よりやや暗い褐灰色シルト～粘土である。

上記基本土層よりベルト①では①・②・V層の3試料（試料No.1-3～-5）、ベルト②がIII～Vの3試料（2-3～-5）、ベルト③がIII～VI層の10試料（a地点：3a-3～-7、b地点：3b-3～-7）、ベルト④がIV～VI層の4試料（4-4～-7）の総計20試料である（第21図）。これら20試料について下記の方法にしたがってプランクトン・オパール分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにと



第21図 下沖北遺跡 試料採取地点付近の土層断面と試料採取層準（■）



第22図 下沖北遺跡 試料採取地点位置図

り、約0.02gのガラスピース（直径約40 μm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10 μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定及び計数は機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについてガラスピースが300個に達するまで行った。

C 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスピース個数の比率から試料1g当たりの各プラント・オパール個数を求め（第9表）、それらの分布を第23図（ベルト①）、第24図（ベルト②）、第25図（ベルト③a地点）、第26図（ベルト③b地点）、第27図（ベルト④）に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当たりの検出個数である。

ベルト①：3試料とも10,000個以上のイネのプラント・オパールが検出され、上位2試料では40,000個前後と非常に多く得られている。またイネの穎部破片が若干検出されている。

イネ以外で最も多く検出されているのはクマザサ属型で、個数としては30,000個前後を示している。その他ネザサ節型、ヨシ属、キビ族、ウシクサ族などが3,000個前後検出されている。

ベルト②：やはり3試料とも10,000個以上のイネのプラント・オパールが検出され、Ⅲ層試料（2-3）では30,000個を越えている。またイネの穎部破片が2試料より若干検出されている。

イネ以外ではやはりクマザサ属型が最も多く検出されており、その他ネザサ節型、ヨシ属、キビ族、ウシクサ族などが約1,500～約4,500個を示している。

ベルト③a地点：約5,000個を示しているⅣ層試料3a-4を除く4試料では10,000個を越えるイネのプラント・オパールが検出され、最も多く得られたのはやはり最上部試料3a-3の約27,000個である。

イネ以外ではやはりクマザサ属型が最も多く、最上部試料を除き25,000個～30,000個得られている。次いでキビ族が多く、3a-5では生産量の少ないキビ族としてはやや高い数値6,300個を示している。そ

| 試料番号 | 層位 | イネ (個/g) | イネ穎破片 (個/g) | ネザサ節型 (個/g) | クマザサ属型 (個/g) | 他のタケ本科 (個/g) | ヨシ属 (個/g) | キビ族 (個/g) | ウシクサ族 (個/g) | 不明 (個/g) |
|------|-------|-------------|----------------|----------------|-----------------|-----------------|--------------|--------------|----------------|-------------|
| 1-3 | ① | 42,100 | 1,200 | 1,200 | 26,900 | 0 | 0 | 3,500 | 3,500 | 8,200 |
| 1-4 | ② | 39,600 | 0 | 2,600 | 28,100 | 0 | 2,600 | 3,800 | 2,600 | 12,800 |
| 1-5 | V | 12,300 | 0 | 3,700 | 39,200 | 0 | 4,900 | 3,700 | 1,200 | 11,000 |
| 2-3 | III | 34,300 | 1,400 | 1,400 | 41,500 | 0 | 1,400 | 2,900 | 2,900 | 7,200 |
| 2-4 | IV | 16,900 | 0 | 3,100 | 24,500 | 0 | 3,100 | 0 | 3,100 | 6,100 |
| 2-5 | V | 16,900 | 1,500 | 1,500 | 36,800 | 0 | 4,600 | 1,500 | 1,500 | 4,600 |
| 3a-3 | III | 27,100 | 0 | 1,400 | 16,300 | 0 | 1,400 | 4,100 | 1,400 | 6,800 |
| 3a-4 | IV | 5,300 | 0 | 0 | 29,000 | 0 | 4,000 | 1,300 | 1,300 | 2,600 |
| 3a-5 | V | 11,000 | 0 | 1,600 | 29,700 | 0 | 1,600 | 6,300 | 3,100 | 9,400 |
| 3a-6 | VII上部 | 12,000 | 0 | 1,500 | 30,000 | 0 | 0 | 0 | 1,500 | 4,500 |
| 3a-7 | VII下部 | 10,900 | 0 | 3,100 | 25,000 | 1,600 | 0 | 3,100 | 1,600 | 6,300 |
| 3b-3 | III | 12,500 | 2,800 | 1,400 | 34,800 | 0 | 0 | 2,800 | 0 | 7,000 |
| 3b-4 | IV | 14,400 | 0 | 0 | 27,400 | 0 | 0 | 0 | 1,400 | 7,200 |
| 3b-5 | V | 24,000 | 1,600 | 1,600 | 35,200 | 3,200 | 4,800 | 3,200 | 3,200 | 16,000 |
| 3b-6 | VII上部 | 6,900 | 0 | 2,800 | 30,500 | 0 | 0 | 2,800 | 2,800 | 2,800 |
| 3b-7 | VII下部 | 8,600 | 0 | 0 | 22,900 | 0 | 0 | 1,400 | 0 | 10,000 |
| 4-4 | IV | 16,300 | 1,400 | 2,700 | 25,900 | 0 | 0 | 5,400 | 0 | 6,800 |
| 4-5 | V | 6,000 | 0 | 3,000 | 12,000 | 0 | 1,500 | 0 | 3,000 | 9,000 |
| 4-6 | V' | 4,700 | 0 | 1,600 | 34,700 | 0 | 0 | 4,700 | 1,600 | 4,700 |
| 4-7 | VI | 7,700 | 0 | 1,500 | 32,500 | 0 | 0 | 1,500 | 0 | 6,200 |

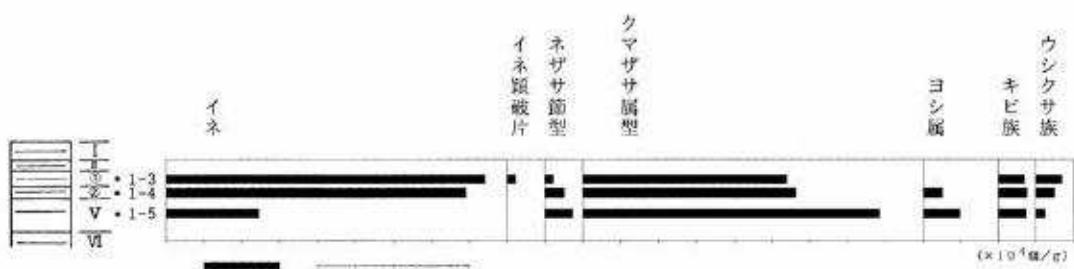
第11表 下沖北遺跡 試料1g当たりのプラント・オパール個数

の他ネザサ節型、ヨシ属、ウシクサ族などが約1,500～約4,000個を示している。

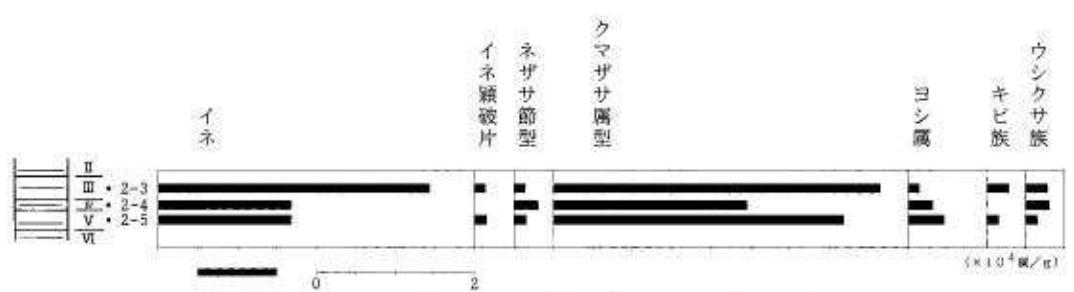
ベルト③b地点：下部VI層の2試料を除き10,000個を越えるイネのプラント・オパールが検出されている。またイネの穎部破片が2試料より若干検出されている。

イネ以外ではやはりクマザサ属型が最も多く、個数的には30,000個前後を示している。ヨシ属が3b-5のみの産出を示しており、他のネザサ節型、キビ族、ウシクサ族も本試料で最も高い数値を示している。

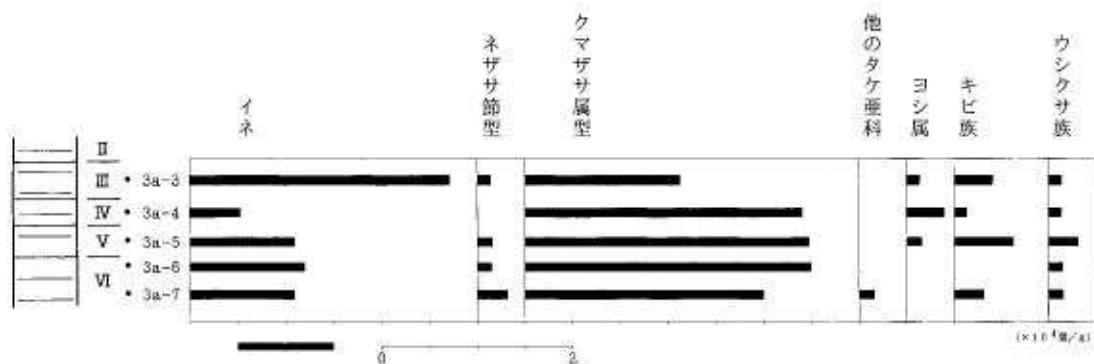
ベルト④：IV層試料4-4では10,000個を越えるイネのプラント・オパールが検出されているが、他の



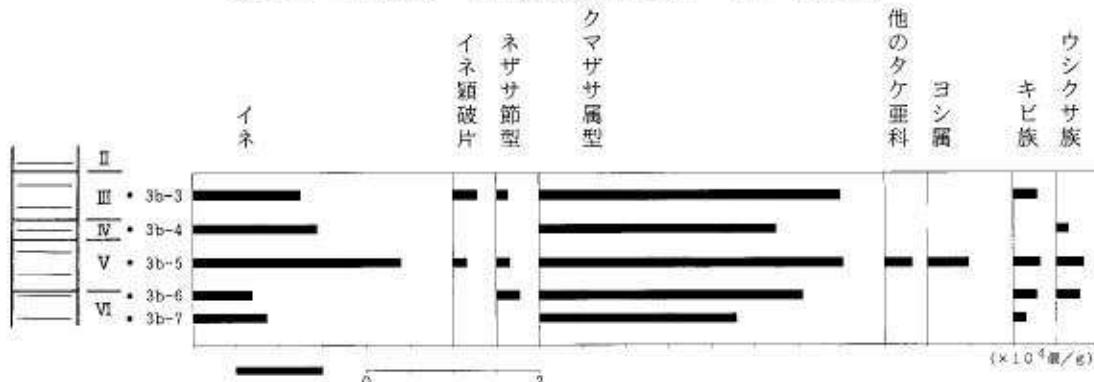
第23図 下沖北遺跡 ベルト①のプラント・オパール分布図



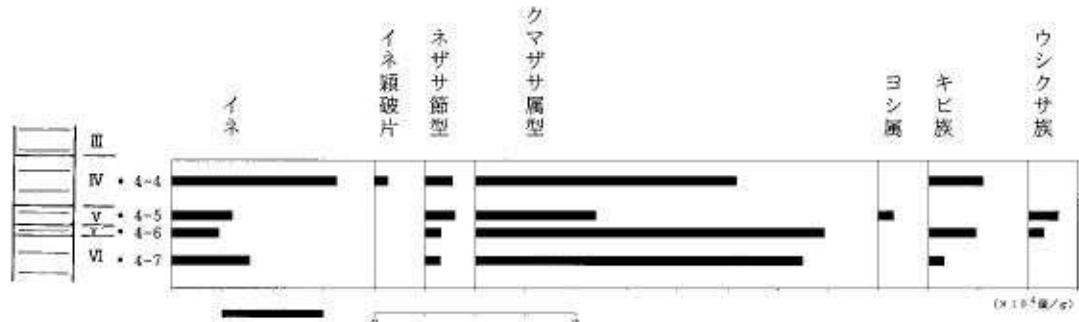
第24図 下沖北遺跡 ベルト②のプラント・オパール分布図



第25図 下沖北遺跡 ベルト③a地点のプラント・オパール分布図



第26図 下沖北遺跡 ベルト③b地点のプラント・オパール分布図



第27図 下沖北遺跡 ベルト④のプラント・オパール分布図

3試料は6,000個前後で、V 2層の4-6では全試料中最も少ない4,700個である。また10,000個を越えるイネのプラント・オパールが検出されている4-4よりイネの穎部破片が若干検出されている。

イネ以外ではやはりクマザサ属型が最も多く、試料4-5を除き約25,000個～約35,000個を示している。キビ族は試料4-3及び4-6で5,000個前後を示しており、その他ネササ節型、ヨシ属、ウシクサ族などが1,500～3,000個ほど得られている。

D 稲作について

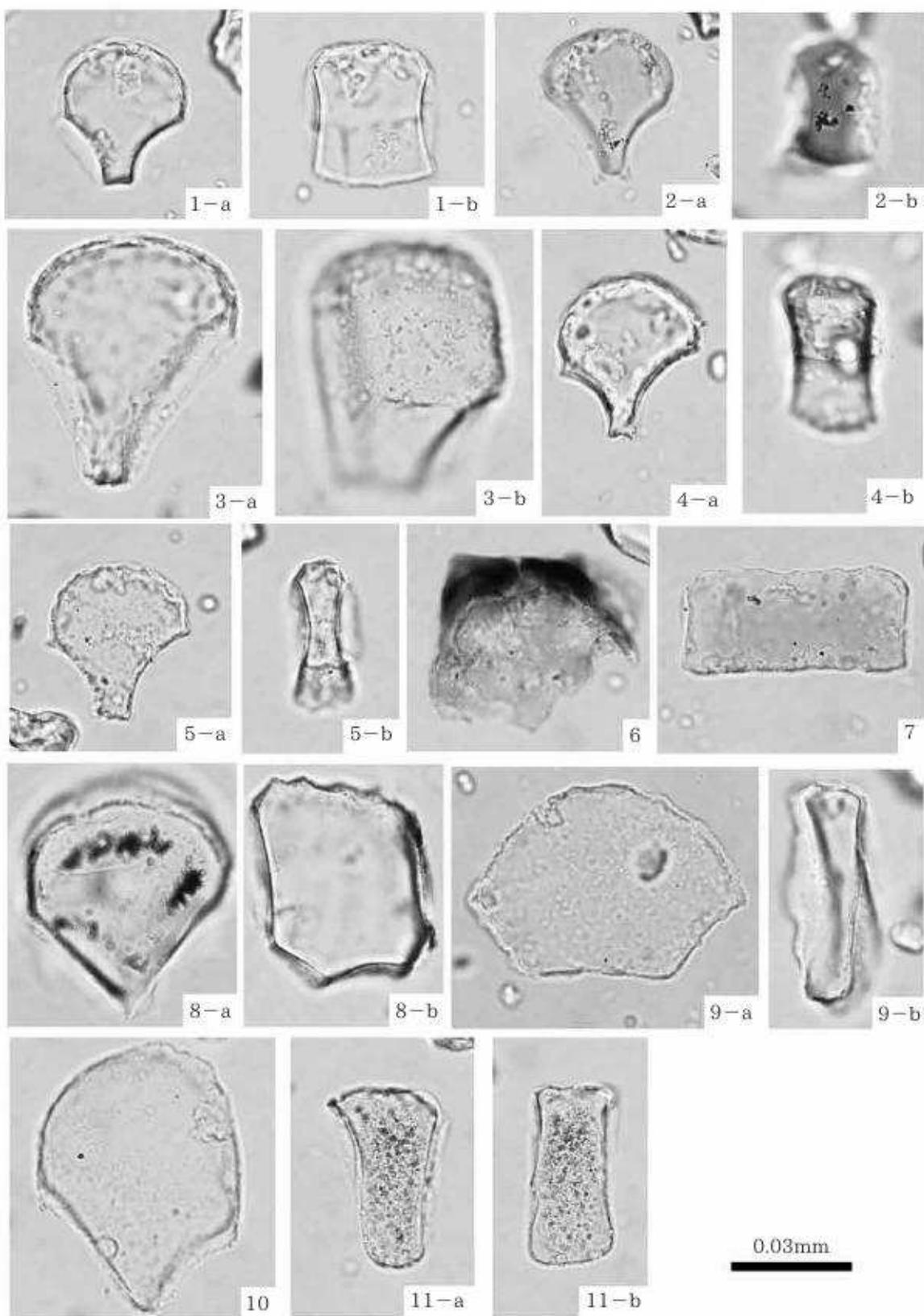
上記したように、全試料よりイネのプラント・オパールが検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、イネのプラント・オパールが試料1g当たり5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田跡の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている〔藤原1984〕。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。上記したようにほとんどの試料でこの5,000個を越えるイネのプラント・オパールが検出されており、検出個数のみからすると試料採取地点で稲作が行われていた可能性は高いと判断される。そのうち水田面と考えられているV層においては多くの試料で10,000個以上を示しており、少ないベルト④でも6,000個であり、稲作が行われていた可能性は高いと判断でき。水田面を支持する結果が得られたと考えられる。さらに下位のVI層試料においても上記5,000個を越えるイネのプラント・オパールが検出されており、稲作が行われていた可能性は高いと判断される。時代は古代と考えられており、少なくとも下沖北遺跡では古代においても稲作が行われていたと判断されよう。

以上のように下沖北遺跡においては古代頃には稲作が行われており、上位の14世紀やさらに上位の近世においても水田稲作が行われていたと判断される。

E 遺跡周辺のイネ科植物

クマザサ属型が多く検出されており、クマザサ属型のササ類（チシマザサ、チシマザサ、ミヤコザサなど）が多く生育していたのである。このクマザサ属型のササ類については、主に林下での生育が予想され、遺跡周辺丘陵部や微高地に成立していたであろう落葉広葉樹林の下草的存在で分布を広げていたと推測される。

ネササ節型のササ類やウシクサ族については日のあたる開けたところでの生育が考えられ、上記水田や住居の周辺や森林の林縁部などにケネザサなどのネササ節型のササ類やススキ、チガヤなどのウシクサ族が生育していたと推測される。



1~5: イネ (a: 断面, b: 側面)
 1: 1-3, 2: 2-5, 3: 3a-7, 4: 3b-5, 5: 4-7
 6: イネ穎部破片 2-5 7: キビ族 (側面) 1-5
 8: ネササ節型 (a: 断面, b: 側面) 1-3
 9: クマザサ属型 (a: 断面, b: 側面) 3b-6
 10: ヨシ属 (断面) 1-5 11: ウシクサ族 (a: 断面, b: 側面) 2-4

第28図 下沖北遺跡のプラント・オバール (scale bar:0.03mm)

5 まとめ

キビ族も多くの試料より検出されているが、その形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、タイヌビエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類できず不明である。しかしながら上記したように各試料採取地点は水田稻作地が予想されていることからここではタイヌビエなどの水田雑草類に由来するキビ族と推察される。

ヨシ属も半数の試料より検出されており、ヨシやツルヨシといったヨシ属が水田稻作地周辺の水路や一部水田雑草として水田内にも生育していたことが考えられる。

5 まとめ

A 古代の遺物

ここでは須恵器と製塩土器についてまとめておく。IV期とされる須恵器のほとんどは末野窯跡群など高田平野東部の丘陵地帯で生産されたものである。特に色調が灰白色で、粘土が良く練られていないためマーブル状を呈しているタイプ(98)、胎土がとろとしたタイプ(93・110など)が該当すると考えられる。器形的な特徴としては、回転ヘラ切り技法の無台环と有台环はともに体部がまっすぐ立ち上がる(51・54など)か、もしくは口縁部がやや外反ぎみになる傾向が認められる(55・115)。また無台环には底部が丸みを帯びるものが認められる(51・98~100など)。法量は口径が11.4~13.4cm、身が深い118は口径が14.7cmである。器高は3.1~4.0cmである。ともに法量の規格化がみてとれる。117の有台环は下越地方の笛神丘陵で生産されたものと考えられ、前述した末野窯跡群産と比べて、胎土中に石英や白色粒が多く認められる。器形的にも高台が高く、高台径が小さい。全体的にどっしりとした作りである。

V期になると、末野窯跡群産とともに佐渡小泊窯跡群産の須恵器が流入してくる。その特徴は胎土中に黒色粒子が目立つこと、器形的に底部が平らか凹み、体部がまっすぐ立ち上がるなどが挙げられる。VII層出土の103・104がそれに当たる。106も小泊産で、外面の細かい水挽痕は東海的な技法の影響と考えられる。器形は、底部は厚みを持ち、体部が外反する。器壁は薄くなる。V期の東頸城丘陵産の須恵器には、今熊窯産と推定される無台环(107・108)が認められる。ともに底部切り離し技法は回転糸切りで、底径は小ぶりである。法量は口径11.8cm~13.9cmで、IV期とほとんど変化はなかった。

製塩土器は遺構や包含層から比較的多く出土しているが、そのほとんどが細片で、図示できるものは少ない。今回、口縁部と底部を中心に23点図示したが、全体の器形が判明する個体はない。そこで以下で、図示した個体を中心に形態的な特徴などをまとめておく。

まず口縁端部の形態では、断面幅が細くなるもの(78・80~82)、外面が面取りされるもの(83・96・127・128)、断面が方形のもの(64~66・79)、丸みを帯びるもの(124~126)が確認できる。このうち83は面取りの幅が他の3点に比べ狭い。次に底部の形態は、丸みも持つもの(67・68)、直角に立ち上がるもの(69・84・97・130)、下端が外へ張り出すもの(70・129)が認められる。体部から口縁部の器形は、まっすぐに開くもの(64~66・80~82・96・125・126・128)と外反ぎみに開くもの(78・79・83・124・127)に大別できる。

04SI013出土の製塩土器は、口縁端部の断面が方形で、器形はまっすぐに開くものが主体となる。底部の形態では全ての形態が確認できる。底部に丸みも持つものは04SI013から出土した67・68である。他の製塩土器に比べ、67の胎土は砂質であることが特筆される。04SK055の製塩土器は一括性が高く、

口縁端部の断面幅が細くなるものが主体となる。器形はまっすぐに開くものと外反ぎみに開くものの両方が確認できる。04SI013出土のものは主体となる形態が異なる。04SI013の製塙土器は、供伴する須恵器からIV～V期と考えられる。一方04SK055からは製塙土器以外出土していないため、時期認定に困難を伴うものの、一部の製塙土器で04SI013のものと共通の形態が確認できる。そのため04SK055の時期についてもIV～V期が目安とはなる。出土した製塙土器はいずれも平底で、バケツ形を呈するものと考えられ、口縁部・底部の形態は刈羽大平遺跡と共通するものであるが、底部下端が外へ張り出すものは確認できないようである〔品田ほか1985〕。

このほか器台が出土した(131)。131は円筒状で、内面には横方向のハケ目調整、外面には縦方向のハケ目調整が施されている。78は口径40cmを超える大型のもので、大藪遺跡の例では口径35cm、底径19cm、器高27cm、立ノ内遺跡の報告番号21では口径約49cm、底径約24cmを測る。78の法量は大藪遺跡のものと立ノ内遺跡のものの中間くらいであろうか。131の内径は11.5～12.5cm程度で、78のような大型の製塙土器の底径とは一致しない。一方、刈羽大平遺跡で確認できる口径約25cm、底径約12cm、器高約26cmの製塙土器(報告番号42)は、131の内径と一致する。下沖北遺跡では破片が小さく、78以外器形や法量を復元できる個体はない。しかし131の存在から、78のような大型のものとともに、刈羽大平遺跡報告番号42のような法量の製塙土器も存在したと考えられる。なお尖底のものや口径10cm前後の小型のものは確認できない。

須恵器の出土状況や時期からみて、古代における活動はIV～V期(8世紀後葉～9世紀中葉)の範囲に收まり、限定された時期に集落が営まれた可能性が考えられる。

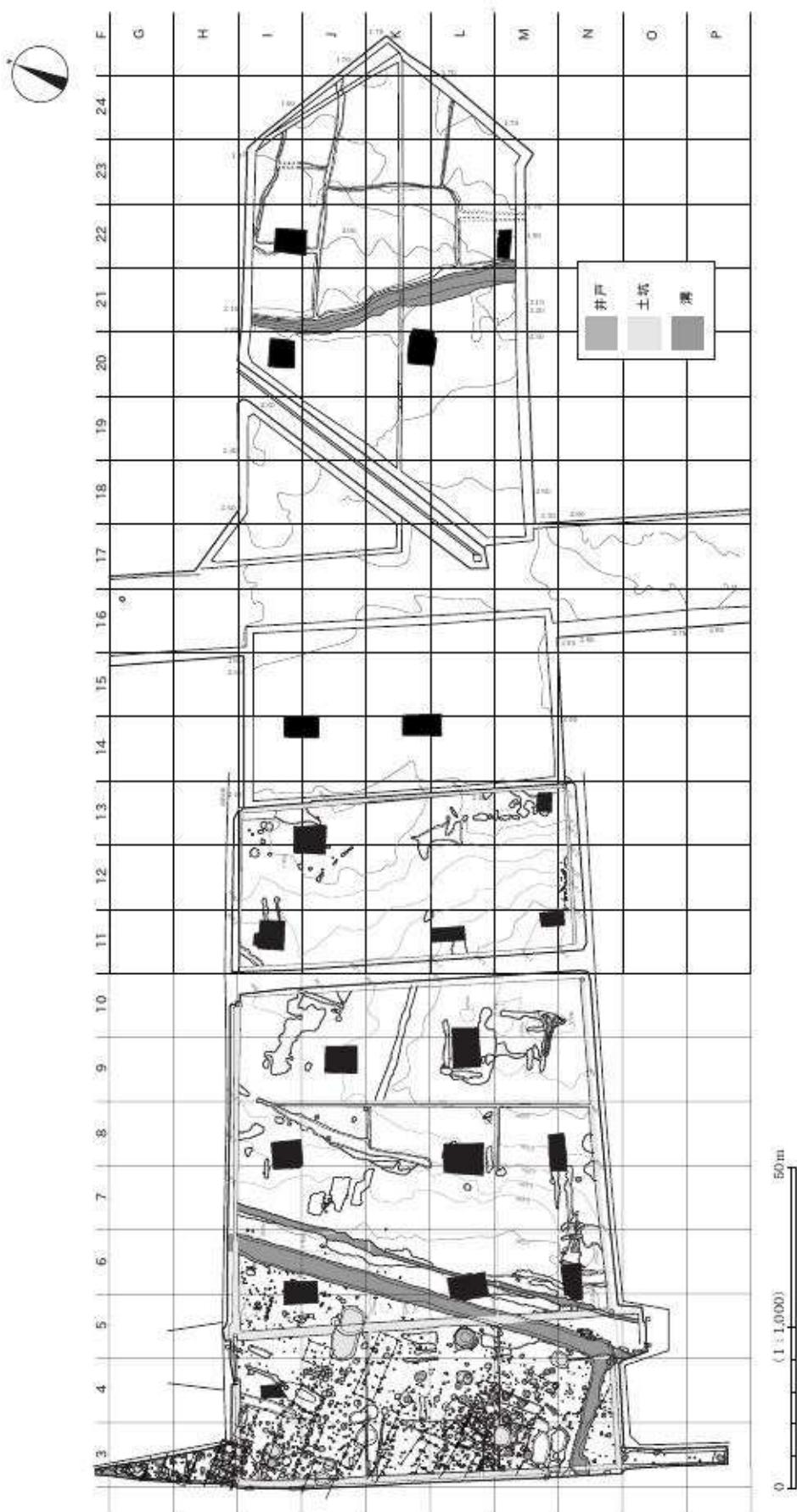
B 中世の水田跡(第29図)

ここでは中世の水田跡と集落について、平成14年度の調査成果も加味してまとめておく。まず中世面の微地形であるが、標高は鶴川に近い西側が高く、東側が低い。集落の立地する2～4列は2.7mと遺跡内で標高が最も高い。また7～10列周辺は溝状に地形が低くなっているが、おおむね西から東に向かつて緩やかに傾斜する。鶴川の自然堤防上に集落が立地し、その後背低地に生産域(水田)が位置するという景観が復元できる。集落と水田は約160m離れるが、その間には遺構らしい遺構は確認できない。

集落部分に関しては、既にまとめられている〔山本ほか2003〕ので、以下でその概要をまとめておく。集落は、幅約3mの溝に囲まれた区画の中に建物や井戸が位置する構造となる。区画内には遺構の集中する地点が4か所認められる(第1～4群)。このうち第1群は規模の大きな建物が重複することから、集落内における中心的な建物が位置する可能性が高く、また第2・3群はこれらに付属する建物が置かれた可能性が指摘された。なお平成14年度の調査では、集落に伴う生産域は確認されなかった。

平成16年度の調査では中世の水田跡が検出された。水田は21～28列に位置し、自然堤防背後の低地部で水田が行われたことがわかる。28列以東は検出しにくい傾向にあったが、32列以東は徐々に標高が高くなることから、横山川の自然堤防に相当するものと考えられる。

検出された水田はV層で耕作を行い、小畦畔も構築されるが、①小畦畔が検出しにくく、②水口も確認できないという特徴が認められる。①については、V層水田面に凹凸があり起伏に富むこと、小畦畔の水田面からの高さが10～15cmと比較的低いものが多いことに起因する。小畦畔の高さが低く、盛り上がりが緩やかなことを考えれば、農閑期に水田が廃絶された可能性が考えられる。なお、V層水田面に起伏が認められるのは、水田耕作によってV層が搅乱された結果と考えられる。②に関して、水口の施設や畦



第29図 下沖北遺跡の中世の遺構配置

畔が途切れる箇所は検出されなかったが、水路（04SD020）が確認できることから、水田に水を引いていたことは確実であろう。一つの可能性としては、水田に水を引く際は小畦畔を切り、水を止める際はV層を使って塞いだことが考えられる。この場合、耕作土と小畦畔、水口を塞ぐ土が全て同じであることから、水口部分の検出は非常に困難である。また現在遺跡周辺では、8月末頃になると用水路自体に水の供給が止まり、水田に水を引くのを止める。遺跡周辺の現水田は圃場整備が終了し、直接用排水路に接しており、水田一枚単位で用排水を行っている。検出された水田跡とはやや形態が異なるものの、中世の水田も稻穂が出る頃には水を引くのを止め、順次水口を塞いでいったものと想定される。推論を重ねたが、検出された水田は小畦畔を切る、あるいは塞ぐことで水口の機能を持たせた可能性が考えられ、また水口が塞がれており、小畦畔が緩やかになっていることを考えると、水田は農閑期に廃絶された可能性が考えられる。

水田面（V層）からは土師質土器（36～43）や珠洲焼（44～48）が出土している。珠洲焼の片口鉢はⅡ～Ⅲ期（47）とⅤ期（48）で、やや時期幅を持つ。土師質土器が形態的に集落出土のものと共通することと珠洲焼（片口鉢）の年代から、水田の時期は集落と同じ13～14世紀に位置づけられる。検出された水田は平成14年度に調査した集落に伴う生産域と考えているが、両者の間が約160m離れ、遺構の空白地となっていることには注意したい。この空白地も自然堤防上に立地することから、水田が位置するとは考えにくい。また歯跡なども検出されないことから、居住域と生産域とがやや距離をおき、空白地を挟んで同時に存在していたと考えられる。ただし検出された水田の近くに、平成14年度に調査した集落とは別の集落が位置し、水田がその集落に伴う可能性もあることは否定できない。なお平成14・16年度の調査とも農具は出土していない。

調査の結果、遺跡からは13～14世紀の集落と水田が確認された。水田は集落に伴う可能性が高く、集落と水田の間には空白地が位置する。この時期の集落は集村化の傾向を示すが、空白地の存在は、その過程において未だ集落化、耕地化されていない土地の存在をうかがわせ、居住域と生産域が比較的近接する東原町遺跡とはやや異なる景観が想定される。

またプラント・オパールの分析の結果（第IV章4）、古代から水田耕作が行われた可能性が高く、本遺跡周辺に古代の遺跡が比較的確認できることから、鶴川下流域が古代から水田化され、開発されていった様子がうかがえる。

要 約

東原町遺跡

- 1 東原町遺跡は、新潟県柏崎市東原町字原19番地1ほかに所在する。調査区は、鰐石川左岸の自然堤防上とその後背低地に立地する。標高は中層が4.40～5.00m、下層が3.70～5.00m、最下層が3.50～4.30mを測る。
- 2 発掘調査は、一般国道8号柏崎バイパスの建設に伴い、平成15（2003）年4月7日から10月31日、平成16（2004）年4月12日から6月18日にかけて実施した。調査面積は30,094m²である。
- 3 古代の遺構は溝4条がある。
- 4 中世の遺構は掘立柱建物4棟、井戸28基、溝92条、土坑55基、ピット400基以上がある。
- 5 近世の遺構は井戸3基、溝11条、土坑17基、ピット3基がある。
- 6 遺物は古代、中世、近世のものが確認できる。種別は土器・陶磁器類、石器・石製品、木製品、金属製品などである。
- 7 古代の遺物は土師器、須恵器である。
- 8 中世の遺物は土師質土器、珠洲焼、越前焼、輸入陶磁器、石器、石製品、木製品、金属製品などである。特に土師質土器の出土量が多く、木製品では漆器皿などが出土した。金属製品では10,674枚の埋納錢が出土している。
- 9 近世の遺物は陶磁器、ガラス製品、木製品、金属製品などである。木製品は棺に使われた桶や漆器椀、数珠玉などで、ガラス製品は数珠玉である。

下沖北遺跡

- 1 下沖北遺跡は新潟県柏崎市大字下方字下沖38番地1ほかに所在する。調査区は鶴川右岸の自然堤防上とその後背低地に立地する。標高は上層が1.50～2.30m、下層が2.30～2.80mを測る。
- 2 発掘調査は一般国道8号柏崎バイパスの建設に伴い、平成16（2004）年6月10日から11月18日にかけて実施した。調査面積は9,010m²である。
- 3 古代の遺構は竪穴住居1軒、焼土2基、溝40条、土坑9基、ピット23基がある。遺構としては確認できないが、古代以降、水田は行われていた。
- 4 中世の遺構は水田跡とピット5基がある。
- 5 近世の遺構は溝がある。
- 6 遺物は古代、中世、近世のものが確認できる。種別は、土器・陶磁器、石製品、木製品、金属製品などである。
- 7 古代の遺物は土師器、須恵器、製塩土器などである。そのうち製塩土器の出土量が多い。
- 8 中世の遺物は土師質土器、珠洲焼、木製品などで、出土量は少ない。
- 9 近世の遺物は陶磁器、金属製品などである。

引用文献

- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』NO.2 日本貿易陶磁研究会
- 宇野隆夫 1997 「中世食器様式の意味するもの」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館
- 小野塚徹夫ほか 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第109集 箕輪遺跡I』 新潟県教育委員会 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 「土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 高志書院
- 春日真実 2001 「柏崎市鶴巻田遺跡出土漆器の編年の位置」『新潟考古学談話会会報』第23号 新潟考古学談話会
- 柏崎市・柏崎市教育委員会 2004 「軽井川南遺跡群現地説明会資料」
- 柏崎市教育委員会 1995 『柏崎市埋蔵文化財調査目録第1集 一写真でつづる発掘調査の概要』
- 柏崎市教育委員会 2002a 『柏崎市埋蔵文化財調査概報 東原町』
- 柏崎市教育委員会 2002b 『琵琶崎城跡現地説明会資料』
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
- 古環境研究所 1991 「仙台市宮沢遺跡第30次調査におけるプラント・オパール分析」『仙台市文化財調査報告書第149集 富沢遺跡—第30次調査報告書第1分冊—縄文～近世編』仙台市教育委員会 p.389-404
- 越路町教育委員会・バリノ・サーヴェイ株式会社 1992 『越路町文化財報告書第19輯 岩田遺跡出土遺物 自然科学分析報告書』 p.33
- 品田高志 1997 「越後国における土師器の変遷と諸相」『中近世の北陸—考古学が語る社会史—』 桂書房
- 品田高志ほか 1985 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5 刈羽大平・小丸山』 柏崎市教育委員会
- 品田高志ほか 1990a 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第13 吉井遺跡群II』 柏崎市教育委員会
- 品田高志ほか 1990b 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第11 千古塚』 柏崎市教育委員会
- 品田高志ほか 1991 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第15 小児石』 柏崎市教育委員会
- 品田高志ほか 1992 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第17 行塚遺跡』 柏崎市教育委員会
- 品田高志ほか 1997 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第26 前掛り』 柏崎市教育委員会
- 品田高志ほか 1999 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第32 角田』 柏崎市教育委員会
- 品田高志ほか 2000 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第34 横山東遺跡群I』 柏崎市教育委員会
- 戸根与八郎 1999 「埋納鉢」『新潟県の考古学』 高志書院
- 橋本鉄男 1979 『ろくろ（ものと人間の文化史31）』 法政大学出版局 p.444
- バリノ・サーヴェイ株式会社 1997 「岩田遺跡第2次調査における自然科学分析調査報告」『越路町文化財報告書第21輯 岩田遺跡 第2次発掘調査報告書』 越路町教育委員会 p.18-25
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2000 「自然科学分析」『吉田町文化財調査報告書第5集 新潟県西蒲原郡吉田町江添C遺跡—吉田町米納津地内国営排水路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』 吉田町教育委員会 山武考古学研究所 p.206-213
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2001 「三角田遺跡から出土した木材の樹種」『燕市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 三角田遺跡 国営新荒井川排水路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 燕市教育委員会 吉田町教育委員会 p.45-49
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2002 「蔵ノ坪遺跡から出土した木材の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第115集 一般国道7号中条バイパス関係発掘調査報告書 蔵ノ坪遺跡』 新潟県教育委員会 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 p.45-59
- 藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯 財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤巻正信ほか 1988 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第27集 西田・鶴巻田遺跡群』 新潟県教育委員会 財團法人新

潟県埋蔵文化財調査事業団

- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9 p.15-29
- 藤原宏志 1984 「プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－」『考古学ジャーナル』227 p.2-7
- 藤原宏志・佐々木彰 1978 「プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）－イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状－」『考古学と自然科学』11 p.9-20
- 水澤幸一 1999 「瓦器、その城館的なるもの－北東日本の事例から－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集 帝京大学山梨文化財研究所
- 水野和雄 1985 「日本石硯考－出土品を中心として－」『考古学雑誌』第70巻第4号 日本考古学会
- 宮田進一 1997 「越中瀬戸の変遷と分布」『中世の北陸－考古学が語る社会史－』 桂書房
- 山崎忠良 2003 「土器・陶磁器について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書125集 下沖北遺跡I』 新潟県教育委員会 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山崎正治・池田亨 2000 『新潟県刈羽郡小国町埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 浦田遺跡発掘調査報告書』 新潟県 小国町教育委員会
- 山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 山本 雄ほか 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書125集 下沖北遺跡I』 新潟県教育委員会 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

観察表

東原町遺跡 土器・陶磁器觀察表

(碎: 粉粒。塊: 長石。石英: 石英。墨: 黑色鉱。針: 表面針孔。角: 角閃石。手: チホート。雲: 雲母。粘: 粘土質)

| 発掘 番号 | 種類 | 形態 | 分類 | 特徴 | 出土箇所 | | 寸法 (cm) | 色調 | 出土層人物 | 施丸物 | 溝型 | 備考 | | |
|----------|----|----|---------|------|--------|--------|---------|------|-------|------|------|-------------|-------------------------------|-----------------------------|
| | | | | | 地盤 | 高さ | | | | | | | | |
| 1 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 日輪 | 7113- | SE1207 | 縦土3 | 12.7 | 2.7 | 4.1 | (褐色) | 褐色 | なし なし 碎口、从隙、圓底 | |
| 2 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 日輪 | 8312地 | SE1277 | 縦土2 | | | 4.7 | (褐色) | 褐色 | なし なし 碎口、从隙、 | |
| 3 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 日輪 | 8312地 | SD177 | 縦土1 | | | 4.6 | (褐色) | 褐色 | なし なし 碎口、从隙、薄底 | |
| 4 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 日輪 | 8312地 | SD177 | 縦土1 | 13.8 | 2.8 | 4.8 | 褐色 | 褐色 | なし なし 碎口、花文、高台内施釉 | |
| 5 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 日輪 | 8312地 | SD177 | 縦土2 | | | 5.1 | 褐色 | 褐色 | なし なし 碎口、花文、高台内施釉 | |
| 6 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 日輪 | 8312地 | SD177 | 縦土1 | | | 5.7 | 褐色 | 褐色 | なし なし 碎口、花文、高台内施釉 | |
| 7 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 日輪 | 539地 | SK130 | 縦土2 | 13.4 | 3.6 | 4.2 | 灰褐色 | 褐色 | なし なし 碎口、花文 | |
| 8 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 日輪 | 8312地 | SK130 | 縦土2 | 13.5 | 3.6 | 4.9 | 褐色 | 褐色 | なし なし 碎口、花文、高台内施釉 | |
| 9 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 日輪 | 529地 | SK130 | 縦土2 | | | 4.8 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文、高台内施釉 | |
| 10 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 日輪 | 333地 | SK130 | 縦土2 | | | 4.1 | 灰褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | |
| 11 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 日輪 | 50-51 | SK146 | 縦土3 | 13.7 | 4.1 | 4.1 | 褐色 | 褐色 | なし なし 碎口、花文、高台内施釉 | |
| 12 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 日輪 | 50-51 | SK146 | 縦土3 | | | 5.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | |
| 13 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 日輪 | 719 | SK180 | 縦土2 | 12.5 | 3.5 | 4.0 | 灰褐色 | 褐色 | なし なし 碎口、花文、灰褐色 | |
| 14 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 日輪 | 17C地 | PI | 縦土2 | 13.4 | 2.8 | 4.6 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文、高台内施釉 | |
| 15 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 日輪 | 916 | PI | 縦土2 | 13.4 | -2.9 | 4.2 | 褐色 | 褐色 | なし なし 碎口、从隙、花文、高台内施釉 | |
| 16 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 日輪 | PI2 | PI2 | 縦土2 | 13.1 | 2.2 | 4.1 | 褐色 | 褐色 | なし あり 碎口、灰褐色 | |
| 17 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 日輪 | D14 | PI2 | 縦土2 | | | 4.9 | (褐色) | 褐色 | なし なし 碎口、花文、高台内施釉 | |
| 18 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 日輪 | 1116 | PI2 | 縦土2 | | | 4.3 | (褐色) | 褐色 | なし なし 碎口、花文 | |
| 19 | 土器 | 罐 | C 1.5-2 | 54地 | SK150 | 縦土2 | 11.0 | 3.0 | 7.9 | 褐色 | 褐色 | あり なし 花文 | | |
| 20 | 土器 | 罐 | B-1 | 13C地 | 54地 | SE135 | 縦土2 | | | 5.7 | 灰白 | 灰白色 | なし なし 圓底灰白 | |
| 21 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 花瓶 | 1112地 | SE452 | | | | | 褐色 | 褐色 | あり なし 花文 | |
| 22 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 花瓶 | 1112地 | SE452 | | | | | 褐色 | 褐色 | あり なし 花文 | |
| 23 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 花瓶 | 21E-3 | SK178 | 縦土1 | 12.6 | | | 青褐色 | 青褐色 | あり あり 碎口、花文 | |
| 24 | 土器 | 罐 | C 1.5-2 | 101地 | SE912 | 下脚 | 12.3 | 3.4 | 7.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 25 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 花瓶 | 8312 | 縦土3 | | | | | 褐色 | 褐色 | あり なし 花文 | |
| 26 | 土器 | 罐 | C 1.5-2 | 32地 | SE907 | | 12.3 | 3.0 | 8.0 | 灰褐色 | 灰褐色 | あり あり 花文 | | |
| 27 | 土器 | 罐 | C 1.5-2 | 32地 | SE907 | | 7.7 | 1.5 | 6.2 | 灰褐色 | 灰褐色 | なし なし 花文 | | |
| 28 | 陶器 | 罐 | 圓底 | 花瓶 | SD072 | 縦土1 | | | | | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | |
| 29 | 土器 | 罐 | B 0.1b | 13C地 | SD074 | | 11.0 | 2.2 | 7.5 | 灰白色 | 灰白色 | なし なし 花文 | | |
| 30 | 土器 | 罐 | B 0.1b | 13C地 | SD074 | | 11.0 | 2.0 | 7.5 | 灰白色 | 灰白色 | なし なし 花文 | | |
| 31 | 土器 | 罐 | B 0.1b | 13C地 | SD074 | | 11.0 | 2.0 | 7.5 | 灰白色 | 灰白色 | なし なし 花文 | | |
| 32 | 土器 | 罐 | B 0.1b | 13C地 | SD074 | | 11.0 | 2.0 | 7.5 | 灰白色 | 灰白色 | なし なし 花文 | | |
| 33 | 土器 | 罐 | B 0.1b | 13C地 | SD074 | | 11.0 | 2.0 | 7.5 | 灰白色 | 灰白色 | なし なし 花文 | | |
| 34 | 土器 | 罐 | C 1.5-2 | 41地 | SE407 | 上脚 | 13.8 | 6.7 | | | 褐色 | 褐色 | あり あり 花文 | |
| 35 | 土器 | 罐 | C 1.5-2 | 41地 | SE407 | 上脚 | 12.7 | | | | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | |
| 36 | 陶器 | 罐 | T輪X斜 | 54地 | SK565 | | | | | 22.1 | 褐綠色 | 褐綠色 | なし なし 花文 44.0cm、体長 136.5cm | |
| 37 | 陶器 | 罐 | 直輪 | T輪X斜 | 54地 | SK565 | | | | 22.3 | 37.0 | 青褐色 | 青褐色 | なし なし 花文 10.0cm、底幅 3.5cm |
| 38 | 陶器 | 罐 | 直輪 | T輪X斜 | 54地 | SK100 | | | | 50.1 | 52.8 | 深褐色 | 深褐色 | なし なし 花文 |
| 39 | 陶器 | 罐 | 直輪 | T輪X斜 | 6612地 | SE162 | | | | 12.4 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | |
| 40 | 土器 | 罐 | C 1.5-2 | 17L | PI | | 12.2 | 3.0 | 5.9 | 灰白色 | 灰白色 | なし なし 花文 | | |
| 41 | 土器 | 罐 | C 1.5-2 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 12.0 | 3.2 | 7.6 | 灰褐色 | 灰褐色 | あり あり 花文 | | |
| 42 | 土器 | 罐 | C 1.5-2 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 12.4 | 3.3 | 8.0 | 灰白色 | 灰白色 | なし なし 花文 | | |
| 43 | 土器 | 罐 | C 1.5-2 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 13.0 | 3.3 | 7.7 | 灰白色 | 灰白色 | なし なし 花文 | | |
| 44 | 土器 | 罐 | C 1.5-2 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 12.0 | 3.4 | 7.5 | 淡黃褐色 | 淡黃褐色 | なし なし 花文 | | |
| 45 | 土器 | 罐 | C 1.5-2 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 12.0 | 3.0 | 8.6 | 灰白色 | 灰白色 | なし なし 花文 | | |
| 46 | 土器 | 罐 | C 1.5-2 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 12.0 | 2.9 | 4.4 | 灰白色 | 灰白色 | なし なし 花文 | | |
| 47 | 土器 | 罐 | C 1.5-2 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 13.1 | 3.4 | 7.5 | 灰白色 | 灰白色 | あり なし 花文 | | |
| 48 | 土器 | 罐 | C 1.5-2 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 12.8 | 3.2 | 6.6 | 灰白色 | 灰白色 | なし なし 花文 | | |
| 49 | 土器 | 罐 | C 1.5-2 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 12.6 | 3.3 | 6.0 | 灰白色 | 灰白色 | なし なし 花文 | | |
| 50 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 9.2 | 1.0 | 6.9 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 51 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 9.0 | 1.5 | 5.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 52 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.4 | 1.5 | 5.6 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 53 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 8.3 | 1.6 | 6.8 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 54 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.9 | 1.5 | 6.7 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 55 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.8 | 1.5 | 6.6 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 56 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.8 | 1.5 | 6.6 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 57 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 58 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 59 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 60 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 61 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 62 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 63 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 64 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 65 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 66 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 67 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 68 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 69 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 70 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 71 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 72 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 73 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 74 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 75 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 76 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 77 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 78 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 79 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 80 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 81 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 82 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 83 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 84 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 85 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 86 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 87 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 88 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 89 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 90 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 91 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 92 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 93 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | 褐色 | 褐色 | なし なし 花文 | | |
| 94 | 土器 | 罐 | C 3.5 | 31地 | SK2601 | 縦土1 | 7.0 | 1.3 | 6.5 | | | | | |

觀察表

| 報告 番号 | 種類 | 時期 | 固種 | 分類 | 時期 | 出水地點 | | | 法長 (cm) | 台詞 | 舶上品人物 | 溶化物 | 網帶 | 備考 | |
|----------|----|---------|---------|-------|------|------|-----|------|---------|---------|---------|-------|------|----|----------|
| | | | | | | ノルマ | 真頸 | 椎骨 | 10.0 | 高さ | 底深 | 西側 | 外側 | | |
| 87 上頸骨 | 固種 | C 1-3 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 13.0 | 3.5 | 6.6 | 10.0 | 高さ-20.0 | 底深-10.0 | 右-青 | ありあり | 少子 | 日米船。 |
| 88 下頸骨 | 固種 | C 1-3 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 12.0 | 3.1 | 7.7 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 89 上頸骨 | 固種 | C 1-3 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 12.7 | 3.1 | 7.5 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 90 上頸骨 | 固種 | C 1-3 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 12.7 | 3.0 | 7.8 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 91 上頸骨 | 固種 | C 1-3 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 12.7 | 3.0 | 7.8 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 92 上頸骨 | 固種 | C 1-3 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 12.7 | 3.0 | 7.8 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 93 上頸骨 | 固種 | C 1-3 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 12.7 | 3.0 | 7.8 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 94 上頸骨 | 固種 | C 1-3 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 12.0 | 3.0 | 7.0 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 95 上頸骨 | 固種 | C 1-3 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 12.8 | 3.0 | 7.5 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 96 上頸骨 | 固種 | C 1-3 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 12.0 | 3.0 | 7.7 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 97 上頸骨 | 固種 | C 1-3 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 11.0 | 2.8 | 6.9 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 98 上頸骨 | 固種 | C 1-3 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 12.8 | 3.4 | 7.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 99 上頸骨 | 固種 | C 1-3 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 12.6 | 3.4 | 7.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 100 上頸骨 | 固種 | C 1-3 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 13.0 | 3.0 | 9.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 101 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 7.8 | 1.7 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 102 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 8.0 | 1.4 | 6.0 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 103 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 7.6 | 1.6 | 6.3 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 104 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 7.5 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 105 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 7.6 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | ありあり | 少子 | 日米船。 |
| 106 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 7.8 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 107 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 7.8 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 108 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 7.8 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 109 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 7.8 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 110 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 7.8 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 111 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 7.8 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 112 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 7.8 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 113 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 7.8 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 114 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 7.8 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 115 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 8.2 | 1.5 | 6.0 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | 上米船。 |
| 116 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 7.1 | 1.7 | 6.1 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 117 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 8.6 | 1.6 | 6.3 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | ありあり | 少子 | 日米船。 |
| 118 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 8.2 | 1.7 | 6.0 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 119 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 8.4 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 120 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 8.4 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 121 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 8.4 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 122 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 8.4 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 123 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 8.4 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | ありあり | 少子 | 日米船。 |
| 124 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 8.4 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 125 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 8.4 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 126 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 8.4 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | ありあり | 少子 | 日米船。 |
| 127 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | SK106 | 椎骨-4 | 8.4 | 1.6 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 128 頭骨 | 固種 | III-1 | II-1 | II-1 | 頭骨 | 10.0 | P59 | 14.4 | | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | 鶴鹿伴丸。 |
| 129 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | P56 | 椎骨-4 | 12.0 | 3.1 | 5.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 130 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | P58 | 椎骨-4 | 11.0 | 2.0 | 6.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 131 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | P56 | 椎骨-4 | 12.0 | 3.0 | 5.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | ありあり | 少子 | |
| 132 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | P58 | 椎骨-4 | 12.0 | 3.0 | 5.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 133 上頸骨 | 固種 | C 3 他 | III 3 他 | P58 | 椎骨-4 | 12.0 | 3.0 | 5.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | |
| 134 背骨 | 固種 | III-1 | II-1 | II-1 | 背骨 | 10.0 | P59 | 14.4 | | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | 外側に赤い骨柱。 |
| 135 背骨 | 固種 | III-1 | II-1 | II-1 | 背骨 | 10.0 | P59 | 14.4 | | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | 日米船。 |
| 136 頭骨 | 固種 | III 3 他 | III 3 他 | P58 | 椎骨-4 | 11.0 | 3.0 | 5.2 | 9.8 | 底深-10.0 | 底白骨 | 研-江-廣 | なし | 少子 | 鶴鹿伴丸。 |

東原町遺跡 土製品觀察表

| 剖面 番号 | 樹種 | 出玉地點 | | | 直根(cm) | | | 樹主 登記號 | 備考 |
|----------|----|--------|----|----|--------|-----------|---------|-----------|-------|
| | | ウリツク | 道端 | 樹冠 | 根系 | 根 | 直根 | | |
| 337 | 大葉 | 134120 | — | ♀ | 4.55 | 4.10~4.40 | △75~△83 | 新利 | 石井・松原 |

東原町遺跡 石製品觀察表

| 番号 名前 | 岩種 | 出土状況 | | | 法長 [cm g] | | | 石材 | 造形状況 | 施作跡 | 備考 |
|-----------------|---------------------|-------|----|------|-----------|--------|--------|--------------|-------|-----------------------|---------------|
| | | 空気中 | 地盤 | 細目 | 法長 | 幅 | 厚さ | | | | |
| 136 玉子石 | M25 | | 下 | 30.0 | 6.0 | 2500.0 | ナメイ子下 | 3/4欠 | | | 風化物質、浮き石30cm。 |
| 139 麻石 (A1型) | H1G | | 上 | 12.3 | 5.0 | 42 | 430.0 | 表面削 下端一部欠 | 風磨面 | | 風化物質。 |
| 140 石碑 | H1G | | 上 | 7.3 | 4.5 | 3.7 | 125.5 | 460.0欠 | 下端一部欠 | | 下端に風化あり。 |
| 141 磨石類 | 3111E | | 上 | 11.8 | 10.0 | 3.6 | 180.0 | 30山皆 | 四角 | 下端に風磨 上端に磨削 表面削 | 風化物質。 |
| 142 熟石類 | 214-3-9-10 SK25E | 804.7 | | 11.5 | 13.5 | 4.0 | 1500.0 | 30山皆 | 半平欠 | 表面に磨打跡 | 風化物質。 |
| 143 砲石類 | 593 | SK20B | 下側 | 12.5 | 8.8 | 3.7 | 476.0 | 30山皆 | 四角 | 表面に斜打跡 | 風化物質。 |
| 144 石旗頭 | 683 | SE20B | 下側 | 16.0 | 10.5 | 3.0 | 2000.0 | 30山皆 | 下小分欠 | 表面に磨打跡。 | |
| 145 鶴石頭 | 12317-22 | SE20E | 下側 | 14.0 | 10.5 | 7.0 | 1500.0 | 30山皆 | 四角 | 表面に上端に斜打跡 表面に磨打跡 | 風化物質。 |
| 146 全塗石 | 12317-23 | SE20I | 下側 | 22.0 | 16.0 | 6.5 | 3200.0 | 30山皆 | 鈍角 | 表面に斜打跡 | 風化物質。 |
| 147 石旗頭 | 12317-24 | SE20I | 下側 | 12.5 | 17.7 | 4.5 | 2000.0 | 30山皆 | 上端 | 下端半欠 | 風化物質。 |
| 148 鶴 | 122 | SD24T | | 9.0 | 3.7 | 1.2 | 66.0 | 鶴石皆 | 下端欠 | 数面 | 全体風化、15°C |
| 149 鶴石 (A2型) | 1236 | | 上 | 7.3 | 3.6 | 3.3 | 126.0 | 30山皆 | 下端欠 | 斜打跡4面 | 風化物質。成形跡有り。 |
| 150 鶴石 (A2型) | 73 | | 上 | 9.0 | 3.7 | 1.0 | 11.0 | 鶴石皆 | 下端欠 | 斜打跡4面 | 風化物質。 |
| 151 鶴石 (A2型) | 7120 | | 上 | 4.0 | 4.0 | 2.0 | 88.0 | 鶴石皆 | 上半分欠 | 鶴石1面 | |
| 152 磨石類 | 1035 | SK20G | 下側 | 12.0 | 8.0 | 3.5 | 807.0 | 30山皆 | 斜角 | 表面に擦痕と斜打跡、斜面に縦打跡 | 風化物質。 |
| 153 石旗頭 | 1021 | KE20I | 下側 | 11.0 | 12.5 | 3.0 | 1500.0 | 30山皆 | 鈍角 | | 風化物質。 |
| 154 石旗頭 | 1020 | SE20I | 下側 | 10.0 | 13.0 | 4.5 | 1150.0 | 30山皆 | 斜角 | | 風化物質。 |
| 155 石旗頭 | 12012-17 | SK20A | 鷹上 | 25.7 | 15.0 | 8.0 | 3000.0 | 30山皆 | 斜角 | 表面に擦痕と斜打跡 | |
| 156 石旗頭 | 12012-27 | SK20A | 鷹上 | 12.8 | 16.0 | 6.5 | 2500.0 | 30山皆 | 斜角 | | 風化物質。 |
| 157 鶴石 (A2型) | 7117 | | 左 | 7.3 | 3.6 | 2.5 | 70.0 | 鶴石皆 | 上端欠 | 斜打跡4面 | 風化物質。 |
| 158 鶴石 (A2型) | 3211E | | 左 | 7.3 | 2.0 | 2.2 | 74.0 | 鶴石皆 | 上端欠 | 斜打跡4面 | 風化物質。 |
| 159 鶴石 (A2型) | 1236 | | 左 | 6.7 | 2.0 | 1.8 | 32.0 | 鶴石皆 | 上端一部欠 | 斜打跡4面、下端に滑行痕 | 風化物質。 |
| 160 鶴石 (D型) | CE18 | | 左 | 4.6 | 5.1 | 1.4 | 42.0 | 鶴石皆 | 上端一部欠 | 鶴石4面 | |
| 161 鶴石 (D型) | T122 | | 左 | 8.2 | 5.0 | 2.1 | 103.0 | 鶴石皆 | 上端欠 | 鶴石4面 | |
| 162 鶴石 (D型) | T122 | | 右 | 7.4 | 4.0 | 1.2 | 48.0 | 鶴石皆 | 上半分欠 | 鶴石4面 | |

東原町遺跡 ガラス玉観察表

| 調査番号 | 器種 | 出土概況 | | | 寸法 (mm) g | | | 材質 | 色調 | 成形 | 備考 |
|------|-----|---------------|-------|------|-----------|------|-----|--------|------|--------|----|
| | | グリーン | 赤 | 青 | 高さ | 幅 | 厚さ | | | | |
| 163 | 吹抜玉 | SC19-20-24-25 | SK011 | 4.00 | 3.70 | 0.17 | ガラス | 透明(白色) | 200g | 気泡多くあり | |
| 164 | 吹抜玉 | SC19-20-24-25 | SK011 | 4.05 | 3.70 | 0.16 | ガラス | 透明(白色) | 160g | 気泡多くあり | |
| 165 | 吹抜玉 | SC19-20-24-25 | SK011 | 4.05 | 3.70 | 0.16 | ガラス | 透明(白色) | 160g | 気泡多くあり | |
| 166 | 吹抜玉 | SC19-20-24-25 | SK011 | 9.00 | 3.20 | 0.15 | ガラス | 透明 | 気泡あり | | |
| 167 | 吹抜玉 | SC19-20-24-25 | SK011 | 4.10 | 3.10 | 0.08 | ガラス | 透明色 | 120g | 透明 | |
| 168 | 吹抜玉 | SC19-20-24-25 | SK011 | 2.70 | 2.40 | 0.04 | ガラス | オーバル底 | 100g | | |

東原町遺跡 木製品観察表

| 調査番号 | 種類 | 出土概況 | | | 寸法 (cm) | | | 木材状況 | 木取扱 | 樹種 | 備考 | |
|------|------|----------|--------|------|-----------|-----------|-------|-------|------|-------|-------------------|--------|
| | | グリーン | 赤 | 青 | 高さ | 幅 | 厚さ | | | | | |
| 169 | 柄 | SC19-08 | SK011 | 楕士2 | 4.60 | 1.7-3.0 | 0.00 | 1/2次 | | 杉 | 斜にして利用 | |
| 170 | 前かぶれ | SC19-08 | SK011 | | 20.0 | 41.5 | 0.35 | 1/2次 | 板目 | 杉 | | |
| 171 | 前かぶれ | SC19-08 | SK011 | | 25.4 | 34.2 | 1.20 | 1/2次 | 板目 | 杉 | | |
| 172 | 漆器鏡 | SC19-08 | SK011 | 楕士2 | 11.9-12.7 | 直径4.4 | 0.35 | 高台 | | 漆器 | | |
| 173 | 鏡床玉 | SC19-08 | SK011 | 楕士2 | 0.90 | 0.95 | 0.40 | 完形 | 板目 | 楓乳群 | | |
| 174 | 鏡床玉 | SC19-08 | SK011 | 楕士2 | 0.89 | 0.90 | 0.42 | 完形 | 板目 | 楓乳群 | | |
| 175 | 鏡底玉 | SC19-08 | SK011 | 楕士2 | 0.97 | 0.83 | 0.45 | 完形 | 板目 | 楓乳群 | | |
| 176 | 鏡底玉 | SC19-08 | SK011 | 楕士2 | 0.91 | 0.95 | 0.40 | 完形 | 板目 | 楓乳群 | | |
| 177 | 鏡底玉 | SC19-08 | SK011 | 楕士2 | 0.90 | 0.90 | 0.40 | 完形 | 板目 | 楓乳群 | | |
| 178 | 鏡底玉 | SC19-08 | SK011 | 楕士2 | 0.42 | 0.43 | 0.23 | 完形 | 板目 | 楓乳群 | | |
| 179 | 鏡底玉 | SC19-08 | SK011 | 楕士2 | 0.83 | 0.42 | 0.45 | 完形 | 板目 | 楓乳群 | | |
| 180 | 鏡底玉 | SC19-08 | SK011 | 楕士2 | 0.80 | 0.43 | 0.35 | 完形 | 板目 | 楓乳群 | | |
| 181 | 鏡底玉 | SC19-08 | SK011 | 楕士2 | 0.90 | 0.80 | 0.45 | 完形 | 板目 | 楓乳群 | | |
| 182 | 鏡底玉 | SC19-08 | SK011 | 楕士2 | 1.20 | 1.20 | 0.40 | 完形 | 板目 | 楓乳群 | | |
| 183 | 鏡底玉 | SC19-08 | SK011 | 楕士2 | 0.95 | 0.95 | 0.23 | 完形 | 板目 | 楓乳群 | | |
| 184 | 鏡底玉 | SC19-08 | SK011 | 楕士2 | 0.42 | 0.45 | 0.20 | 完形 | 板目 | 楓乳群 | | |
| 185 | 鏡底玉 | SC19-08 | SK011 | 楕士2 | 0.43 | 0.43 | 0.20 | 完形 | 板目 | 楓乳群 | | |
| 186 | 前かぶれ | SC19-08 | SK011 | 楕士2 | 12.9 | 21.0 | 1.40 | 1/2次 | 板目 | 杉 | 外客文様で装飾 | |
| 187 | 柄 | SG10 | SK111 | 楕士2 | 7.0 | 1.5-5.0 | 0.25 | 1/2次 | | 杉 | 斜にして利用 | |
| 188 | 漆器鏡 | SG10 | SK110 | 木柄 | 16.2 | 32.0 | 0.25 | | 板目 | 杉 | | |
| 189 | 漆物底盤 | SG10 | SK110 | 木柄 | 19.6 | 35.0-37.0 | 0.25 | | 板目 | 杉 | 日用具 | |
| 190 | 柱柱 | SG10 | SK110 | 木柄 | 69.4 | 19.0 | | | 丸材 | 杉 | | |
| 191 | 柱柱 | SG10 | SK110 | 木柄 | 72.2 | 23.0 | | | 丸材 | 杉 | 接合手札の痕跡 | |
| 192 | 柱柱 | SG10 | SK110 | 木柄 | 60.5 | 24.0 | | | 丸材 | 杉 | 接合手札の痕跡 | |
| 193 | 漆器底盤 | SG10 | SK110 | 木柄 | 11.0 | 12.6 | 漆厚7.4 | 漆面3.1 | | ナラ | 内件面無端 | |
| 194 | 筒 | SK150 | 薄手筒 | 19.2 | 0.80 | | | 上端欠 | 板目 | 杉 | | |
| 195 | 筒 | 20137 | SK025 | 木柄 | 17.7 | 0.40 | | | 上端欠 | 板目 | 杉 | |
| 196 | 漆器筒 | 21120 | SK451 | | 11.7-7.6 | 底径5.5 | 漆高1.2 | | 丸材 | 杉 | 内件面無端 | |
| 197 | 漆器筒 | 21120 | SK451 | | 11.7-9.4 | 底径6.9 | 漆高1.2 | | 丸材 | 杉 | 内件面無端 | |
| 198 | 漆器筒 | 21120 | SK451 | | 11.7-9.8 | 底径7.3 | 漆高1.2 | | 丸材 | 杉 | 内件面無端 | |
| 199 | 漆器筒 | 21120 | SK451 | | 11.7-9.7 | 漆高1.2 | | | 丸材 | 杉 | 内件面無端 | |
| 200 | 漆器筒 | 21120 | SK451 | | 20.5 | 8.10 | 0.16 | | 板目 | 杉 | 未打孔あり | |
| 201 | 漆器筒 | 21120 | SK451 | | 27.1 | 3.30 | 0.22 | | 板目 | 杉 | | |
| 202 | 漆器筒 | 21120 | SK451 | | 24.3 | 5.20 | 0.20 | | 板目 | 杉 | | |
| 203 | 漆器筒 | 21120 | SK451 | | 29.9 | 4.70 | 0.65 | 上端欠 | 板目 | 杉 | 未打孔あり | |
| 204 | 勺札 | 21120 | SK451 | | 20.2 | 4.90 | 0.76 | | 丸材 | 杉 | | |
| 205 | 漆器底盤 | 21211-7 | SK024 | 木柄 | 18.5 | 39.5 | 0.7 | | 板目 | 杉 | 未打孔あり | |
| 206 | しわ毛七 | 21122-2 | SK014 | | 24.5 | 6.80 | 0.60 | 下端一端欠 | 板目 | 杉 | 鶴丸彫刻加工 | |
| 207 | 精杓 | 21216 | SK026 | 木柄 | 48.1 | 12.2 | | | 丸材 | 杉 | 接合手札あり | |
| 208 | 油筋底盤 | 2204-223 | SD103 | | 11.9-9.3 | 月9.3 | 0.35 | 1/3次欠 | 板目 | ナラ | 接合手札あり | |
| 209 | 筒 | 5G28 | SK010 | | 28.2 | 25.0 | 0.40 | | 板目 | 杉 | 内件面無端 | |
| 210 | 柱柱 | 4H | PT | 61.5 | 24.3 | | | 丸材 | 杉 | 内件面無端 | | |
| 211 | 柱柱 | 6H | PT | 94.1 | 34.6 | 15.9 | | 丸材 | 杉 | 内件面無端 | | |
| 212 | 人形 | 217 | SK1774 | 楕士2 | 10.85 | 2.80 | | | 丸材 | 杉 | 漆の残り一部剥離 脚・丁度13cm | |
| 213 | 漆器底盤 | 2034 | SK023 | 木柄 | 11.46 | 39.3-0.3 | | | 上端強欠 | 板目 | 杉 | 漆底 漆削底 |
| 214 | 柱柱 | 6214 | SK743 | | 75.0 | 21.0 | | | 丸材 | 杉 | 接合手札あり | |
| 215 | 筒 | 83.00 | SK015 | 木柄 | 18.9 | 1.0 | | | 上端欠 | 板目 | 杉 | |
| 216 | 鋼矢 | 52 | P30 | | 24.5 | 13.0 | 0.12 | | 丸材 | 杉 | 頭脚から下端にかけて凹凸有り | |

東原町遺跡 錢貨観察表

| 調査番号 | 銭貨名 | 出土概況 | | | 寸法 (mm) g | | | 材質 | 成形 | 割持率 | 備考 |
|------|------|---------------|-------|------|-----------|-----|-----|-----|------|-------|---------|
| | | 直径 | 外径 | 内径 | 厚 | 重 | 重 | | | | |
| 217 | 寛永通寶 | SC19-20-24-25 | SK011 | 23.0 | 21.0 | 5.7 | 2.8 | 1.0 | 2.95 | 1636年 | 吉賀地 |
| 218 | 寛永通寶 | SC19-20-24-25 | SK011 | 24.3 | 24.8 | 6.6 | 3.6 | 1.0 | 3.05 | 1636年 | 吉賀地 |
| 219 | 寛永通寶 | SC19-20-24-25 | SK011 | 24.2 | 24.2 | 5.5 | 5.5 | 1.0 | 2.68 | 1636年 | 吉賀地 |
| 220 | 寛永通寶 | SC19-20-24-25 | SK011 | 23.0 | 23.8 | 5.5 | 3.6 | 1.0 | 3.00 | 1636年 | 吉賀地 |
| 221 | 寛永通寶 | SC19-20-24-25 | SK011 | 24.3 | 24.1 | 5.6 | 5.6 | 1.0 | 3.08 | 1636年 | 吉賀地 |
| 222 | 寛永通寶 | SC19-20-24-25 | SK011 | 24.3 | 24.1 | 6.1 | 6.0 | 1.1 | 2.67 | 1636年 | 吉賀地 |
| 223 | 寛永通寶 | SC19-20-24-25 | SK011 | 22.7 | 22.9 | 6.5 | 6.5 | 1.0 | 2.85 | 1637年 | 新食地 |
| 224 | 寛永通寶 | SC19-20-24-25 | SK011 | 22.0 | 22.6 | 6.5 | 6.4 | 1.0 | 2.25 | 1637年 | 新食地 |
| 225 | 寛永通寶 | SC19-20-24-25 | SK011 | 24.0 | 24.0 | 6.5 | 6.5 | 1.0 | 2.53 | 1637年 | 新食地 |
| 226 | 寛永通寶 | SC19-20-24-25 | SK011 | 22.0 | 22.8 | 6.5 | 6.4 | 1.0 | 2.54 | 1637年 | 新食地 |
| 227 | 寛永通寶 | SC19-20-24-25 | SK011 | 23.3 | 23.3 | 6.3 | 6.3 | 1.0 | 2.64 | 1636年 | 吉賀地 |
| 228 | 寛永通寶 | SC25-005 | SK012 | 24.2 | 21.0 | 5.9 | 6.1 | 1.0 | 2.64 | 1636年 | 吉賀地 |
| 229 | 寛永通寶 | SC25-005 | SK012 | 21.2 | 21.2 | 6.6 | 6.5 | 0.8 | 2.87 | | |
| 230 | 寛永通寶 | 2010 | SK111 | 24.0 | 24.9 | 5.7 | 3.7 | 1.1 | 3.25 | 1636年 | 吉賀地 |
| 231 | 寛永通寶 | 2010 | SK111 | 24.1 | 23.0 | 6.0 | 6.0 | 1.1 | 2.75 | 1636年 | 吉賀地 |
| 232 | 寛永通寶 | 2010 | SK111 | 22.8 | 22.2 | 6.6 | 6.9 | 1.0 | 2.19 | 1636年 | 吉賀地 |
| 233 | 寛永通寶 | 2010 | SK111 | 24.3 | 23.2 | 6.9 | 6.9 | 1.1 | 2.90 | 1637年 | 吉賀地(正錢) |
| 234 | 寛永通寶 | 2010 | SK111 | 25.2 | 25.2 | 6.1 | 6.1 | 1.1 | 3.29 | 1636年 | 吉賀地(正錢) |

觀察表

東原町遺跡 金属製品観察表

| 報告 番号 | 種別 | 甫上礁底 | | | | | | 備考 | |
|----------|------|------------------|-------|-----|---------|--------|---------|--------|--------------|
| | | データ ID | 測量 | 標本 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 厚さ (cm) | 重量 (g) | |
| 235 | 鰐 | 8124_834 | SE012 | - | 10.5 | 23.3 | 0.5 | 1760.0 | 迷彩斑 |
| 236 | ザリガニ | 10416 | KE016 | - | 10.0 | 25.5 | - | - | 表面 目打穴あり |
| 237 | 刀子 | 10416 | SE016 | - | 0.2 | 2.1 | 0.4 | 20.0 | 先端欠 目打穴あり |
| 238 | 38 | TE-110° | SE013 | - | 14.5 | 0.4 | 0.5 | 25.0 | 1/2欠 |
| 239 | 不明 | 62~93 | SD407 | - | 5.2 | 2.0 | 0.4 | 15.0 | 鈎穴あり |
| 240 | ザリガニ | 62~93 | SD407 | 上側 | 15.2 | 23 | 1.7 | 160.0 | - |
| 241 | 貝殻 | 8123_231, 8122_3 | SE177 | 殻上部 | 27.0 | 22 | 0.4 | 100.0 | 表面 |
| 242 | 不明 | 7327 | - | 右 | 3.0 | 3.6 | 0.2 | 10.0 | - |
| 243 | 難 | 7327 | - | 左 | 12.0 | 3.0 | 1.6 | 230.0 | 空洞 |

東原町遺跡 羽口觀察表

| 属名 种名 | 性别 | 生长情况 | | | | 株高 (cm) | 幅 (cm) | 厚度 (cm) | 重量 (g) | 备注 |
|----------|----|------|--------|-----|-----|---------|--------|---------|--------|----|
| | | 茎毛多少 | 直立 | 匍匐 | 根系 | | | | | |
| 244-射干 | 射干 | 2014 | 3X0911 | 匍士上 | 直7. | 46.7 | 2.5 | 80.0 | | |
| 245-射干 | 射干 | 2014 | 3X0911 | 匍士上 | 直3. | 54.4 | 2.9 | 55.0 | | |
| 246-射干 | 射干 | 2013 | 3X0911 | 匍士上 | 直5. | 65.6 | 2.6 | 70.0 | | |
| 247-射干 | 射干 | 2014 | 3X0911 | 匍士上 | 直8. | 55.2 | 2.0 | 75.0 | | |

下沖北遺跡 土器・陶磁器觀察表

〔砂〕砂紋。圓 = 長石。石 = 石英。黑 = 深色黏。赤 = 赤鵝卵。針 = 鋸齒斜針。角 = 角閃石。孚 = 孚十卜。雲 = 雲母。

| 番号 | 種類 | 原産地 | 品種 | 交配 | 特徴 | 出土地点 | | | 法量 (ml) | | | 色調 | 前記 | 後記 | 目印 | 音高 | 选择 | 前日深入物 | | 前作物 | | 耕作 | | 播種 | | |
|----|-----|-----|-------|---------|----|------|----------|-----|---------|-----|-----|-----|-------|----|-----|----|----|-------|-----|-----|-----|-----|-----|------------|---------------|--------------------|
| | | | | | | タマリ | タマリ | タマリ | タマリ | タマリ | タマリ | | | | | | | タマリ | タマリ | タマリ | タマリ | タマリ | タマリ | タマリ | タマリ | |
| 1 | 百合 | 鹿児島 | 白百合 | | | 213B | 54500009 | 黒 | 1.1 | 1.0 | 1.0 | 黒色 | 西側 | 各個 | | | 黒 | 右・左 | 小石 | あり | なし | | | 前日割、肥化物有り。 | | |
| 2 | 青森 | 福島 | 紫花 | 山田 | 山田 | 2015 | 54500003 | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 反白苔 | 無 | 苔 | | | 黒 | 右 | 小石 | なし | なし | | | 未定。 | |
| 3 | 上野賀 | 福島 | C 1+正 | | | 2212 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 白苔苔 | 黒 | 白苔 | | | 黒 | 右・左 | 小石 | なし | あり | 十子 | | | |
| 4 | 上野賀 | 福島 | C 1+3 | | | 2219 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 野苔 | 黒 | 野苔 | | | 黒 | 右・左 | 小石 | なし | あり | 十子 | | | |
| 5 | 上野賀 | 福島 | C 1+6 | | | 2216 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右・左 | | | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | なし | | | |
| 6 | 上野賀 | 福島 | B 0.6 | 150-100 | | 2123 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | にぬき黒苔 | 黒 | 右 | 苔 | | 黒 | 右 | 右 | あり | あり | 赤 | | 京都系。 | |
| 7 | 上野賀 | 福島 | B 0.6 | 150-100 | | 2122 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 苔 | | 黒 | 右 | 右 | あり | あり | 十子 | | 京都系、右側偏重。 | |
| 8 | 内蔵 | 滋賀県 | 野苔 | 水草 | 水草 | 2619 | | 黒 | 1.0 | 2.0 | 0.0 | 灰白色 | 白苔苔 | 黒 | 白苔 | | | 黒 | 右 | 右 | なし | なし | なし | | 近畿河川水系切手。 | |
| 9 | 青森 | 福島 | 白百合 | 山田 | 山田 | 2613 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 黒苔 | 黒 | 黒苔 | | | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | なし | | 蓬文丸。 | |
| 10 | 上野賀 | 福島 | C 1+1 | | | 2214 | | 黒 | 1.0 | 3.0 | 7.0 | 黒色 | 黒苔苔 | 黒 | 右・左 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | なし | | | |
| 11 | 上野賀 | 福島 | C 1+3 | | | 2111 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 黒苔苔 | 黒 | 右・左 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 右 | なし | なし | なし | 八千代 ナガサキ 横須賀 |
| 12 | 上野賀 | 福島 | C 1+3 | | | 2418 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | にぬき黒苔 | 黒 | 右 | 黒 | | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 13 | 上野賀 | 福島 | C 1+3 | | | 2118 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | にぬき黒苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 14 | 上野賀 | 福島 | C 1+3 | | | 2114 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 15 | 上野賀 | 福島 | C 1+3 | | | 2419 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | 波紋。 | |
| 16 | 上野賀 | 福島 | C 1+3 | | | 2211 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 17 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2213 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 18 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2215 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 19 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2113 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 20 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2114 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 21 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2116 | | 黒 | 1.0 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 22 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2311 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 23 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2312 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 24 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2313 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 25 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2111 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 26 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2112 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 27 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2113 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 28 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2114 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 29 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2115 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 30 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2116 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 31 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2117 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 32 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2118 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | 平行タヌキ目 | |
| 33 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2119 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | 平行タヌキ目 | |
| 34 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2120 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | 内面に溝筋有り。根葉鋸歯。 | |
| 35 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2121 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | 外側に輪達化。 | |
| 36 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2122 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 37 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2123 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 38 | 上野賀 | 福島 | C 1+2 | | | 2124 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 父母苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 39 | 阿多 | 沖縄 | 黒 | 黒 | | 2014 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 黒苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 40 | 阿多 | 沖縄 | 黒 | 黒 | | 2015 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 黒苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 41 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2111 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 42 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2112 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 43 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2113 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 44 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2114 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 45 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2115 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 46 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2116 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 47 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2117 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 48 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2118 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 49 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2119 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 50 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2120 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 51 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2121 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 52 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2122 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 53 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2123 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 54 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2124 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 55 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2125 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 56 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2126 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 57 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2127 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 58 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2128 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 59 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2129 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 60 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2130 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 61 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2131 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 62 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2132 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 63 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2133 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 64 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2134 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 65 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | | | 2135 | | 黒 | 1.1 | | | 黒色 | 水に倒伏苔 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | 右 | 黒 | なし | なし | 十子 | | | |
| 66 | 阿多 | 沖縄 | C 2+0 | </ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

観察表

下沖北遺跡 土製品観察表

| 報告番号 | 種類 | 測量 | 出土場所 | | | 法軸(cm) | | | 出土器物 | 備考 |
|------|----|----|--------|----|----|--------|------|------|-----------|----|
| | | | グリット | 通縫 | 厚さ | 長さ | 幅 | 厚さ | | |
| 137 | 土器 | 上層 | 16J1-3 | - | - | 0.52 | 3.40 | 1.20 | 素面・石器・陶片等 | 上層 |

下沖北遺跡 石製品観察表

| 報告番号 | 測量 | 出土場所 | | | 法軸(cm) | | | 重量(g) | 有無 | 備考 |
|------|--------|-------|----|------|--------|-----|------|-------|----|-----------|
| | | グリット | 通縫 | 厚さ | 長さ | 幅 | 厚さ | | | |
| 138 | 石刀(A1) | 24J7 | II | 12.3 | 3.0 | 3.0 | 30.5 | 鋸歯刃 | 上層 | 石器・鐵器・骨器等 |
| 139 | 石刀(A1) | 24L12 | V | 9.9 | 6.0 | 1.5 | 29.8 | 鋸歯刃 | 中層 | 鐵器・骨器等 |

下沖北遺跡 木製品観察表

| 報告番号 | 測量 | 出土場所 | | | 法軸(cm) | | | 枚数 | 有無 | 備考 |
|------|----|-------|-----|----|--------|-----|-----|----|----|------------|
| | | グリット | 通縫 | 厚さ | 長さ | 幅 | 厚さ | | | |
| 140 | 木 | 24J10 | 未確認 | V | 27.0 | 3.1 | 3.2 | - | 木材 | - |
| 141 | 木 | 24J11 | 未確認 | V | 25.1 | 3.0 | 3.0 | - | 木材 | 厚2.9~3.3cm |

下沖北遺跡 錢貨観察表

| 報告番号 | 錢貨名 | 出土場所 | | | 法軸(cm) | | | 銘文 | 有無 | 備考 |
|------|------|-------|-----|------|--------|------|------|-----|------|----------|
| | | グリット | 通縫 | 厚さ | 長さ | 幅 | 厚さ | | | |
| 142 | 圓孔通貫 | 16P10 | II | - | 24.8 | - | 20.5 | 1.0 | 22.2 | 821年 漢唐 |
| 143 | 圓孔通貫 | 16P9 | II | 24.2 | 24.4 | 20.5 | 20.4 | 1.0 | 2.64 | 621年 銀 |
| 144 | 圓孔通貫 | 16P5 | II | 23.9 | 23.7 | 19.8 | 20.1 | 1.2 | 2.22 | 1595年 行書 |
| 145 | 圓孔通貫 | 16P9 | II | 23.2 | 23.8 | 19.3 | 19.3 | 0.8 | 2.08 | 1111年 銀 |
| 146 | 宣德通貫 | 16P7 | II | - | - | 20.5 | - | 0.8 | 2.10 | 1432年 銀 |
| 147 | 圓孔通貫 | 21J5 | III | 24.1 | 24.1 | 21.1 | 21.2 | 1.2 | 1.94 | 621年 銀 |
| 148 | 淳祐元寶 | 22J11 | III | 24.4 | 24.5 | 18.2 | 18.5 | 1.0 | 3.16 | 990年 行書 |
| 149 | 淳祐元寶 | 22J10 | III | 23.8 | 23.1 | 18.4 | 18.4 | 0.8 | 2.06 | 1208年 銀 |
| 150 | 聖宋通貫 | 22J14 | III | 24.5 | 24.5 | 18.7 | 27.1 | 0.7 | 2.07 | 1028年 銀 |
| 151 | 聖宋通貫 | 22J12 | III | 24.0 | 24.9 | 19.5 | 19.4 | 1.2 | 3.14 | 1016年 銀 |
| 152 | 元豐通貫 | 22J15 | III | 23.5 | 23.5 | 18.7 | 18.5 | 1.1 | 3.01 | 1076年 銀 |
| 153 | 元豐通貫 | 22J9 | III | 23.6 | 23.5 | 19.6 | 20.1 | 0.8 | 2.11 | 1096年 銀 |
| 154 | 嘉祐元寶 | 22J9 | III | 23.7 | 23.4 | 17.2 | 17.6 | 0.8 | 2.04 | 1064年 行書 |
| 155 | 元符通貫 | 21J5 | III | 24.1 | 24.2 | 19.8 | 19.4 | 0.8 | 2.24 | 1098年 銀 |
| 156 | 崇寧通貫 | 21J7 | III | 24.5 | 24.8 | 20.7 | 20.6 | 0.7 | 2.03 | 1106年 銀 |
| 157 | 開元通貫 | 15J13 | V | - | - | - | 19.2 | 0.5 | 2.02 | 621年 銀 |

図 版

凡 例

1 土器等の付着物の範囲は [] のスクリーントーンで示した。

2 須恵器の断面は黒塗りつぶして示した。

3 石器の磨痕は [] 、敲痕は [] 、炭化物の付着範囲は [] のスクリーントーンで示した。

4 木製品の木目は、本取部位表示を目的としているため、年輪幅は実際を示していない。

5 遺物の写真図版の縮尺は、一部を除き図面図版と同じである。

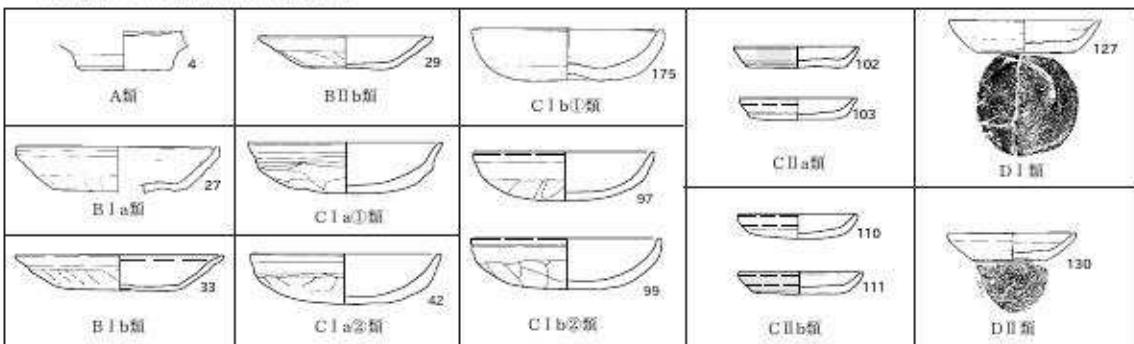
6 土師質土器分類図は以下の通りである（A・B

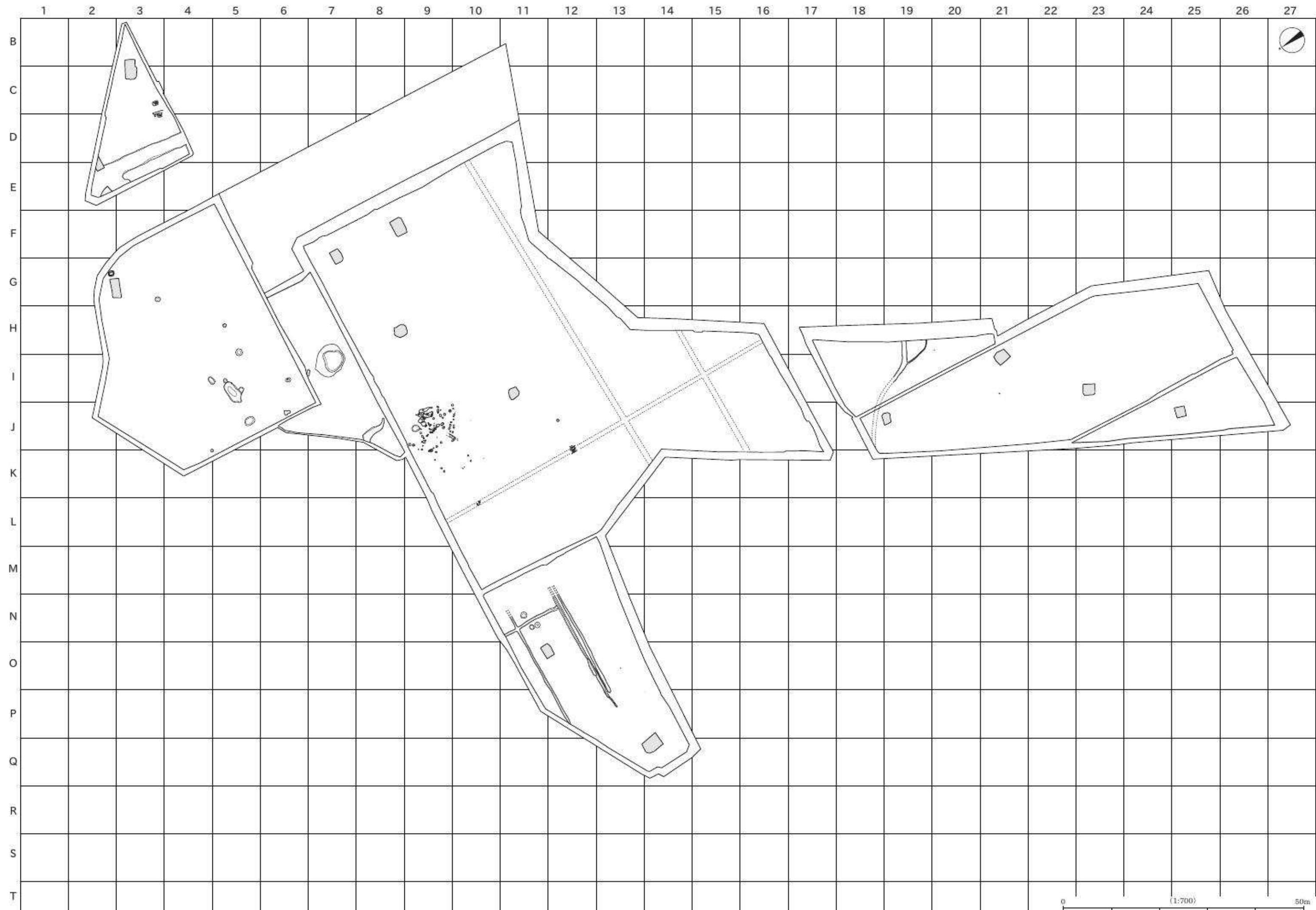
I a・C I b①・D類は下沖北遺跡 H14 年度

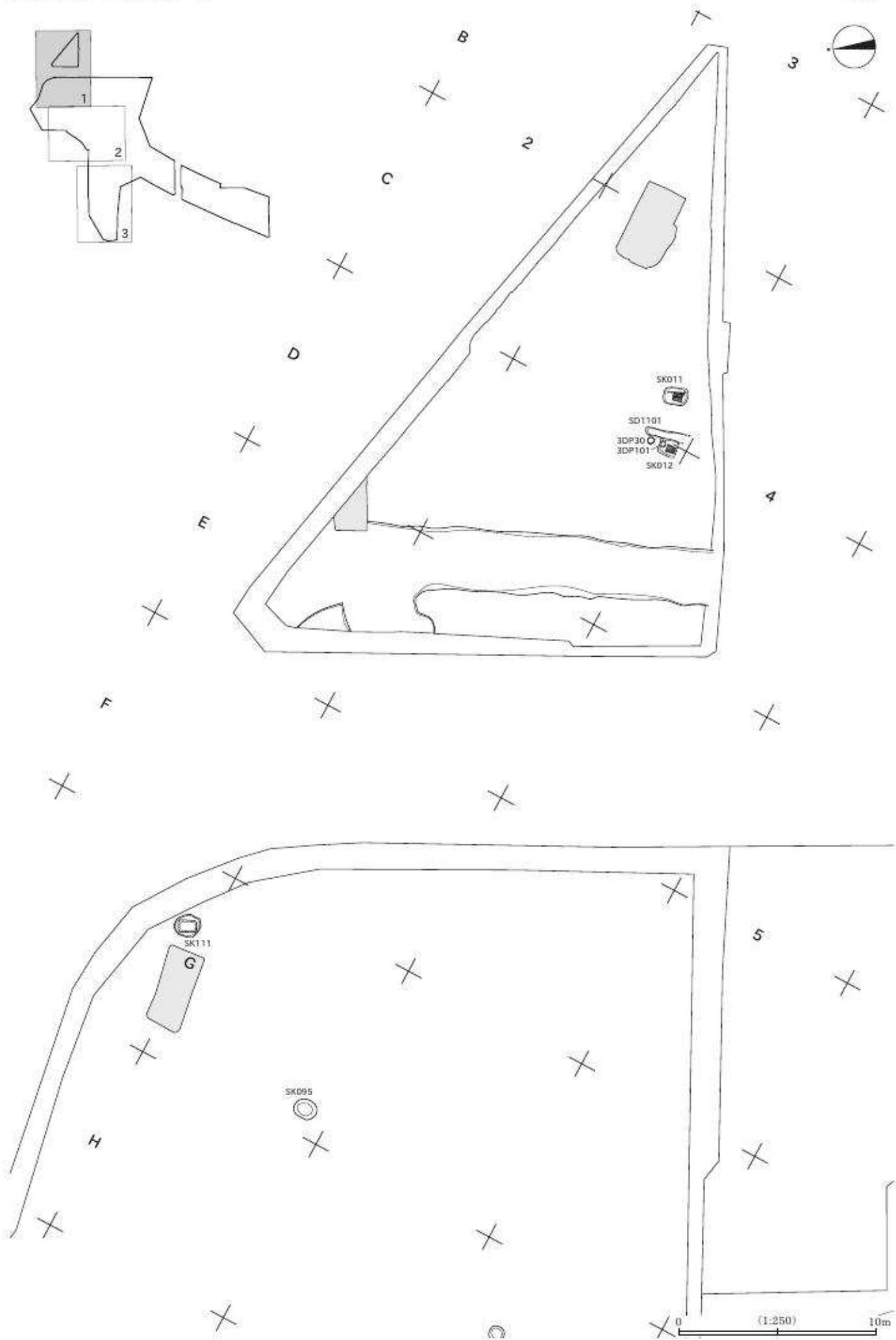
調査分。その他は東原町遺跡。）。

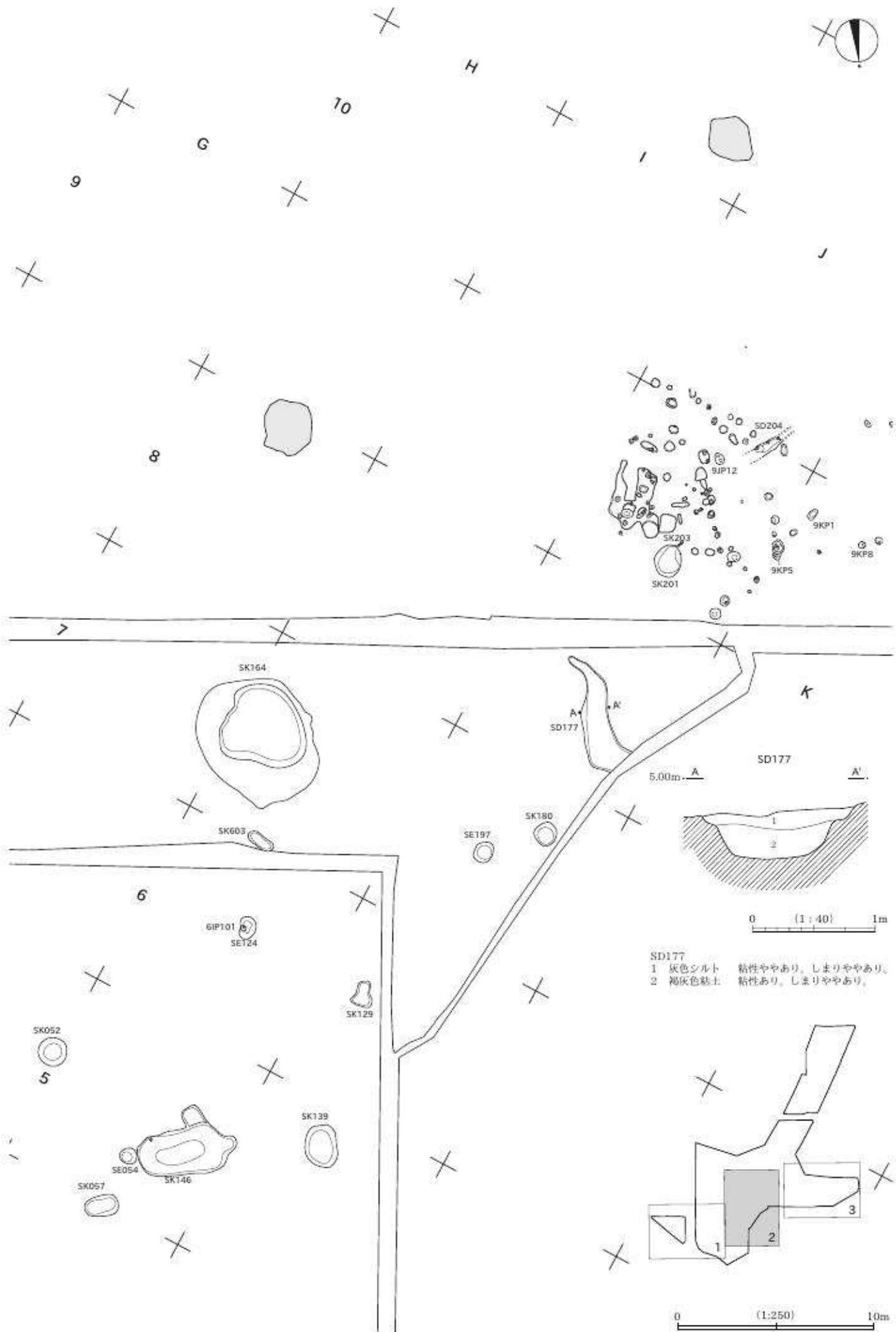
7 埋納錢の凡例は以下の通りである。

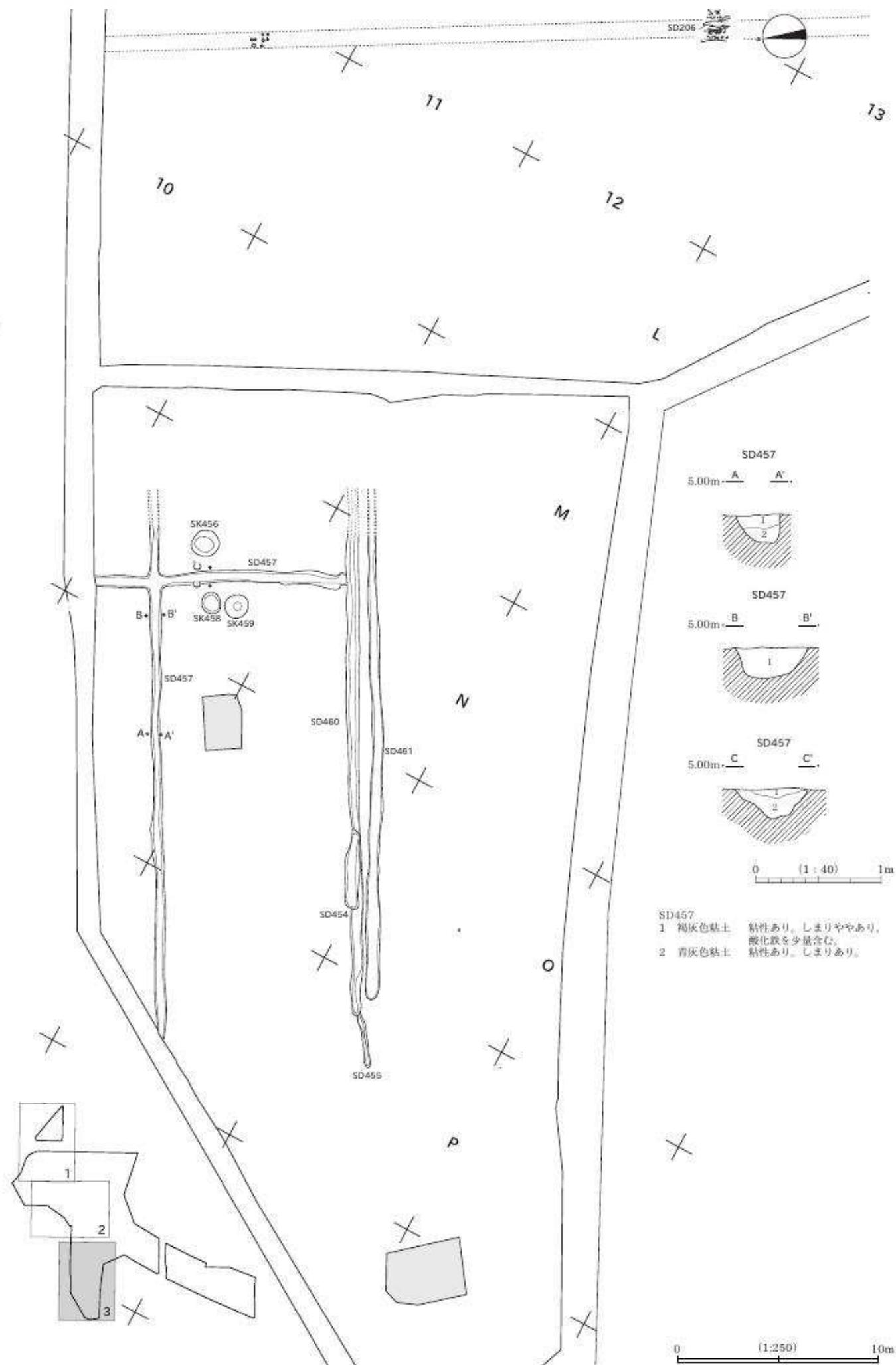
| |
|----------------|
| 表面拓本 |
| 裏面拓本 |
| 錢種 |
| 縕番号 - 節 - 節内順番 |
| 初鋳年 |
| 背景 |

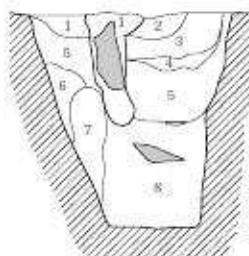
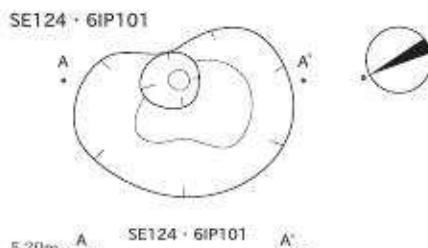




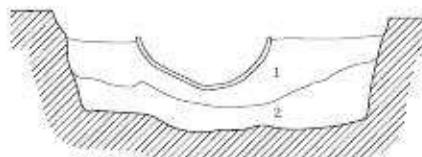
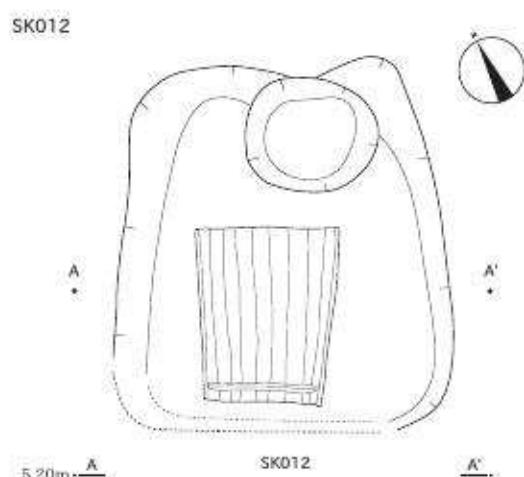




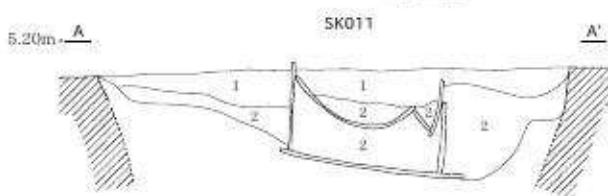
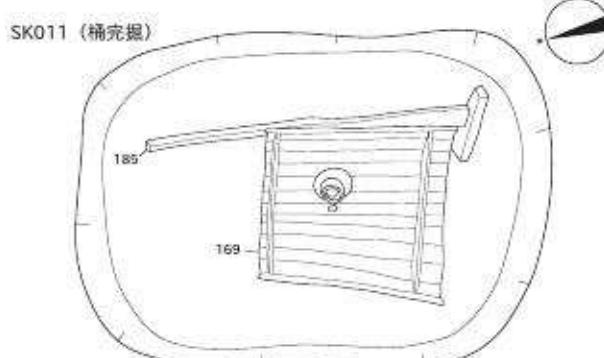
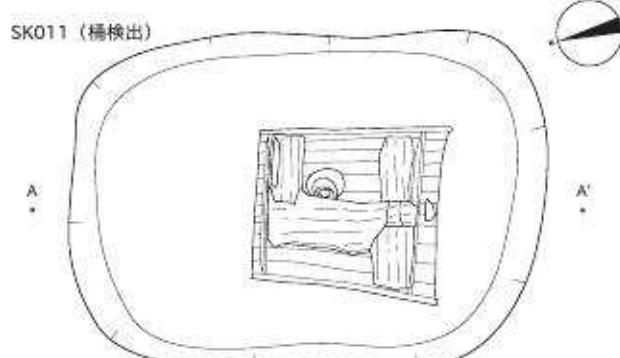




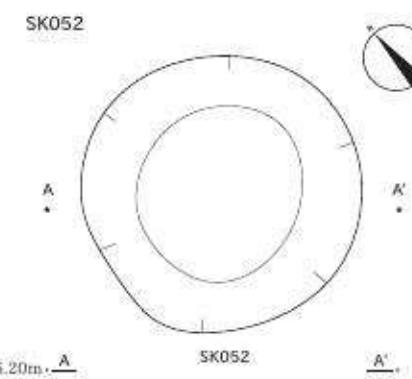
- SE124
1 青灰色シルト 粘性あり。しまりややあり。黄褐色土をブロック状に含む。
2 にぶい黄褐色シルト 粘性あり。しまりあり。炭化物を含む。酸化鉄を含む。
3 青灰色シルト 粘性あり。しまりややあり。炭化物を含む。酸化鉄を含む。
4 青灰色シルト 粘性あり。しまりややあり。炭化物を含む。酸化鉄を多く含む。
5 青灰色シルト 粘性あり。しまりややあり。酸化鉄を少量含む。
6 褐灰色シルト 粘性ややあり。しまりややあり。
7 緑灰色シルト 粘性あり。しまりややあり。
8 暗緑灰色粘土 粘性あり。しまりあり。
- 6IP101
1 青灰色粘土 粘性あり。しまりあり。灰色土をブロック状に含む。
酸化鉄を少量含む。



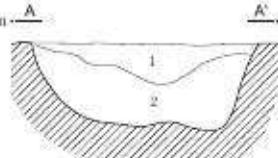
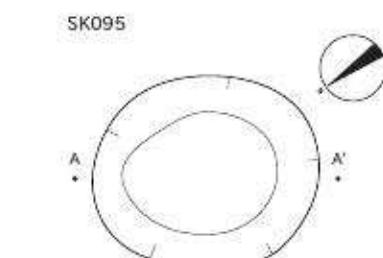
- SK012
1 底褐色粘土 粘性あり。しまりややあり。礫をごく少量含む。
2 褐灰色粘土 粘性あり。しまりややあり。



- SK011
1 青灰色粘土 粘性あり。しまりややあり。酸化鉄をまばらに含む。
2 灰色粘土 粘性あり。しまりややあり。炭化物を少量含む。



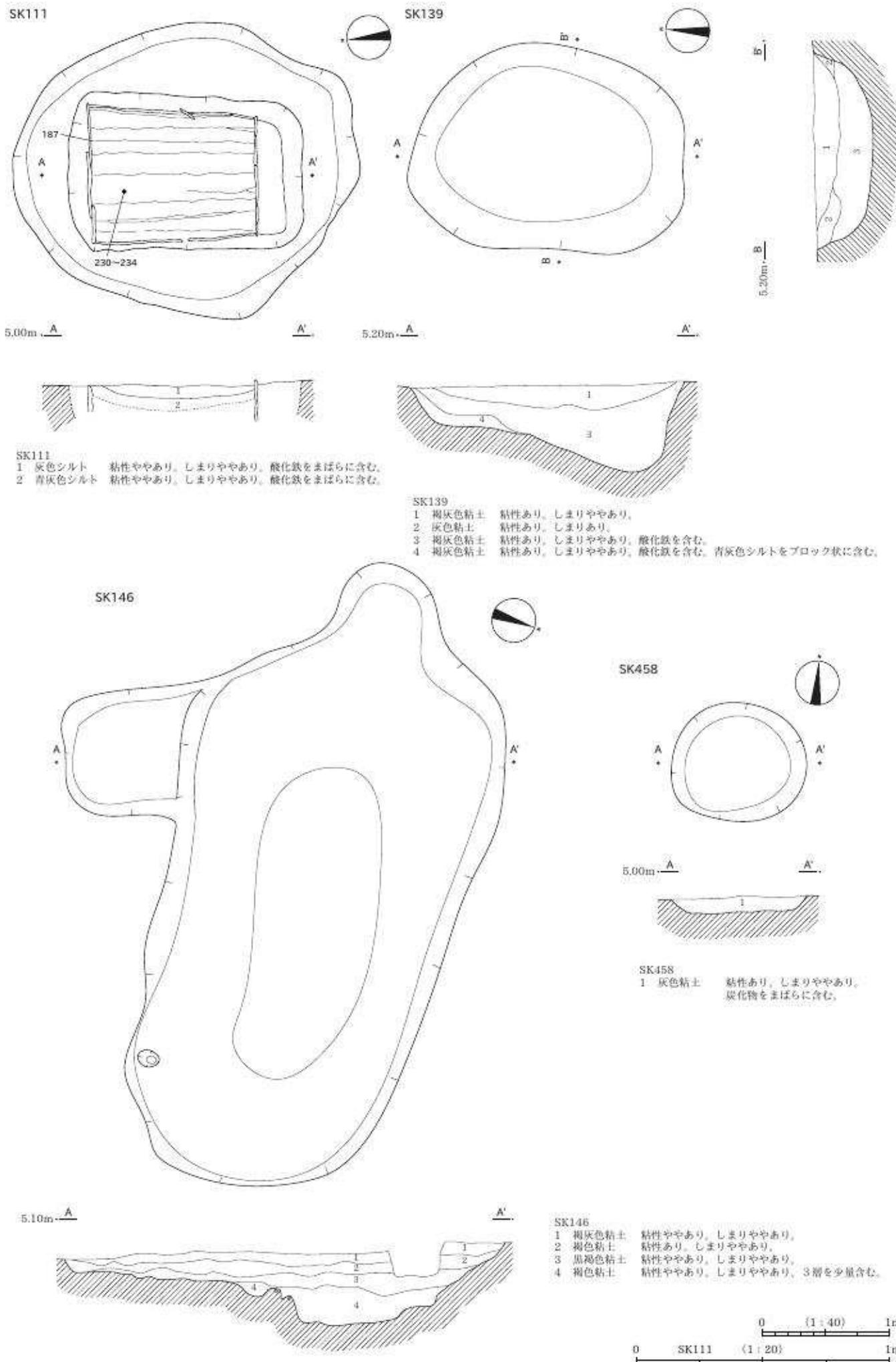
- SK052
1 青灰色粘土 粘性あり。しまりややあり。酸化鉄をまばらに含む。
2 青灰色粘土 粘性あり。しまりややあり。
3 黒色粘土 粘性あり。しまりややあり。炭化物をまばらに含む。

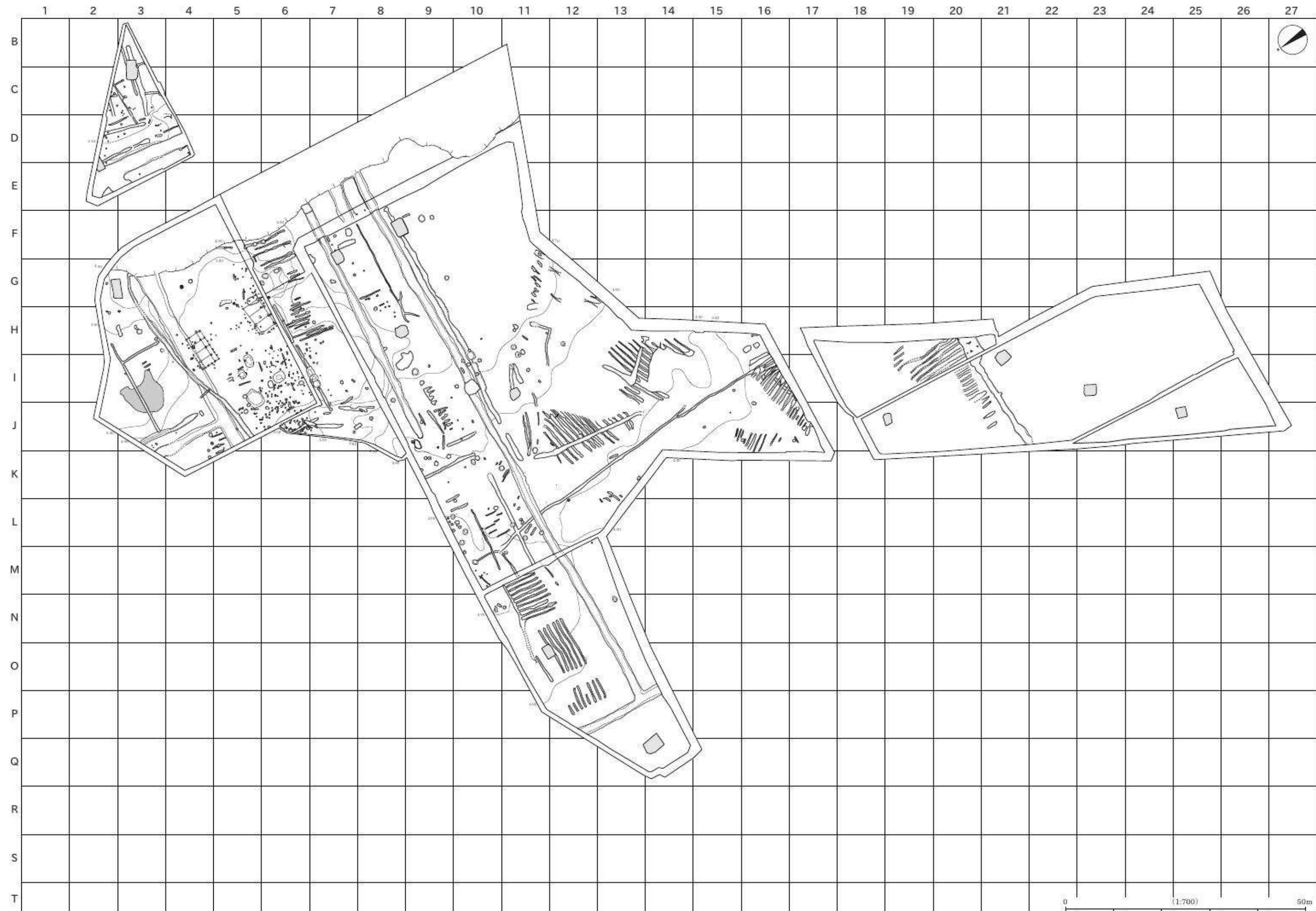


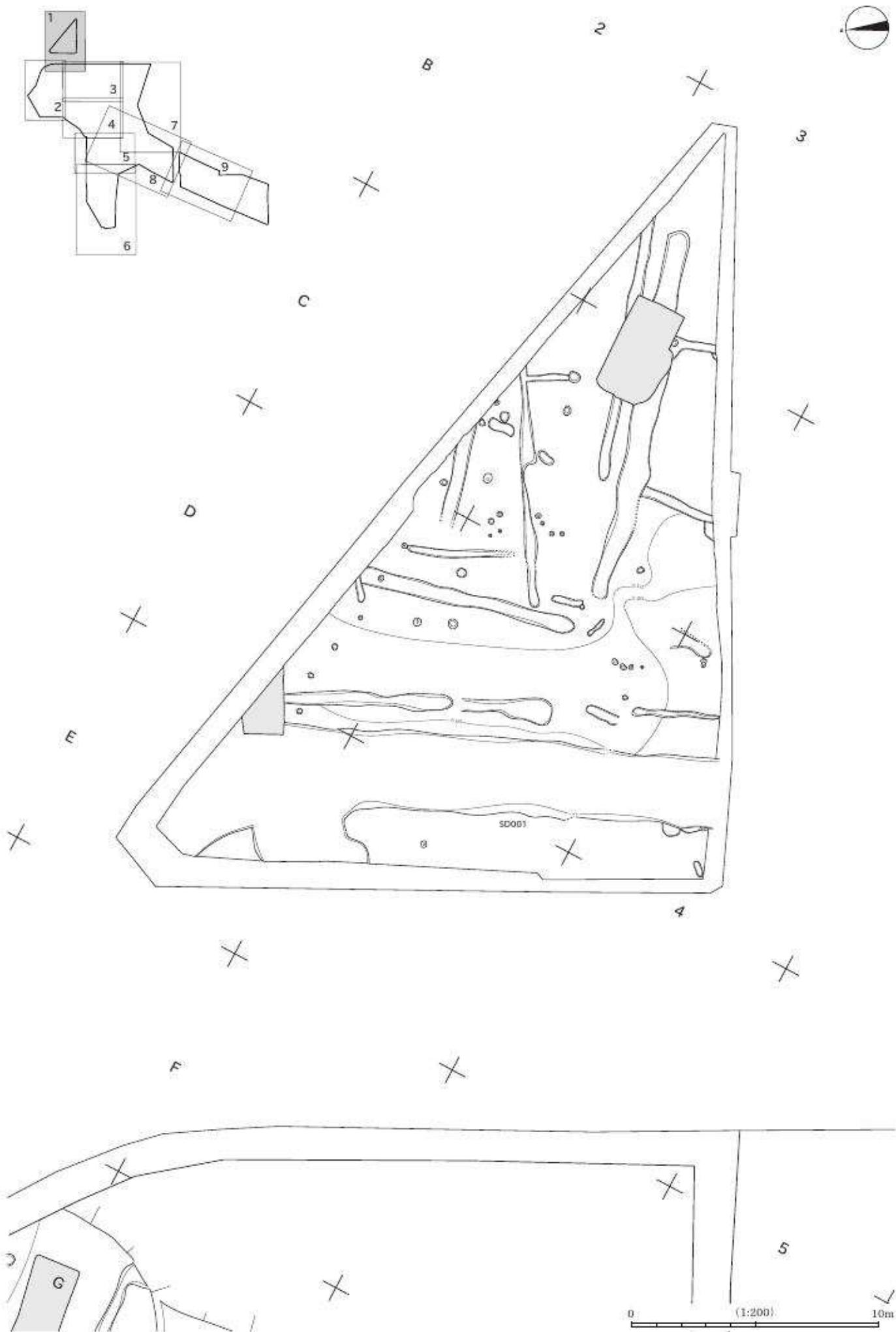
- SK095
1 褐黒色粘土 粘性あり。しまりあり。
2 褐灰色粘土 粘性あり。しまりややあり。
上層をブロック状に含む。

0 (1 : 40) 1m
SK011・012 (1 : 20) 1m

木

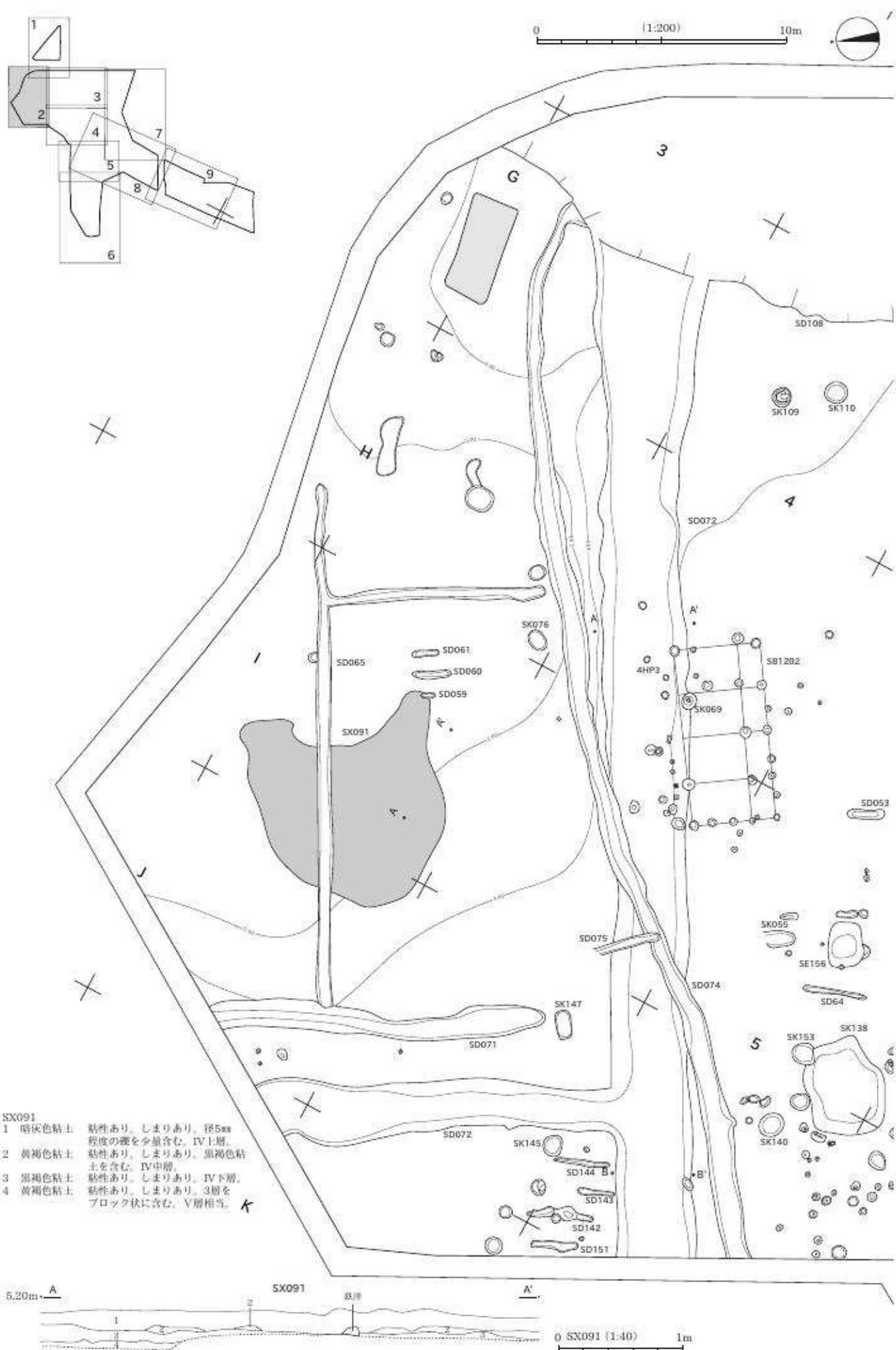






図版9

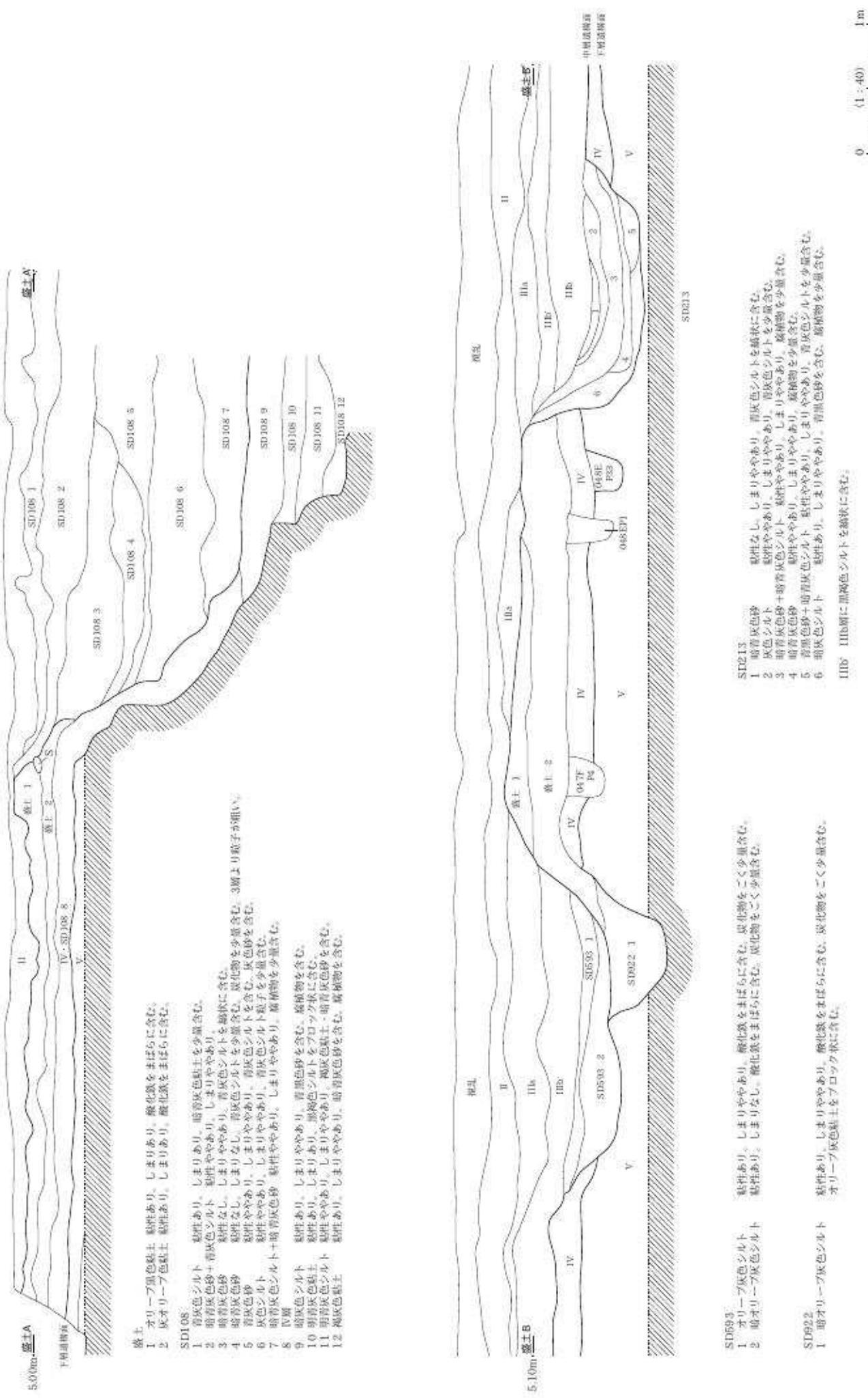
東原町遺跡 中層分割図(2)

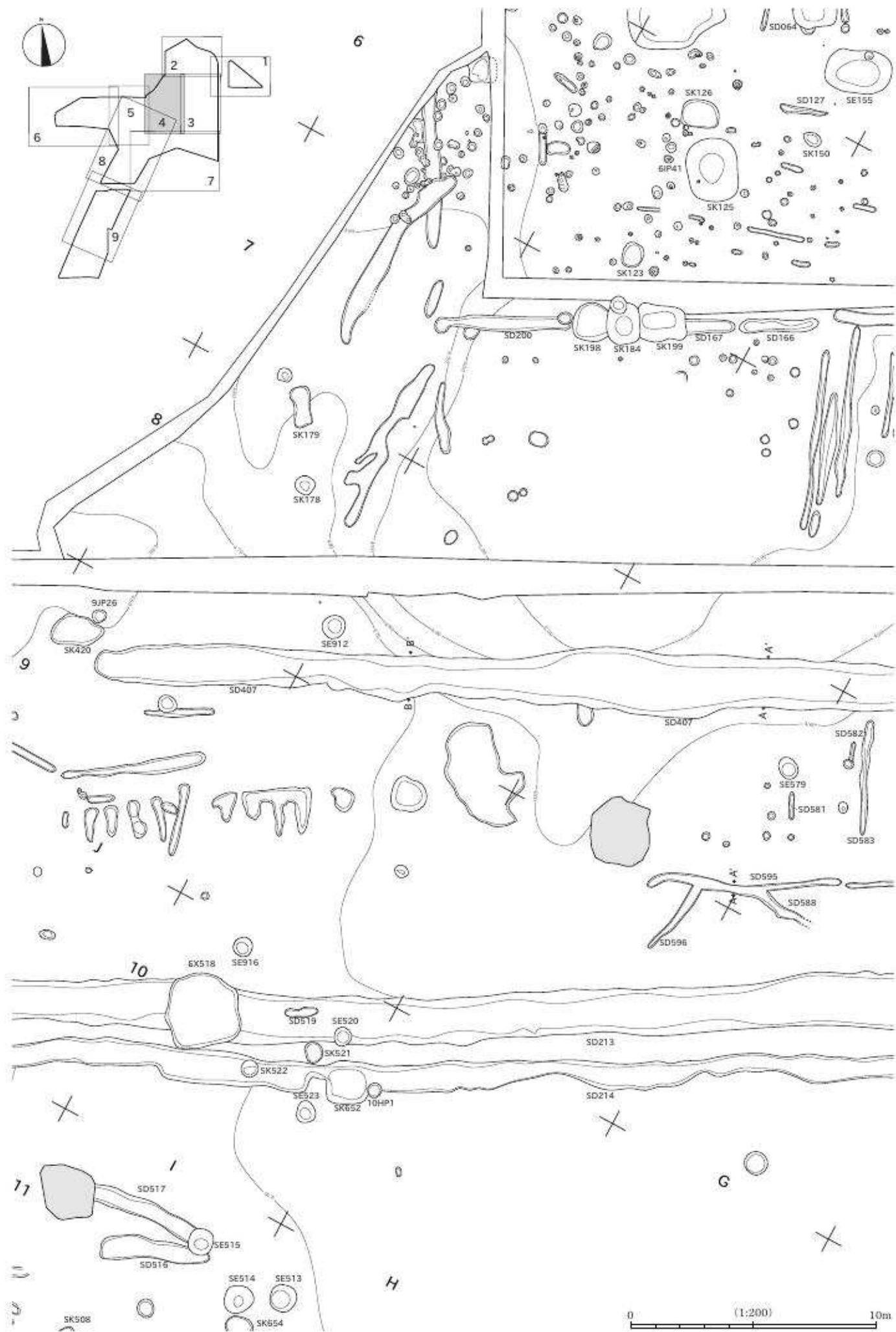


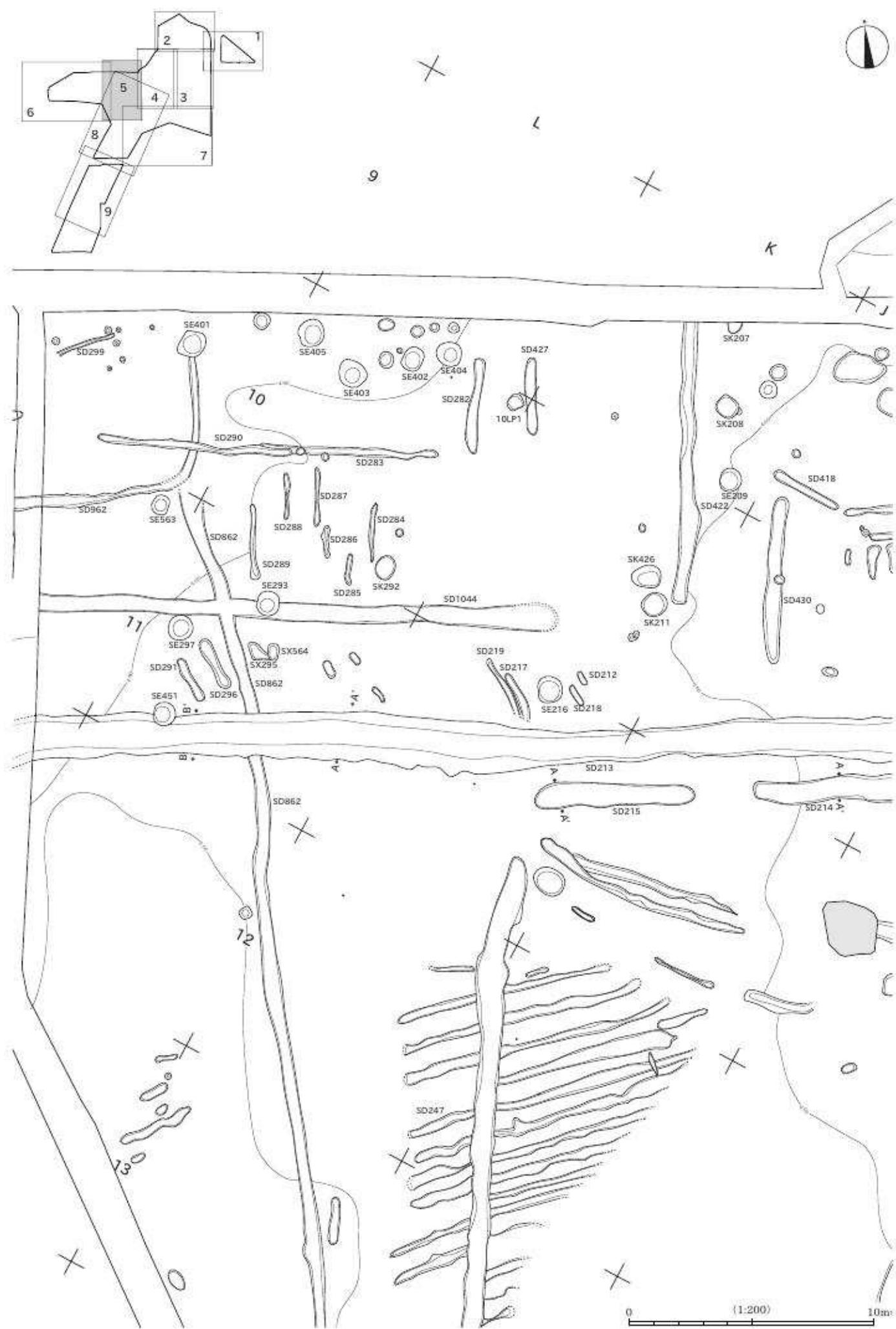
東原町遺跡 中層分割図 (3)

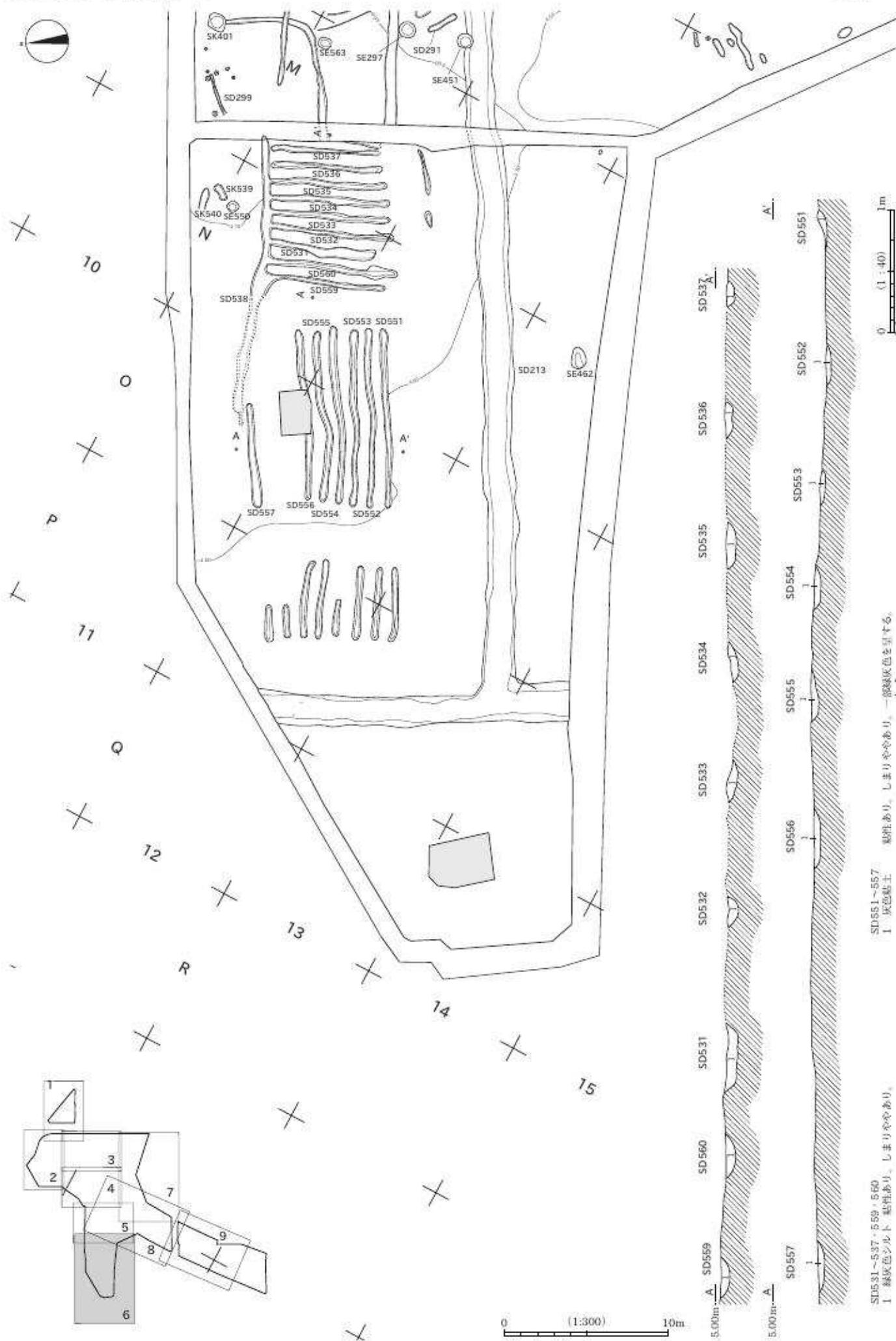
図版 10



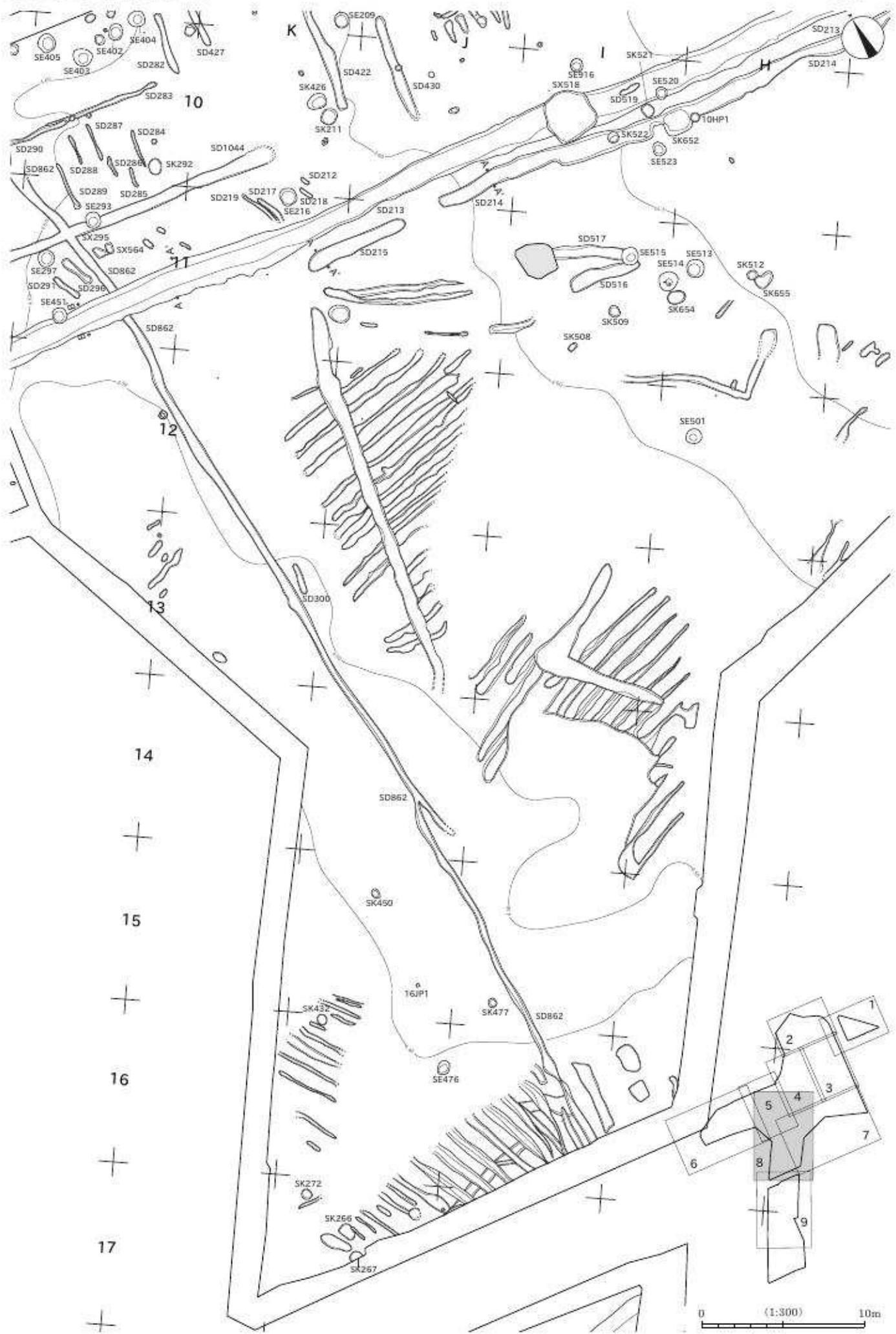


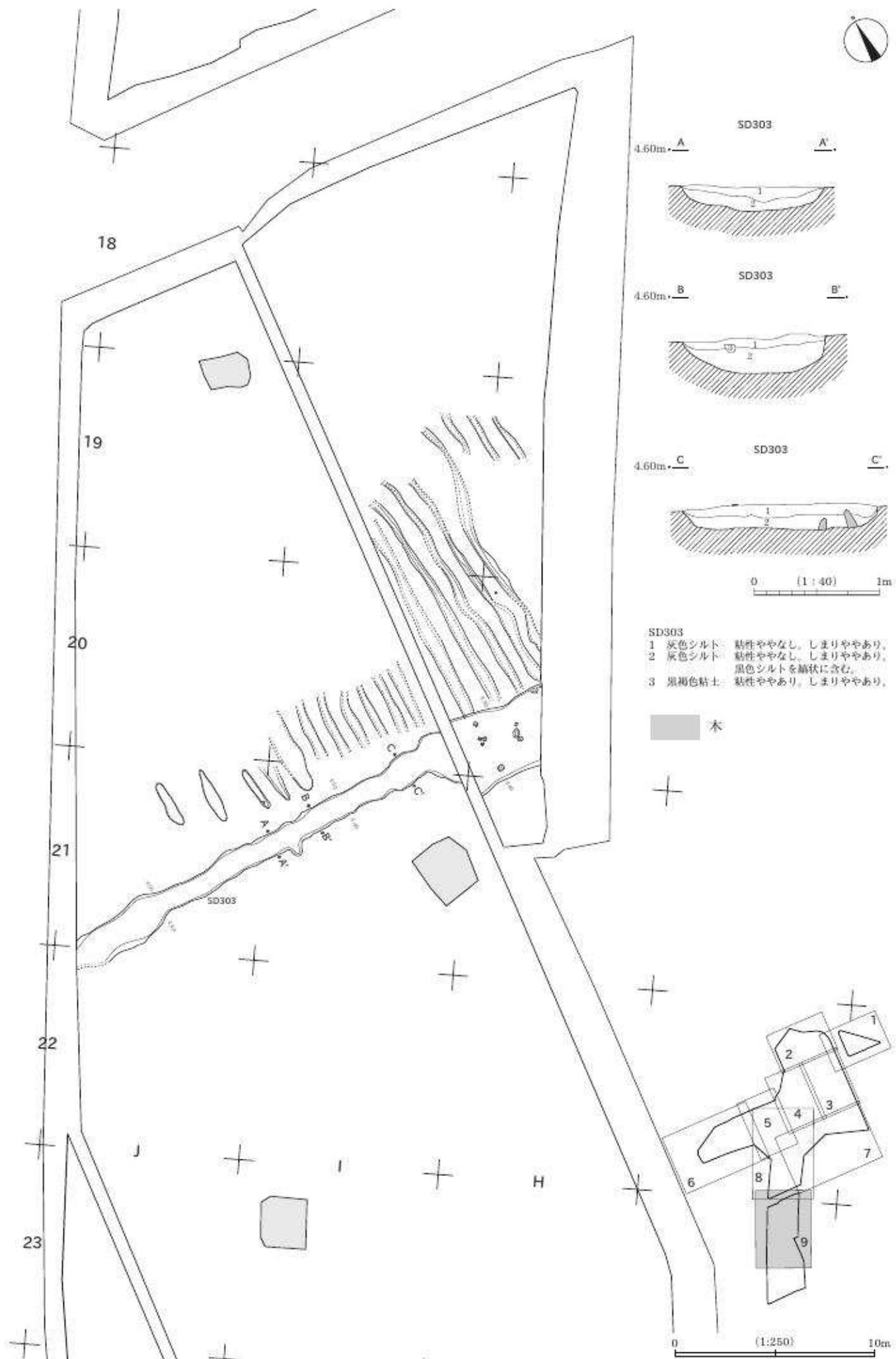






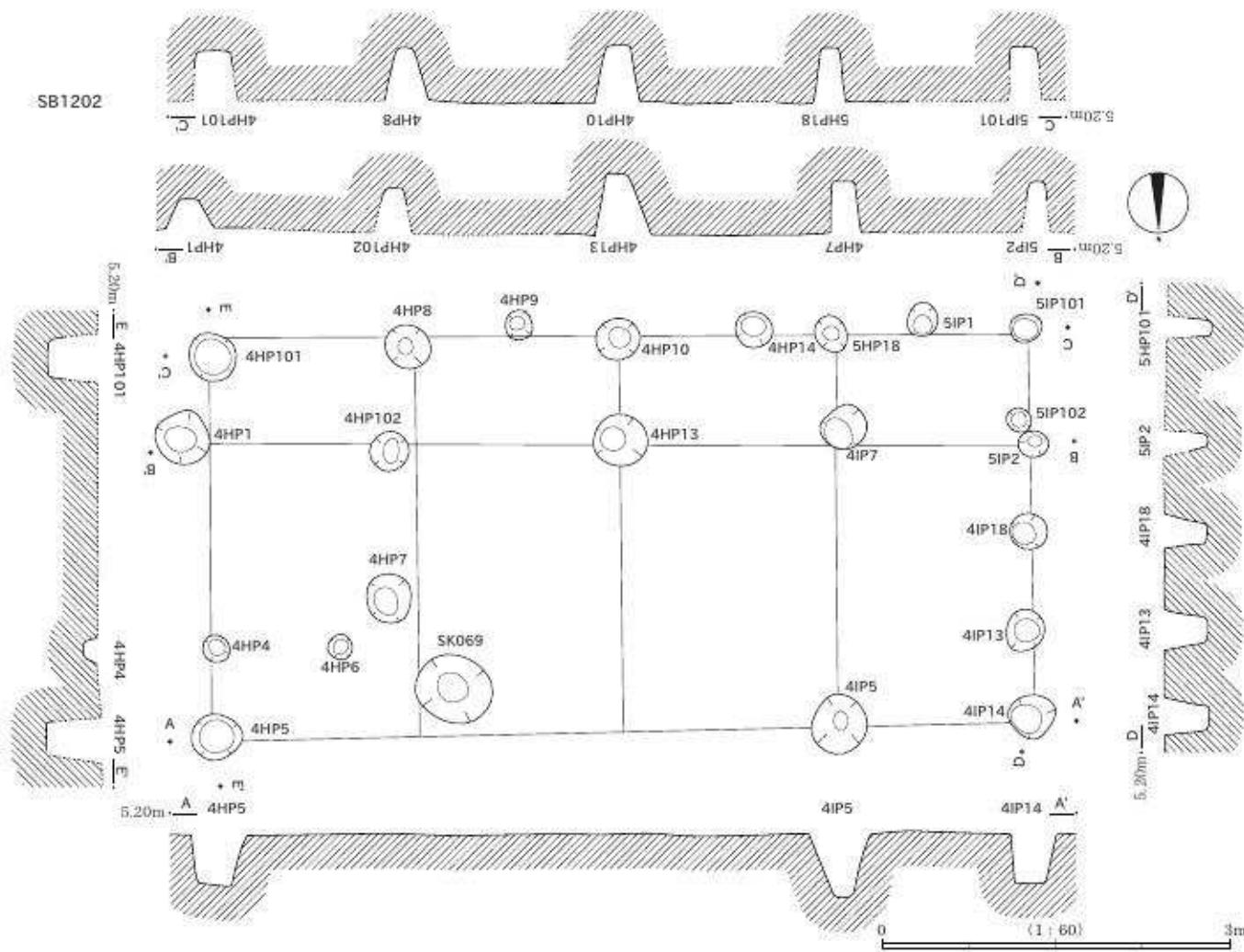
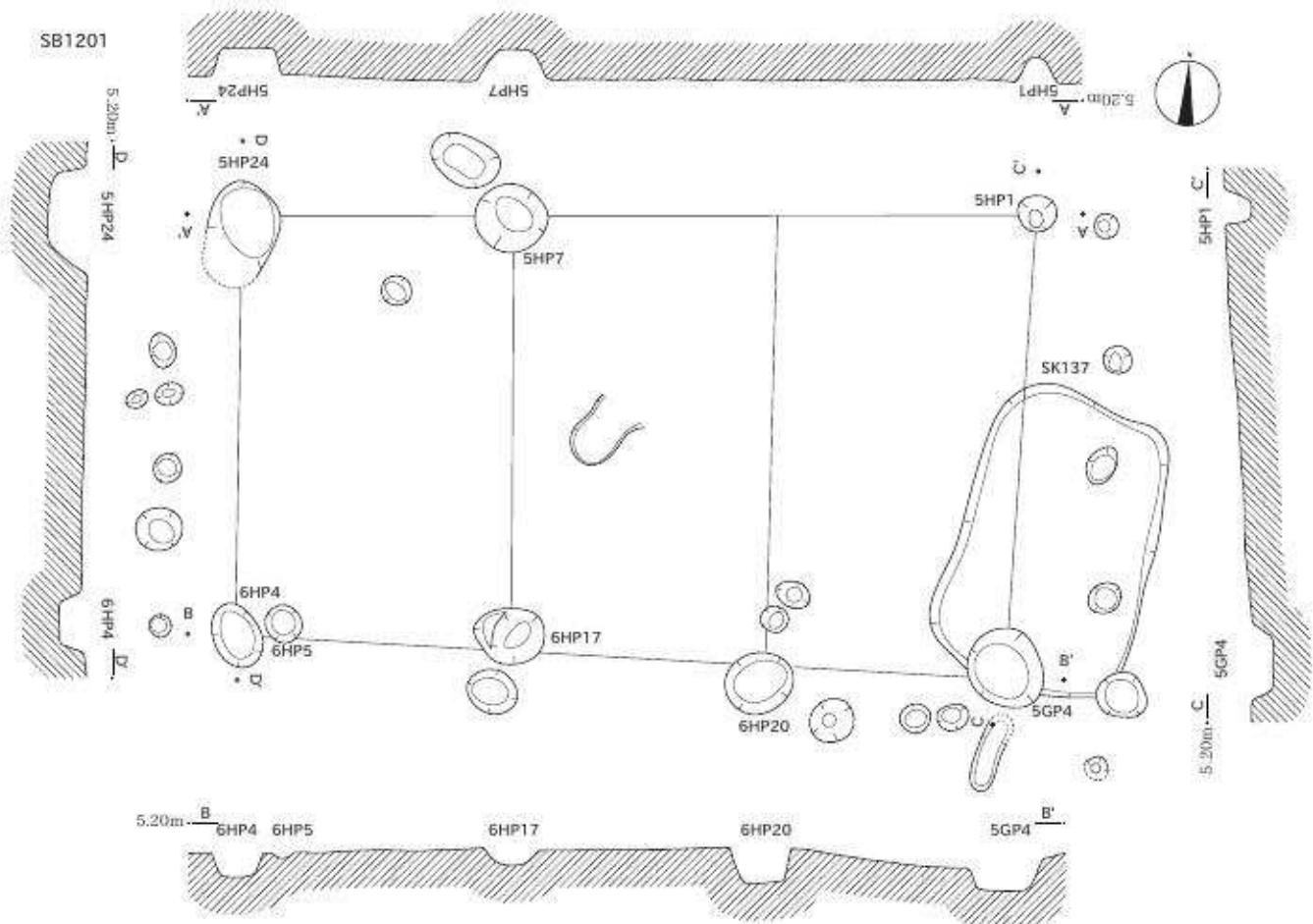


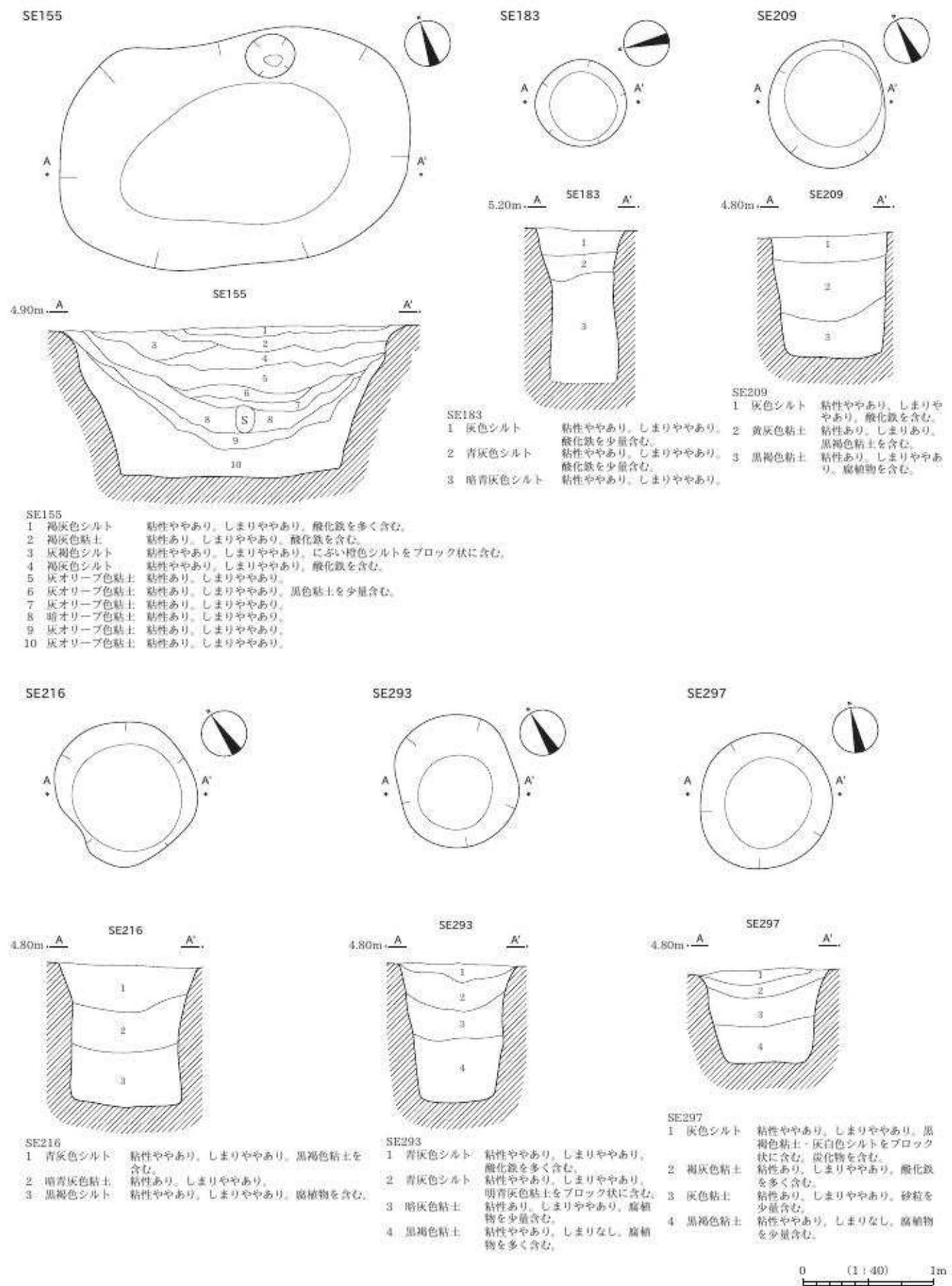


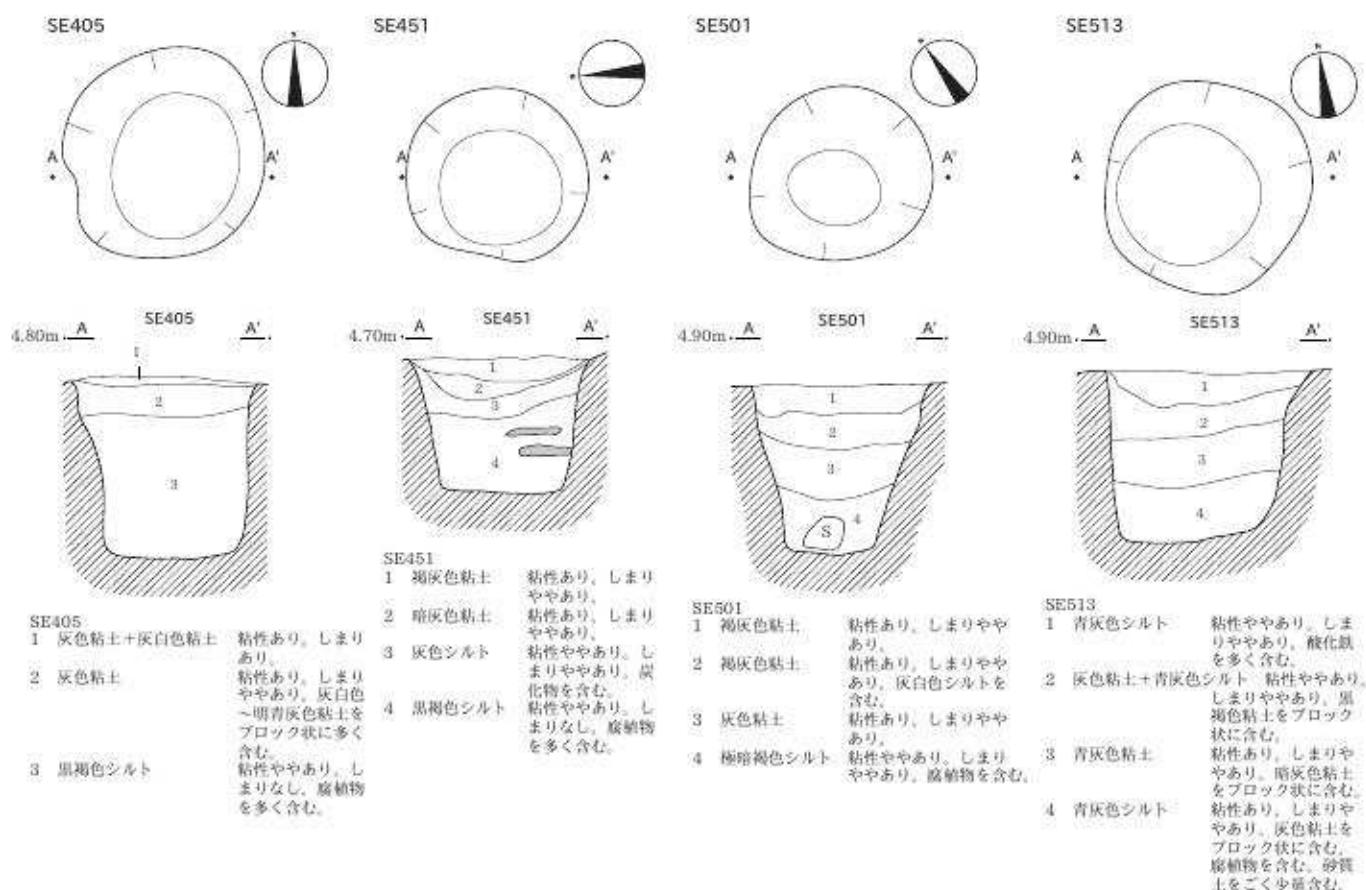
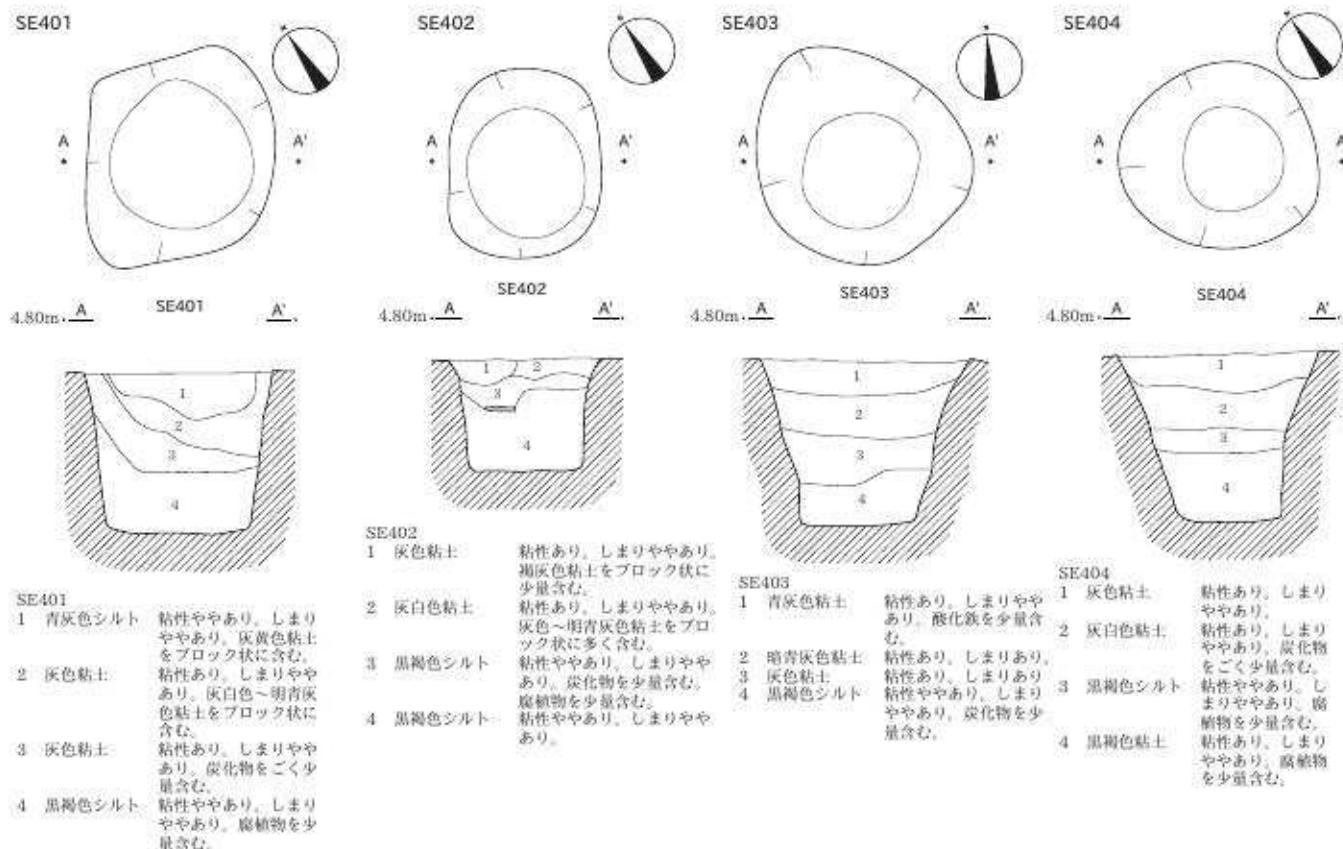


東原町遺跡 中層個別図 (2)

図版 18

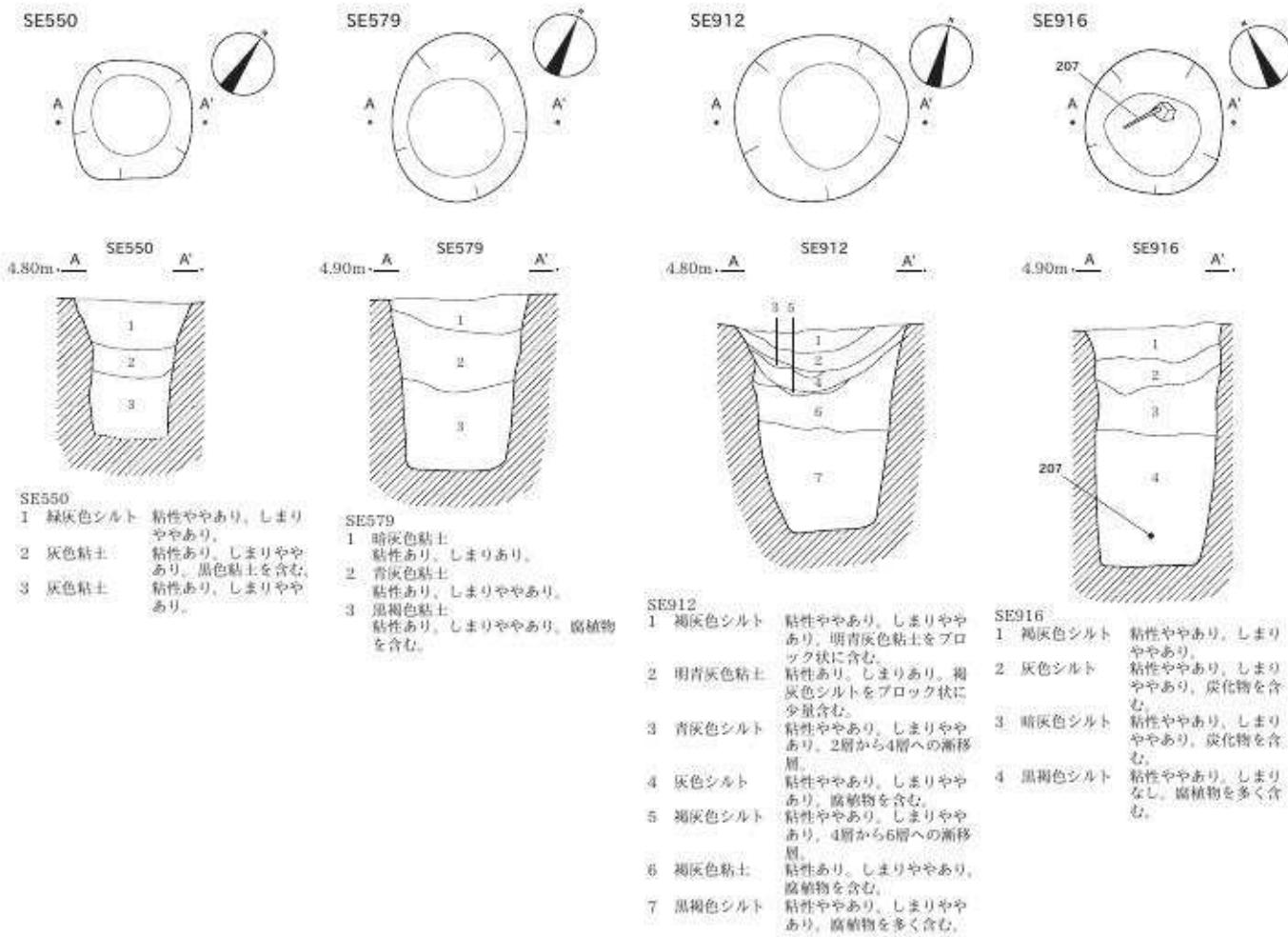
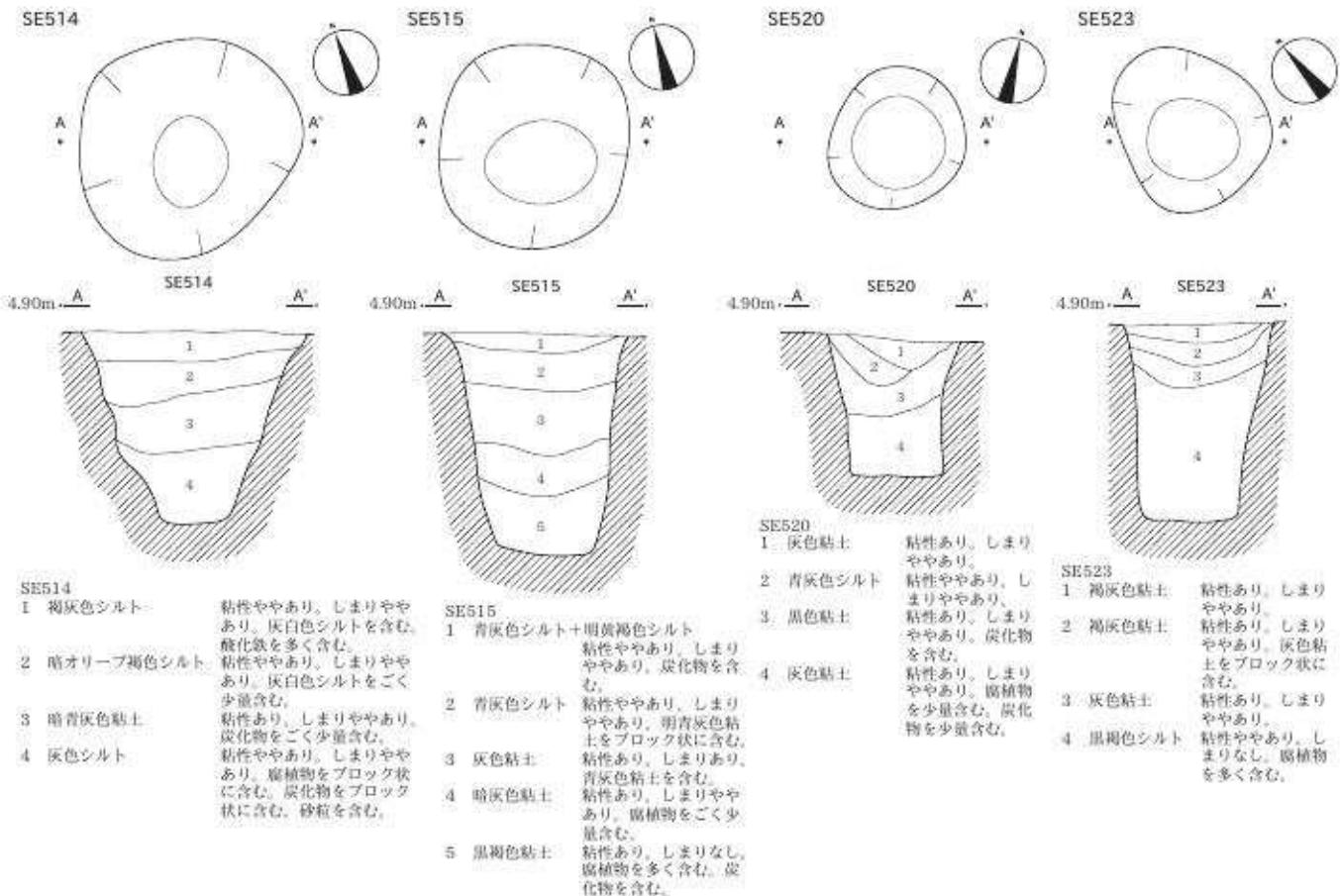


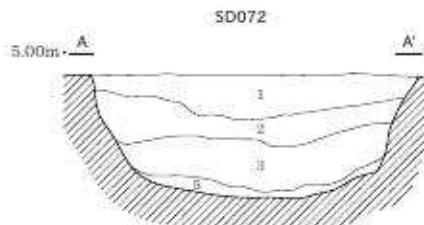




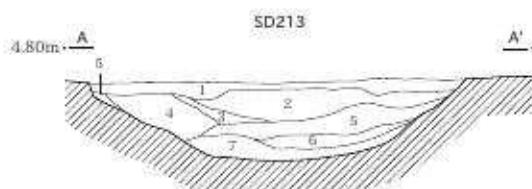
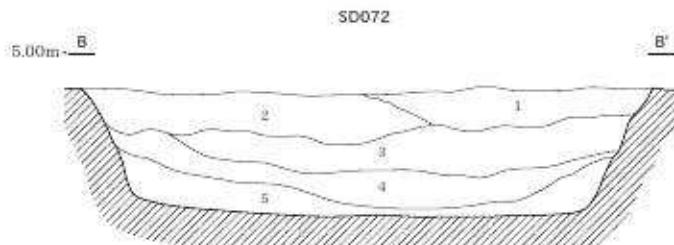
木

0 (1:40) 1m

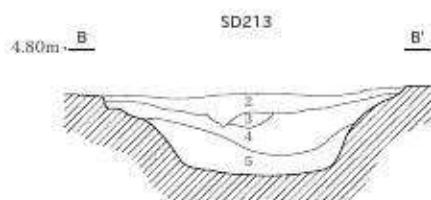




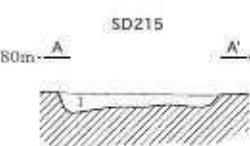
SD072
 1 褐灰色シルト 粘性ややあり。しまりややあり。酸化鉄を多く含む。炭化物をごく少量含む。
 2 灰白色シルト 粘性ややあり。しまりややあり。酸化鉄を多く含む。V層に類似する。
 3 褐灰色粘土 粘性ややあり。しまりややあり。酸化鉄をごく少量含む。
 4 青灰色シルト 粘性ややあり。しまりややあり。酸化鉄をごく少量含む。
 5 褐灰色粘土 粘性ややあり。しまりややあり。炭化物を含む。



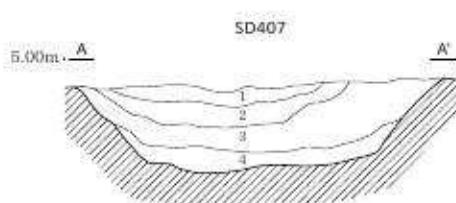
SD213
 1 灰色シルト 粘性ややあり。しまりややあり。砂粒を含む。
 2 青灰色砂質土 粘性なし。しまりややあり。
 3 暗青灰色シルト 粘性ややあり。しまりややあり。砂粒を含む。
 4 暗青灰色砂質土 粘性なし。しまりややあり。砂粒を含む。
 5 暗青灰色砂質土 粘性なし。しまりなし。
 6 青黒色砂質土 粘性ややあり。しまりなし。青灰色砂・青灰色シルトを含む。
 7 明青灰色粘土 粘性あり。しまりややあり。



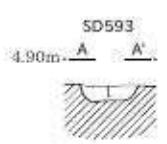
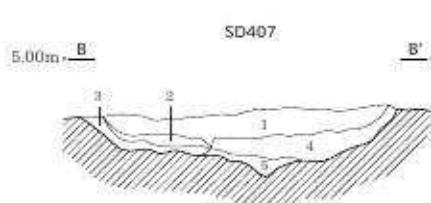
SD214
 1 灰黄褐色粘土 粘性あり。しまりややあり。



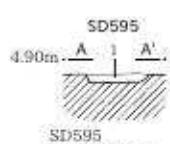
SD215
 1 黒褐色粘土 粘性あり。しまりややあり。



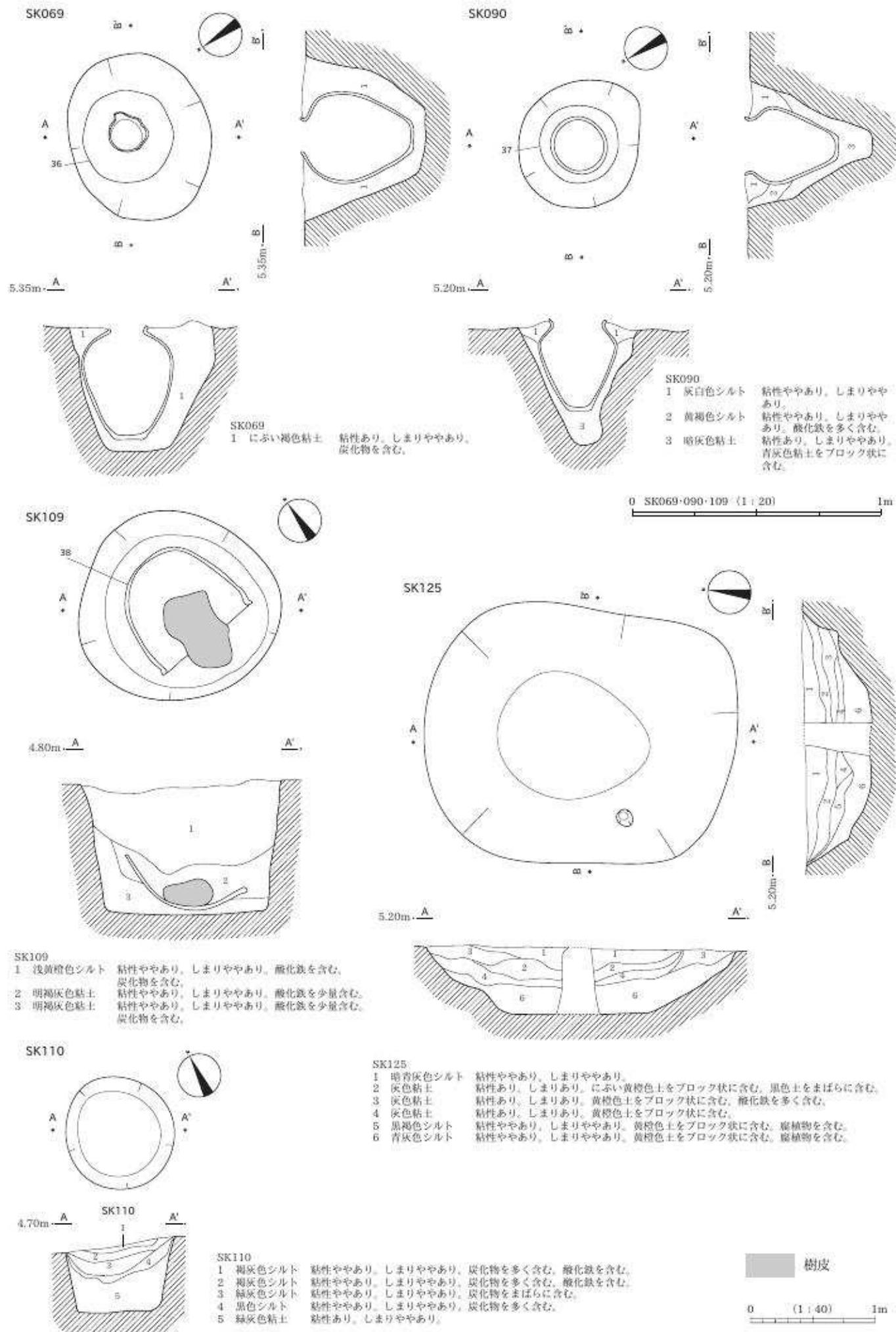
SD407
 1 青灰色砂質土 粘性ややあり。しまりややあり。にぶい橙色シルトをブロック状に含む。下位の一部に黄褐色砂質土を含む。
 2 青灰色シルト 粘性ややあり。しまりややあり。灰黄色粘土をブロック状に含む。
 3 青灰色シルト 粘性ややあり。しまりややあり。黄色砂質土をブロック状に含む。
 4 褐灰色粘土 粘性あり。しまりややあり。
 5 青灰色シルト 粘性ややあり。しまりややあり。黒褐色粘土をブロック状に含む。

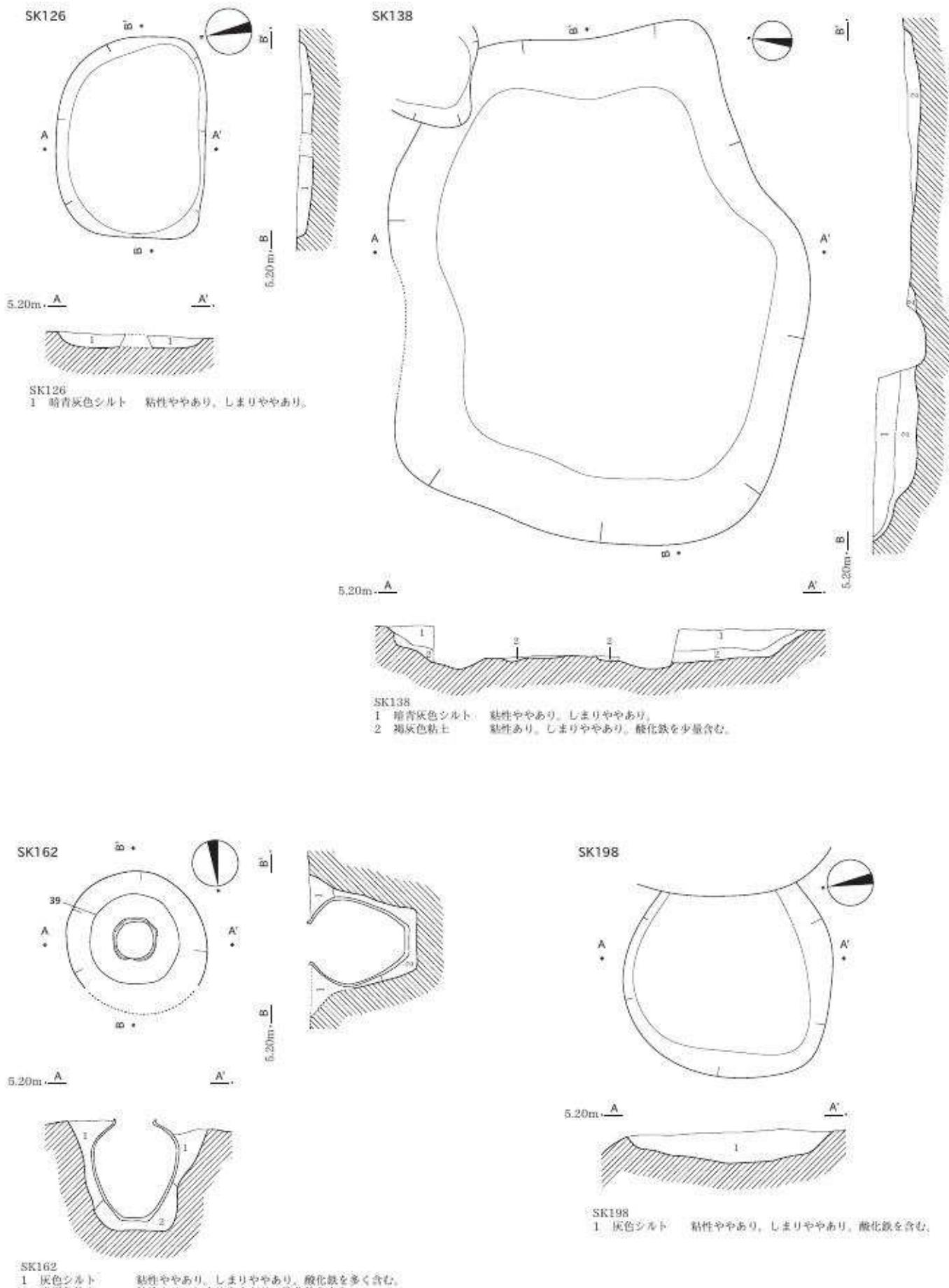


SD593
 1 オリーブ灰色シルト 粘性あり。しまりややあり。酸化鉄をまばらに含む。炭化物をごく少量含む。



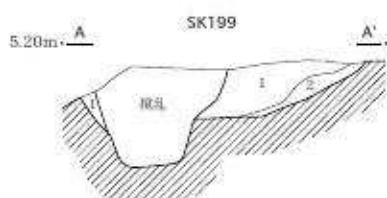
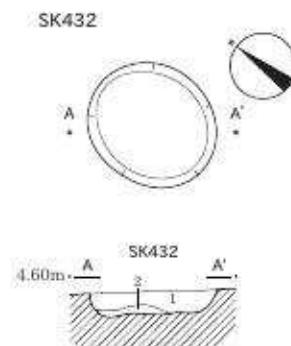
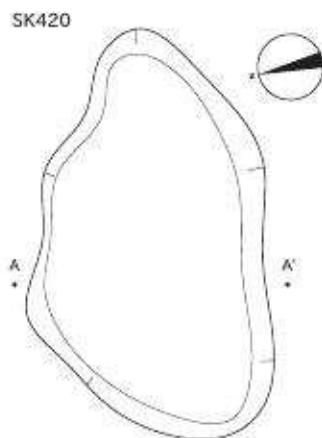
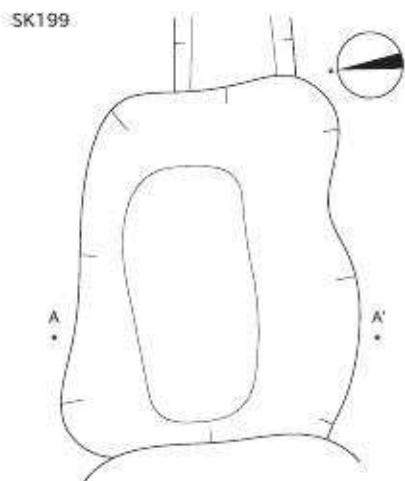
SD595
 1 黄褐色粘土 粘性あり。しまりあり。





0 SK162 (1 : 20) 1m

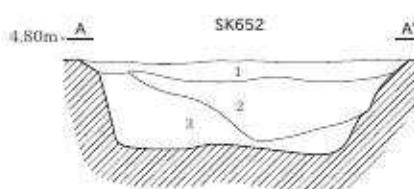
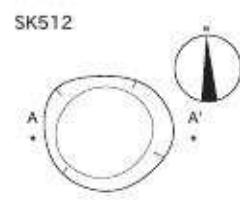
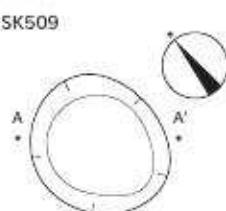
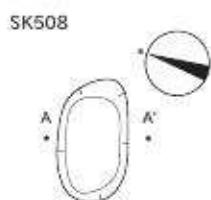
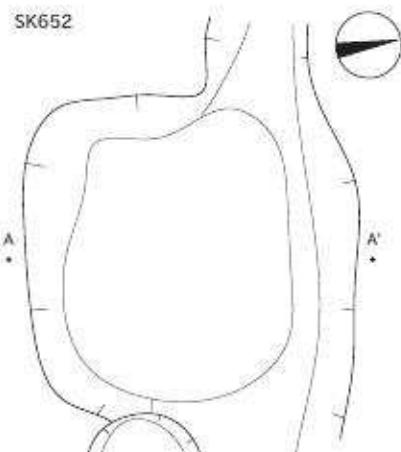
0 (1 : 40) 1m



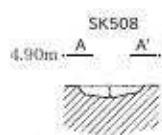
SK199
1 灰色シルト 粘性ややあり。しまりややあり。
黒褐色土をまばらに含む。酸化鉄を含む。
2 灰色シルト 粘性ややあり。しまりあり。黒褐色土をまばらに含む。酸化鉄を含む。



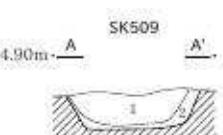
SK420
1 喷青灰色粘土 粘性あり。しまりややあり。
灰色粘土をブロック状に含む。
2 黒灰色粘土 粘性あり。しまりややあり。
明青灰色粘土をブロック状に含む。



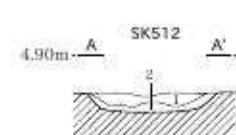
SK652
1 灰黄褐色シルト 粘性あり。しまりややあり。
2 黑灰色シルト 粘性ややあり。しまりややあり。
3 喷褐色粘土 粘性あり。しまりややあり。



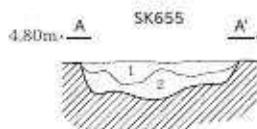
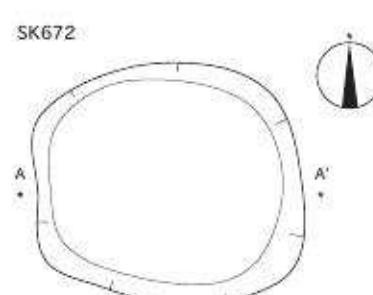
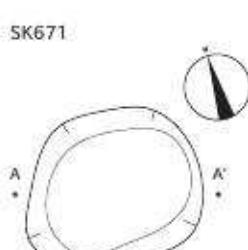
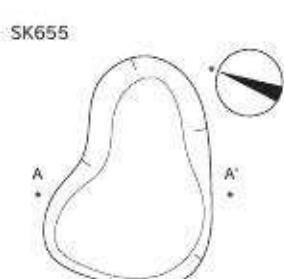
SK508
1 灰色粘土 粘性あり。しまりややあり。



SK509
1 灰色粘土 粘性あり。しまりややあり。
灰白色シルト、
灰黃褐色粘土をブロック状に含む。
2 喷褐色粘土 粘性あり。しまりあり。



SK512
1 灰色粘土 粘性あり。しまりあり。
2 黑灰色粘土 粘性ややあり。しまりややあり。



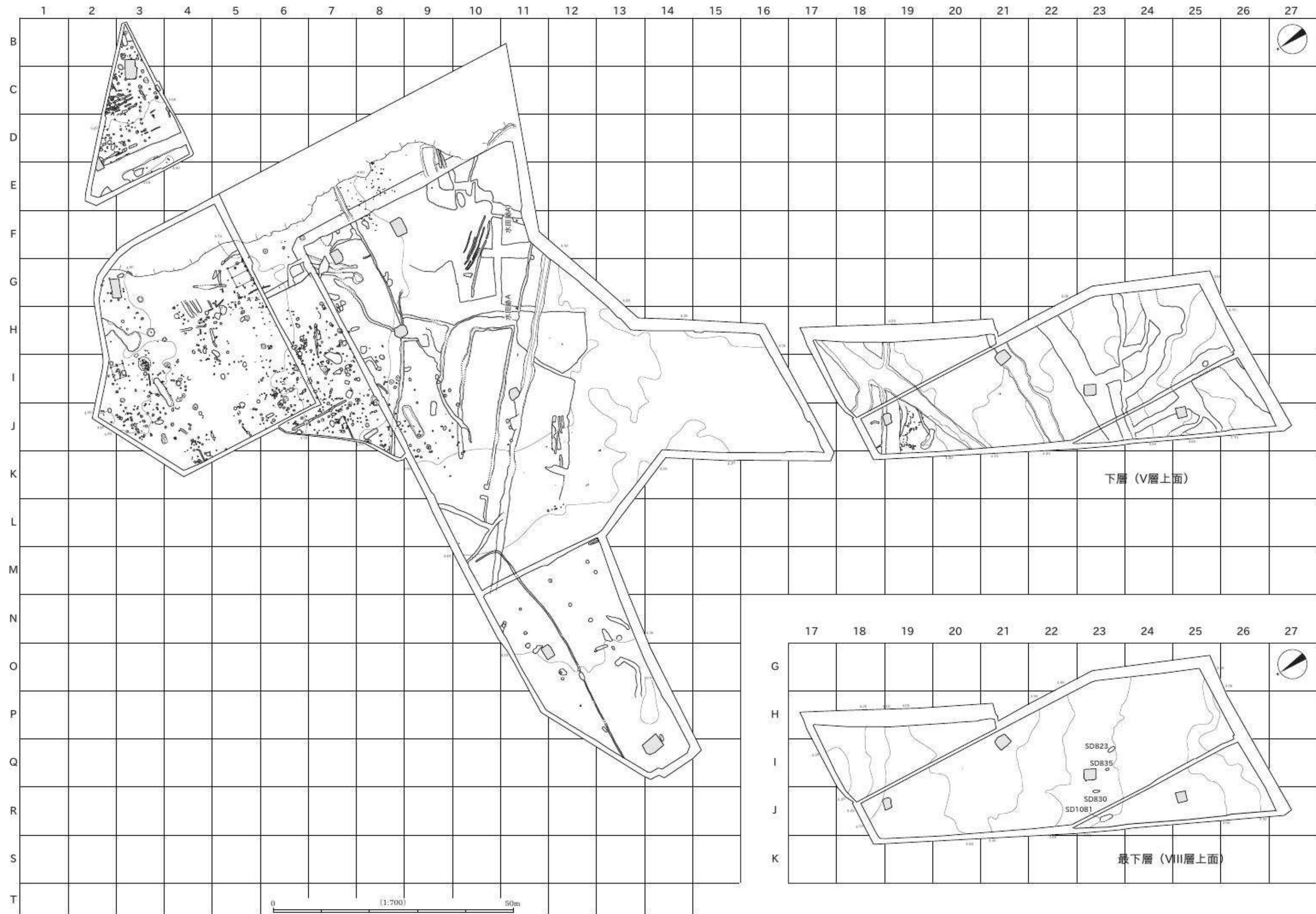
SK655
1 黑灰色シルト 粘性ややあり。しまりややあり。
2 灰色粘土 粘性あり。しまりややあり。

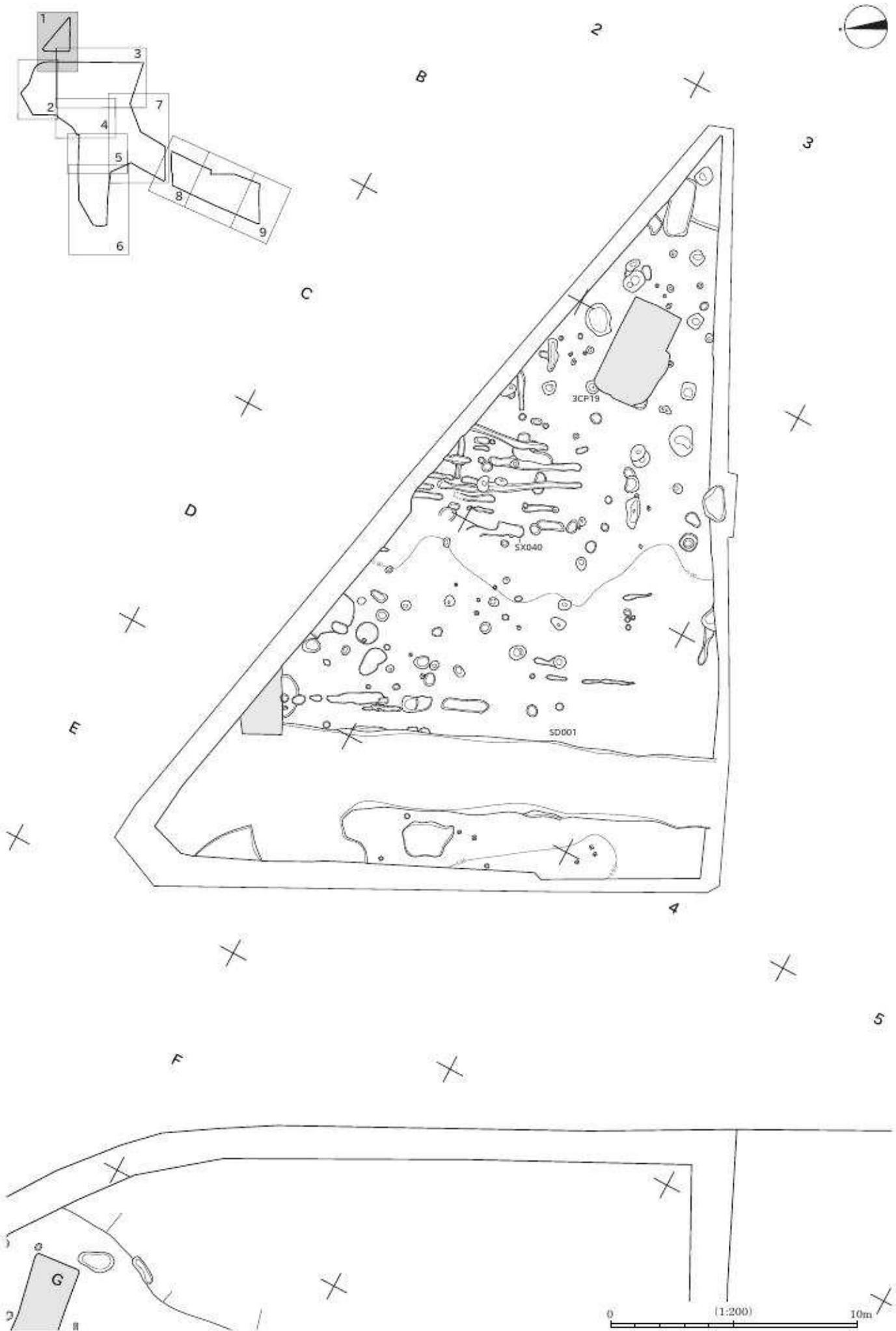


SK671
1 灰色粘土 粘性あり。しまりややあり。



SK672
1 灰色粘土 粘性あり。しまりややあり。

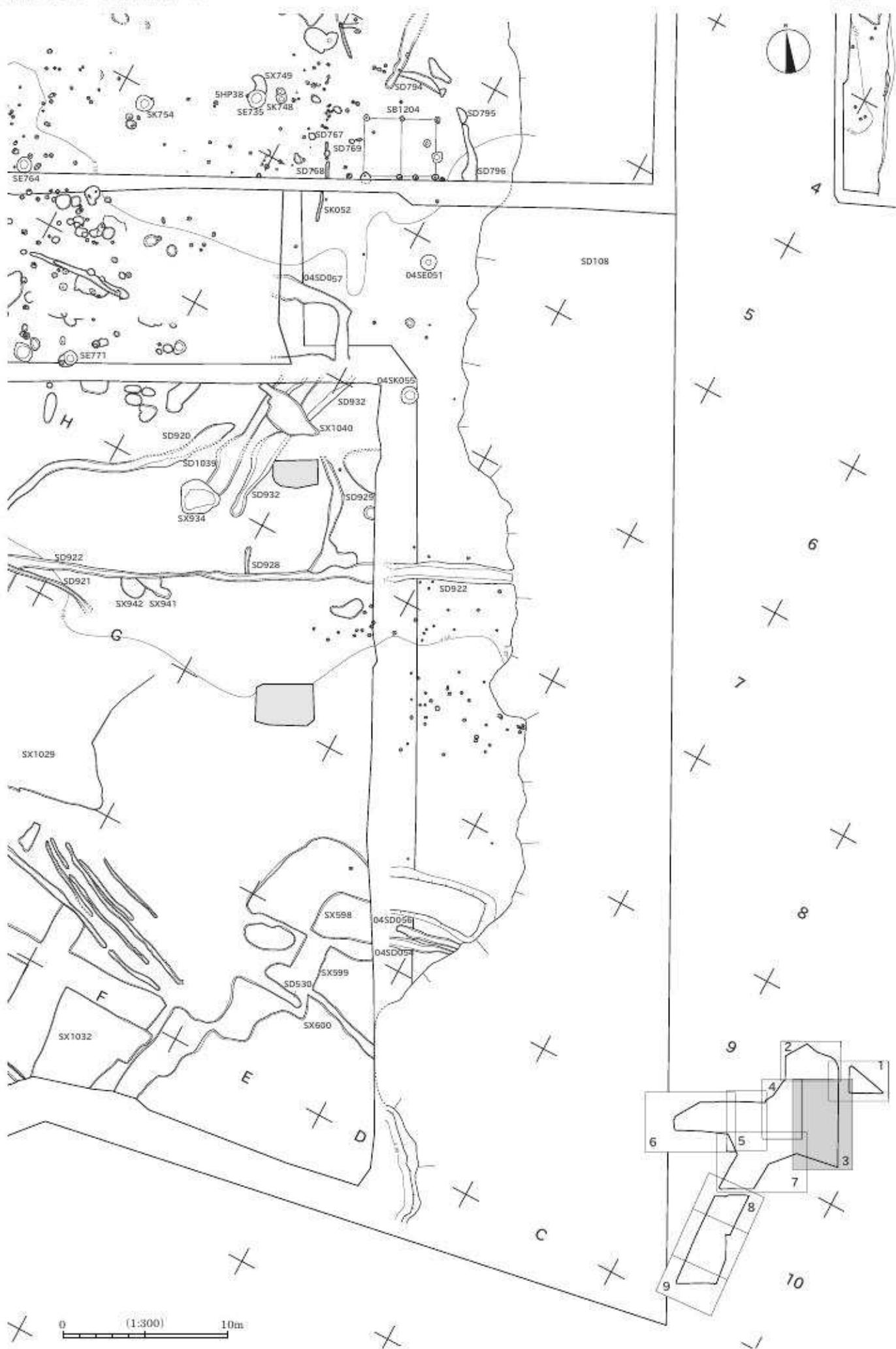




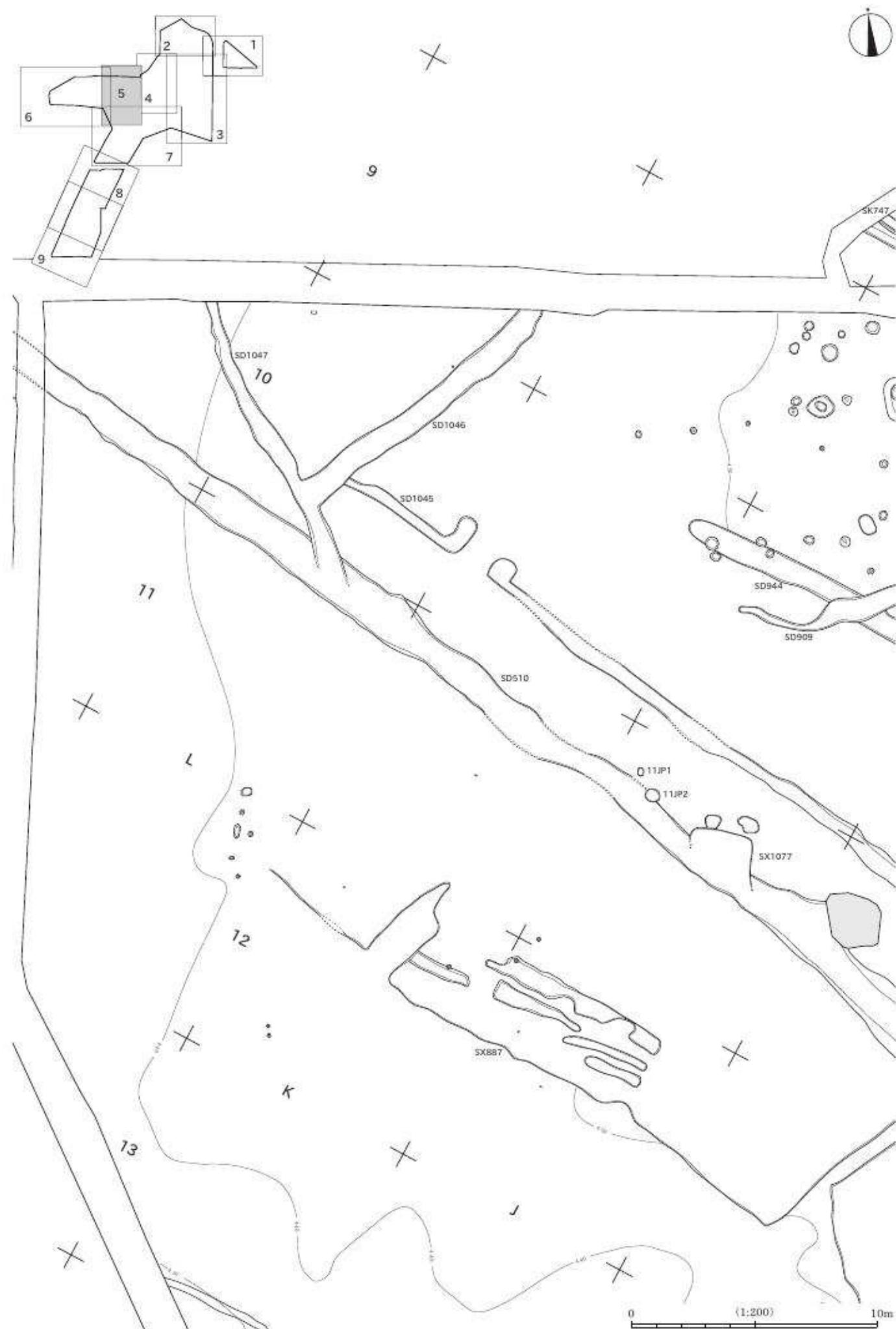


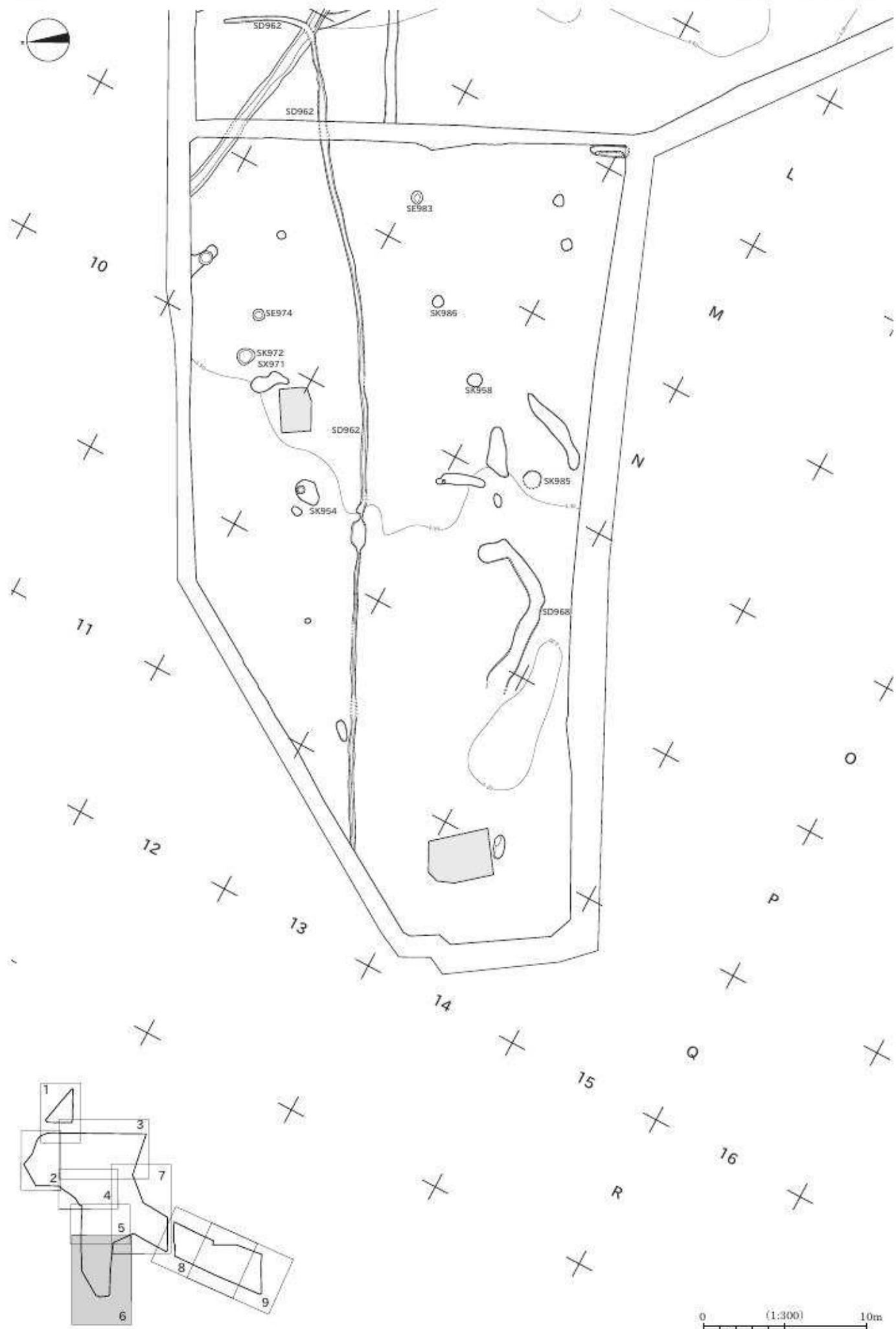
東原町遺跡 下層分割図 (3)

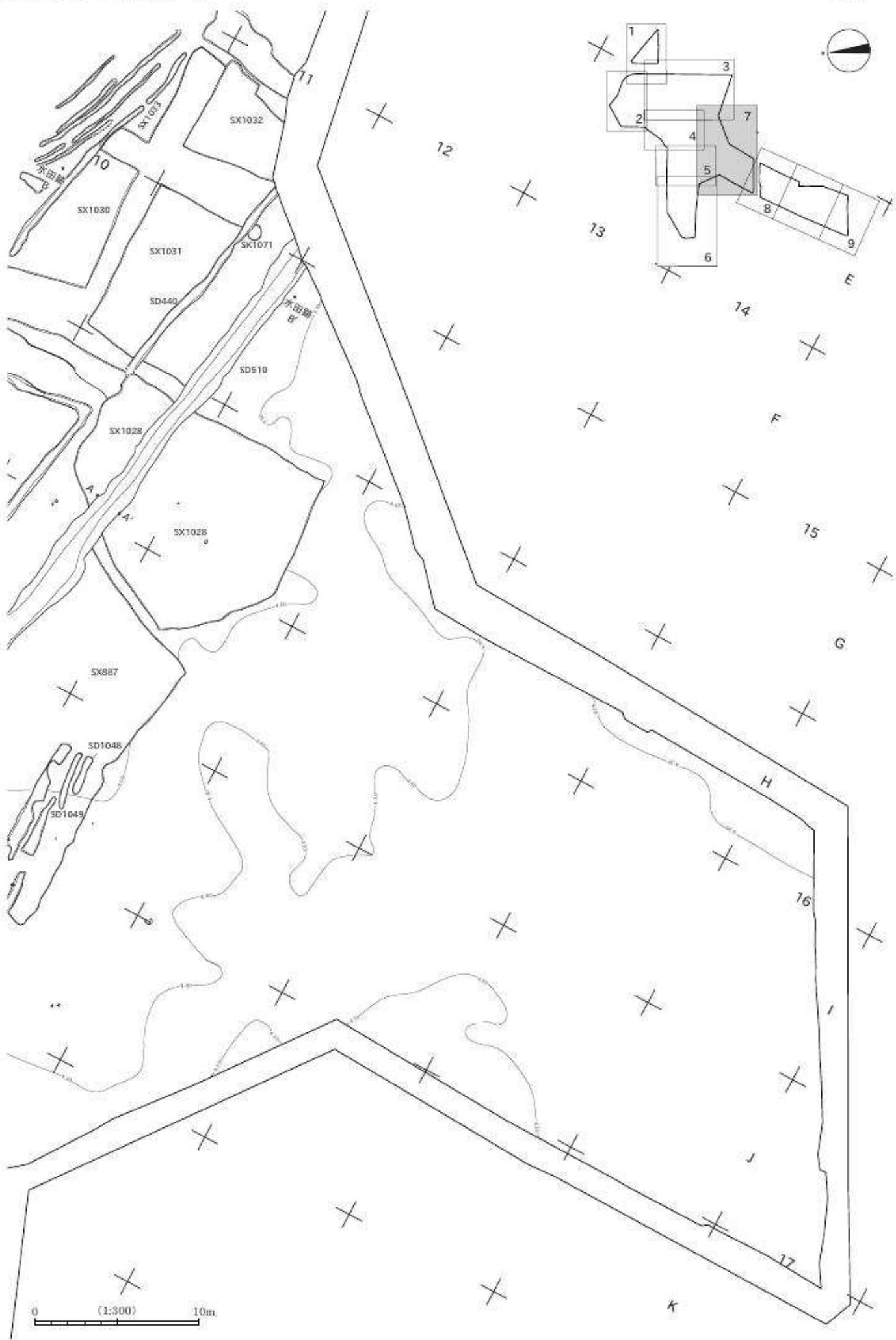
図版 29

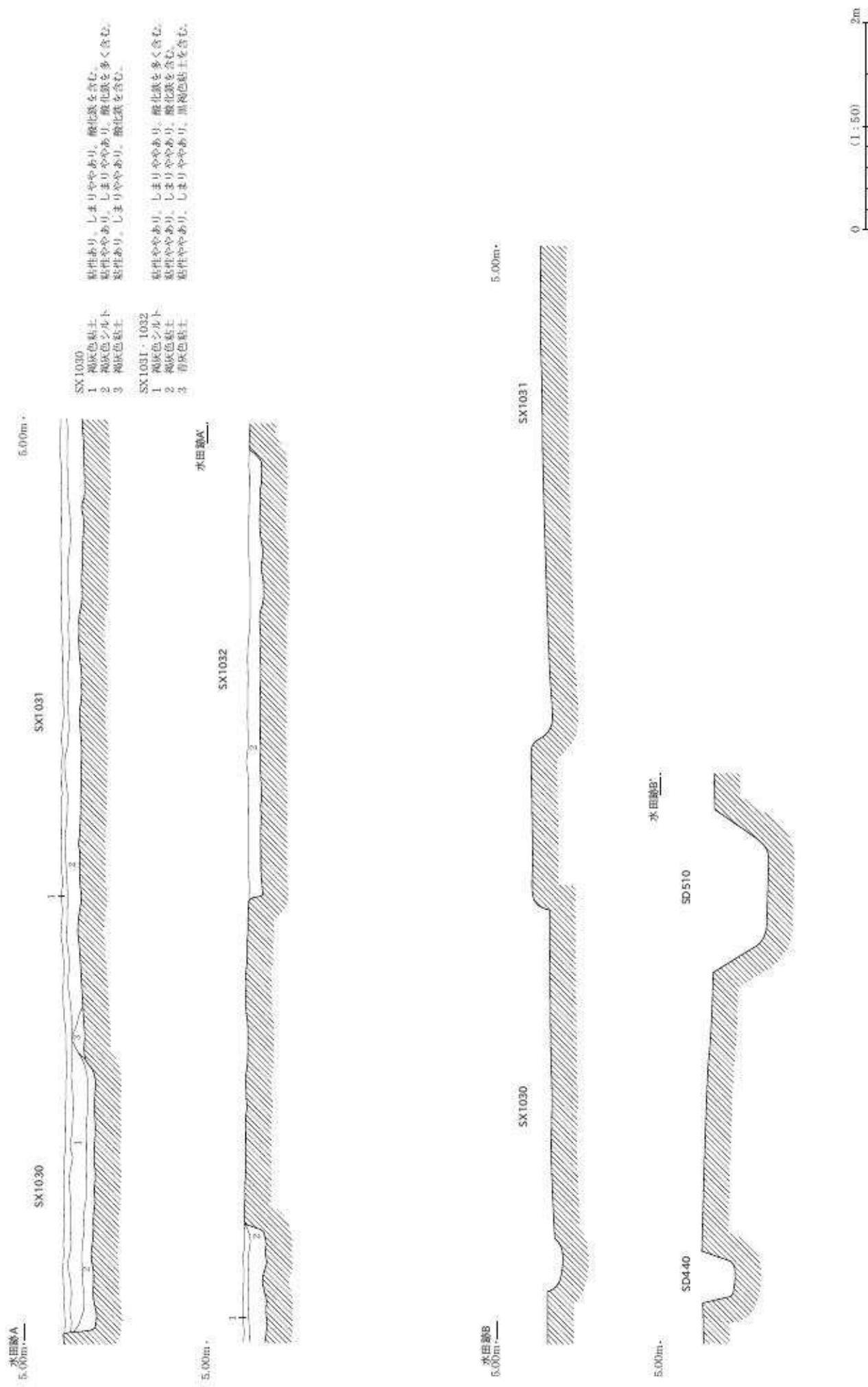


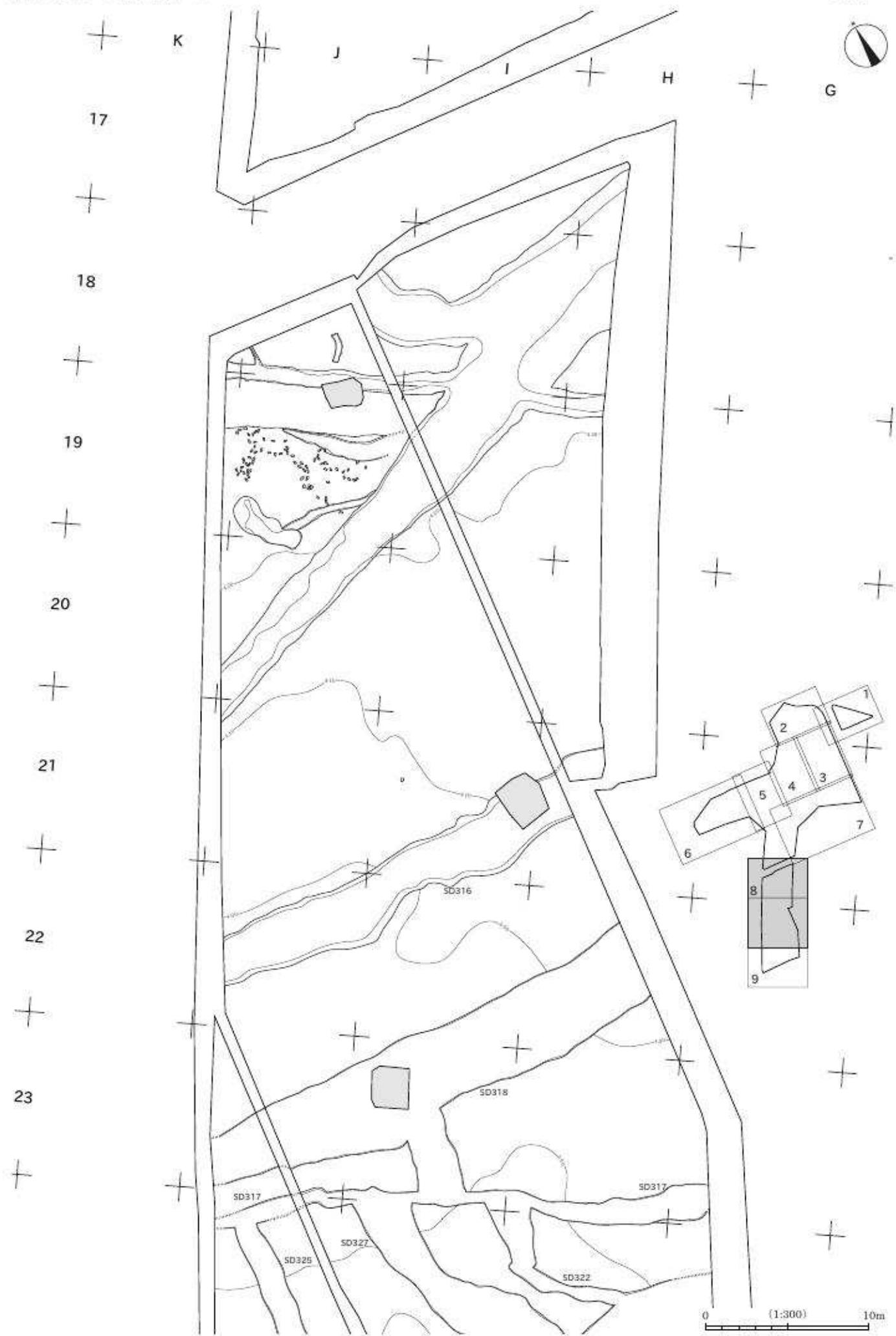


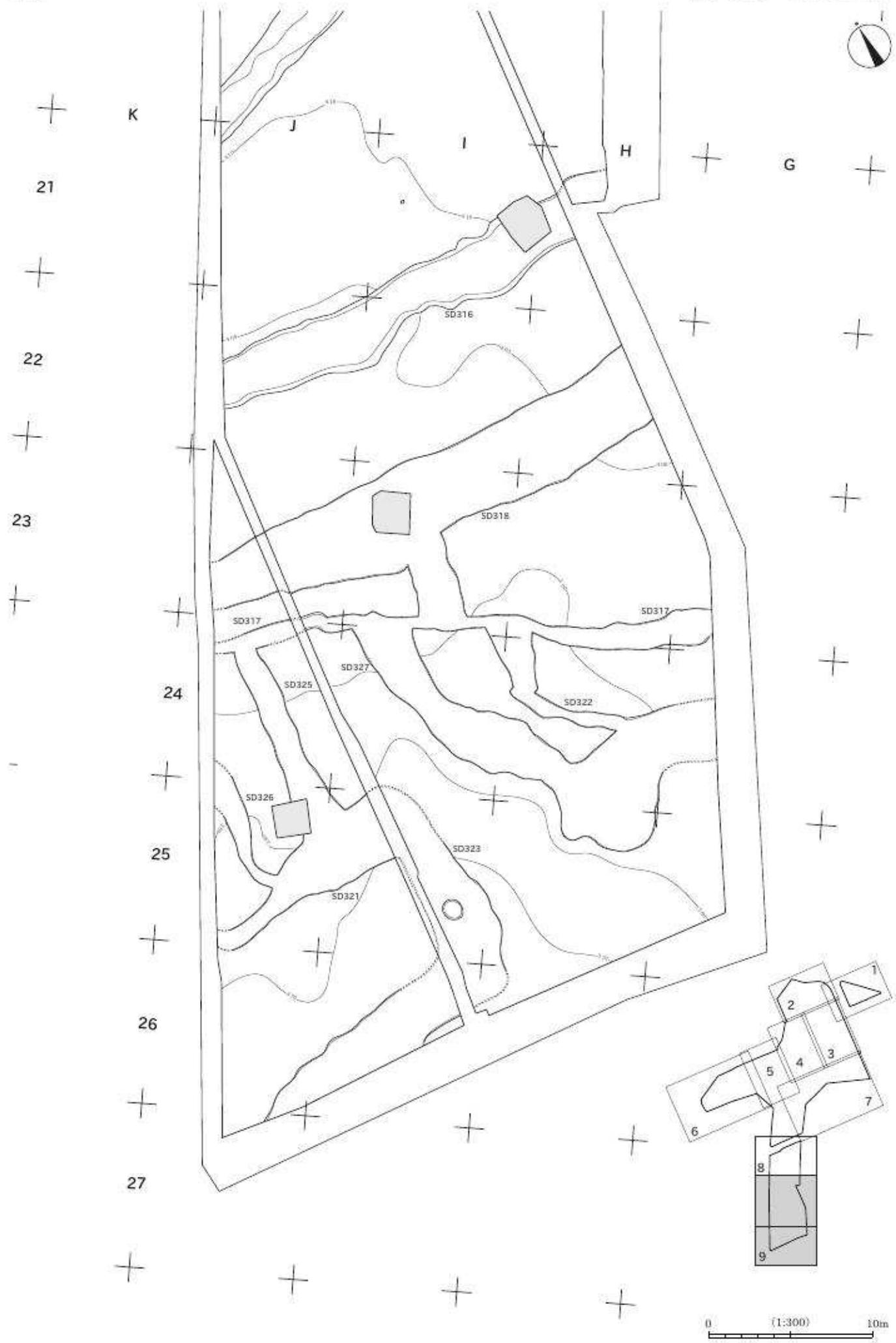




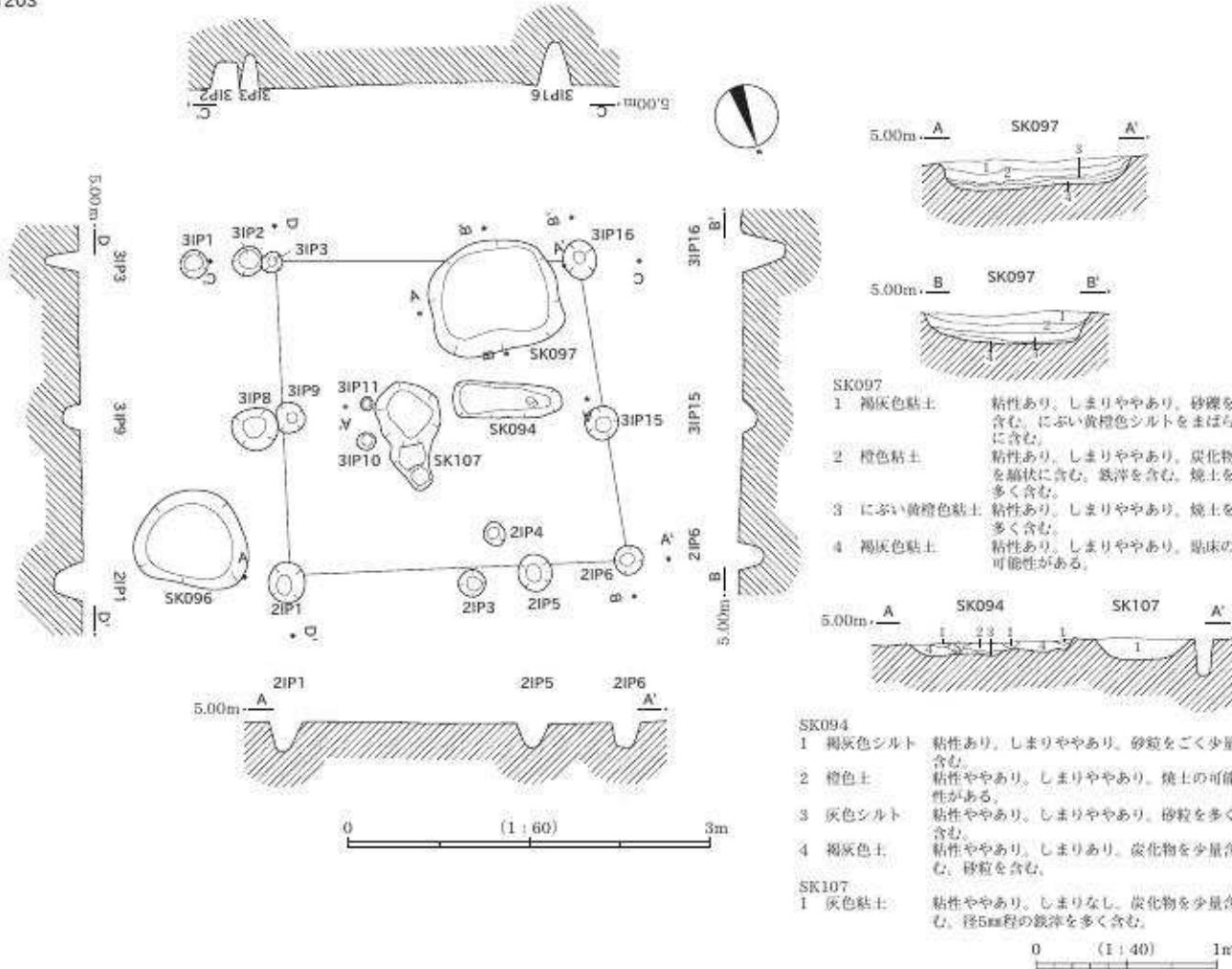




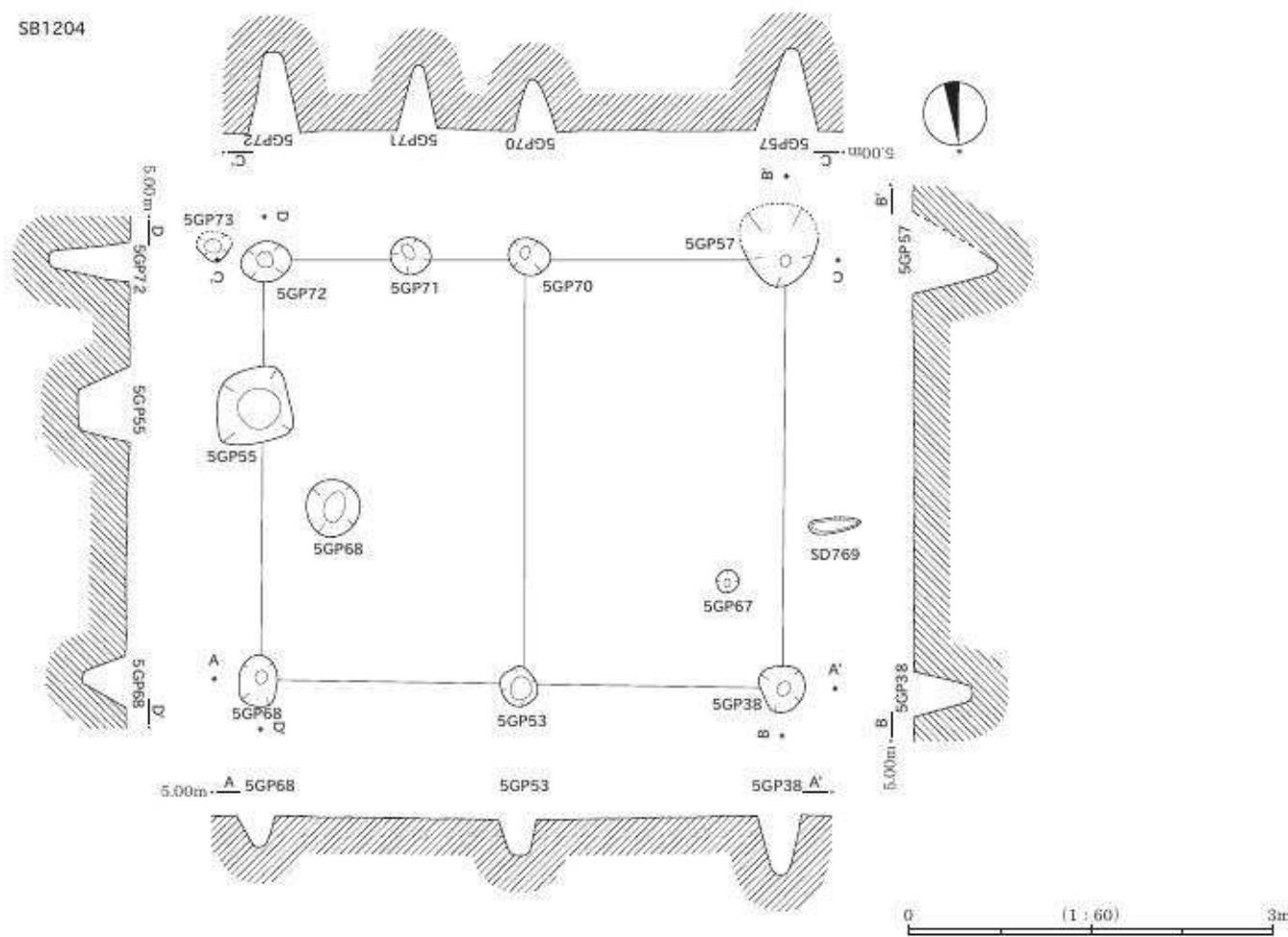




SB1203

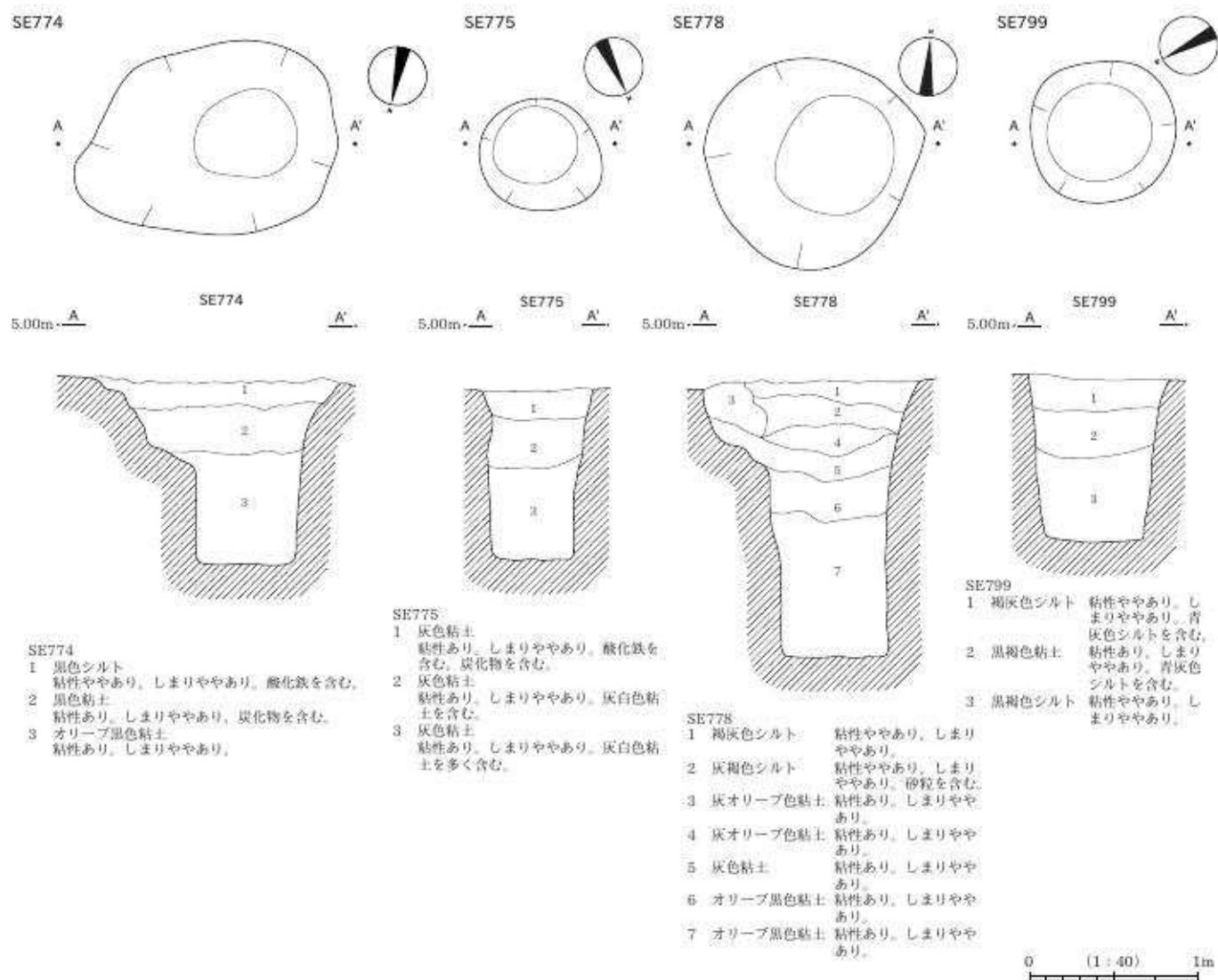
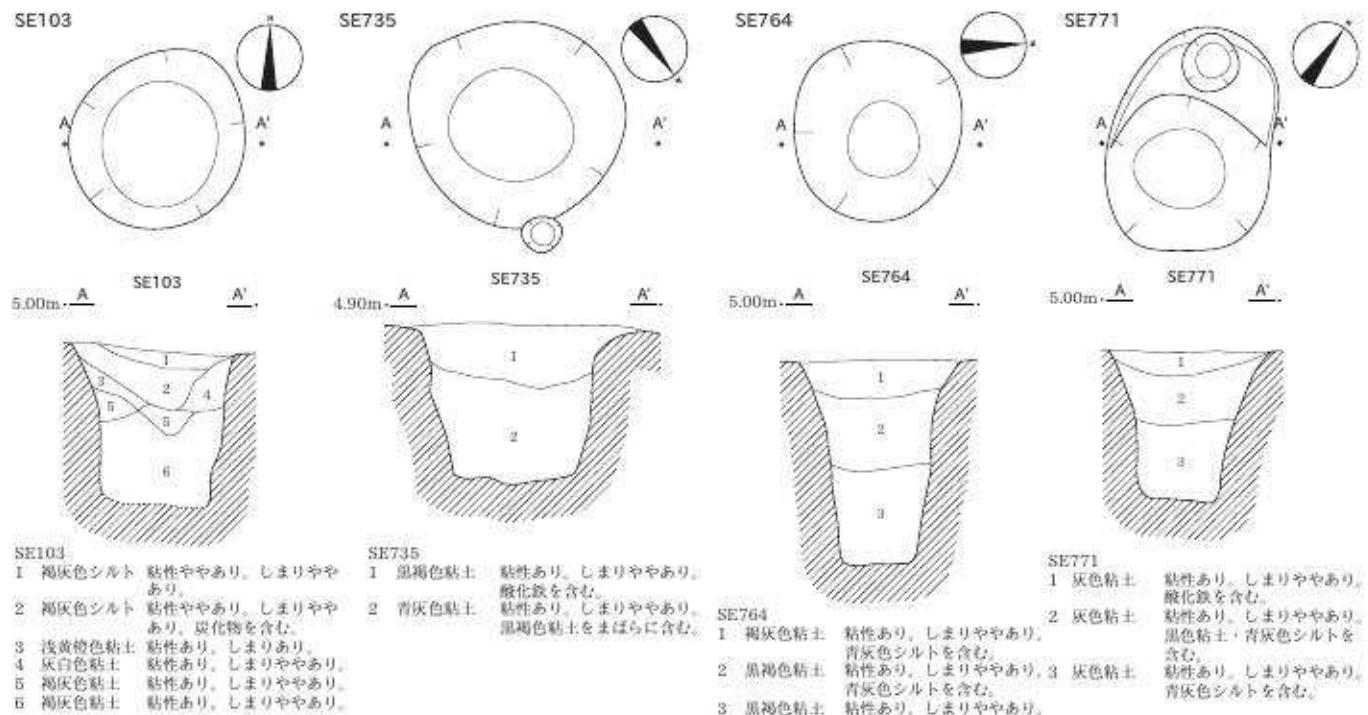


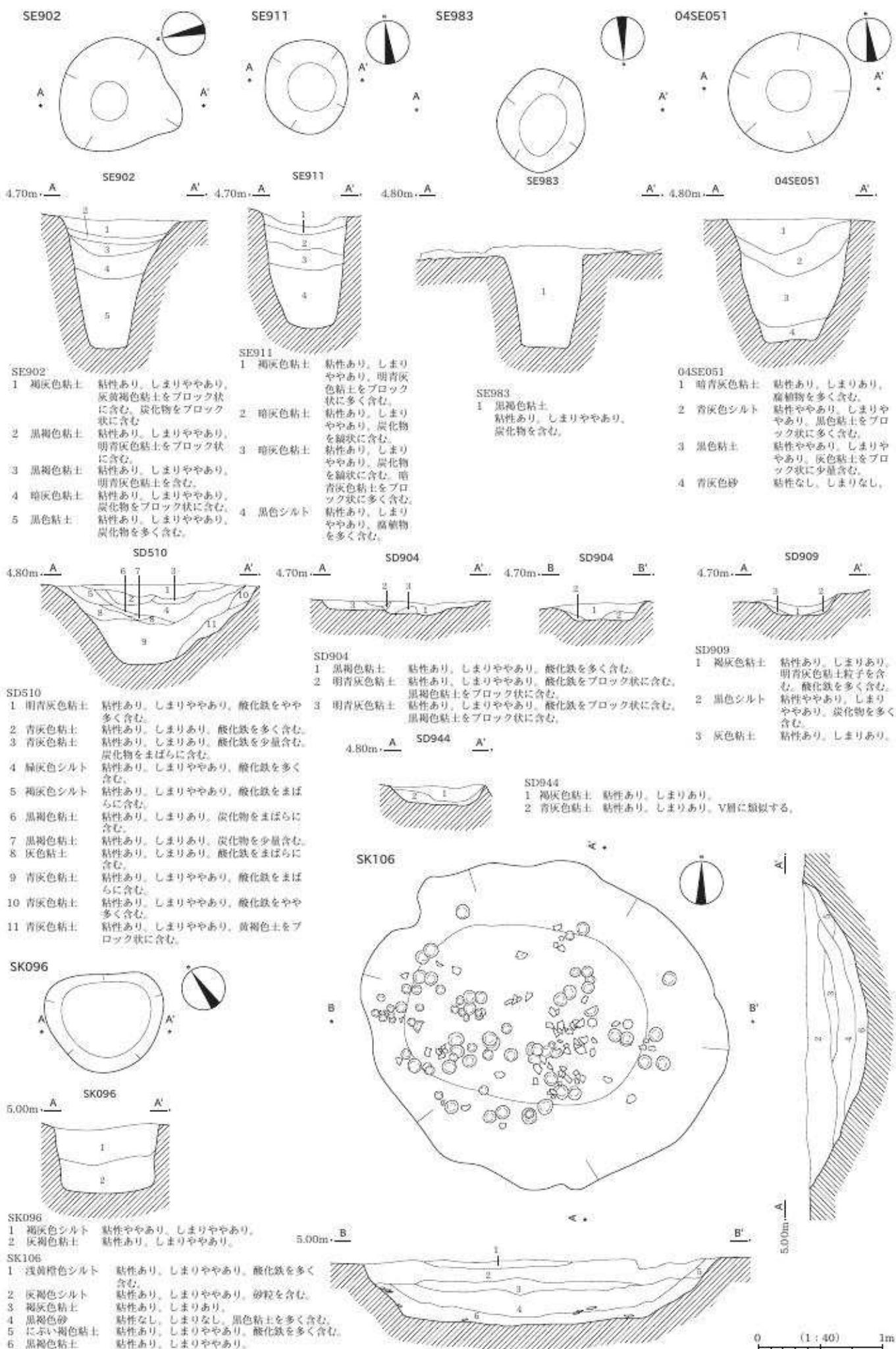
SB1204

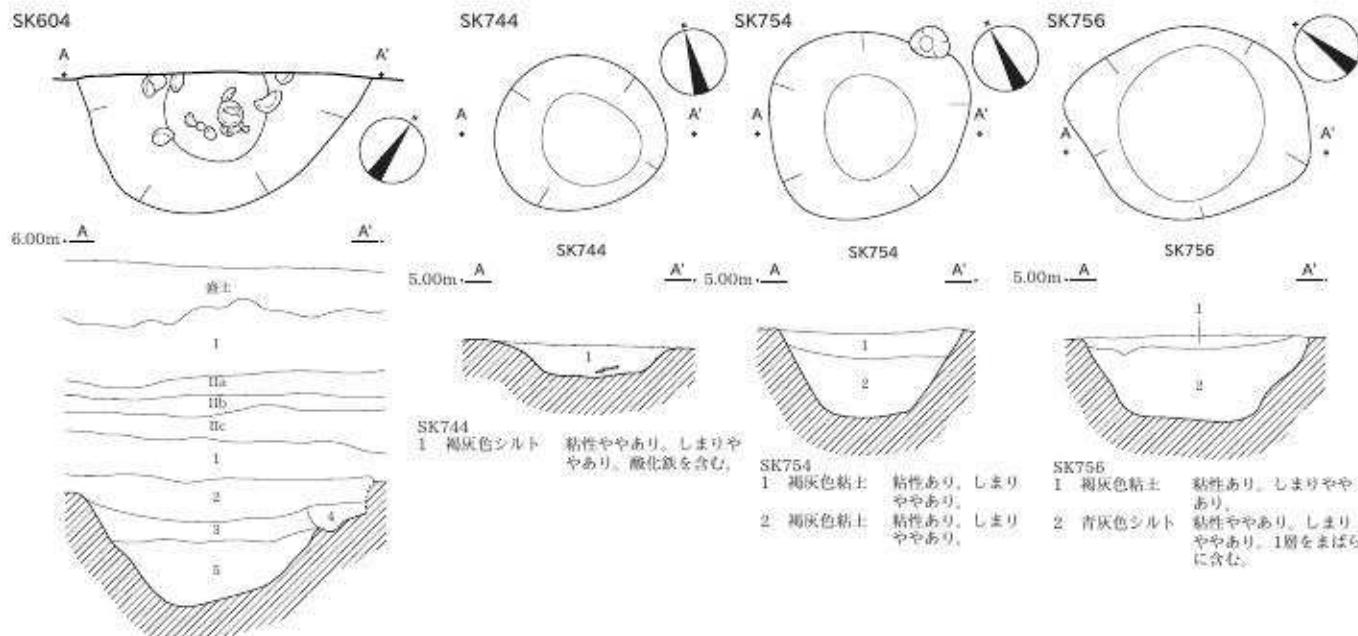


図版 38

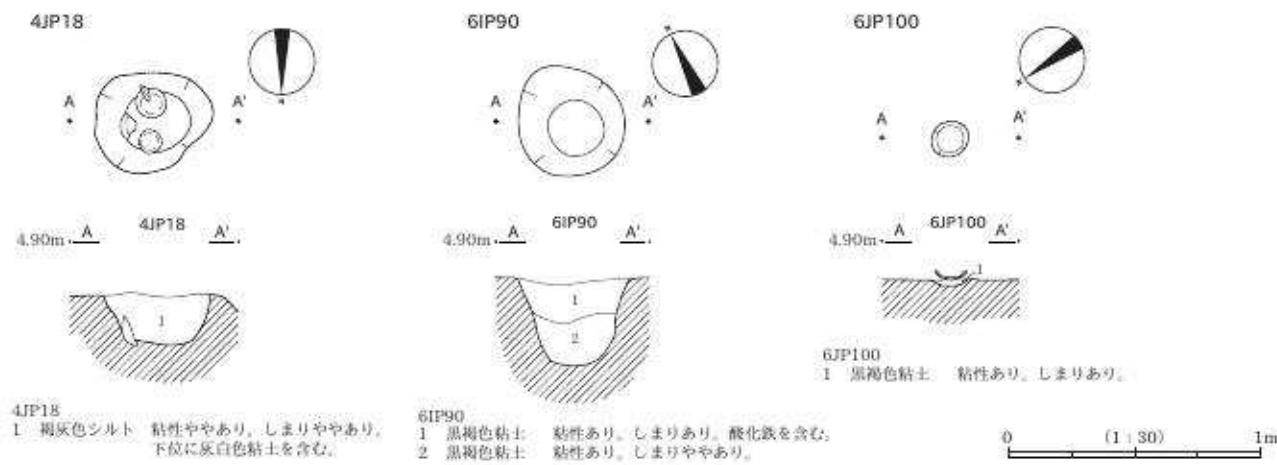
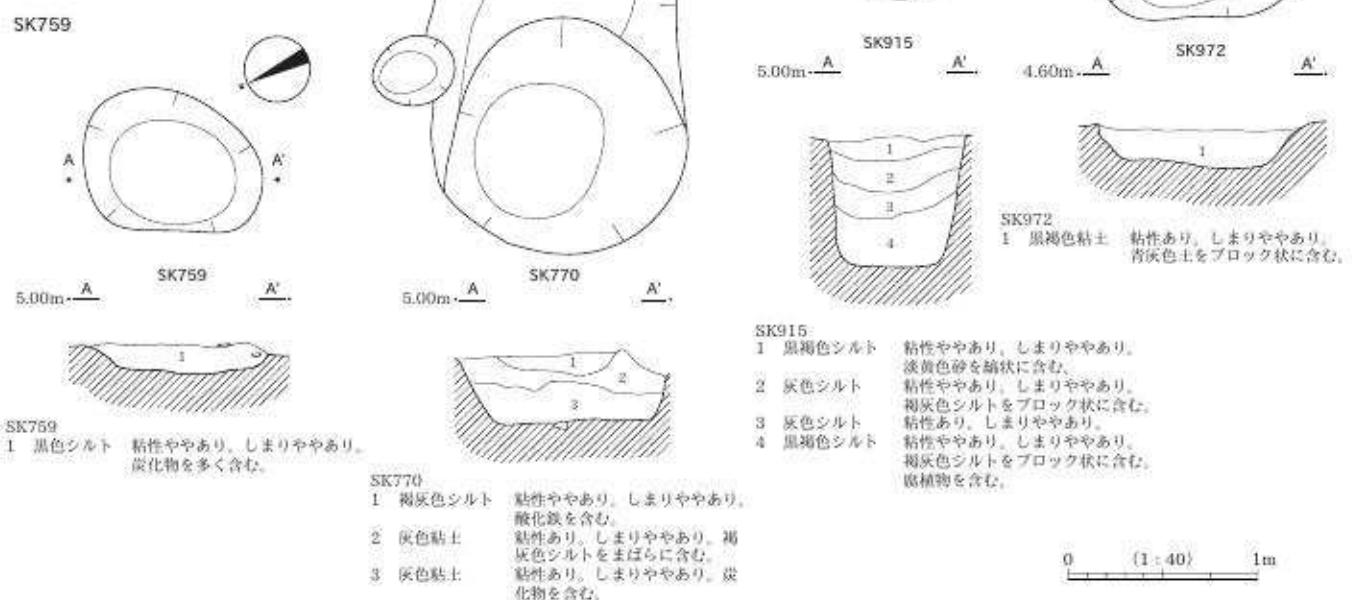
東原町遺跡 下層個別図 (3)

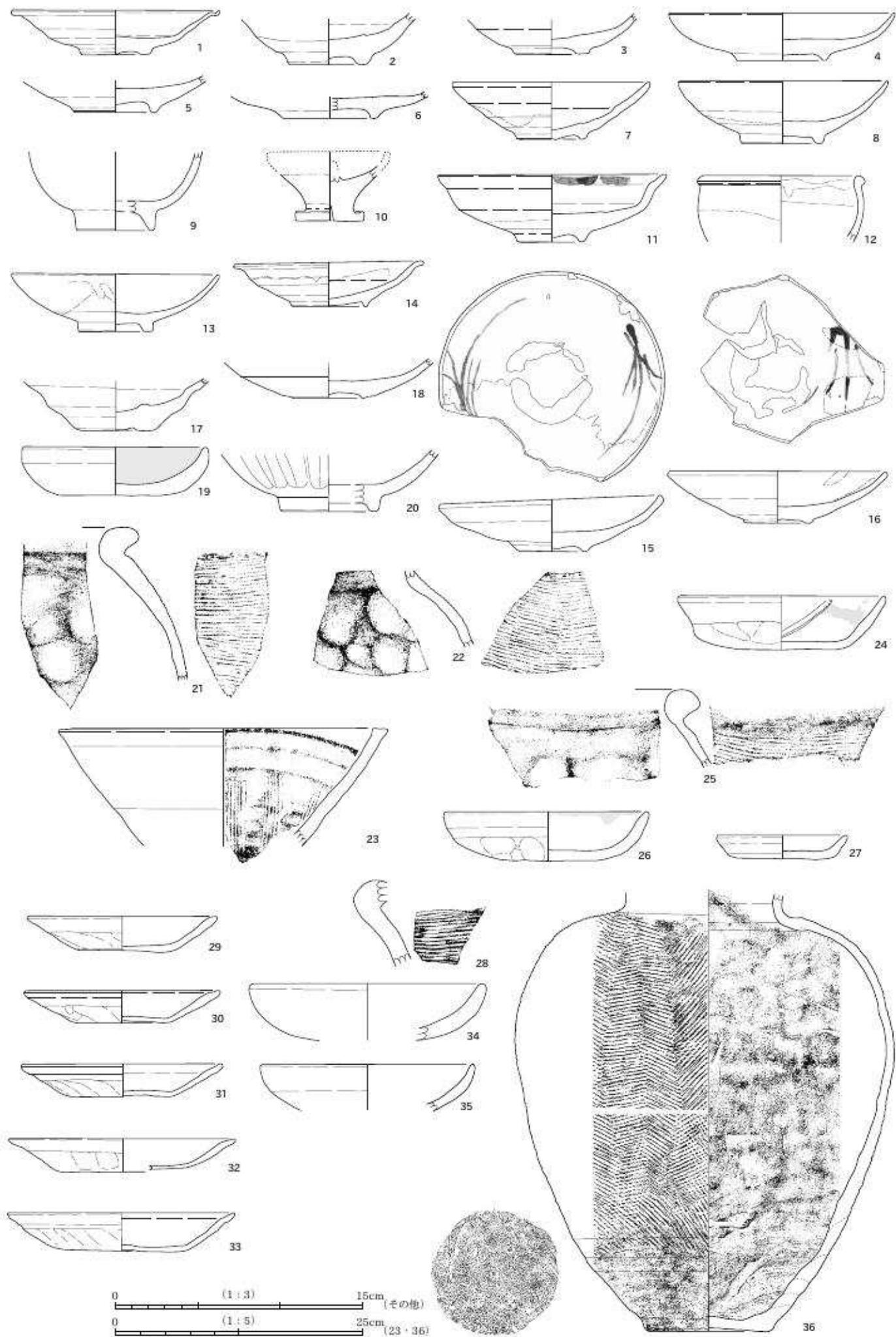


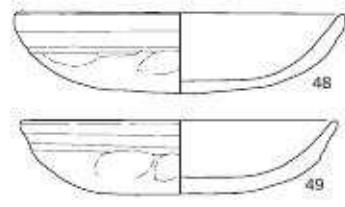
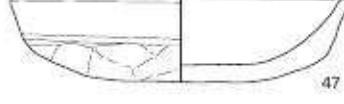
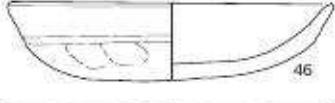
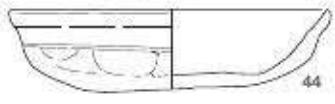
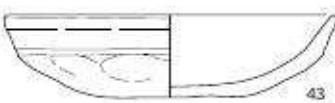
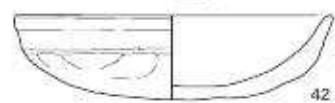
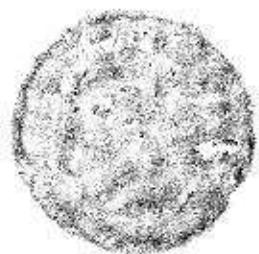
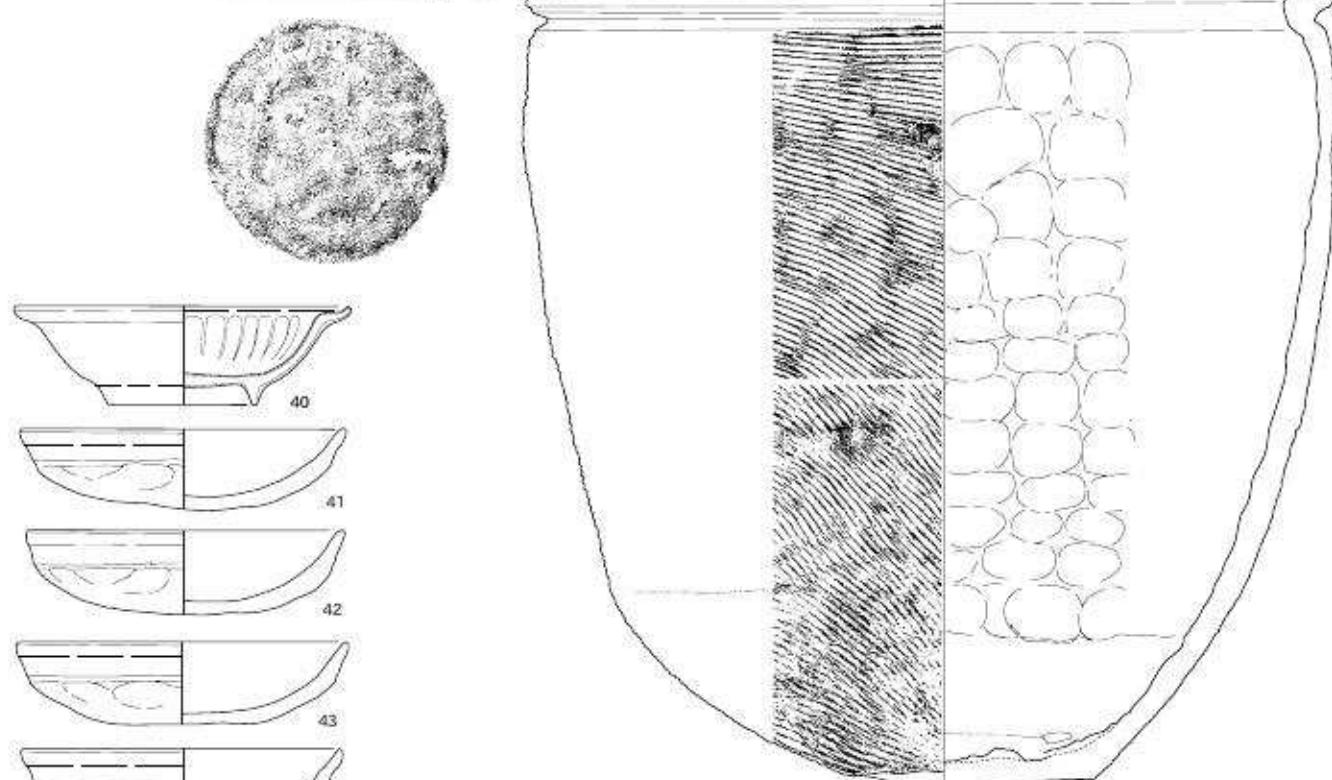
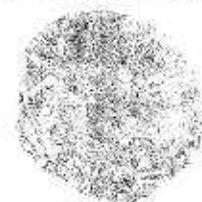
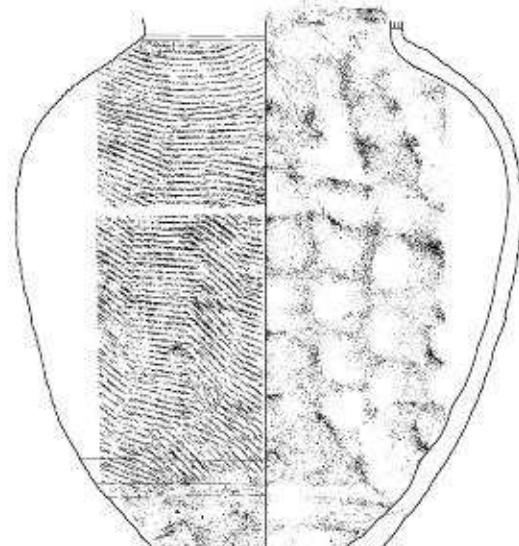
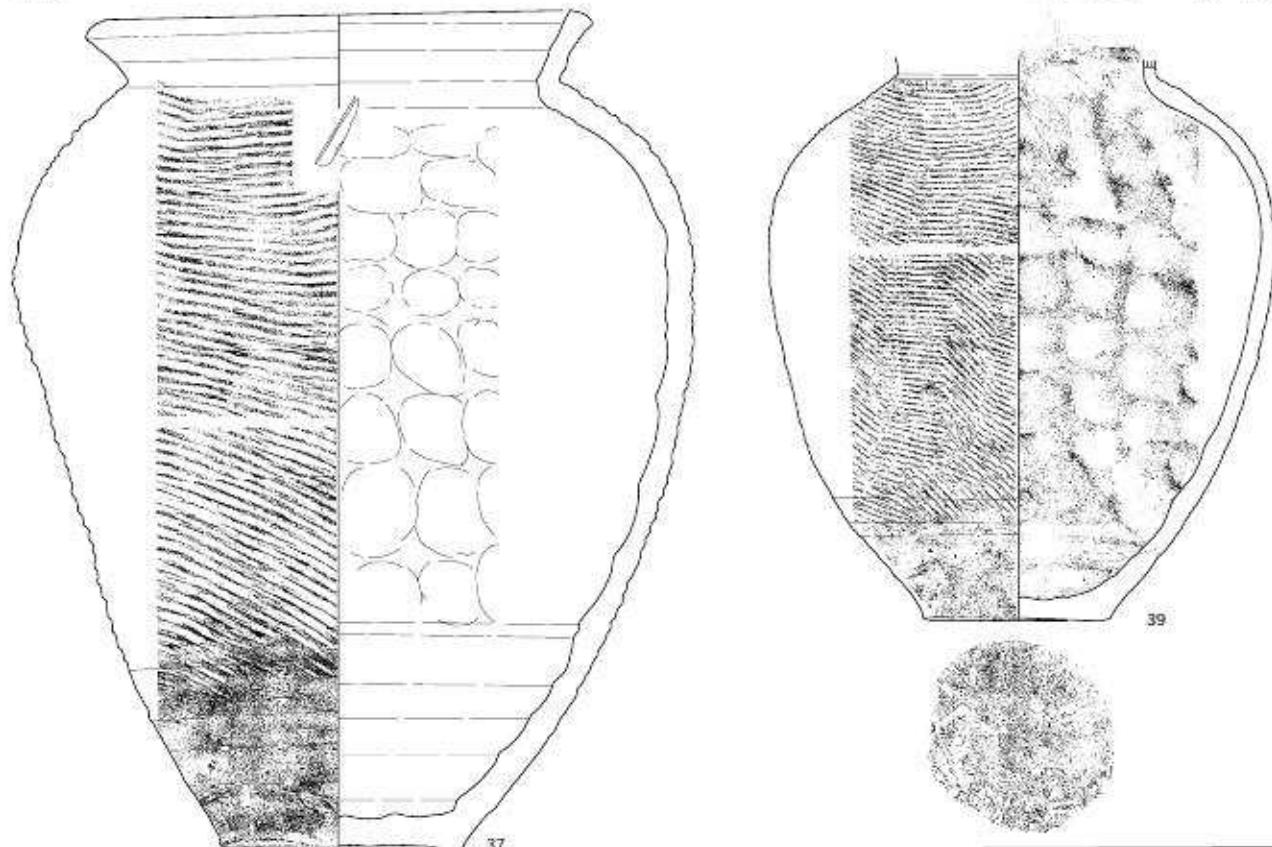




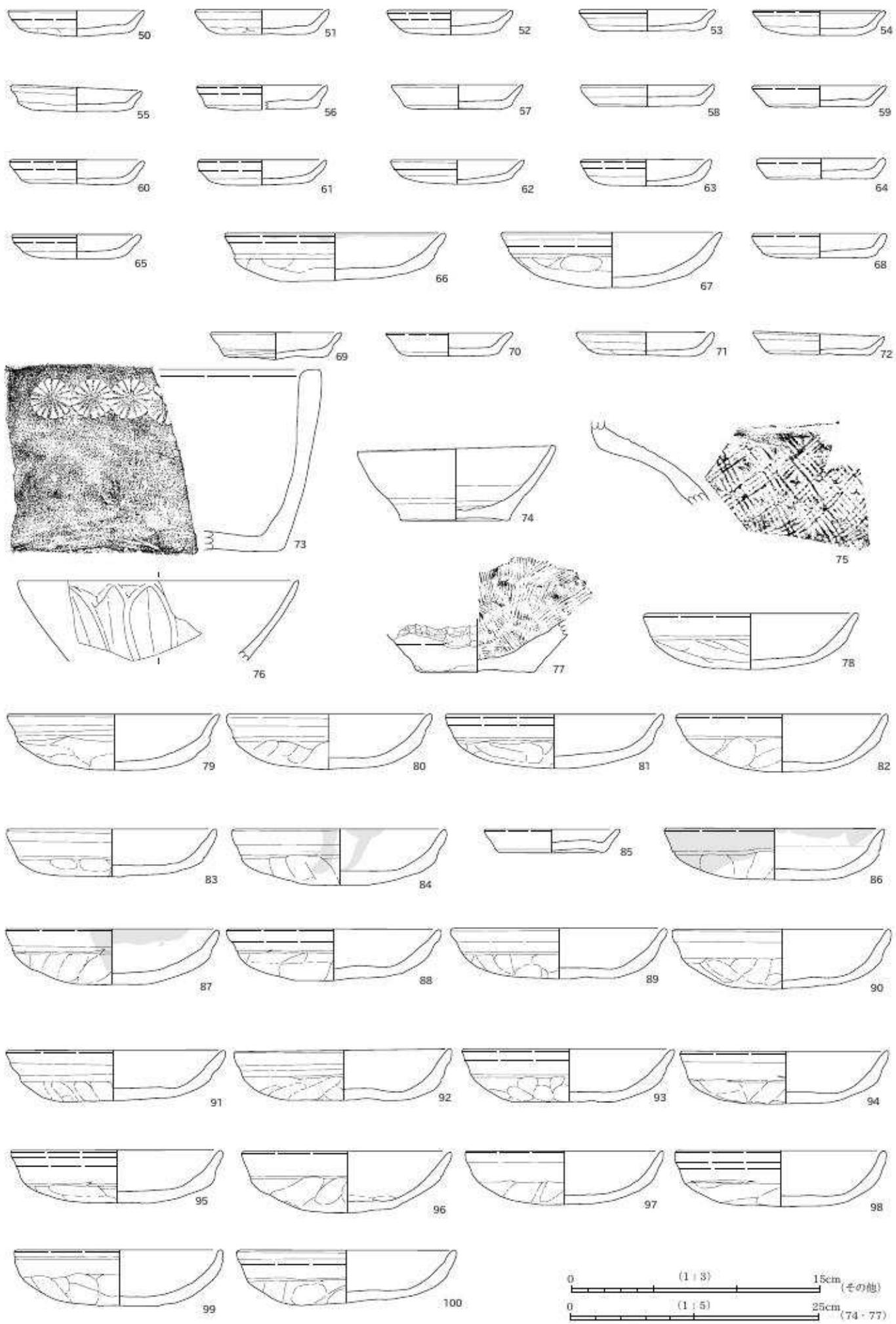
SK604
1 青灰色シルト 粘性あり。しまりややあり。
2 青灰色砂 粘性あり。しまりややあり。
3 褐灰色シルト 粘性あり。しまりややあり。
4 黒褐色シルト 粘性あり。しまりややあり。
5 黒色シルト 粘性あり。しまりややあり。
IIa 灰色粘土 床土相当。
IIb オリーブ灰色粘土 床土相当。
IIc 灰色粘土 床土相当。

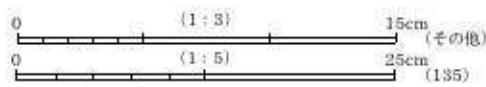
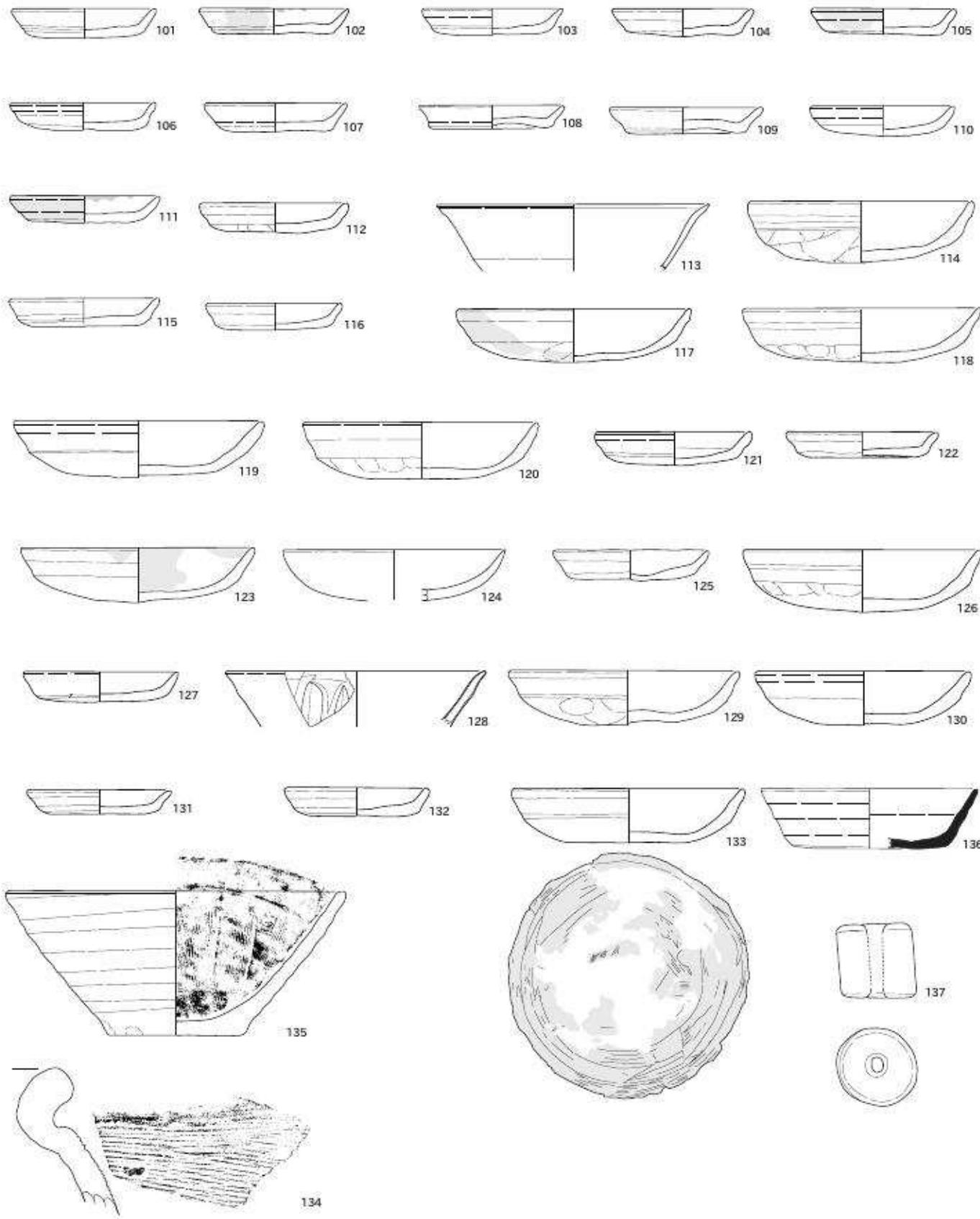


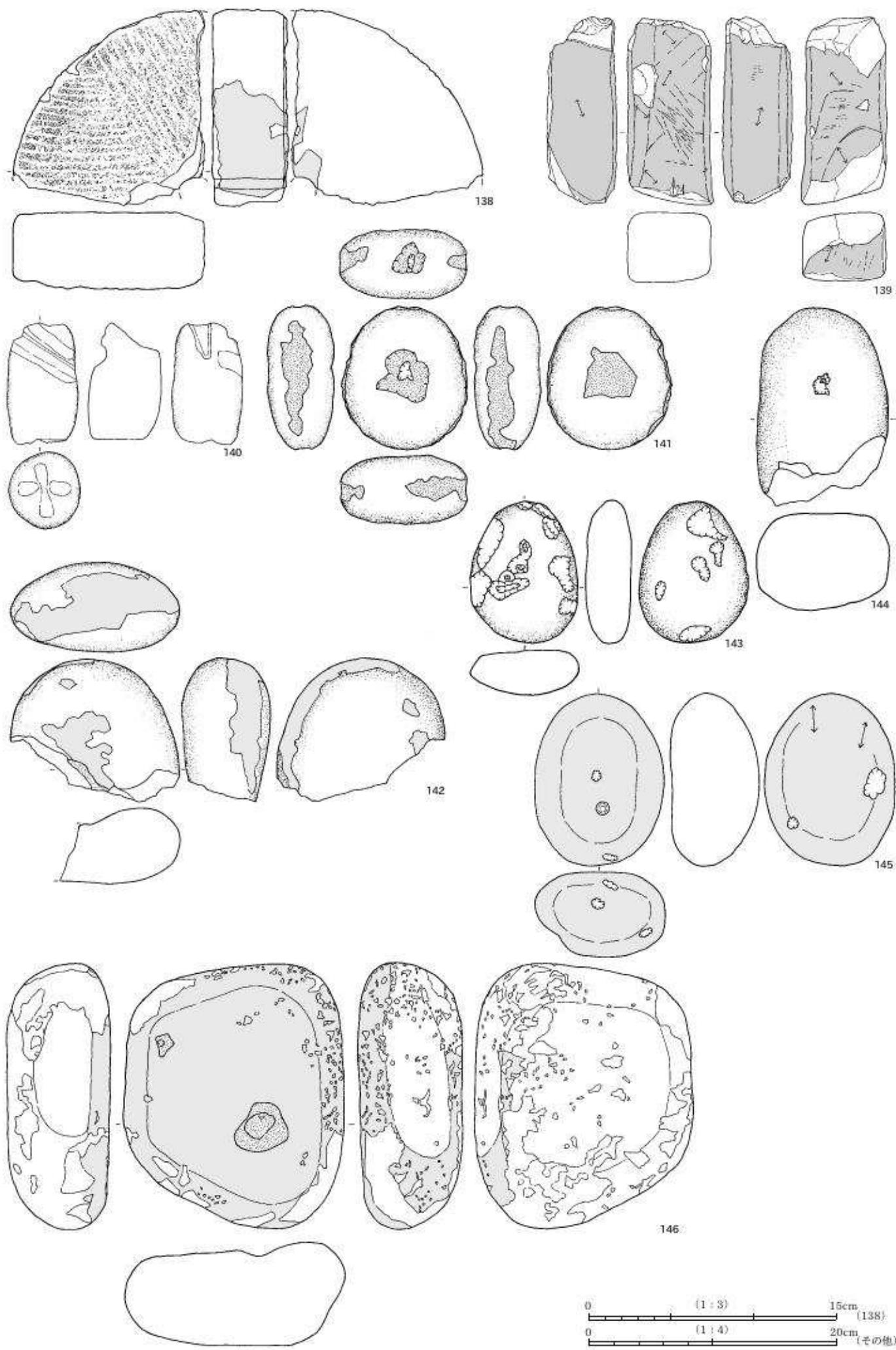


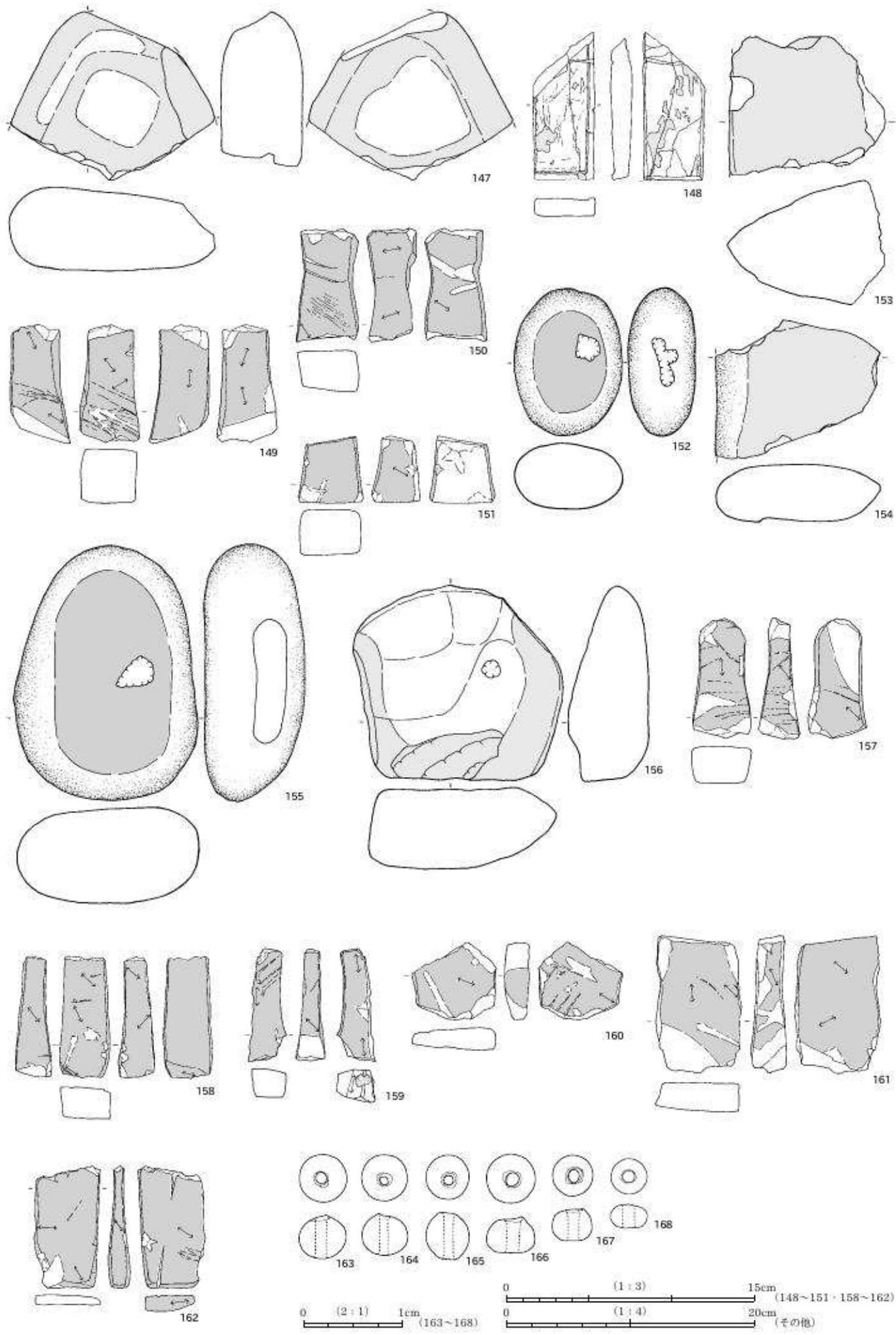


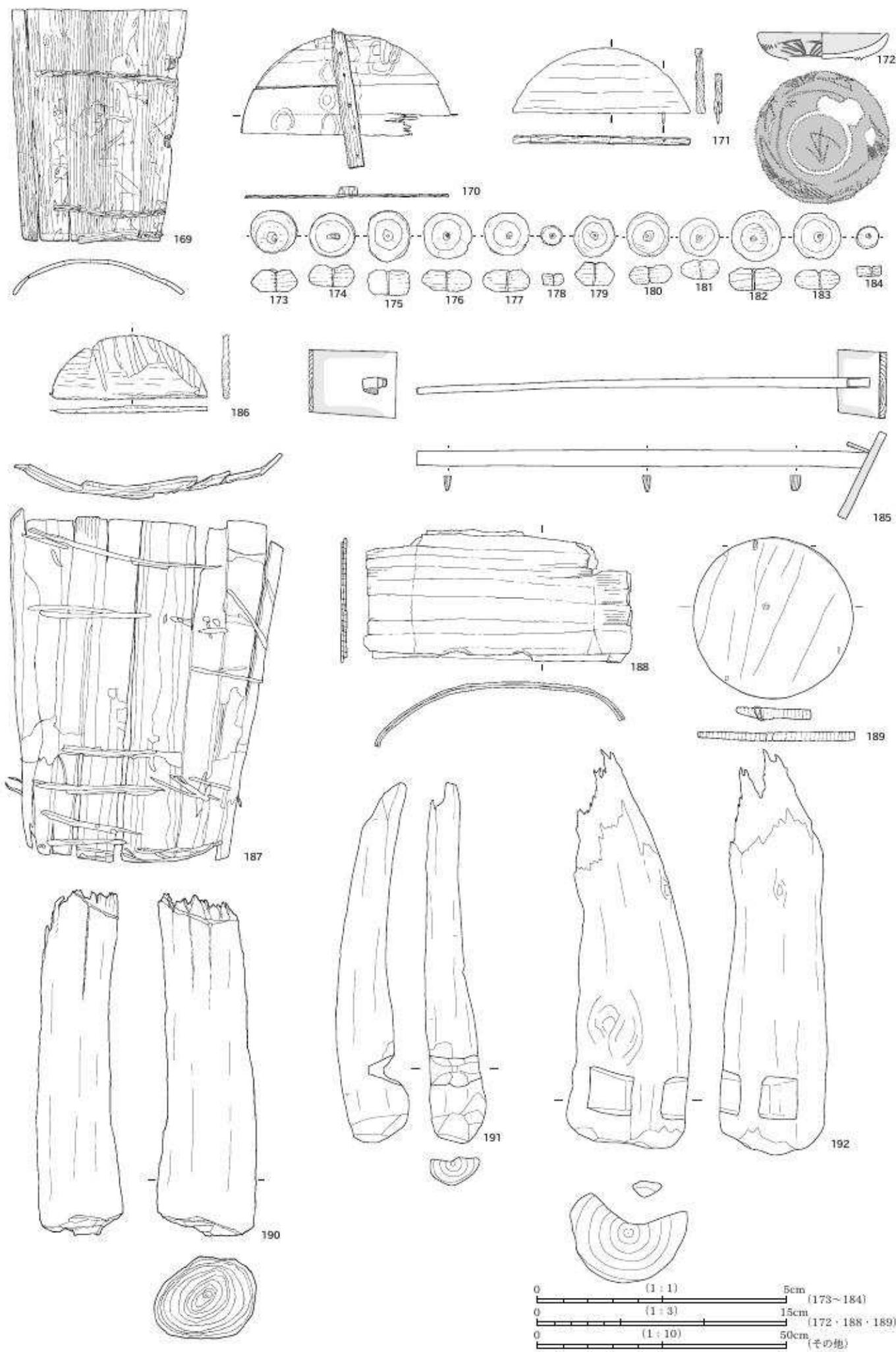
0 (1 : 3) 15cm (その他)
0 (1 : 5) 25cm (37~39)

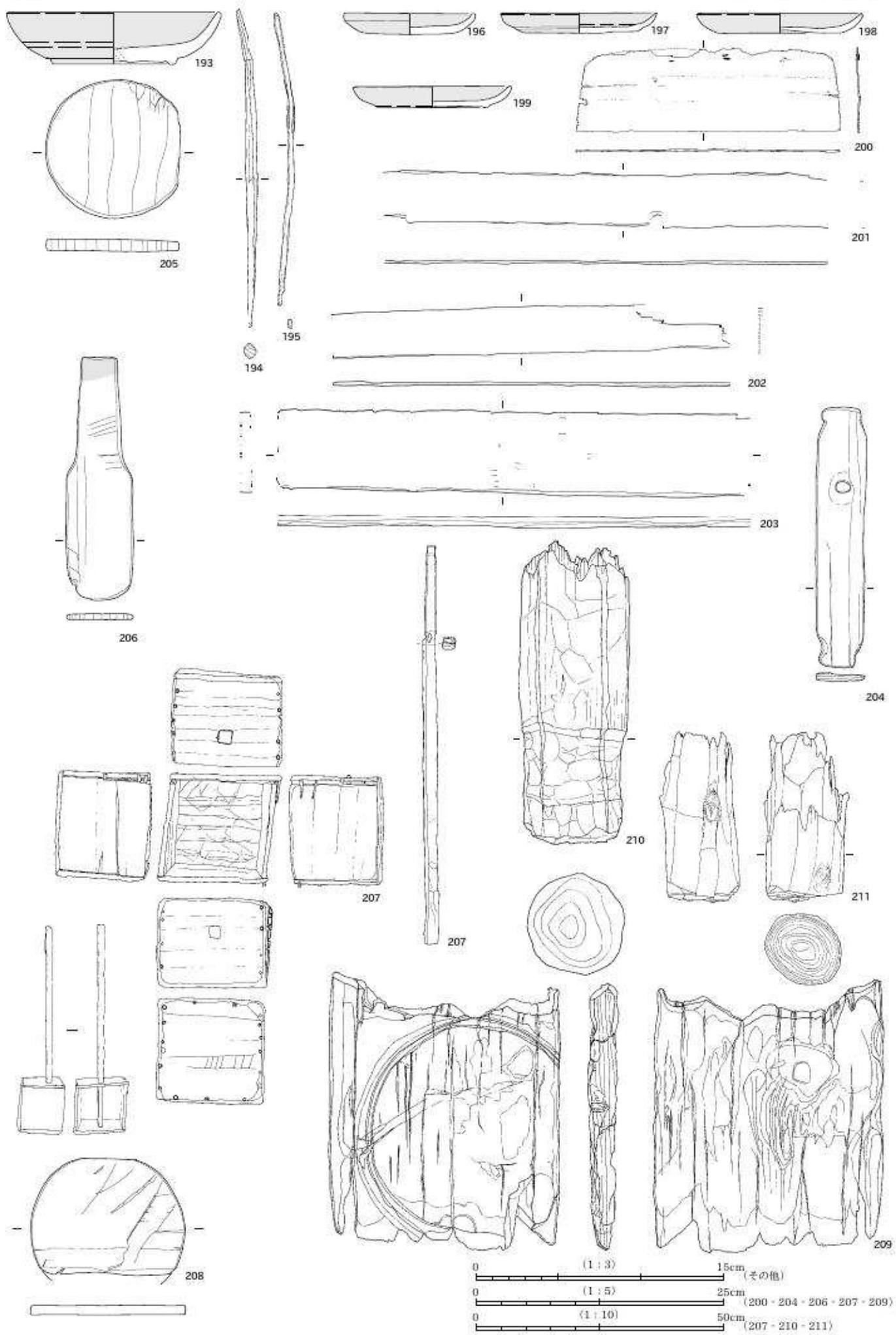


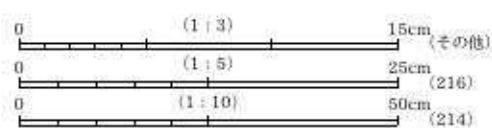
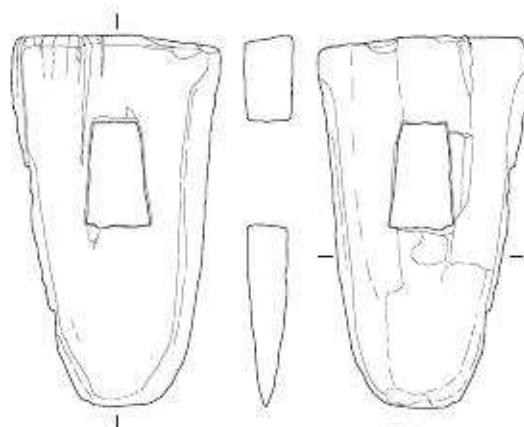
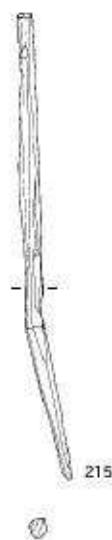
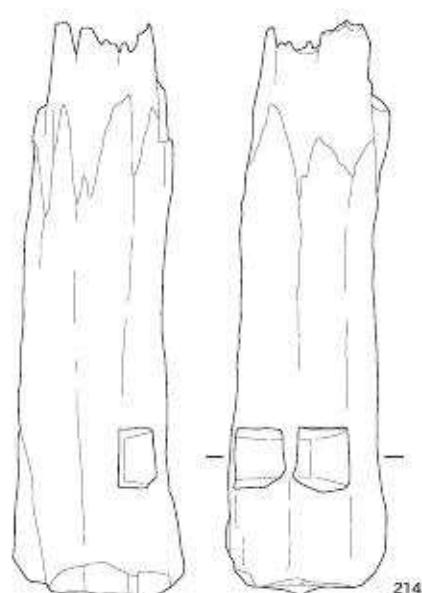
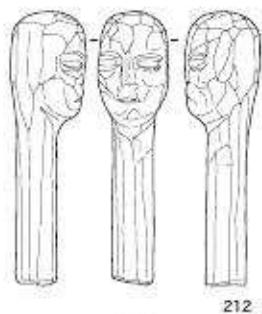


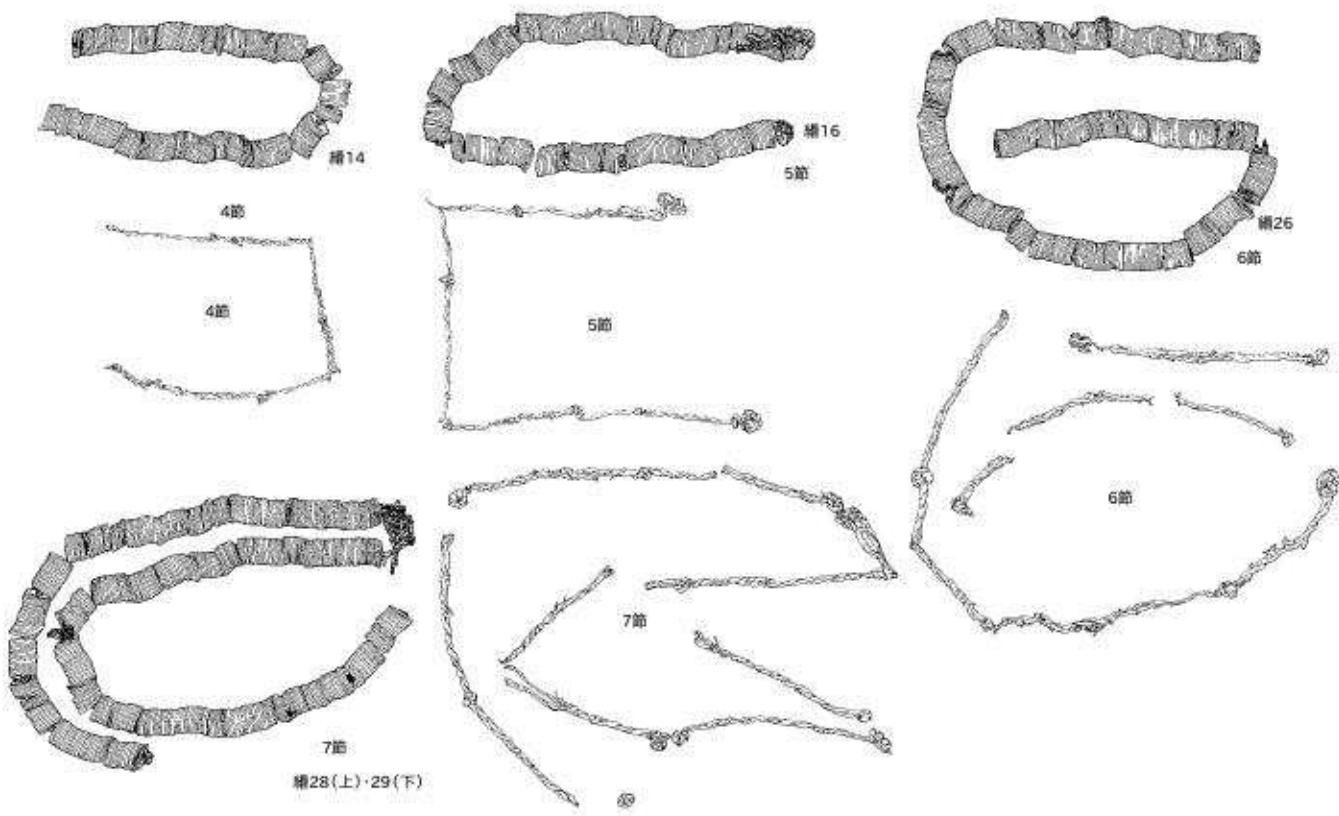
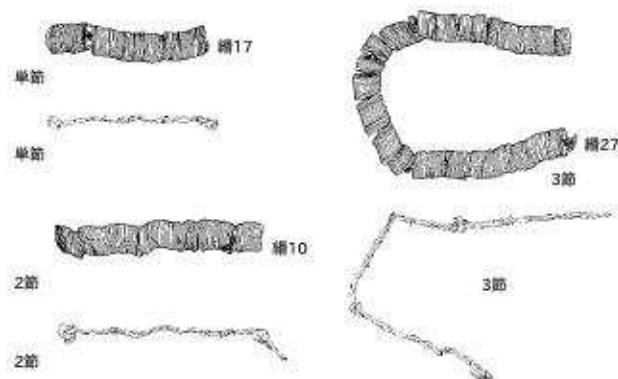
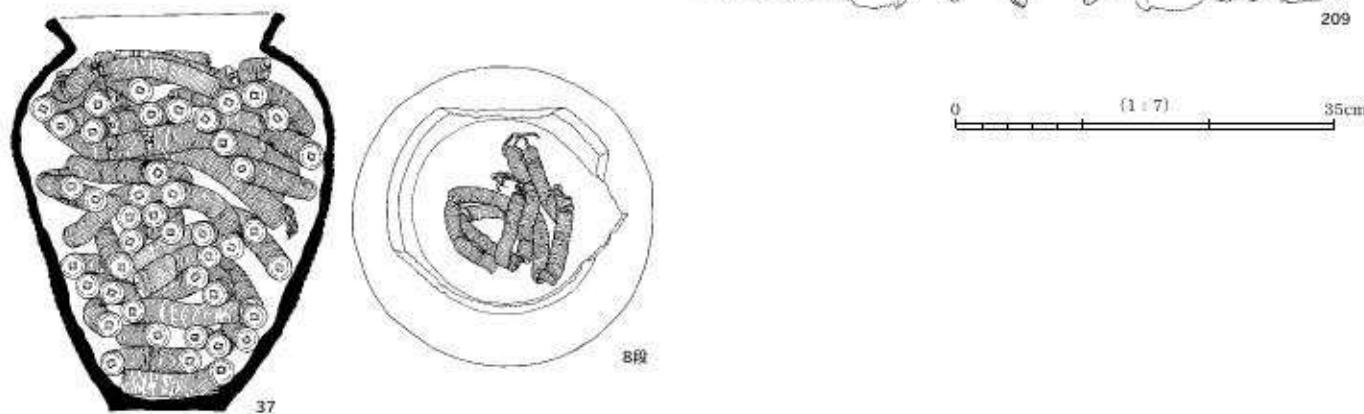
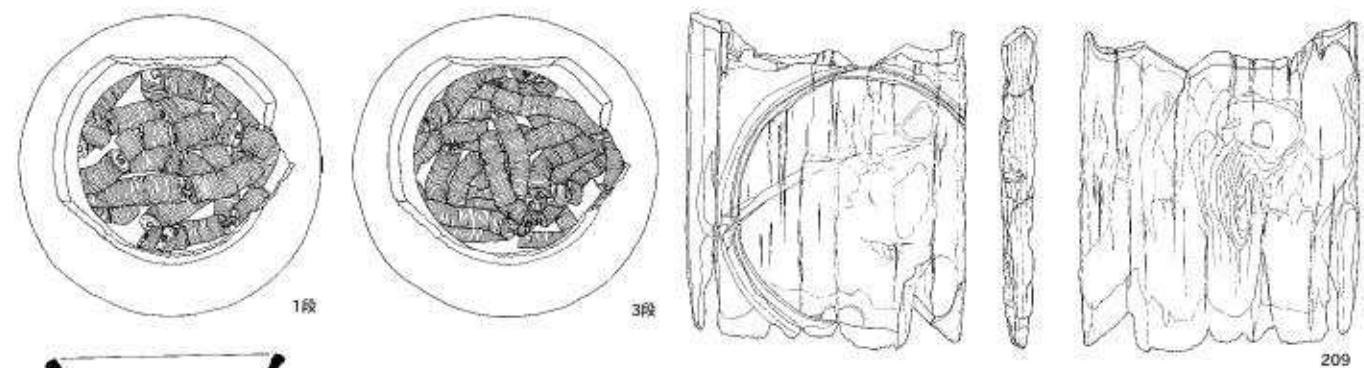












0 (1 : 7) 35cm

| | | | | | | |
|---------|---------|---------|---------|----------|---------|---------|
| | | | | | | |
| 五铢 | 五铢模銘錢 | 開元通寶 | 開元通寶 | 開元通寶 | 開元通寶 | 開元通寶 |
| 23-3-70 | 31-2-69 | 32-2-83 | 33-4-52 | 31-1-38 | 23-5-57 | 33-2-87 |
| 24年 | 24年 | 621年 | 621年 | 621年 | 621年 | 621年 |
| | | | 上月 | 下月 | 左月 | 右月 |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| 開元通寶 | 開元通寶 | 開元通寶 | 開元通寶 | 乾元重寶当十錢 | 乾元重寶当十錢 | 開元通寶紀地錢 |
| 5-2-12 | 9-2-7 | 30-1-58 | 14-2-55 | 33-2-190 | 32-1-92 | 9-1-91 |
| 621年 | 621年 | 621年 | 621年 | 758年 | 758年 | 845年 |
| 上月、左星 | 右上月 | 孕星 | 上下月 | | 下月 | 益 |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| 開元通寶紀地錢 | 開元通寶紀地錢 | 開元通寶紀地錢 | 開元通寶紀地錢 | 開元通寶紀地錢 | 開元通寶紀地錢 | 開元通寶紀地錢 |
| 13-1-25 | 21-1-67 | 14-2-92 | 14-1-9 | 9-2-51 | 33-5-9 | 24-3-49 |
| 845v | 845年 | 845年 | 845年 | 845年 | 845年 | 845年 |
| 宣、上月 | 桺 | 京or昌 | 興 | 克 | 潤 | 榮 |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| 開元通寶紀地錢 | 開元通寶紀地錢 | 開元通寶紀地錢 | 開元通寶紀地錢 | 開元通寶紀地錢 | 開元通寶紀地錢 | 開元通寶紀地錢 |
| 16-1-73 | 31-5-57 | 22-5-29 | 28-4-71 | 29-2-14 | 27-3-61 | 26-4-73 |
| 845年 | 845年 | 845年 | 845年 | 845年 | 845年 | 845年 |
| 京、下月 | 荊 | 昌 | 上月、藍 | 左橫洪 | 下橫榮 | 廣 |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| 開元通寶紀地錢 | 天漢元寶 | 光天元寶 | 乾德元寶 | 咸康元寶 | 漢通元寶 | 周通元寶 |
| 27-2-72 | 30-3-74 | 32-4-25 | 33-1-40 | 33-2-143 | 30-1-35 | 5-2-43 |
| 845年 | 917年 | 918年 | 919年 | 925年 | 948年 | 955年 |
| 落 | | | | | 下月 | |

| | | | | | | |
|---------|---------|---------|----------|----------|---------|---------|
| | | | | | | |
| 周通元寶 | 周通元寶 | 周通元寶 | 唐國通寶(篆) | 開元通寶(隸) | 開元通寶(篆) | 宋通元寶 |
| 18-3-87 | 21-2-48 | 28-1-82 | 24-1-3 | 32-3-73 | 27-1-14 | 33-5-37 |
| 955年 | 955年 | 955年 | 959年 | 960年 | 960年 | 960年 |
| 上月 | 右下月 | 上甲文 | | | 錯范 | |
| | | | | | | |
| 宋通元寶 | 宋通元寶 | 太平通寶 | 太平通寶 | 淳化元寶(真) | 淳化元寶(行) | 淳化元寶(草) |
| 13-1-9 | 32-2-71 | 33-4-49 | 22-1-3 | 33-6-68 | 33-6-20 | 33-2-65 |
| 960年 | 960年 | 976年 | 976年 | 990年 | 990年 | 990年 |
| 下甲文 | 下星 | | 上月 | | | |
| | | | | | | |
| 至道元寶(真) | 至道元寶(行) | 至道元寶(草) | 咸平元寶(真) | 景德元寶(真) | 景德元寶(真) | 祥符元寶 |
| 30-4-53 | 30-4-85 | 32-2-63 | 32-1-27 | 31-3-97 | 28-3-39 | 33-6-6 |
| 995年 | 995年 | 995年 | 998年 | 1004年 | 1004年 | 1008年 |
| | | | | | 左月 | |
| | | | | | | |
| 祥符元寶 | 祥符通寶 | 天禧通寶(真) | 天禧通寶(真) | 天聖元寶(真) | 天聖元寶(真) | 天聖元寶(真) |
| 24-5-34 | 21-3-99 | 28-2-69 | 32-1-29 | 32-2-54 | 24-5-38 | 29-2-25 |
| 1008年 | 1008年 | 1017年 | 1017年 | 1023年 | 1023年 | 1023年 |
| 上星 | | | 下月 | | 上下月 | |
| | | | | | | |
| 明道元寶(真) | 明道元寶(篆) | 景祐元寶(真) | 景祐元寶(篆) | 皇宋通寶(真) | 皇宋通寶(真) | 皇宋通寶(真) |
| 33-5-87 | 24-5-70 | 33-2-5 | 29-3-139 | 33-2-139 | 26-2-89 | 33-6-90 |
| 1032年 | 1032年 | 1034年 | 1034年 | 1038年 | 1038年 | 1038年 |
| | | | | | 上月 | 下月 |

| | | | | | | |
|---|-------------------------------------|-------------------------------|---------------------------------------|-------------------------------------|-------------------------------------|--|
| | | | | | | |
| 皇宋通寶 (真) 26-6-111 1038年 下月又は甲文 | 皇宋通寶 (篆) 33-6-93 1038年 | 至和元寶 (真) 31-3-25 1054年 | 至和元寶 (篆) 33-22-137 1054年 | 至和通寶 (真) 22-3-91 1054年 | 至和通寶 (篆) 33-2-135 1054年 | 嘉祐元寶 (真) 33-4-93 1056年 |
| | | | | | | |
| 嘉祐元寶 (篆) 33-6-89 1056年 | 嘉祐通寶 (真) 33-3-89 1056年 | 嘉祐通寶 (篆) 33-6-1 1056年 | 嘉祐通寶 (篆) 24-3-33 1056年 脩月、上星 | 治平元寶 (真) 33-4-1 1064年 | 治平元寶 (真) 15-1-14 1064年 上月 | 治平元寶 (真) 11-2-45 1064年 右月又は甲文 |
| | | | | | | |
| 治平元寶 (篆) 33-2-40 1064年 右上星 | 治平元寶 (篆) 32-3-2 1064年 | 治平通寶 (真) 33-2-103 1064年 | 治平通寶 (篆) 33-2-119 1068年 | 熙寧元寶 (真) 33-4-33 1068 | 熙寧元寶 (真) 30-1-42 1068年 上月 | 熙寧元寶 (篆) 33-6-75 1068年 |
| | | | | | | |
| 熙寧元寶 (篆) 26-6-192 1068年 上月又は甲文 | 熙寧重寶折二錢 (真) 19-1-55 1071年 | 元豐通寶 (行) 33-2-84 1078年 | 元豐通寶 (行) 30-4-68 1078年 | 元豐通寶 (行) 2-2-91 1078 | 元豐通寶 (篆) ハラ-5-3 1078年 上星 | 元祐通寶 (行) 33-5-27 1086年 |
| | | | | | | |
| 元祐通寶 (行) 31-5-46 1086年 下月又は甲文 | 元祐通寶 (行) 18-1-47 1086年 左上星 | 元祐通寶 (篆) 33-3-8 1086年 | 元祐通寶 (篆) 16-3-22 1086年 左上月 | 元祐通寶 (篆) 13-1-32 1086年 右上月 | 元祐通寶 (篆) 24-5-24 1086年 右下月 | 元祐通寶 (篆) 33-3-38 1086年 上星 |

| | | | | | | |
|-------------|-------------|----------|-------------|-------------|----------|----------|
| | | | | | | |
| 元祐通寶 (篆) | 紹聖元寶 (行) | 紹聖元寶 (行) | 紹聖元寶 (行) | 紹聖元寶 (行) | 紹聖元寶 (行) | 紹聖元寶 (篆) |
| 31-3-50 | 30-3-57 | 16-4-66 | 22-5-41 | 14-2-50 | 25-1-48 | 33-2-171 |
| 1086年 | 1094年 | 1094年 | 1094年 | 1094年 | 1094年 | 1094年 |
| 左月又は甲文 | | 上月 | 下月 | 下星 | 左星 | |
| | | | | | | |
| 紹聖元寶 (篆) | 紹聖元寶 (篆) | 紹聖元寶 (篆) | 紹聖元寶 (篆) | 紹聖元寶 (篆) | 紹聖元寶 (篆) | 紹聖元寶 (篆) |
| 31-3-71 | 28-3-71 | 33-1-12 | 21-1-32 | 33-6-92 | 33-6-8 | 16-3-2 |
| 1094年 | 1094年 | 1094年 | 1097年 | 1098年 | 1098年 | 1098年 |
| 上月 | 下月 | 右上月 | | | | 下甲文 |
| | | | | | | |
| 聖宋元寶 (行) | 聖宋元寶 (篆) | 大觀通寶 | 大觀通寶 | 政和通寶 (篆) | 政和通寶 (篆) | 政和通寶 (篆) |
| 32-2-44 | 33-6-38 | 29-3-38 | 33-2-79 | 33-6-35 | 26-2-3 | 33-2-157 |
| 1101年 | 1101年 | 1107年 | 1107年 | 1111年 | 1111年 | 1111年 |
| | | 左下月 | | | 左下月 | 右月又は甲文 |
| | | | | | | |
| 政和通寶 (篆) | 政和通寶 (篆) | 宣和通寶 (篆) | 宣和通寶 (篆) | 宣和通寶折二錢 (篆) | 建炎通寶 (真) | 紹興通寶 (真) |
| 24-2-30 | 32-1-39 | 20-3-33 | 33-2-6 | 33-2-62 | 8-2-24 | 18-1-3 |
| 1111年 | 1111年 | 1119年 | 1119年 | 1119年 | 1127年 | 1131年 |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| 紹興元寶折二錢 (真) | 紹興元寶折二錢 (篆) | 正隆元寶 | 乾道元寶折二錢 (真) | 淳熙元寶 (真) | 淳熙元寶 (真) | 淳熙元寶 (真) |
| 21-3-180 | 13-1-29 | 32-2-95 | 28-4-79 | 30-3-52 | 30-4-96 | 32-4-38 |
| 1131年 | 1131年 | 1157年 | 1165年 | 1174年 | 1174年 | 1174年 |
| | | | | | 捌 | 九 |

| | | | | | | |
|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| 淳熙元寶 (真) |
| 22-3-31 | 33-4-41 | 8-3-53 | 33-6-16 | 25-2-45 | 33-6-80 | 26-6-181 |
| 1174年 |
| 十 | 十一 | 十二 | 十三 | 十四 | 十五 | 十六 |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| 淳熙元寶 (真) | 淳熙元寶 (真) | 紹熙元寶 | 紹熙元寶 | 紹熙元寶 | 紹熙元寶 | 紹熙元寶 |
| 33-2-184 | 21-1-25 | 27-3-77 | 21-1-173 | 28-4-51 | 32-2-45 | 11-1-10 |
| 1174年 | 1174年 | 1190年 | 1190年 | 1190年 | 1190年 | 1190年 |
| 月星 | 月星 | 元 | 二 | 三 | 四 | 五 |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| 慶元通寶 | 慶元通寶 | 慶元通寶 | 慶元通寶 | 慶元通寶 | 嘉泰通寶 | 嘉泰通寶 |
| 27-3-95 | 32-4-21 | 33-2-131 | 33-2-2 | 29-2-26 | 26-6-110 | 32-2-38 |
| 1195年 | 1195年 | 1195年 | 1195年 | 1195年 | 1201年 | 1201年 |
| 元 | 二 | 四 | 五 | 六 | 元 | 二 |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| 嘉泰通寶 | 嘉泰通寶 | 開禧通寶 | 開禧通寶 | 開禧通寶 | 嘉定通寶 | 嘉定通寶 |
| 29-2-50 | 32-2-5 | 21-1-80 | 14-1-33 | 28-3-36 | 31-5-56 | 20-2-57 |
| 1201年 | 1201年 | 1205年 | 1205年 | 1205年 | 1208年 | 1208年 |
| 三 | 四 | 元 | 二 | 三 | 元 | 二 |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| 嘉定通寶 |
| 29-2-90 | 26-3-5 | 22-2-16 | 31-3-4 | 33-6-49 | 20-3-47 | 33-2-47 |
| 1208年 |
| 三 | 四 | 五 | 六 | 七 | 八 | 九 |

| | | | | | | |
|---------|---------|---------|----------|----------|---------|---------|
| | | | | | | |
| 嘉定通寶 | 嘉定通寶 | 嘉定通寶 | 嘉定通寶 | 嘉定通寶 | 大宋元寶 | 大宋元寶 |
| 28-4-36 | 33-4-86 | 27-2-65 | 32-4-62 | 29-3-102 | 33-2-8 | 4-2-49 |
| 1208年 | 1208年 | 1208年 | 1208年 | 1208年 | 1225年 | 1225年 |
| 十 | 十一 | 十二 | 十三 | 十四 | 元 | 三 |
| | | | | | | |
| 紹定通寶 | 紹定通寶 | 紹定通寶 | 紹定通寶 | 紹定通寶 | 紹定通寶 | 嘉熙通寶 |
| 30-2-82 | 22-3-41 | 33-3-78 | 30-1-178 | 28-4-46 | 28-2-62 | 18-2-39 |
| 1228年 | 1228年 | 1228年 | 1228年 | 1228年 | 1228年 | 1237年 |
| 元 | 二 | 三 | 四 | 五 | 六 | 三 |
| | | | | | | |
| 嘉熙通寶 | 淳祐元寶 | 淳祐元寶 | 淳祐元寶 | 淳祐元寶 | 淳祐元寶 | 淳祐元寶 |
| 20-1-27 | 15-2-81 | 31-2-63 | 23-3-79 | 4-2-59 | 23-1-86 | 22-1-61 |
| 1237年 | 1241年 | 1241年 | 1241年 | 1241年 | 1241年 | 1241年 |
| 四 | 元 | 二 | 三 | 四 | 六 | 七 |
| | | | | | | |
| 淳祐元寶 | 淳祐元寶 | 皇宋元寶 | 皇宋元寶 | 皇宋元寶 | 皇宋元寶 | 開慶通寶 |
| 24-4-65 | 27-1-70 | 15-1-29 | 26-1-68 | 30-2-56 | 27-2-41 | 22-3-14 |
| 1241年 | 1241年 | 1253年 | 1253年 | 1253年 | 1253年 | 1259年 |
| 八 | 九 | 元 | 四 | 五 | 六 | 元 |
| | | | | | | |
| 景定元寶 | 景定元寶 | 景定元寶 | 景定元寶 | 咸淳元寶 | 咸淳元寶 | 咸淳元寶 |
| 30-3-93 | 27-1-26 | 18-3-70 | 22-3-1 | 32-3-47 | 31-5-35 | 9-1-58 |
| 1260年 | 1260年 | 1260年 | 1260年 | 1265年 | 1265年 | 1265年 |
| 元 | 二 | 三 | 五 | 元 | 二 | 五 |

| | | | | | | |
|---------|------------|---------|----------|----------|----------|----------|
| | | | | | | |
| 咸淳元寶 | 咸淳元寶 | 至大通寶 | 紹豐元寶 (行) | 皇宋通寶島錢 | 淳化元寶島錢 | 開元通寶島錢 |
| 30-1-20 | 9-2-60 | 18-4-65 | 12-1-55 | 32-3-10 | 18-1-65 | 23-3-51 |
| 1265年 | 1265年 | 1310年 | 1341年 | 1340年±10 | 1340年±10 | 1350年±10 |
| 七 | 八 | | | | | |
| | | | | | | |
| 天聖元寶島錢 | 元豐通寶島錢 (篆) | 無文錢 | | | | |
| 26-4-8 | 32-4-94 | 23-5-32 | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |



217



218



219



220



221



222



223



224



225



226



227



228



229



230



231



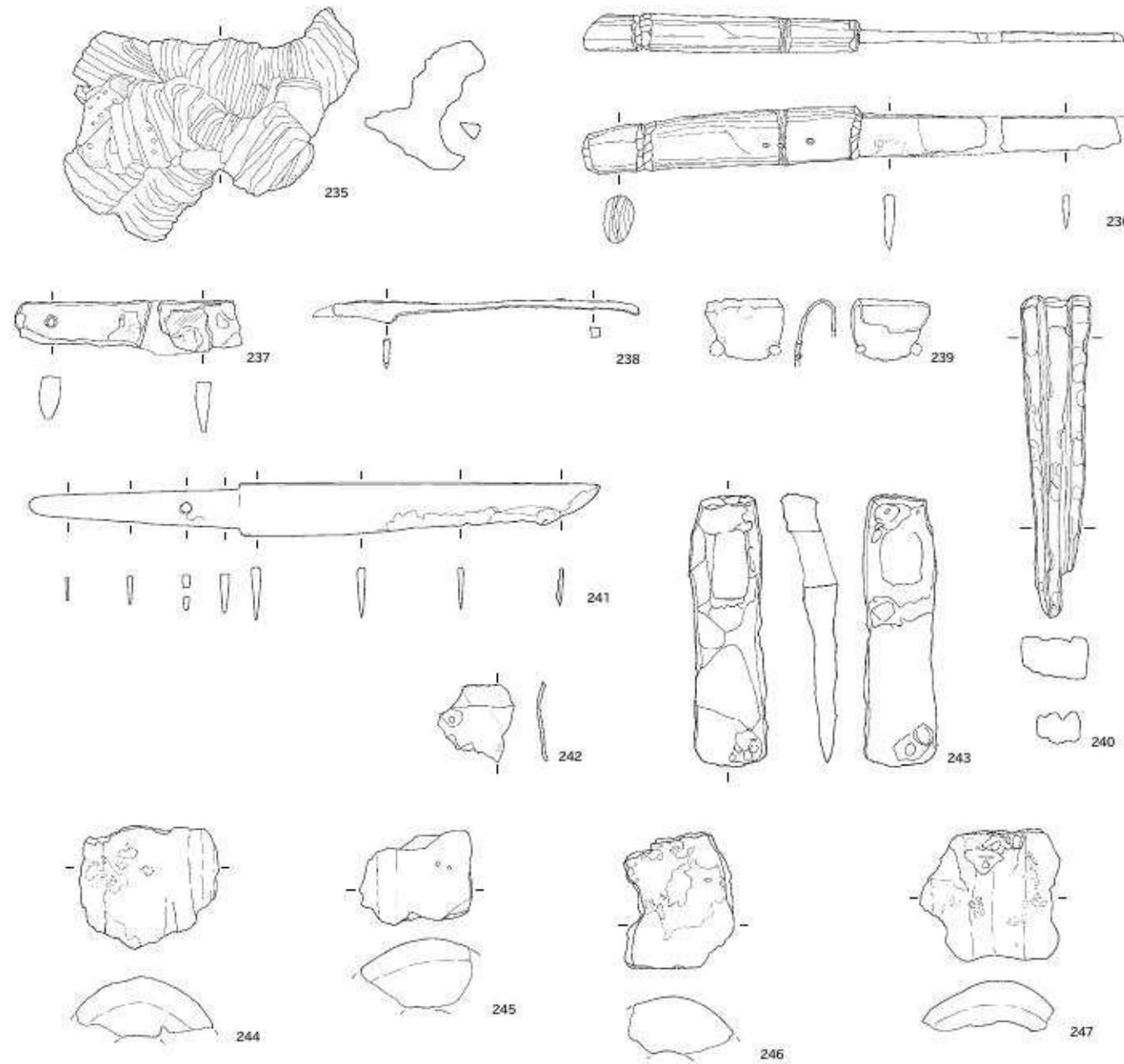
232



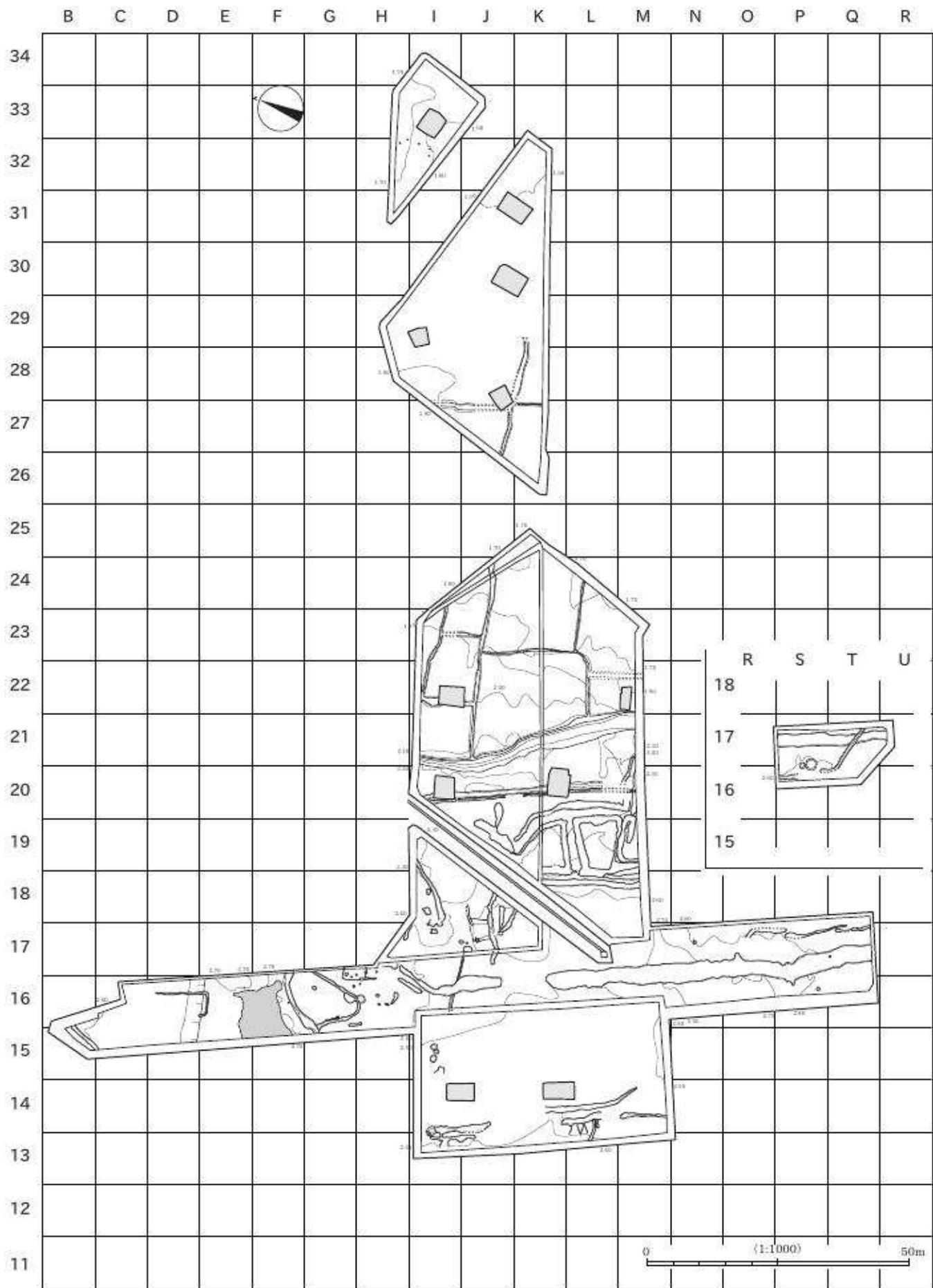
233

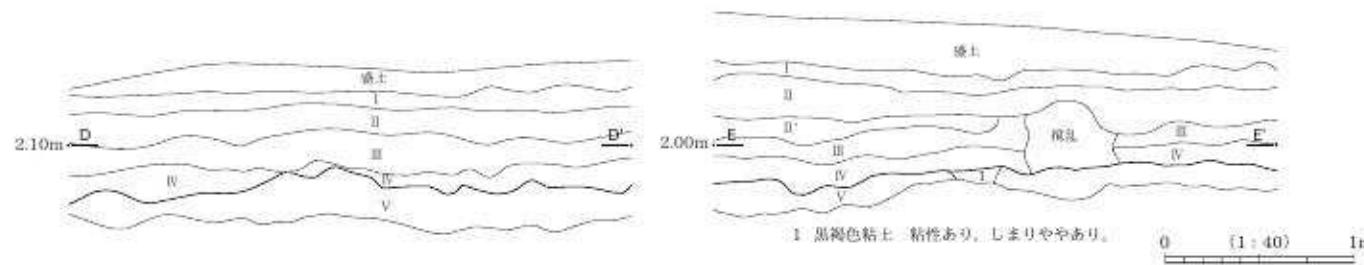
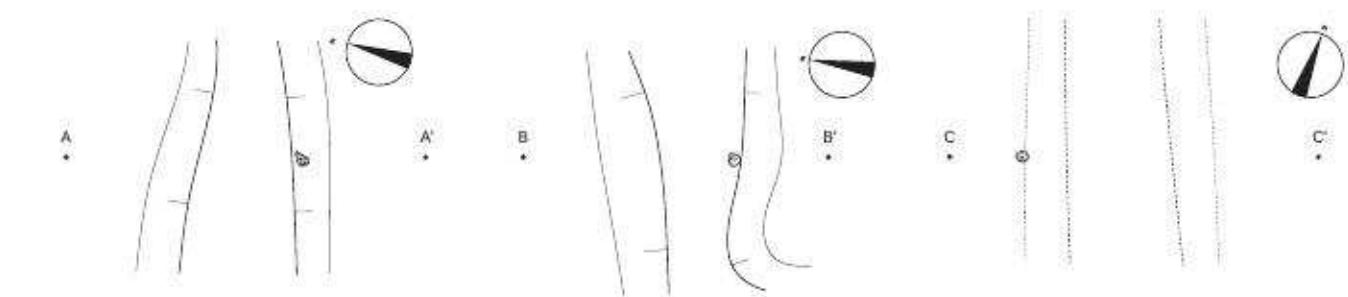
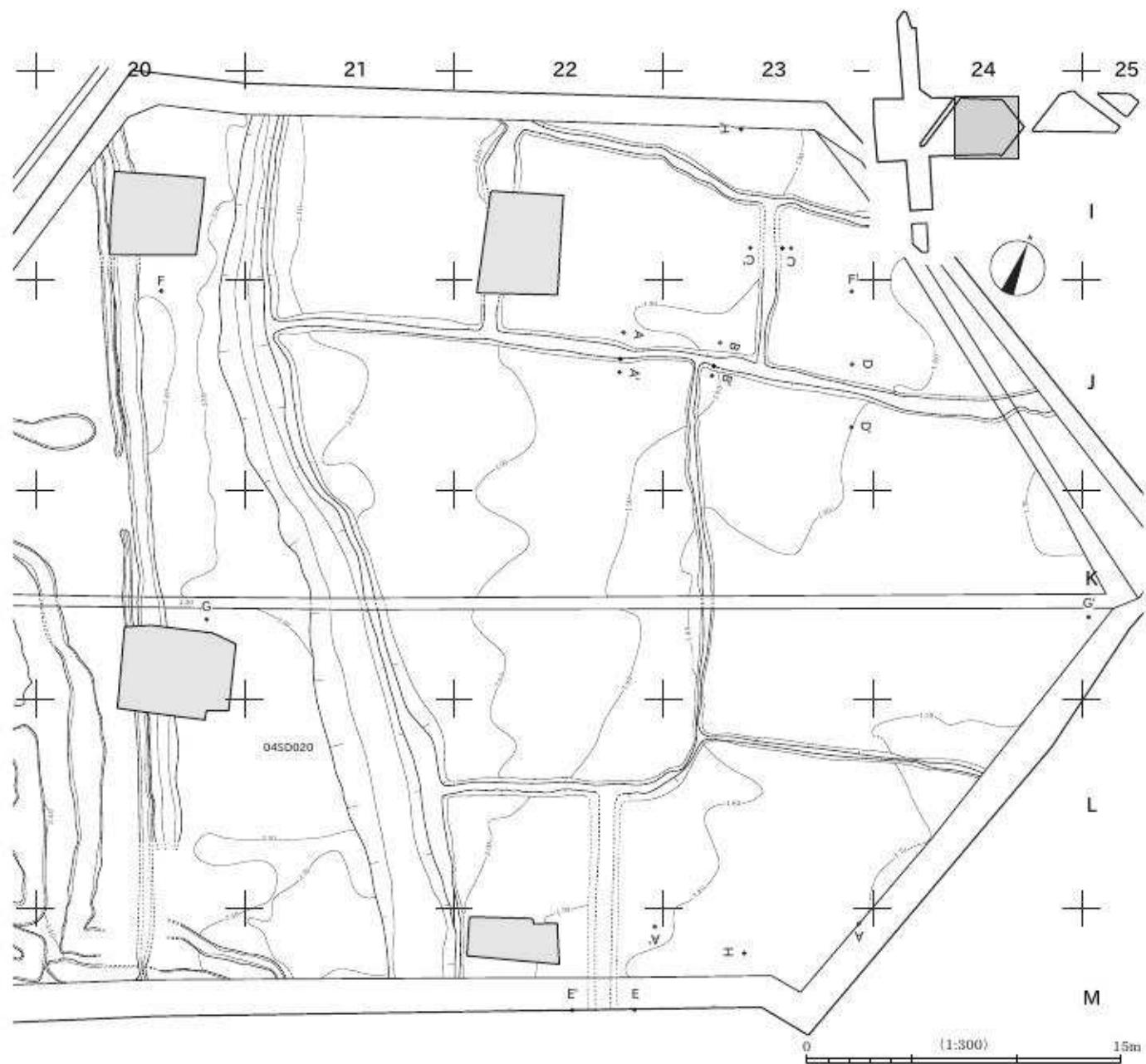


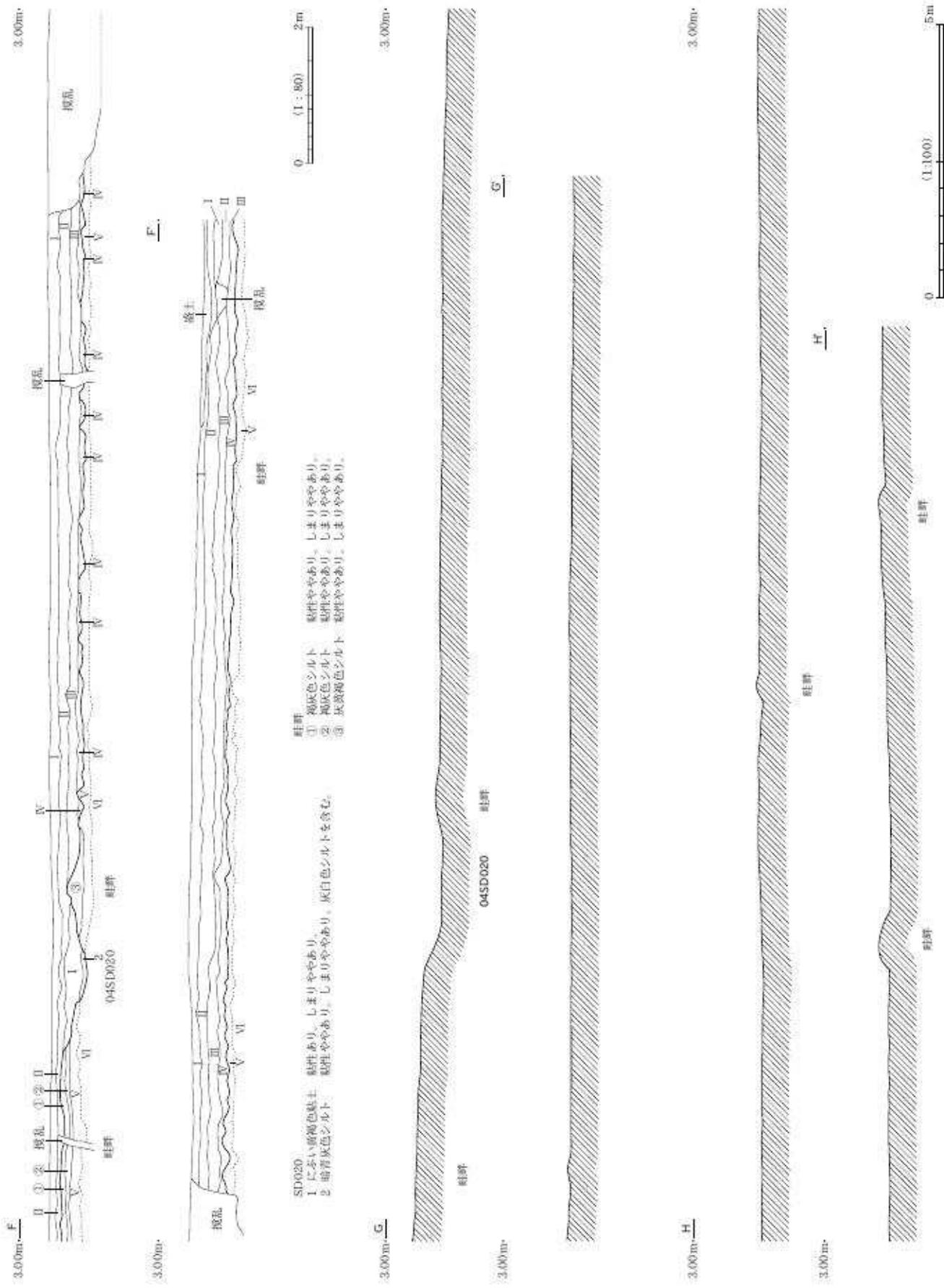
234

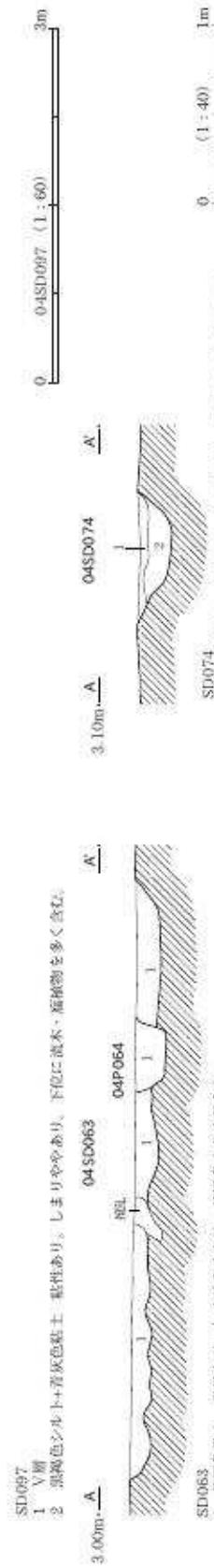
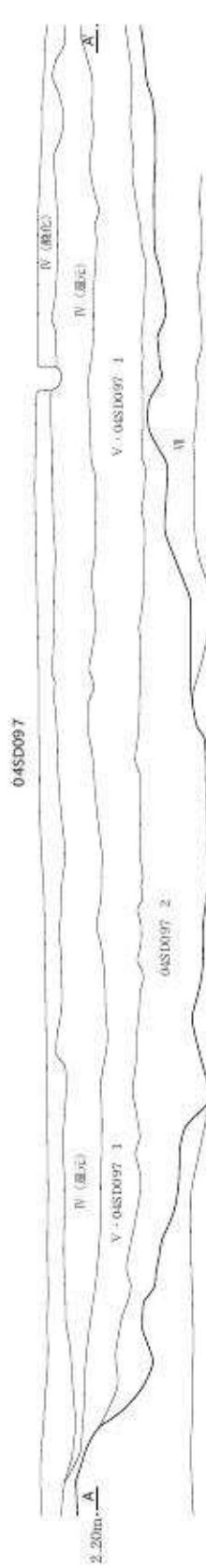
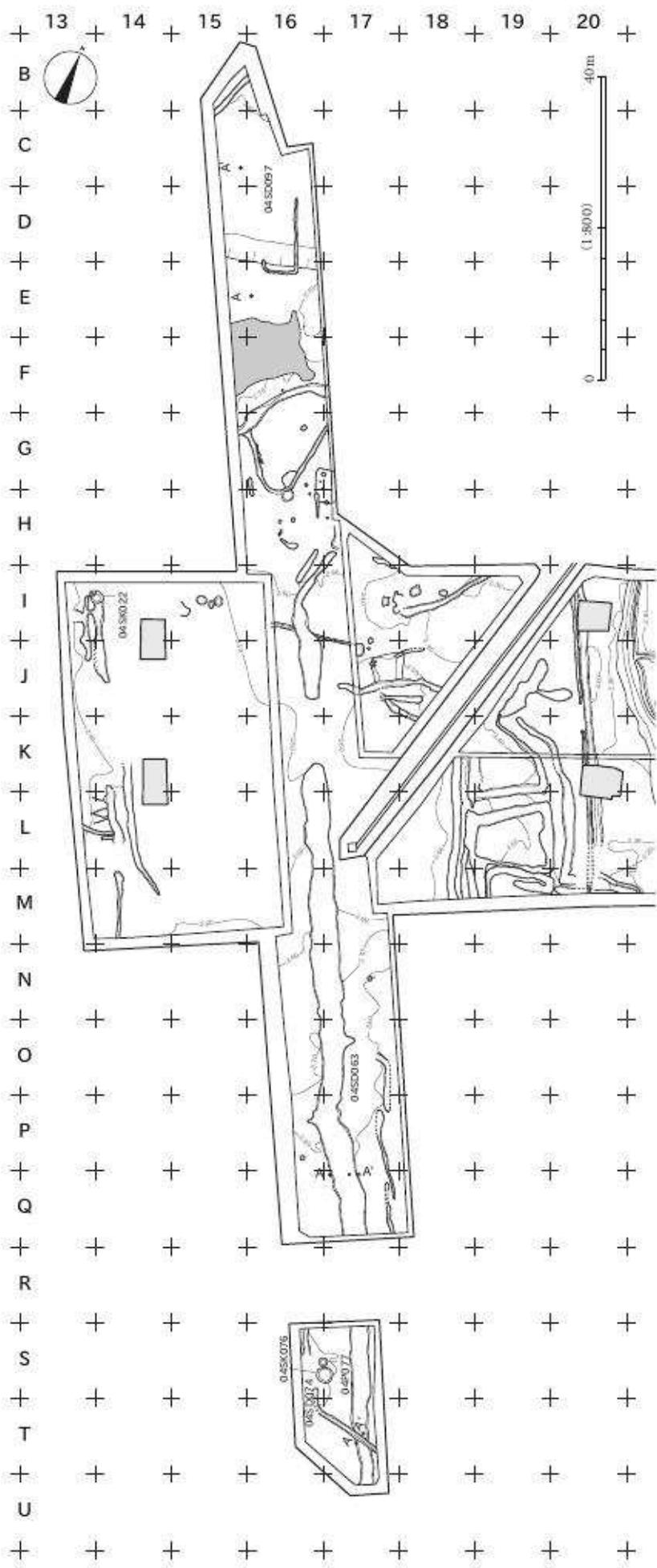


0 (1:3) 15cm (その他)
0 (1:5) 25cm (235)







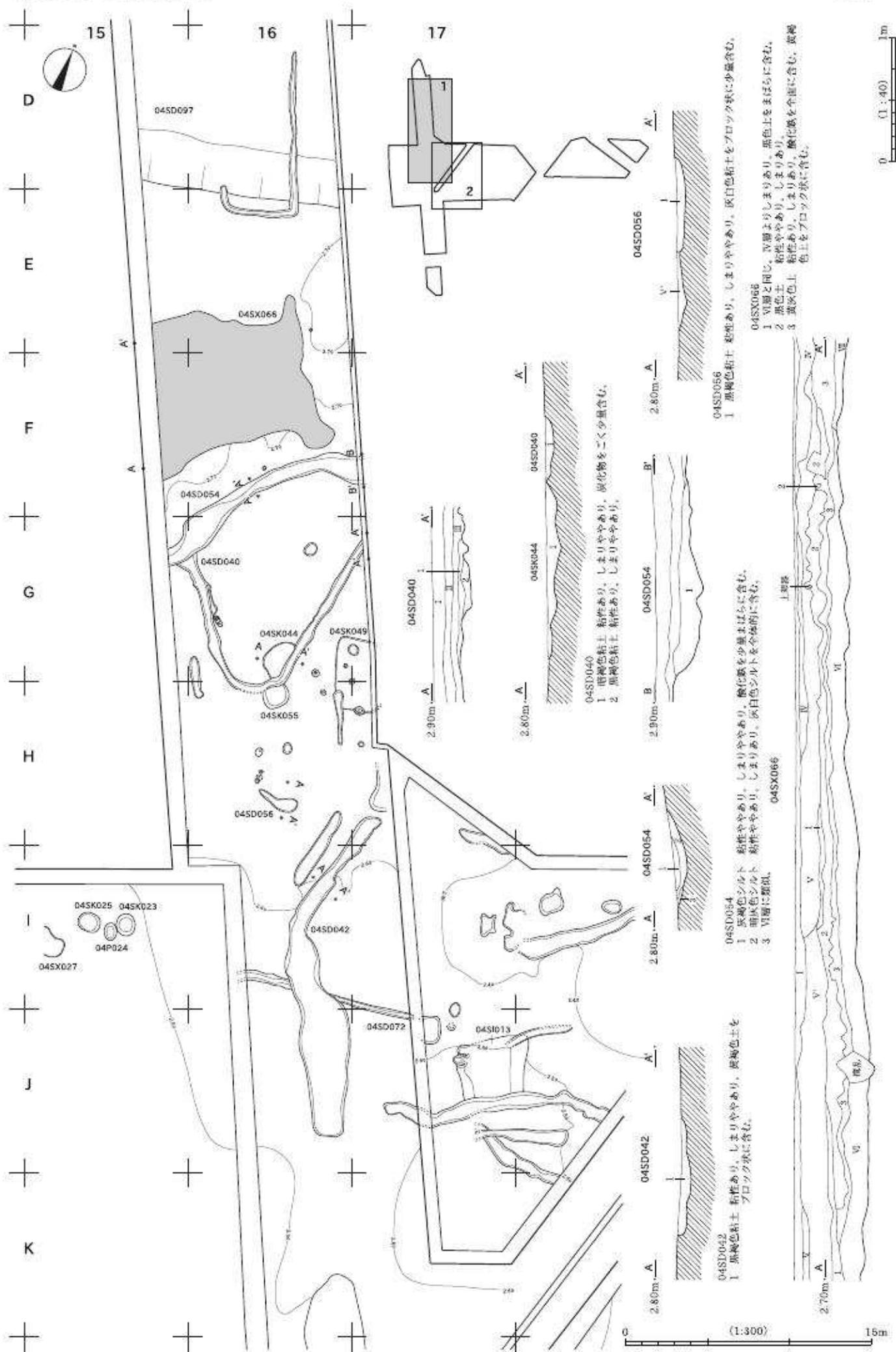


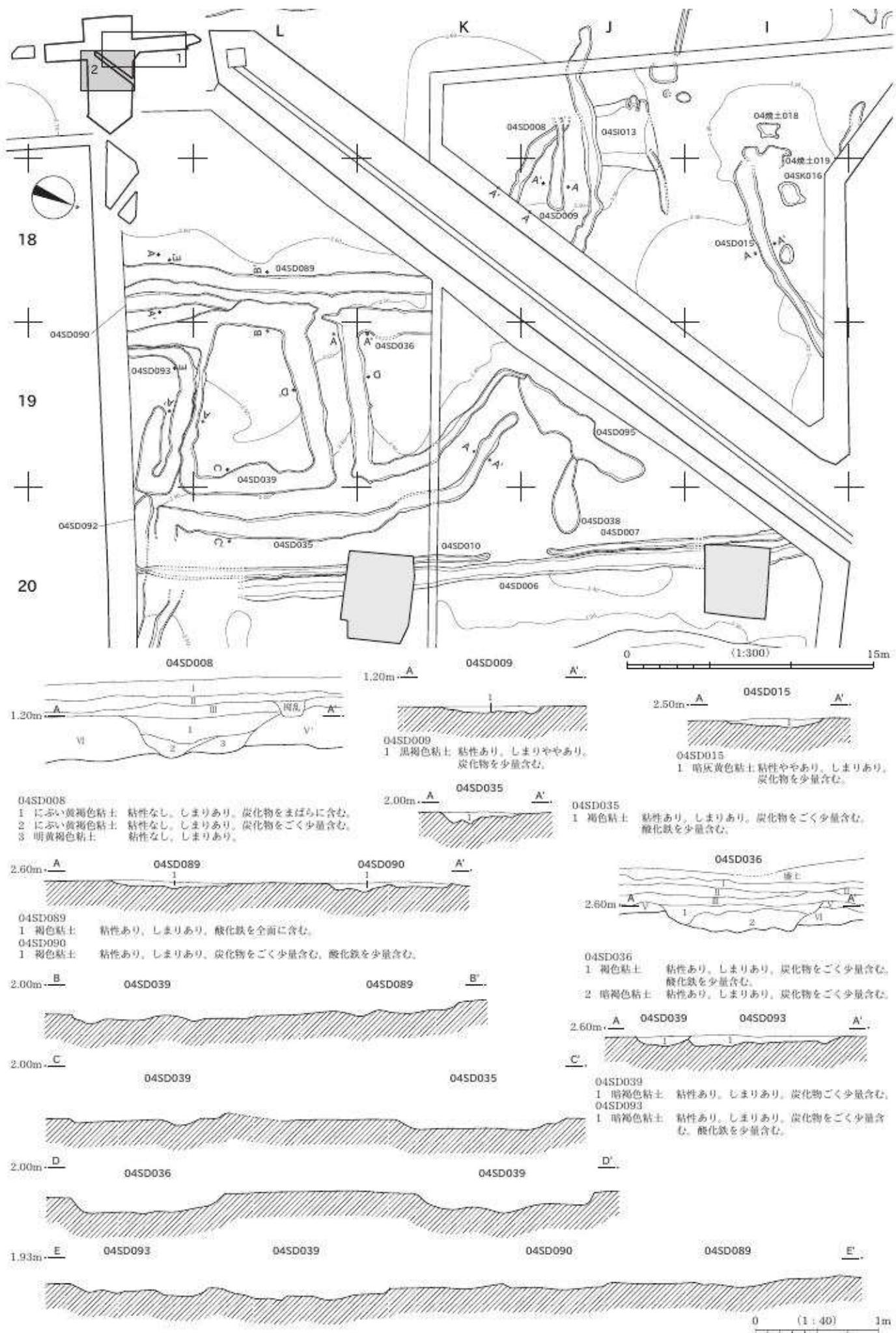
1 暗灰色粘土 黏性あり。酸化熱をまほらくに含む。
2 青灰色粘土 黏性あり。しまりなし。炭化物を多く含む。

SD063 雷電の如き
主に多方面に雷弧が生じる。

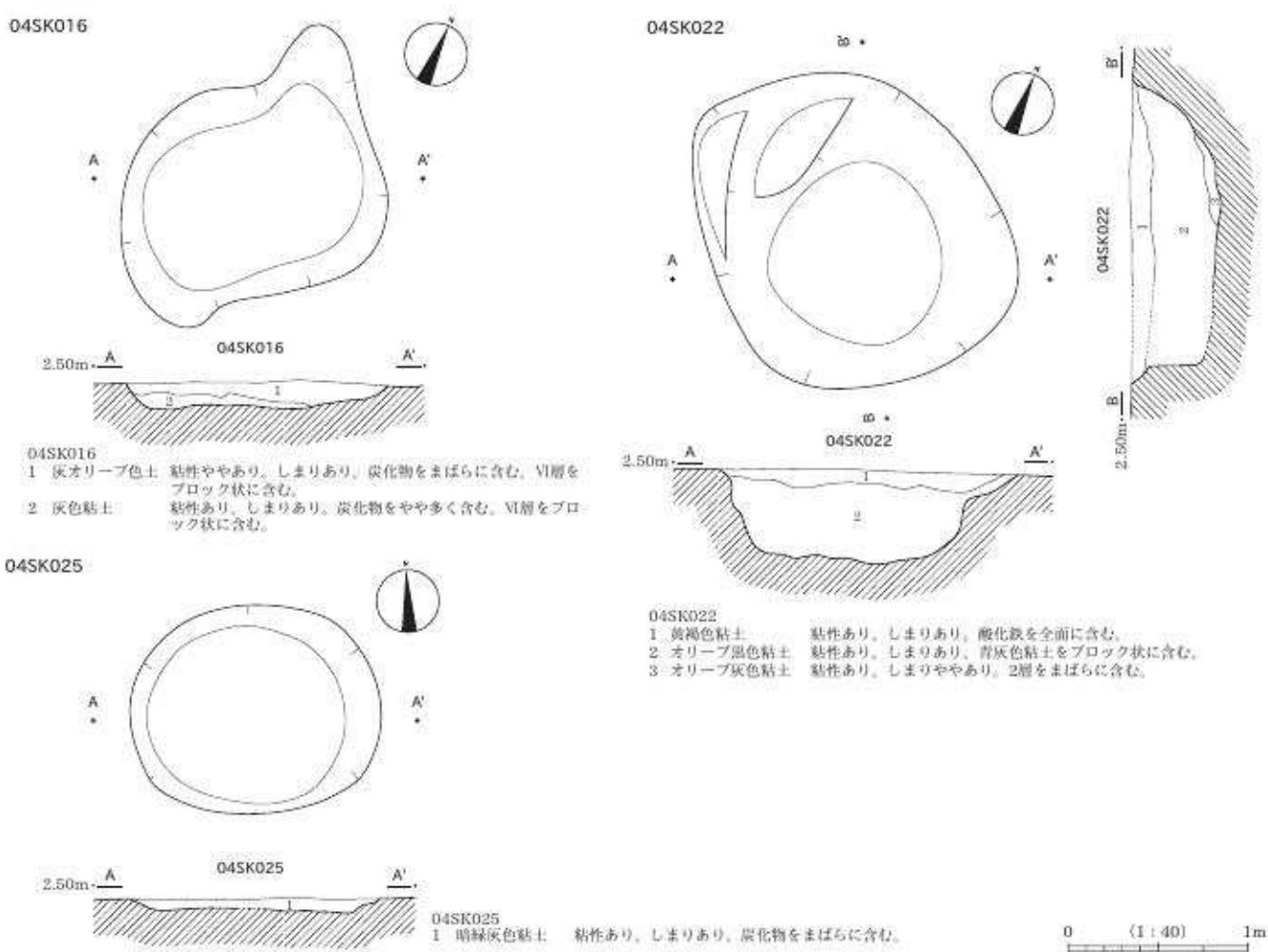
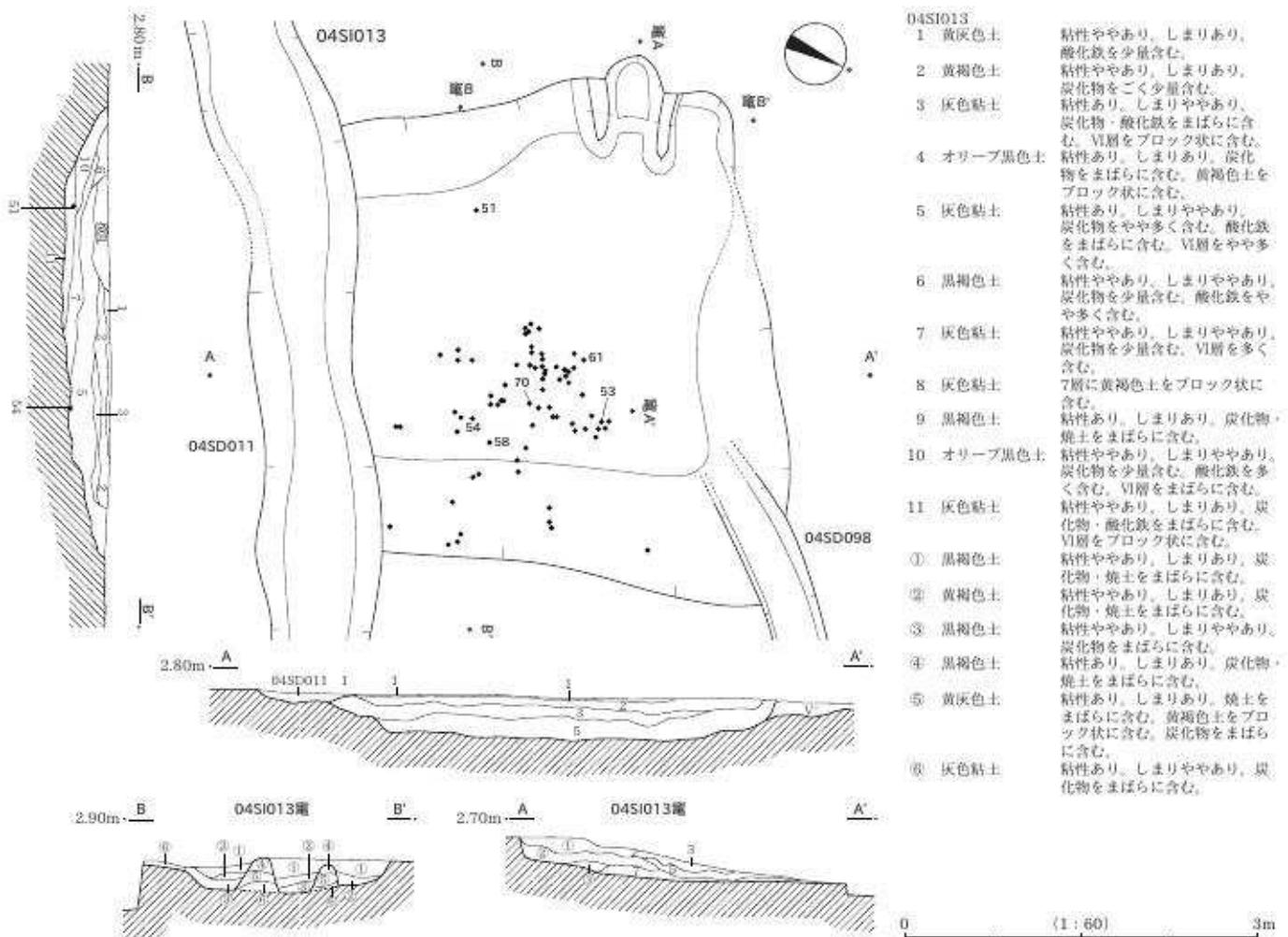
下冲北遺跡 下層分割図 (1)

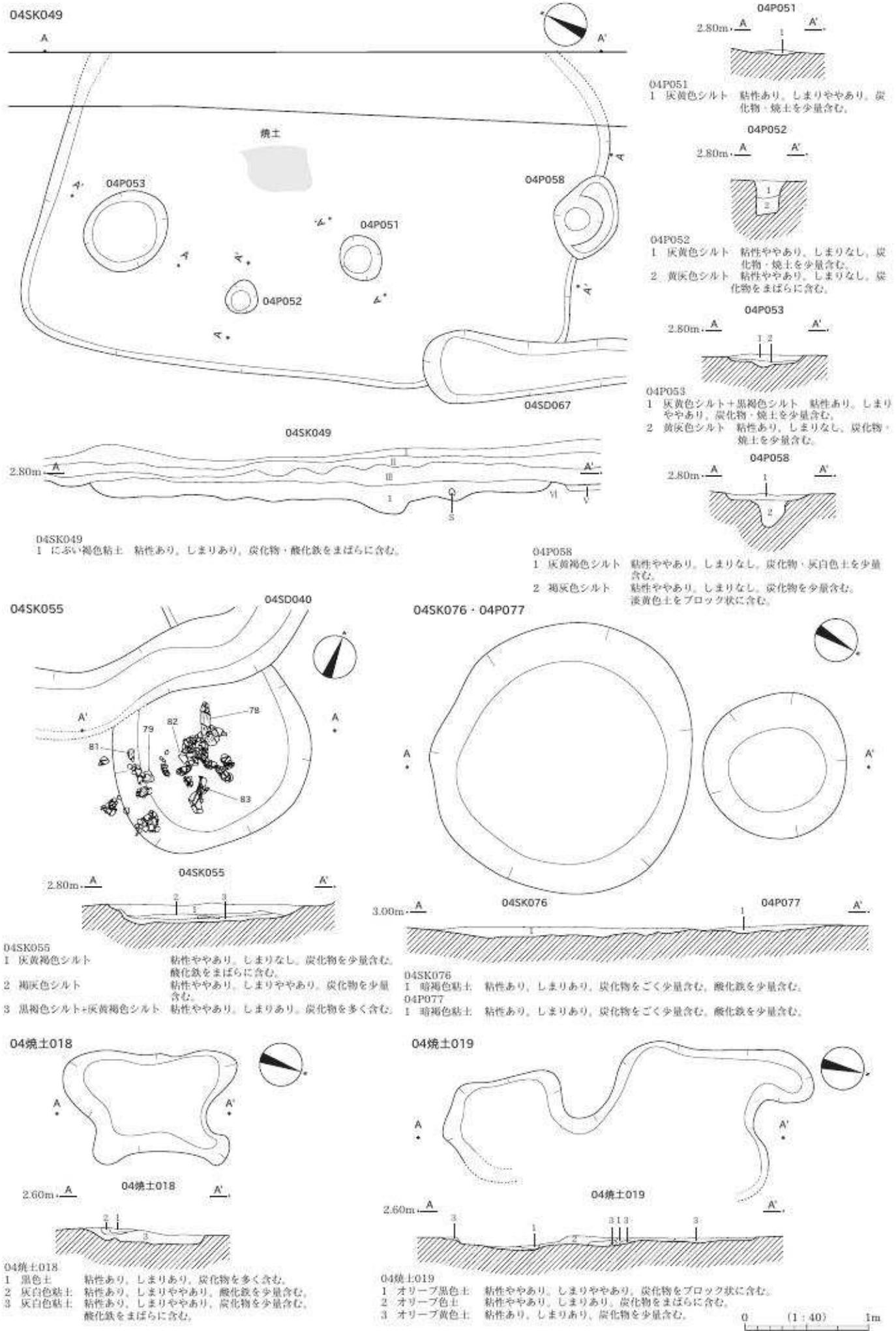
図版 63

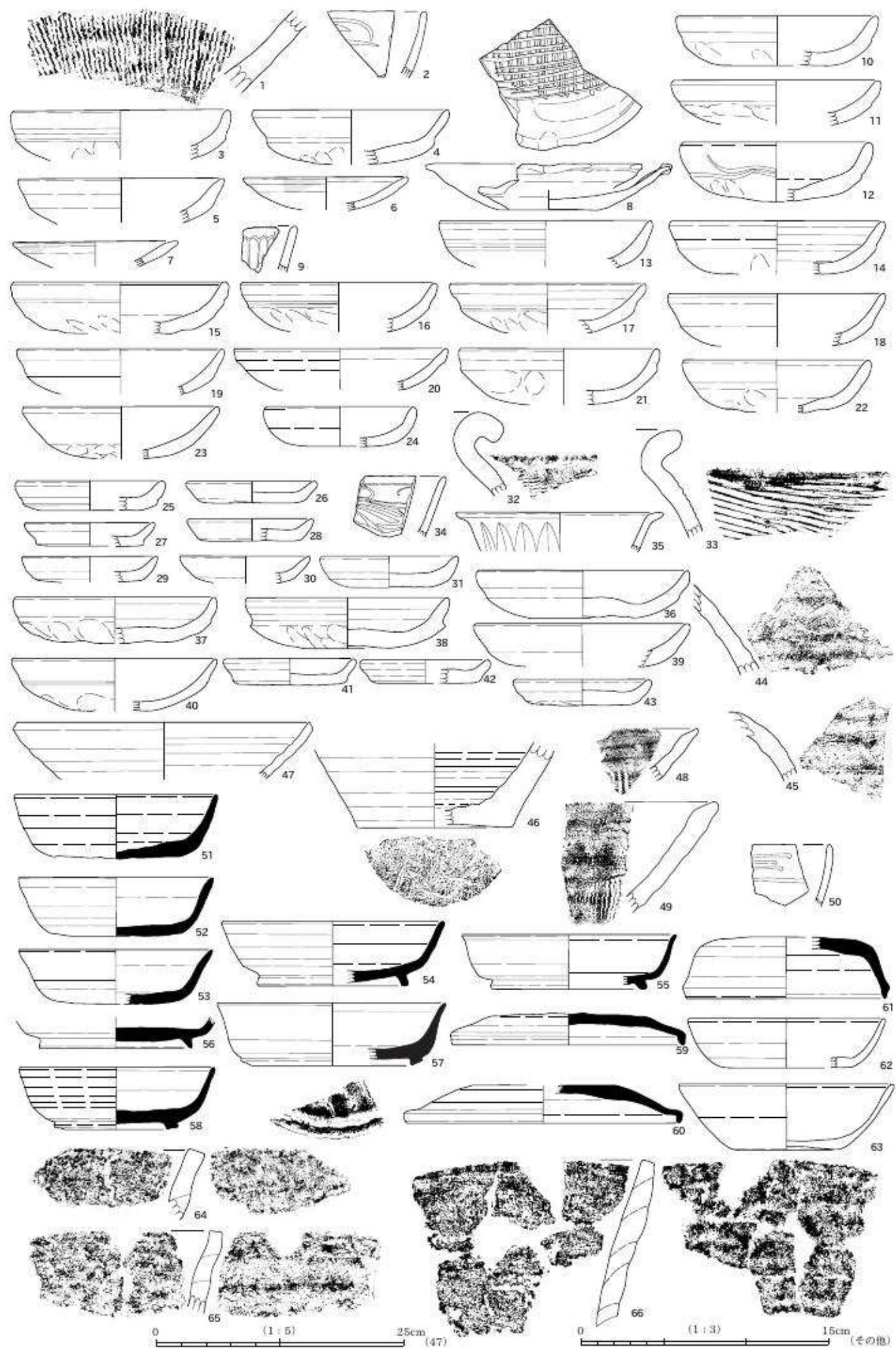


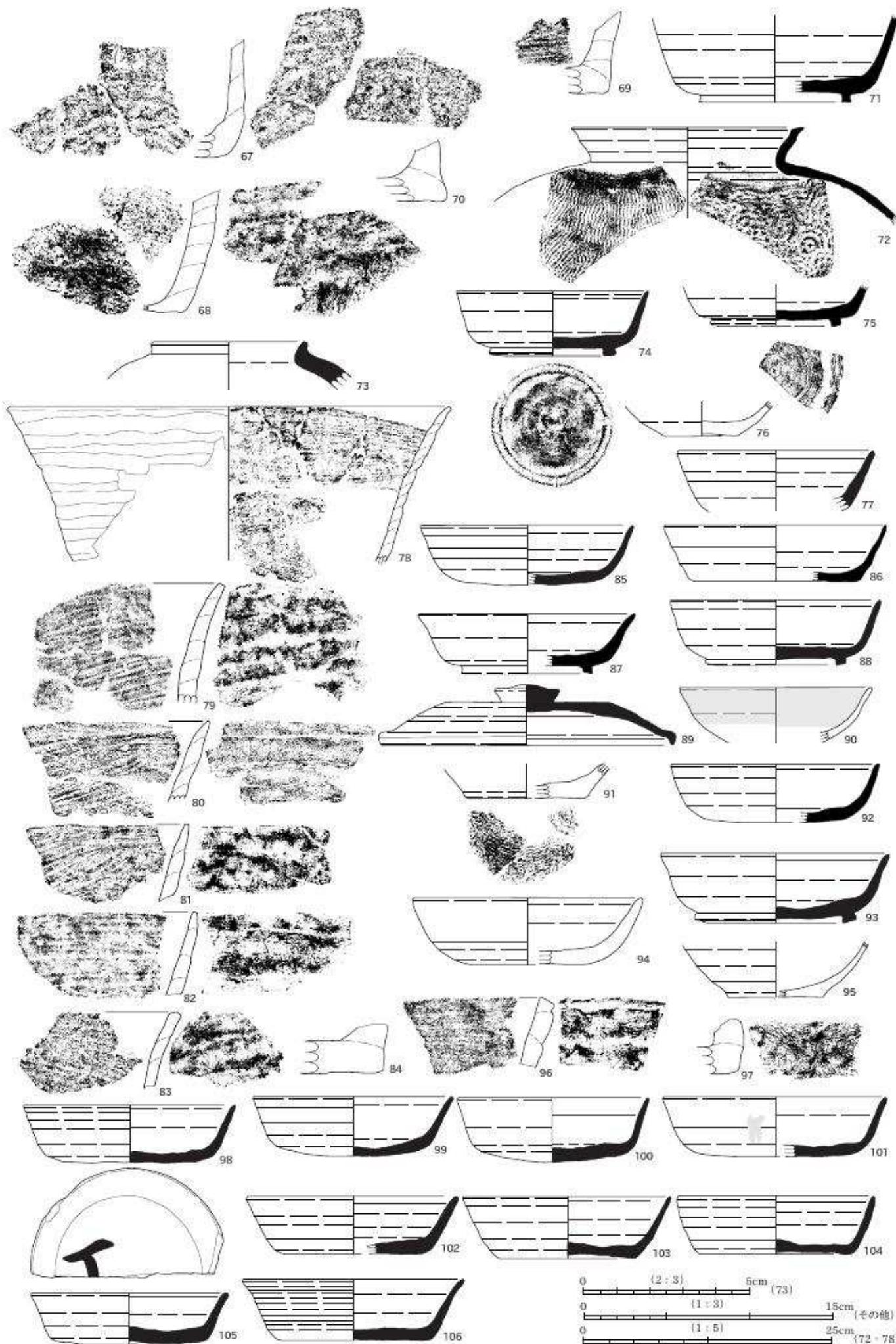


下沖北遺跡 下層個別図 (1)

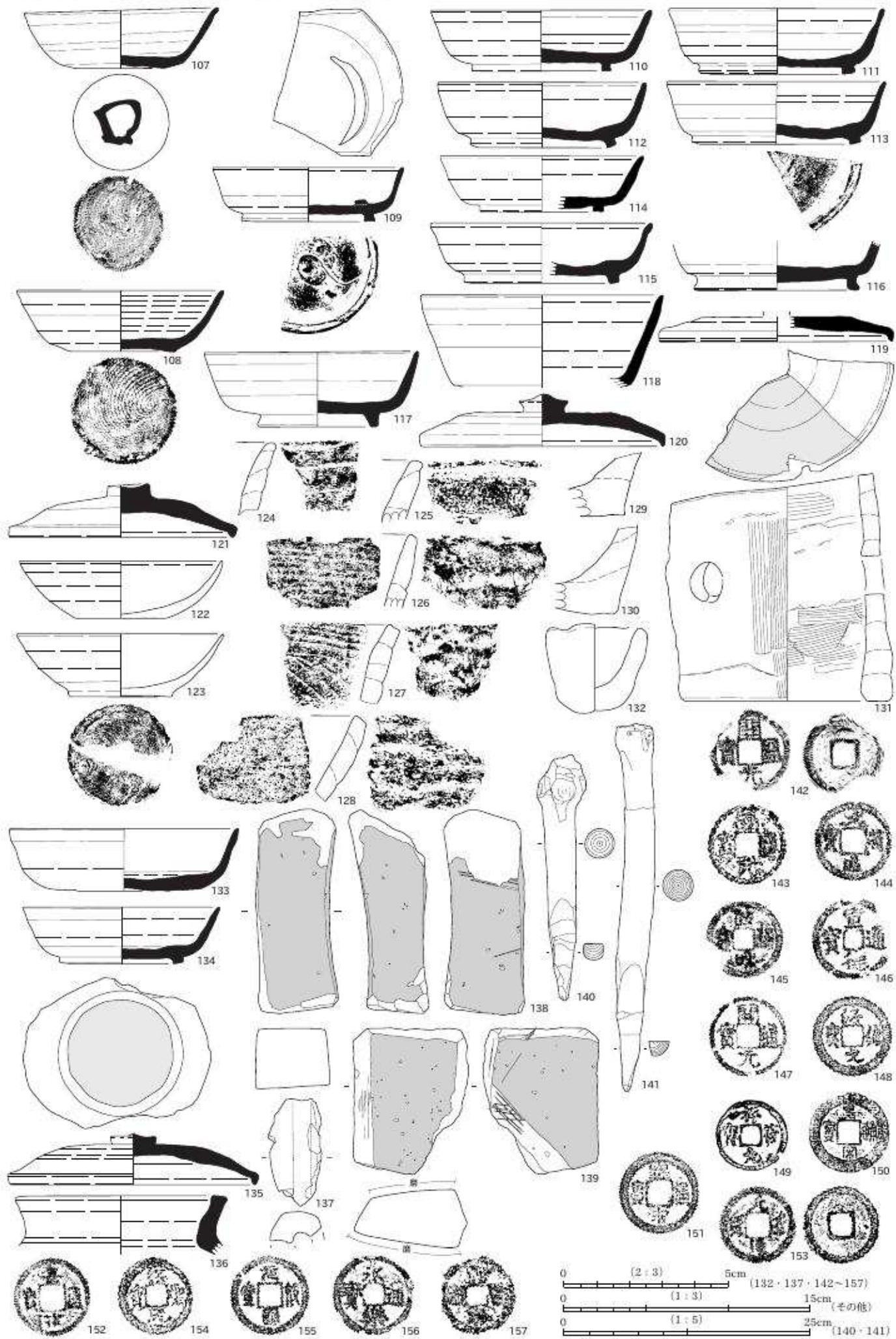








0 (2 : 3) 5cm (73)
0 (1 : 3) 15cm (その他)
0 (1 : 5) 25cm (72 - 78)

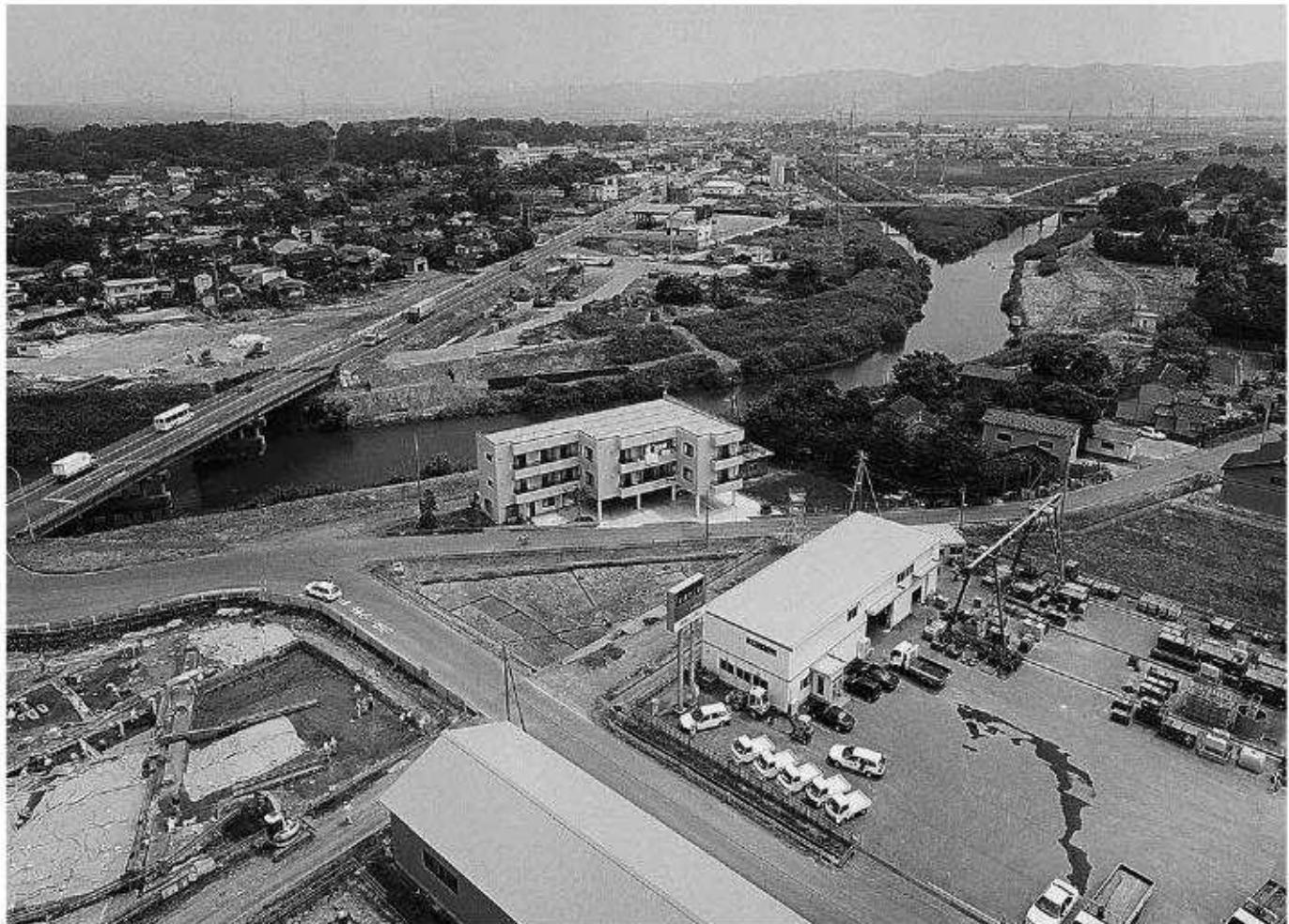




遺跡近景（北から 右は国道8号、奥は米山）



遺跡近景（南から）



遺跡近景（南西から 画面中央が鯖石川）



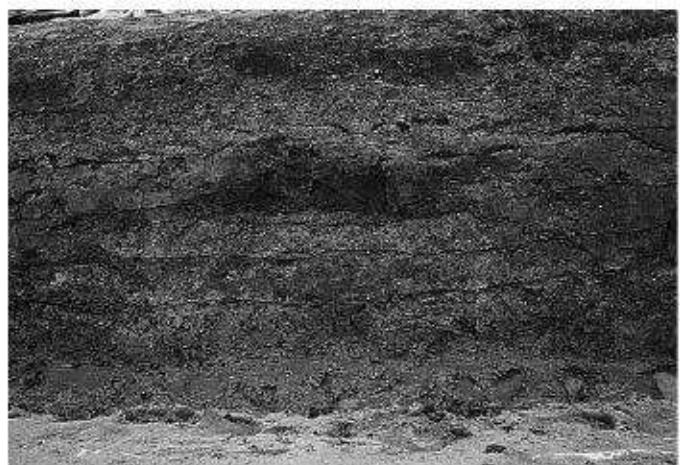
基本層序①（北東から）



基本層序②（北西から）



基本層序③（南西から）



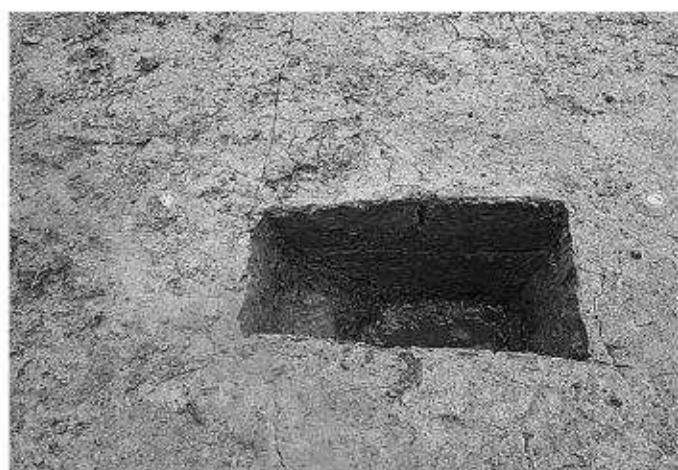
基本層序④（西から）



C区 上・中層（上空から）



SE124 完掘（西から）



SD457 断面A-A'（西から）



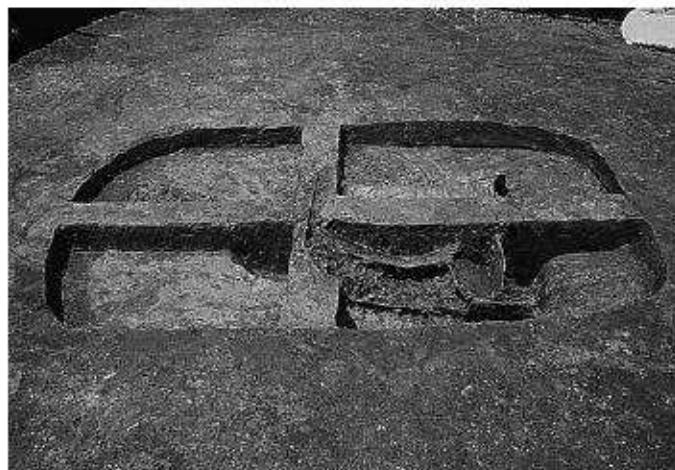
SD177 断面（南から）



SD177 完掘（南から）



SK012 完掘 (東から)



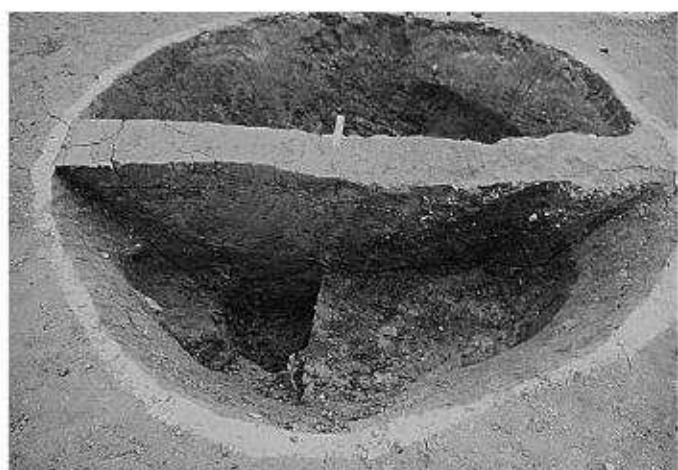
SK011 断面 (南から)



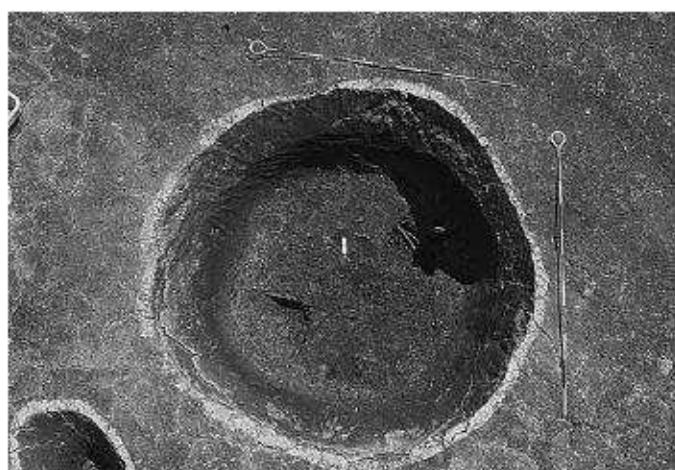
SK011 完掘 (東から)



SK011 出土状況 (西から)



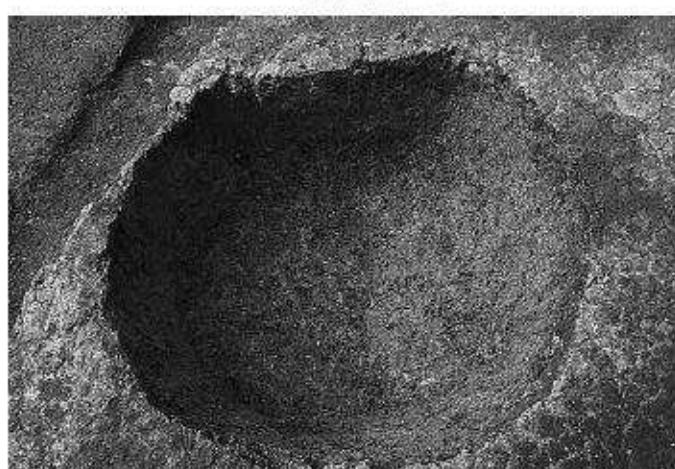
SK052 断面 (南から)



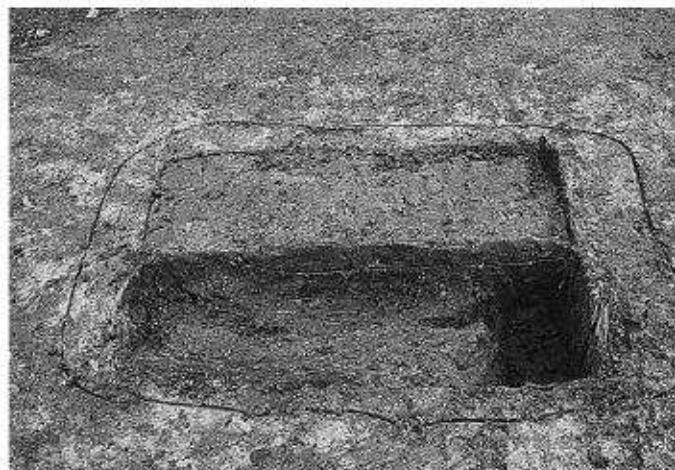
SK052 完掘 (北西から)



SK095 断面 (南から)



SK095 完掘 (南から)



SK111 断面 (西から)



SK111 完掘 (西から)



SK139 断面 B-B' (南から)



SK139 完掘 (西から)



SK458 断面 (北から)



SK458 完掘 (南から)



SK146 断面 (北東から)



A区 作業風景



B・C区 中層（上空から）



C区 中層（上空から）



SB1201 完掘（南から）



SB1202 完掘（上空から）



SE155 断面（南から）



SE183 完掘（西から）



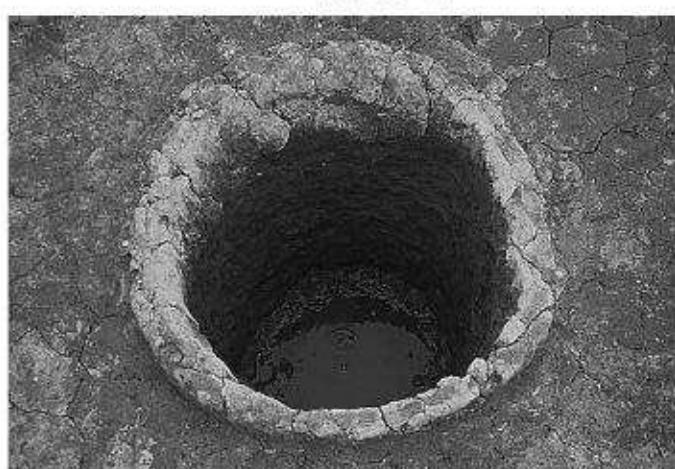
SE209 完掘（南から）



SE216 完掘（南から）



SE293 断面（南から）



SE293 完掘（南から）



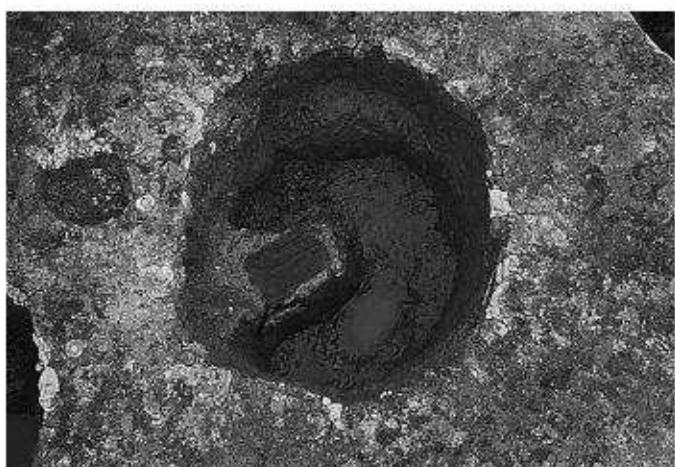
SE297 断面（南から）



SE297 完掘（南から）



SE401 完掘（南から）



SE402 完掘（南から）



SE403 断面（南から）



SE403 完掘（南から）



SE404 断面（南から）



SE404 完掘（南から）



SE451 断面（西から）



SE451 完掘（西から）



SE501 断面（南から）



SE514 完掘（北から）



SE513 断面（南から）



SE513 完掘（北から）



SE515 断面（南から）



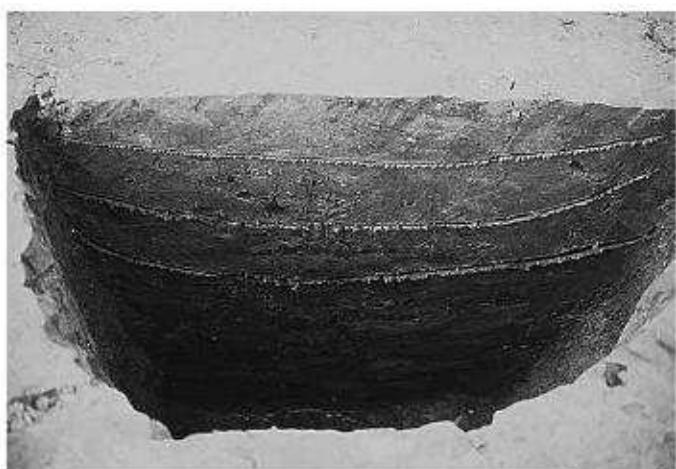
SE515 完掘（南から）



SE520 断面（南から）



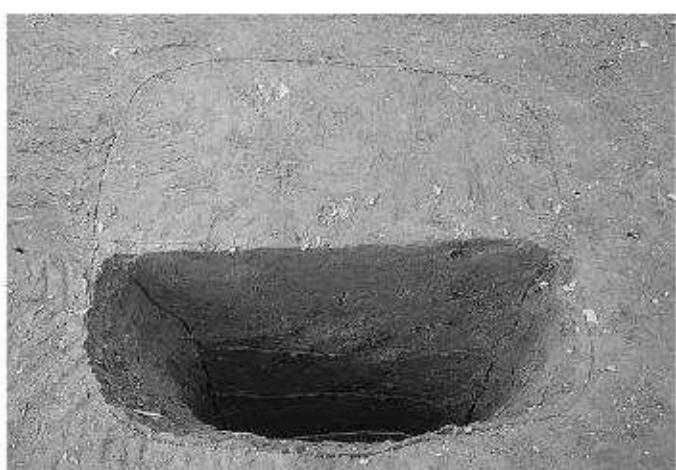
SE520 完掘（南から）



SE523 断面（南から）



SE523 完掘（南から）



SE550 断面（東から）



SE579 完掘（南から）



SE916 断面（南から）



SE916 完掘（南から）



SD072 断面 B-B' (東から)



SD108 断面 (南から)



SD214 断面 (西から)



SD215 断面 (西から)



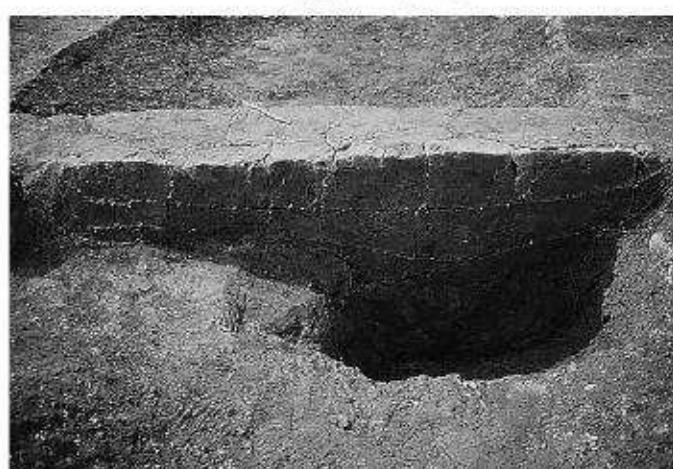
SD303 断面 B-B' (西から)



SD303 断面 C-C' (西から)



SD407 断面 A-A' (西から)



SD407 断面 B-B' (東から)



SD593 断面（東から）



SD595 断面（東から）



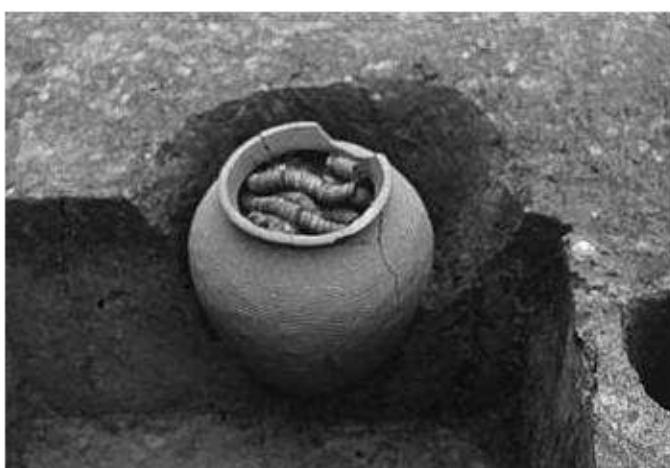
盛土 断面A-A'（南西から）



盛土・SD213 断面B-B'（西から）



SK090 出土状況（西から）



SK090 断面A-A'（西から）



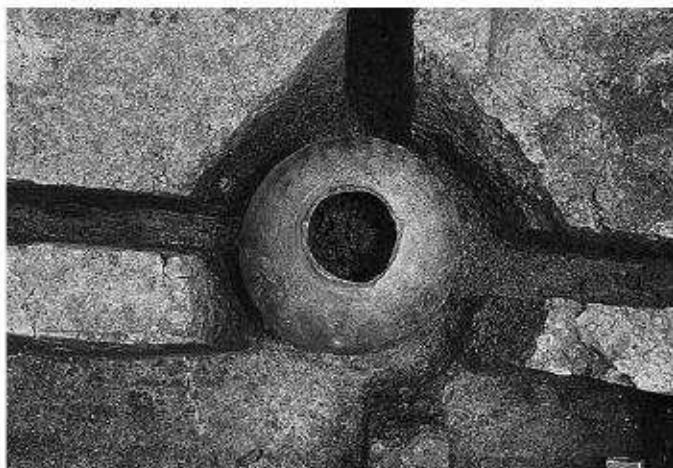
SK090 完掘（南西から）



SK109 完掘（南から）



SK069 断面 A-A' (西から)



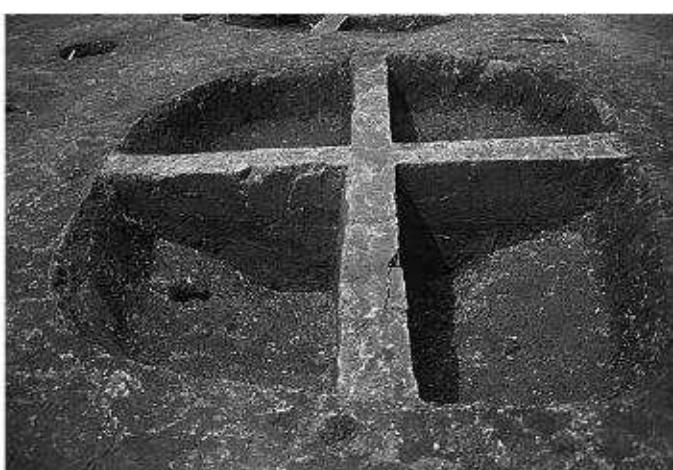
SK069 完掘 (南から)



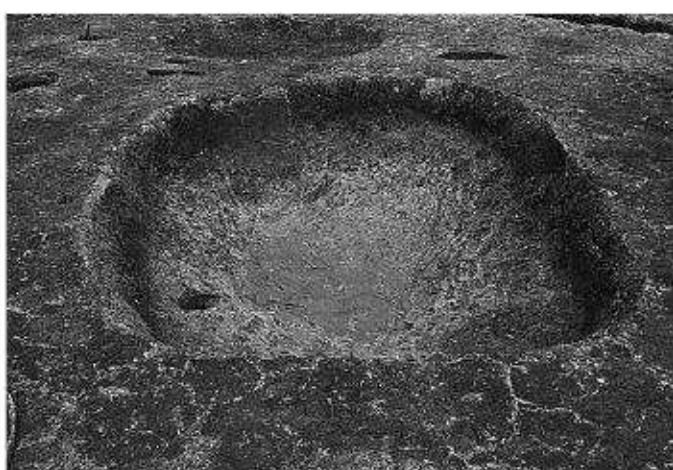
SK110 断面 (南から)



SK125 断面 A-A' (西から)



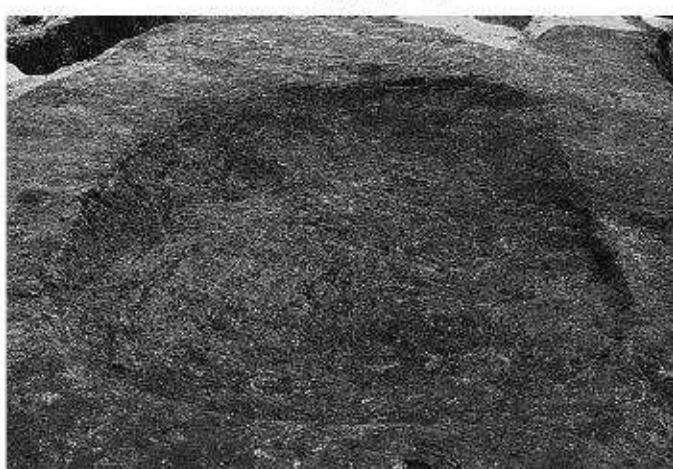
SK125 断面 B-B' (南から)



SK125 完掘 (南から)



SK126 断面 A-A' (西から)



SK126 完掘 (南から)



SK138 完掘 (西から)



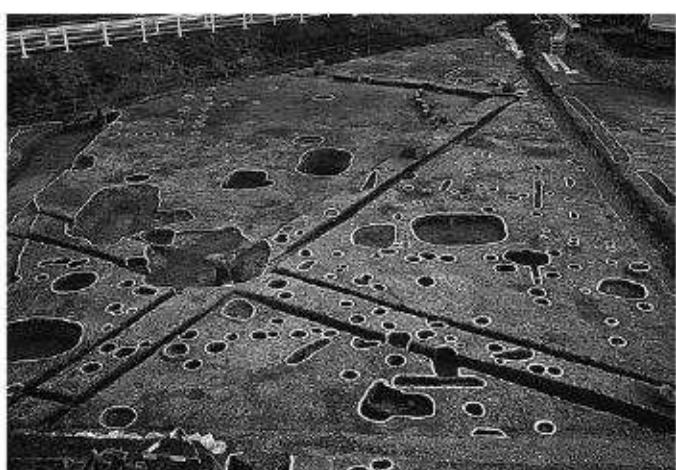
SK162 出土状況 (西から)



SK162 断面 (南から)



SK162 完掘 (北から)



B区 中層 (西から)



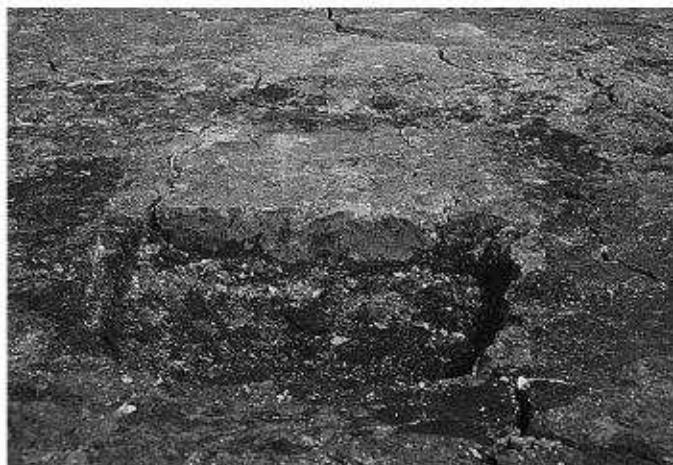
SK184・198・199 完掘 (西から)



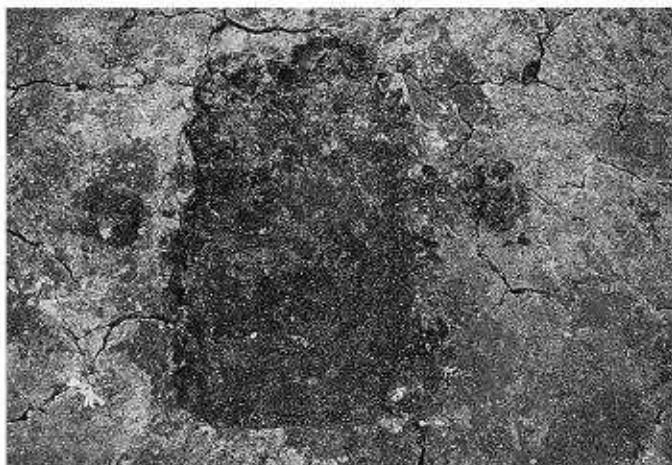
SK420 断面 (西から)



SK420 完掘 (西から)



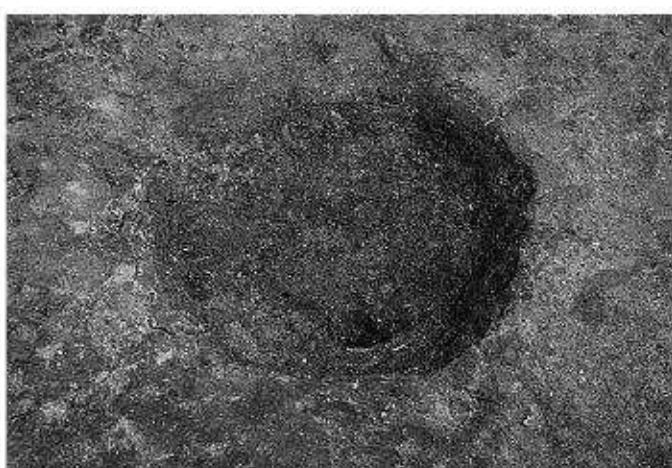
SK508 断面（南から）



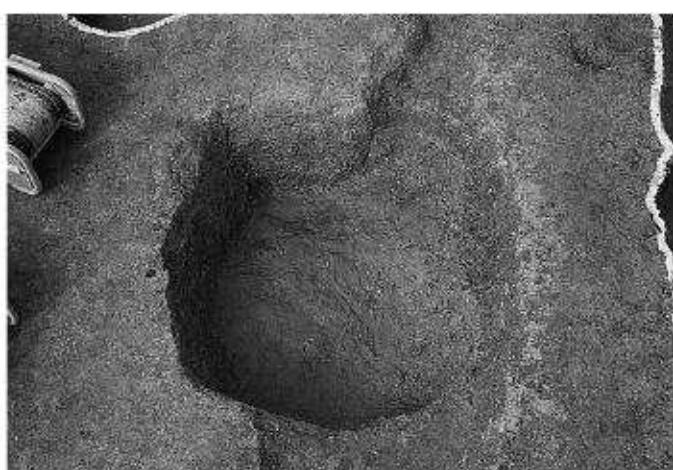
SK508 完掘（南から）



SK512 断面（南から）



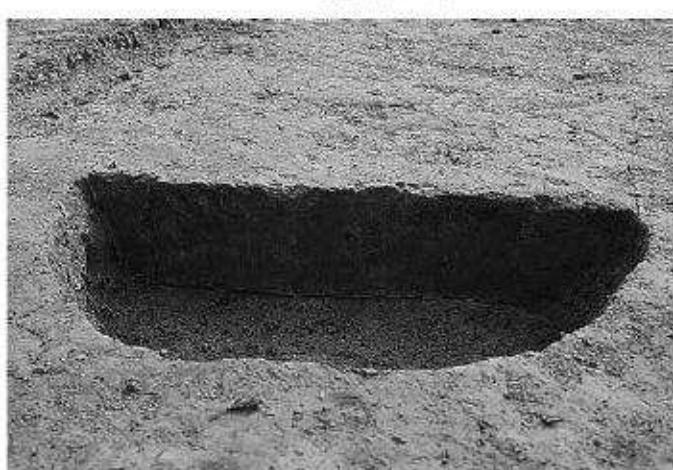
SK512 完掘（南から）



SK652 完掘（東から）



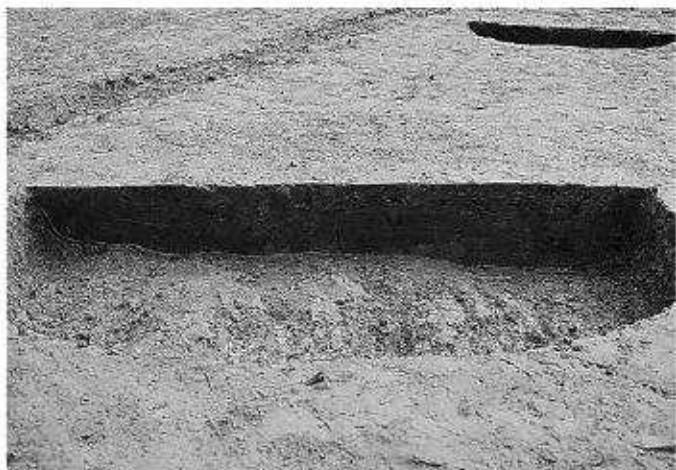
SK655 完掘（南から）



SK671 断面（北から）



SK671 完掘（北から）



SK672 剖面 (北から)



SK672 完掘 (北から)



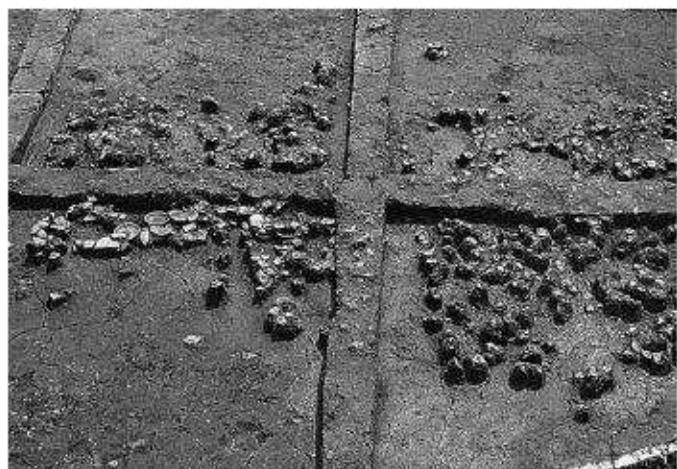
11N周辺の歎跡 剖面 (南から)



120周辺の歎跡 剖面 (西から)



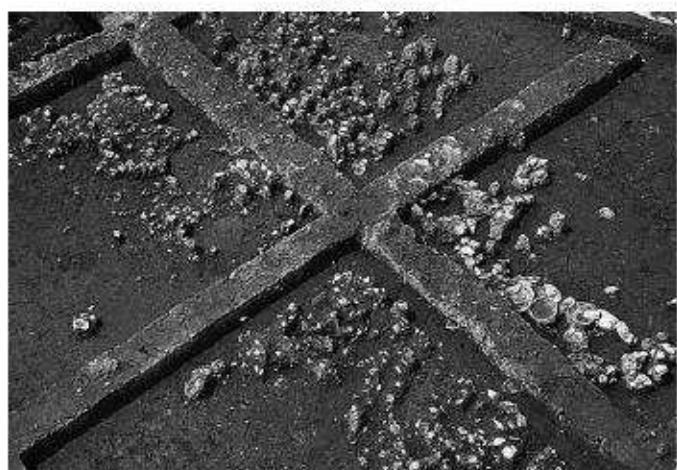
131周辺の歎跡 (東から)



SX091 検出状況 (東から)



SX091 検出状況 (南から)



SX091 検出状況 (南西から)



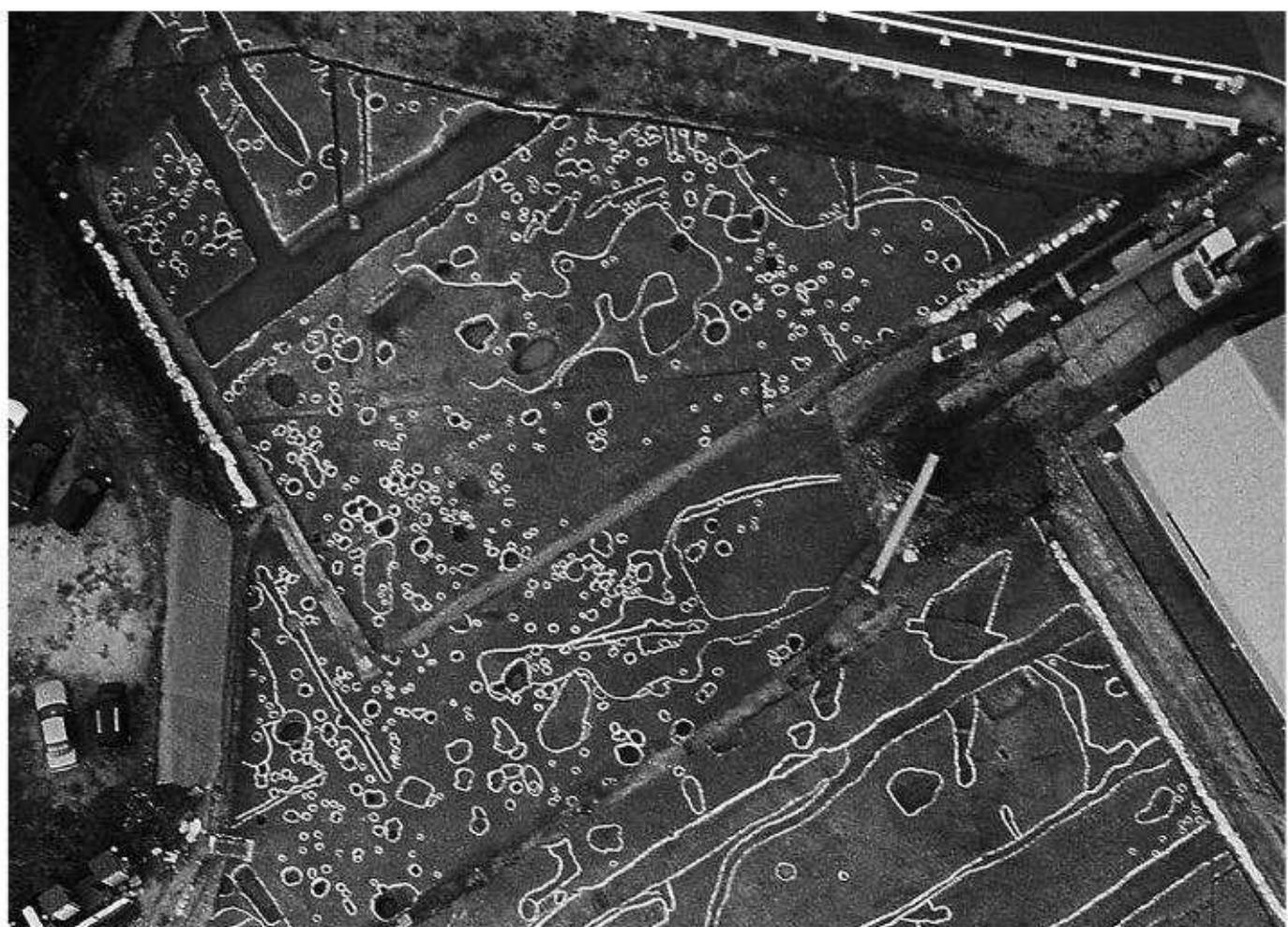
B・C区 下層（上空から）



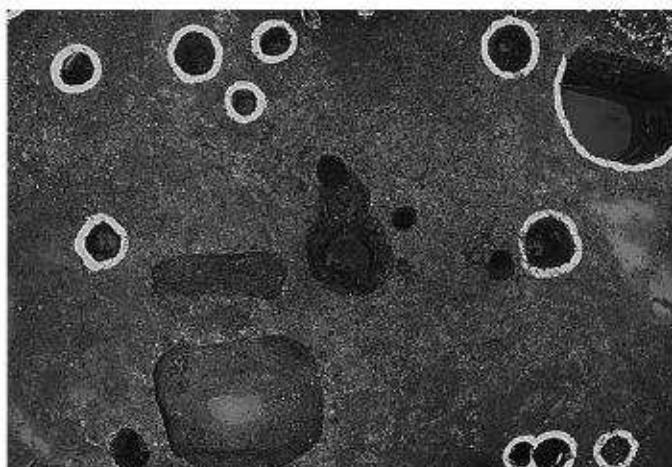
D区 下層（上空から）



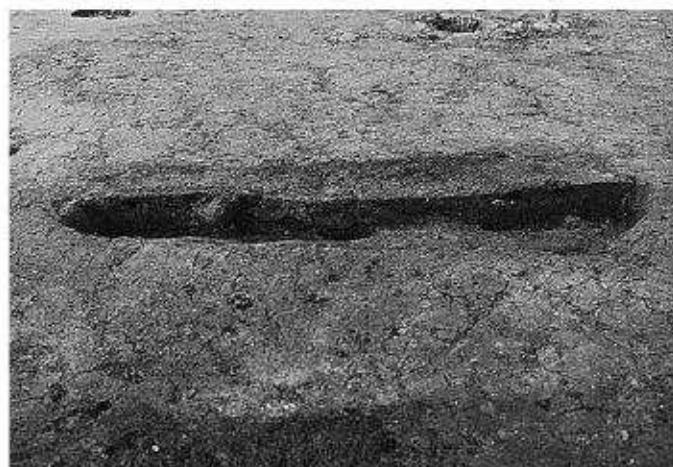
A区 下層（上空から）



B区 下層（上空から）



SB1203 完掘 (南から)



SK094 断面 (南から)



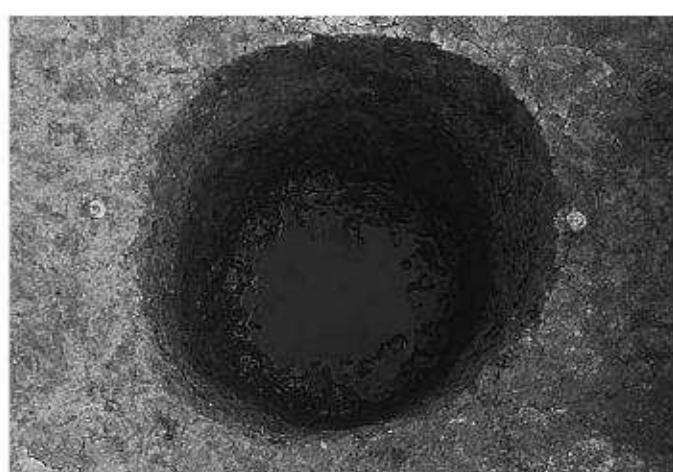
SK097 断面 A-A' (南から)



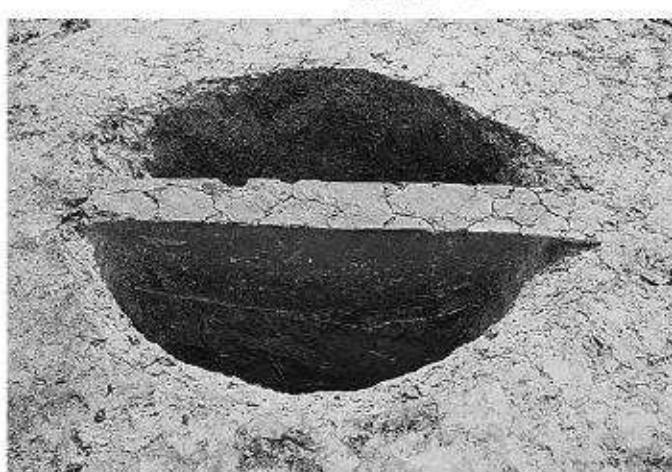
SK097 完掘 (南から)



SK094・107 完掘 (南から)



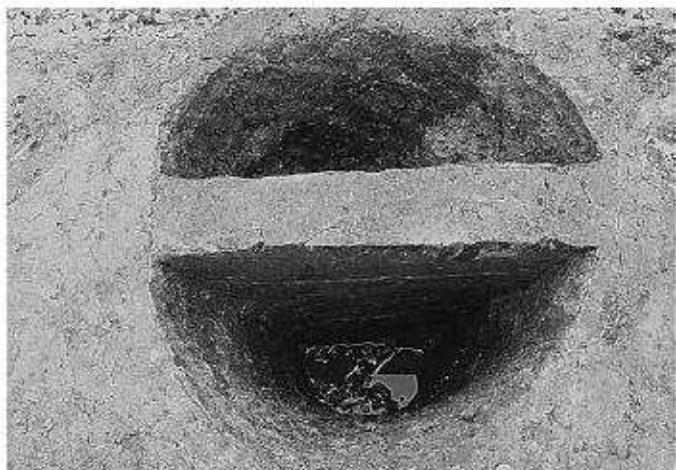
SE103 完掘 (北から)



SE735 断面 (西から)



SE735 完掘 (西から)



SE764 断面（北から）



SE764 完掘（北から）



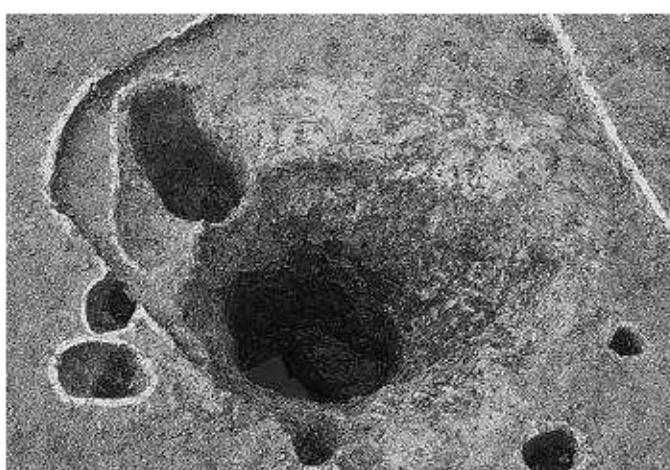
SE771 断面（東から）



SE778 断面（東から）



SE774 断面（北から）



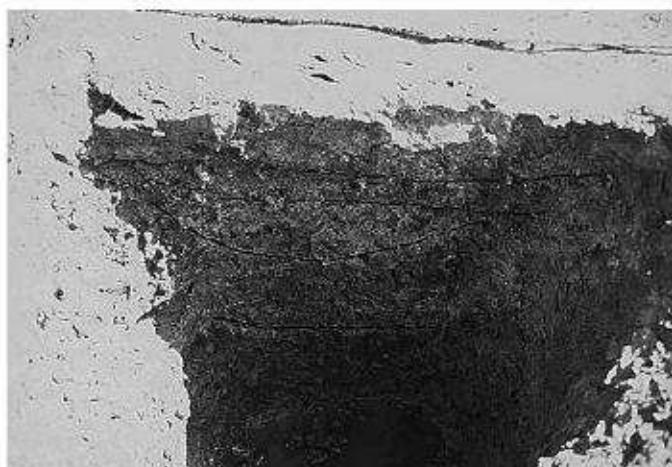
SE774 完掘（南から）



SE775 断面（西から）



SE775 完掘（西から）



SE902 断面（西から）



SE902 完掘（南から）



SE911 断面（南から）



SE911 完掘（南から）



04SE051 断面（南から）



04SE051 完掘（南から）



SD510 断面（西から）



SD904 断面 C-C'（南から）



SK096 剖面（南から）



SK106 出土状況（南から）



SK106 剖面 A-A'（東から）



SK106 剖面 B-B'（南から）



SK604 剖面（南から）



SK604 完掘（東から）



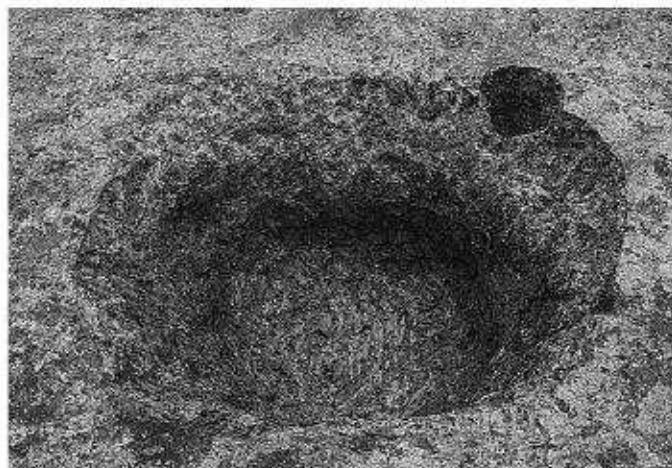
SK744 剖面（南から）



SK744 完掘（南から）



SK754 断面（南から）



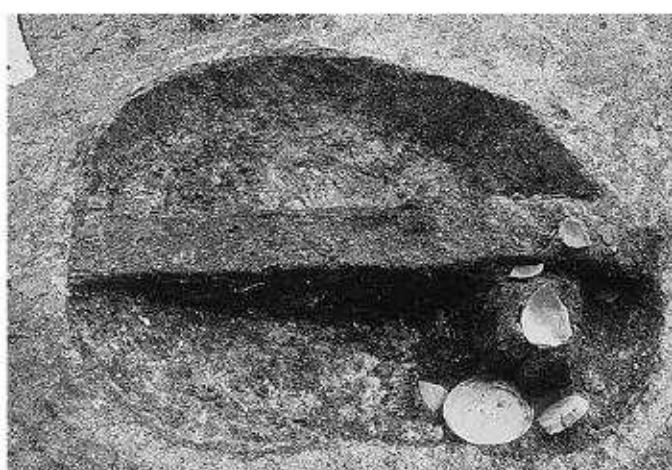
SK754 完掘（南から）



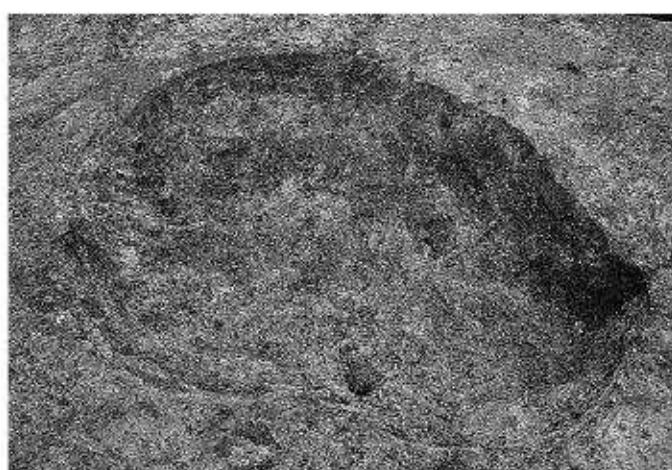
SK756 断面（南から）



SK756 完掘（西から）



SK759 断面（西から）



SK759 完掘（北西から）



SK770 断面（西から）



SK770 完掘（西から）



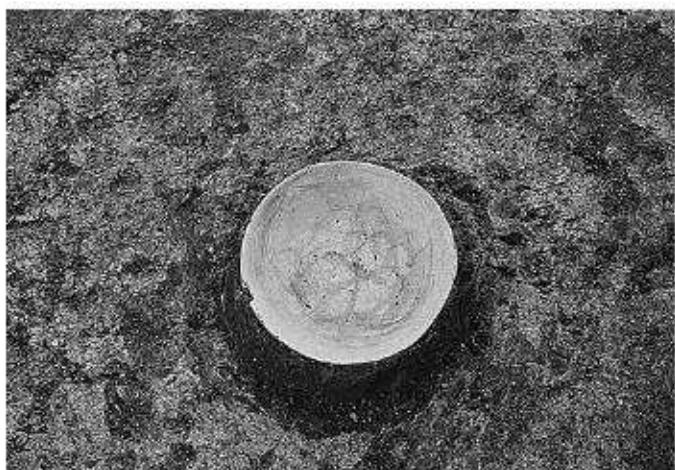
SK915 剖面（南から）



SK915 完掘（南から）



4JP18 完掘（北から）



6JP100 出土状況（北から）



6IP90 剖面（南から）



6IP90 完掘（南から）



C区 作業風景

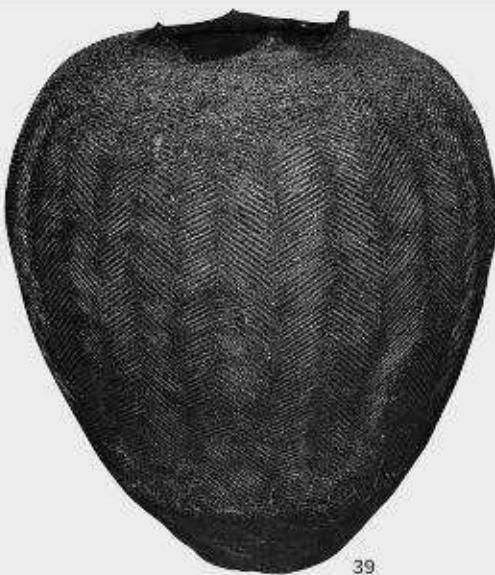


D区 作業風景





37



39



38



40



41



42



43



44



45



46



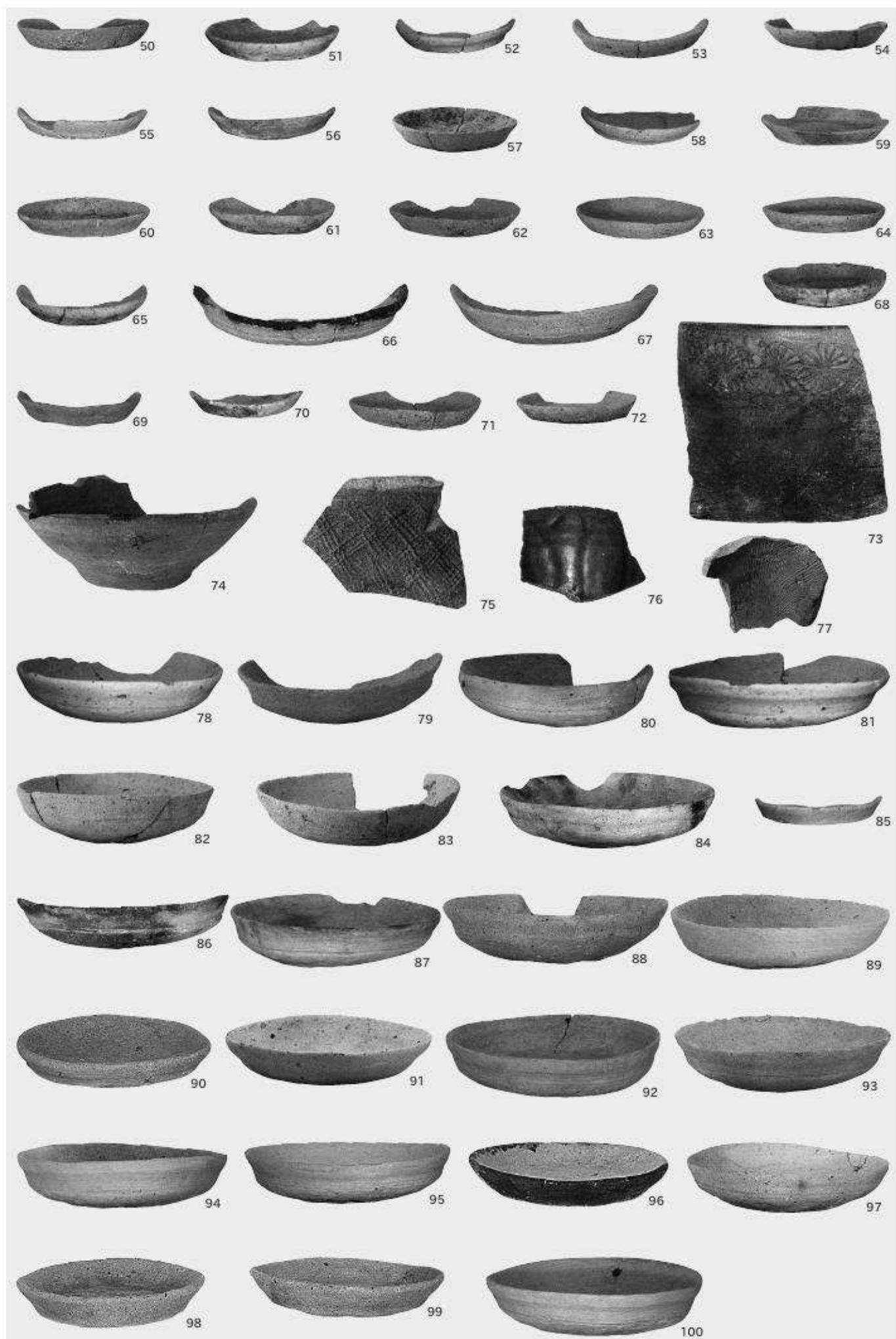
47

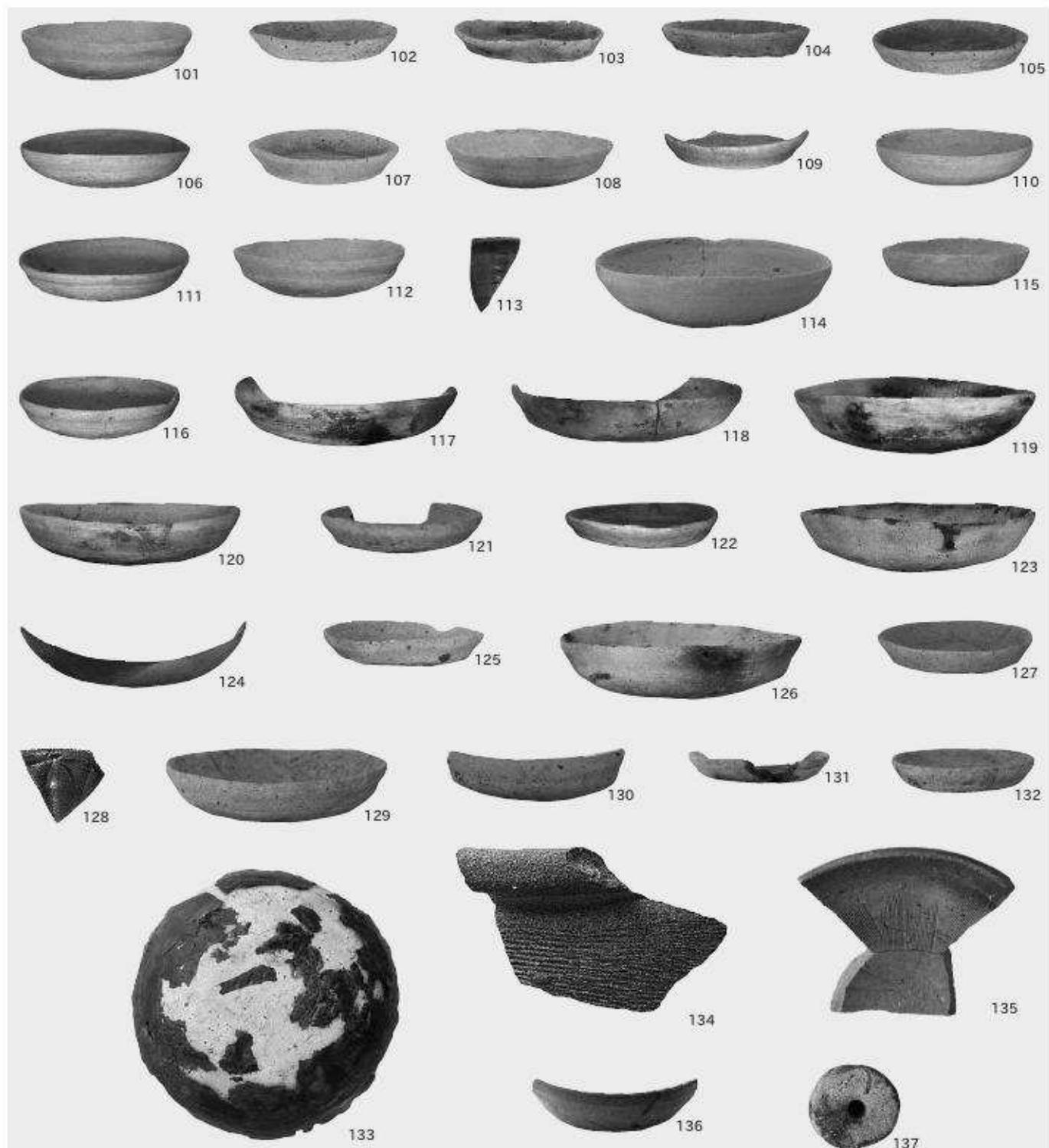


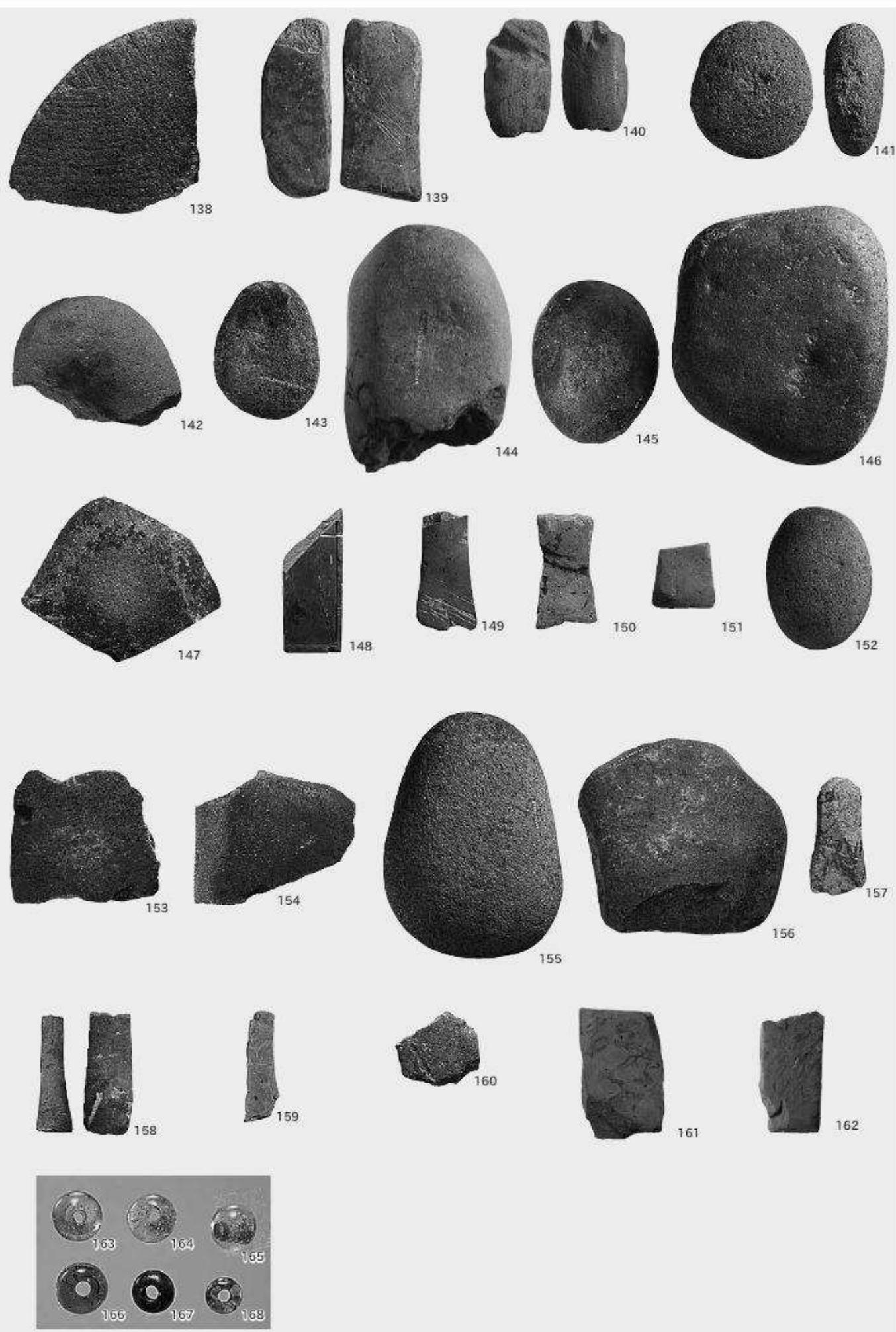
48



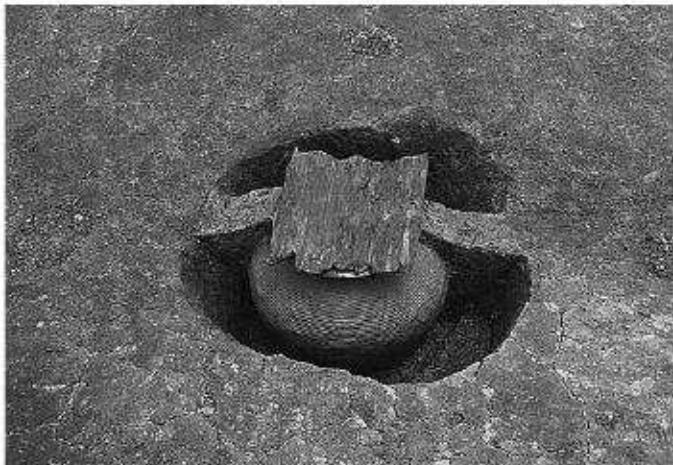
49







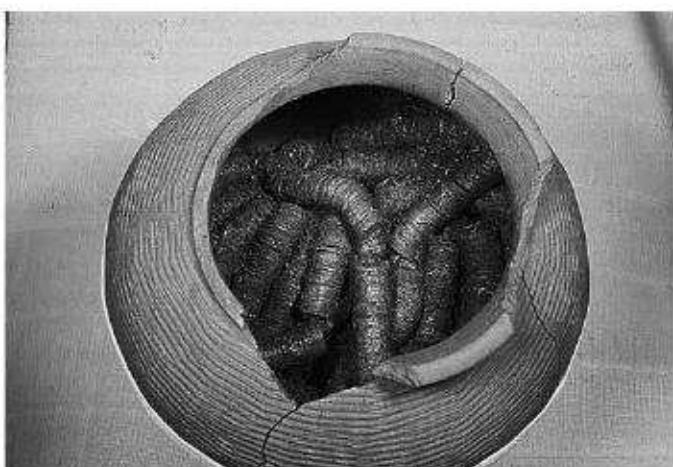




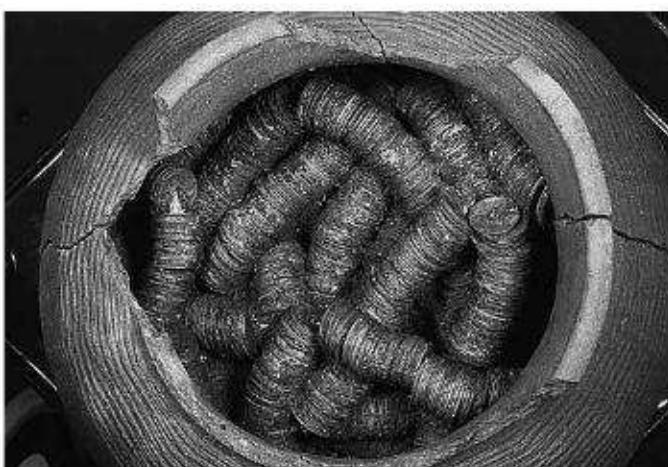
SK090 検出状況



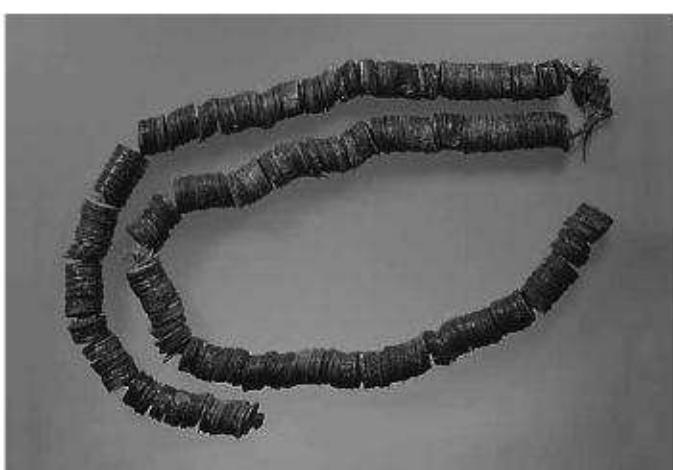
鉄貨埋納状況



鉄貨埋納状況



鉄貨埋納状況



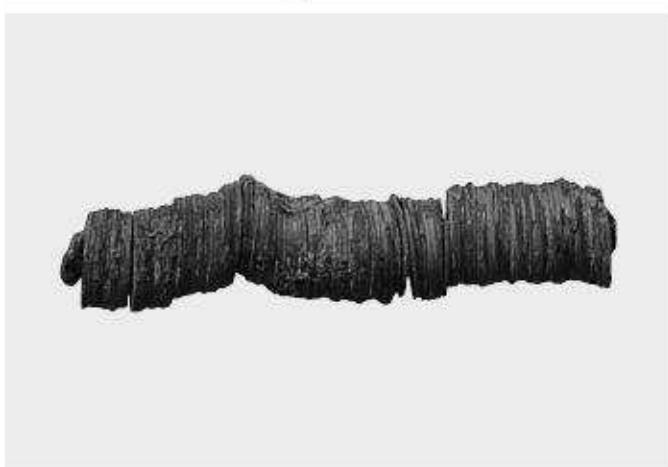
縄28・29



縄32・33



縄19



縄7



235



235



236



237



238



239



240



241



242



243



244



245



246



247



遺跡近景（東から）



3区上層（南から）



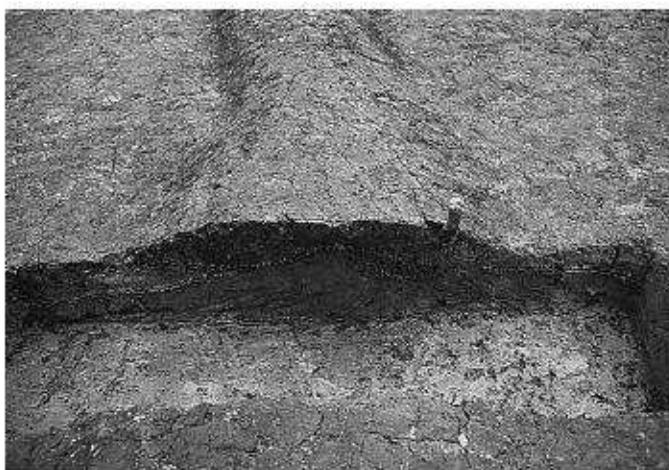
基本層序① (南から)



基本層序⑩ (西から)



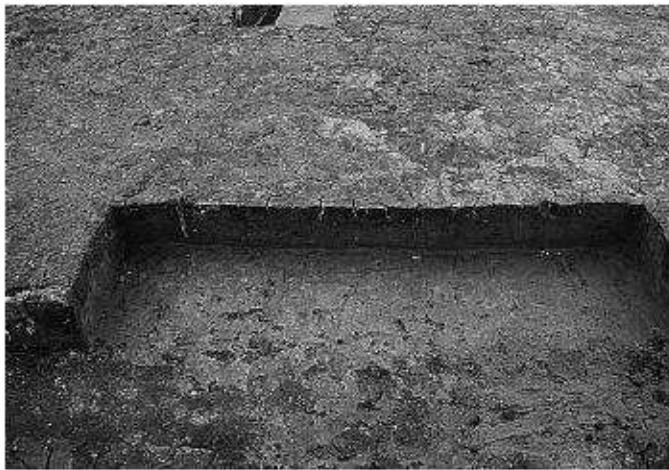
04SD020 断面 (南から)



22J10杭 断面 (西から)



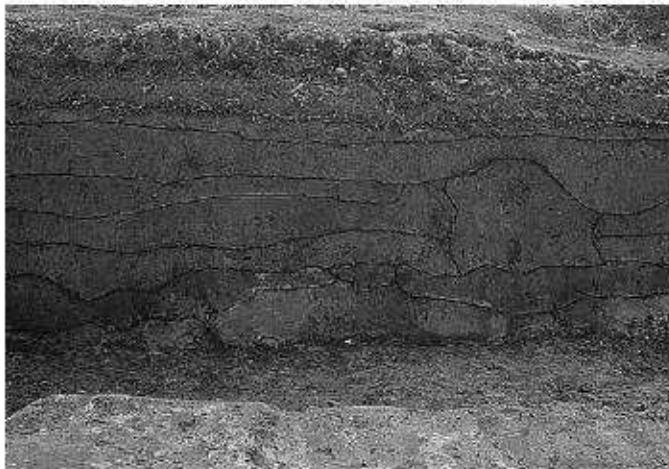
23J12杭 断面 (西から)



23I3杭 断面 (南から)



畦畔 断面 D-D' (南から)



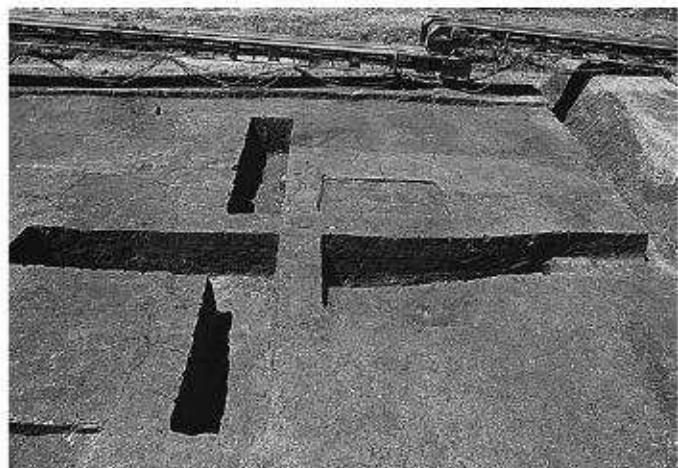
畦畔 断面 E-E' (北から)



3区西側 下層（上空から）



4区 下層（上空から）



04SI013 断面 A-A' (東から)



04SI013 断面 B-B' (西から)



04SI013 窑 断面 A-A' (西から)



04SI013 窯 断面 B-B' (西から)



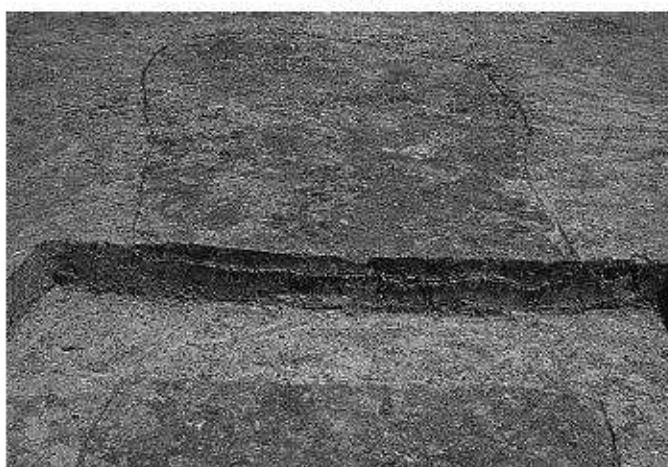
04SI013 窯 断面 (西から)



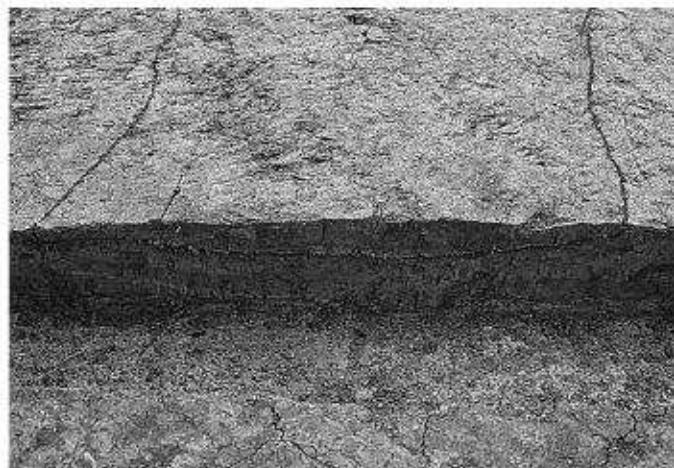
04SI013 完掘 (東から)



04SD008 断面 (西から)



04SD009 断面 (西から)



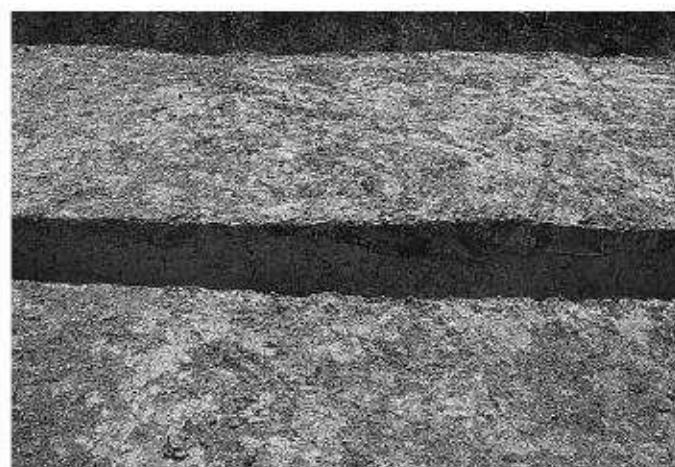
04SD015 断面（北東から）



04SD035 断面（西から）



04SD036 断面（東から）



04SD039・093 断面（北から）



04SD040 断面A-A'（西から）



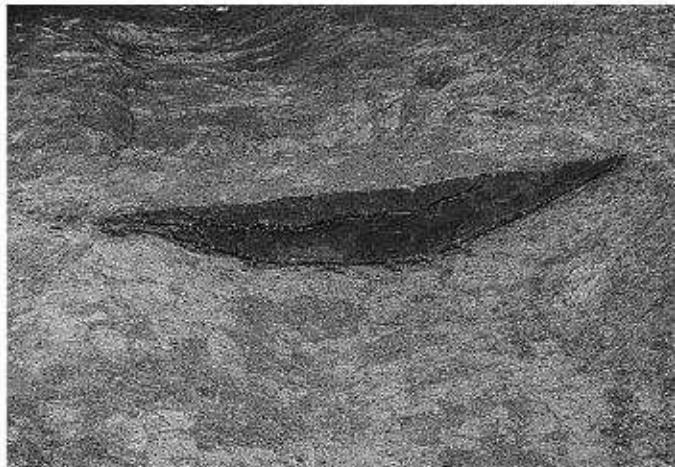
04SD043 断面（東から）



04SD042 断面（北から）



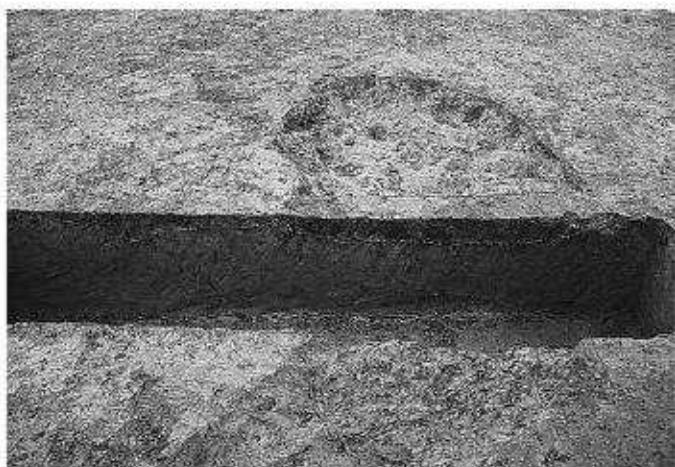
04SD040・054 完掘（北から）



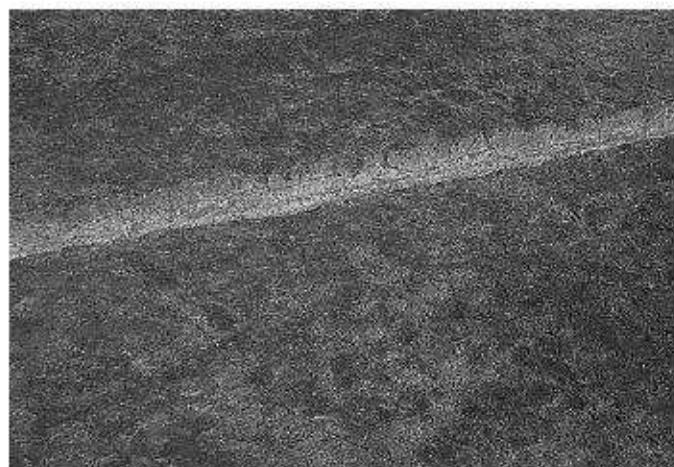
04SD054 断面 A-A' (東から)



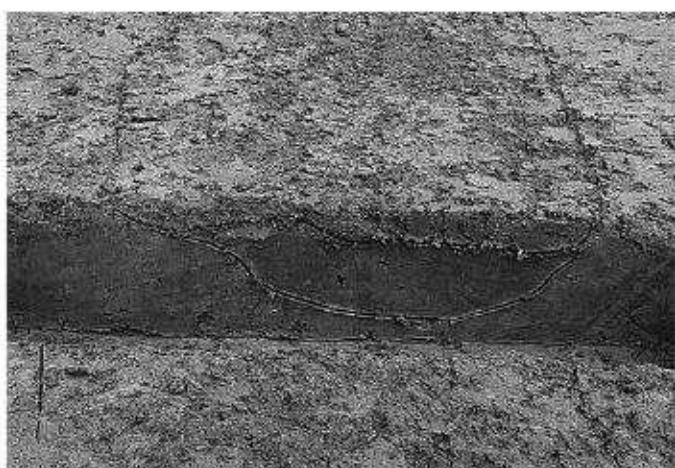
04SD054 断面 B-B' (西から)



04SD056 断面 (西から)



04SD063 断面 (南から)



04SD074 断面 (南東から)



04SD063・074 完掘 (上空から)



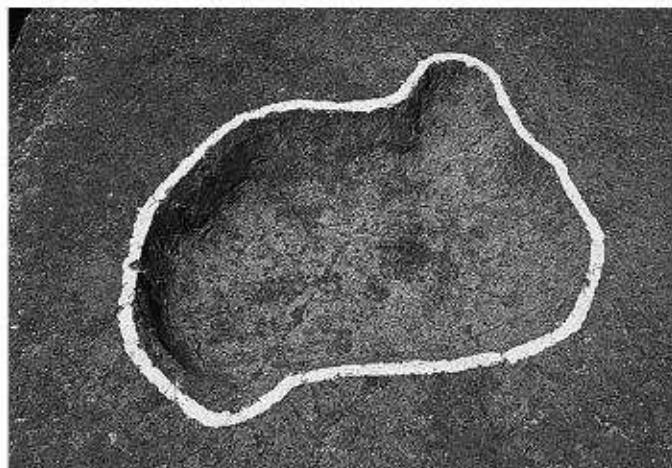
04SD090 断面 (南から)



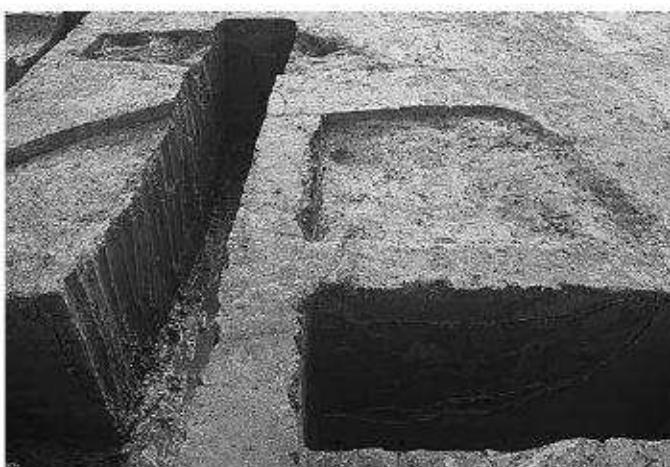
04SD097 断面 (東から)



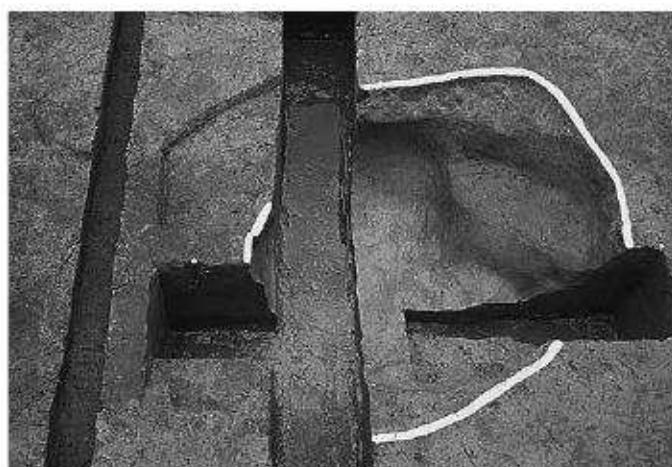
04SK016 断面（南から）



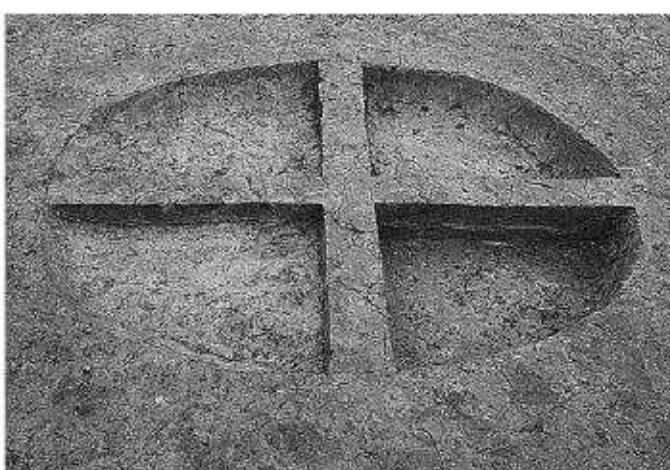
04SK016 完掘（南から）



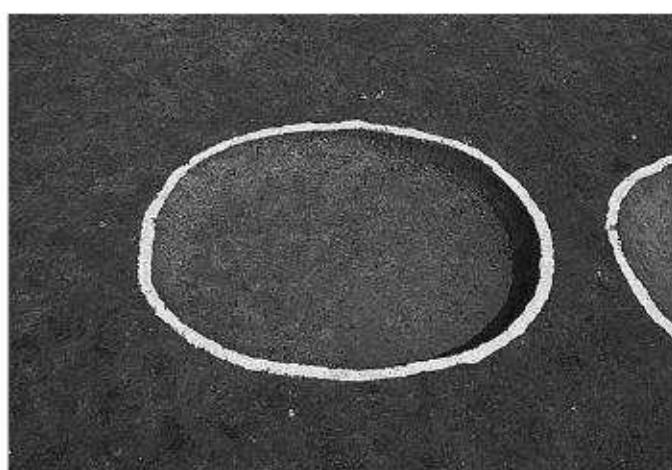
04SK022 断面 B-B'（東から）



04SK022 完掘（東から）



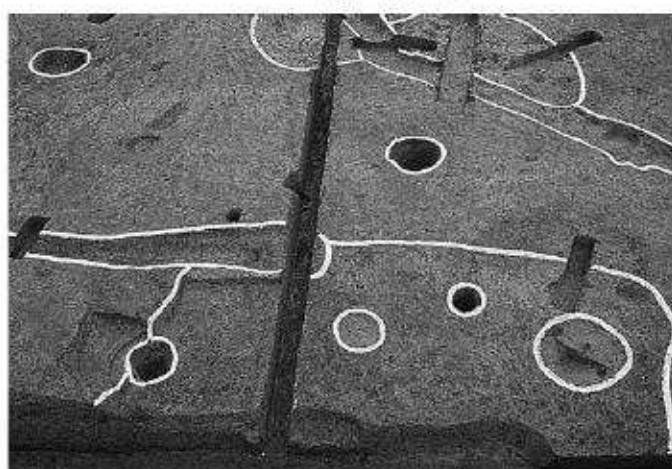
04SK025 断面（南西から）



04SK025 完掘（南西から）



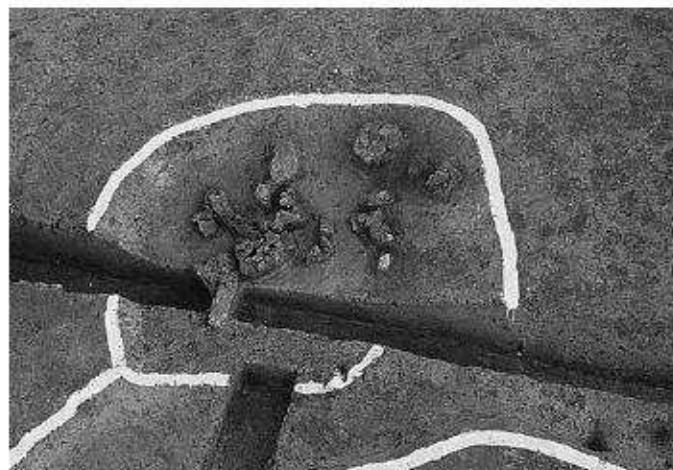
04SK049 断面（南から）



04SK049 完掘（東から）



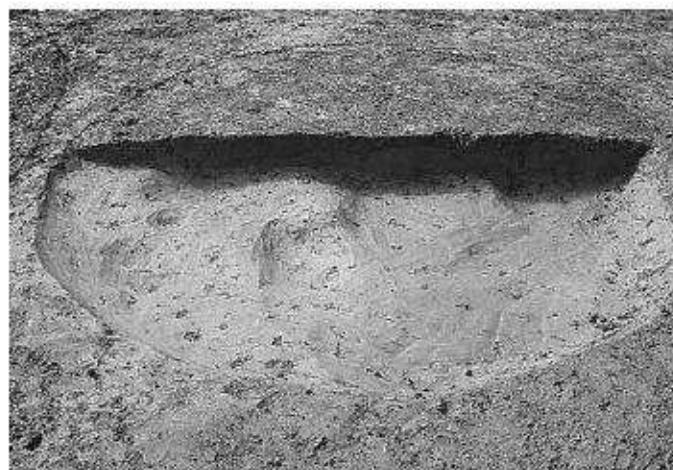
04SK055 断面（北から）



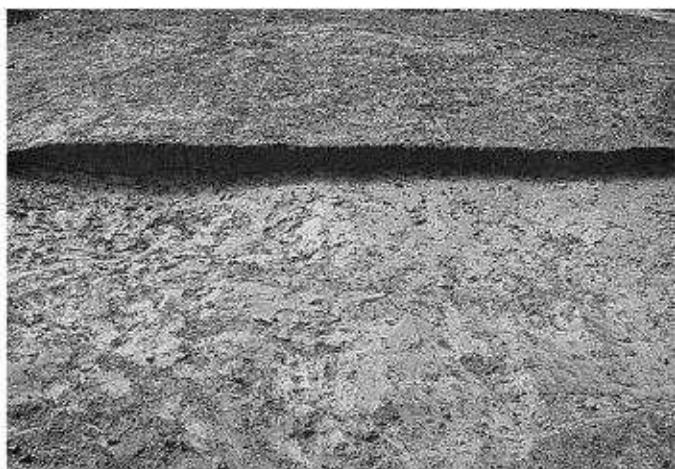
04SK055 完掘（北から）



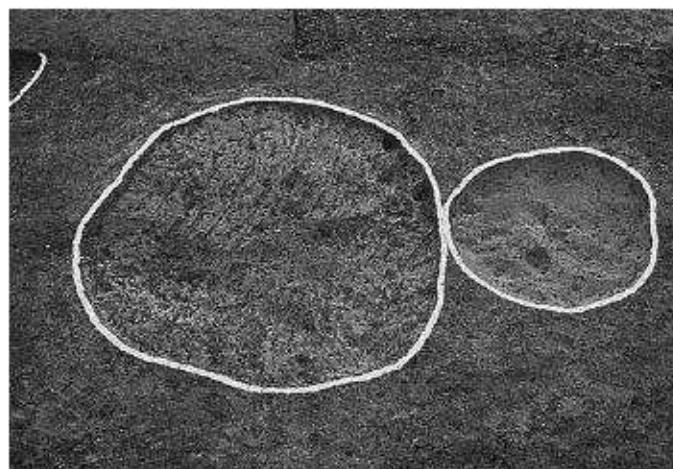
04SK055 遺物出土状況（東から）



04P077 断面（南から）



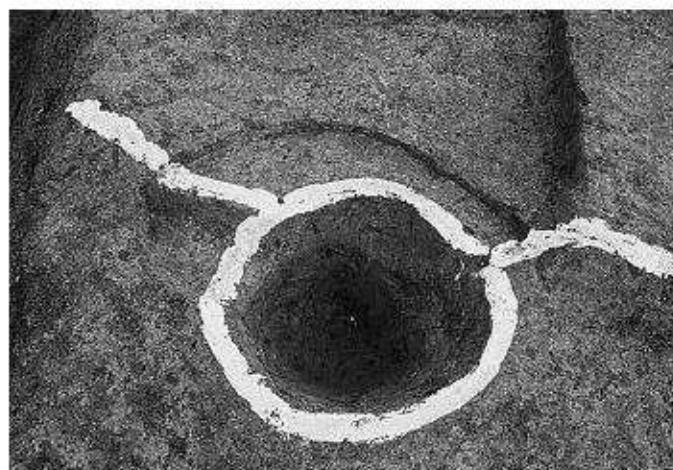
04SK076 断面（南から）



04SK076 完掘（東から）



04P058 断面（北から）



04P058 完掘（北から）



04焼土018 検出状況（東から）



04焼土018 断面（東から）



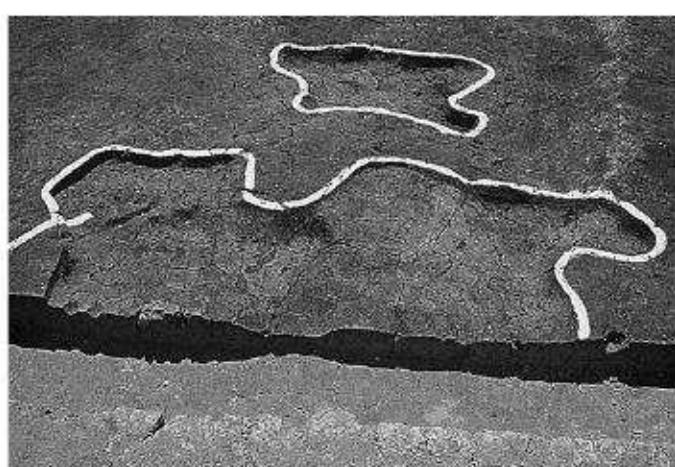
04焼土018 完掘（東から）



04焼土019 検出状況（東から）



04焼土019 断面（東から）



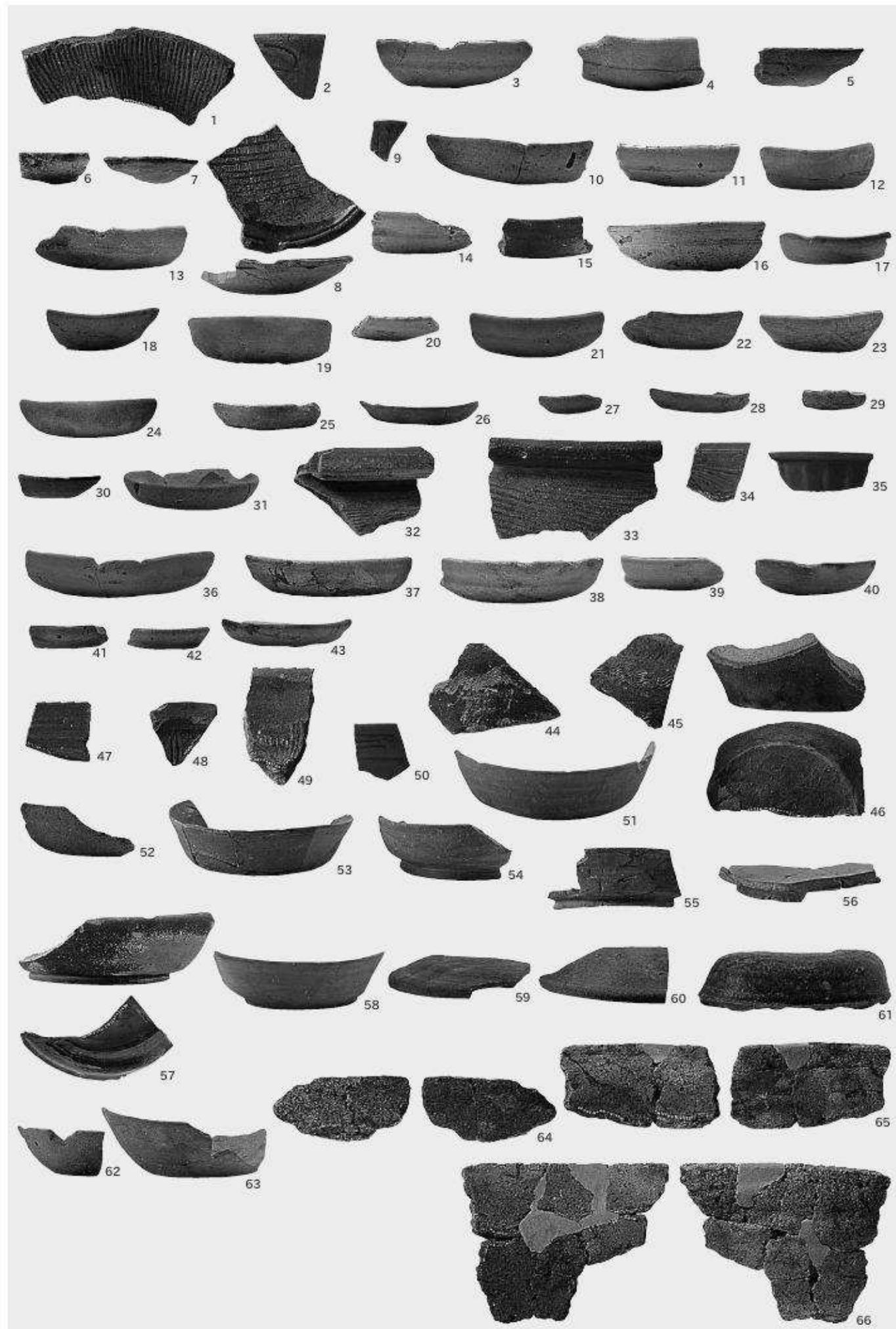
04焼土019 完掘（東から）

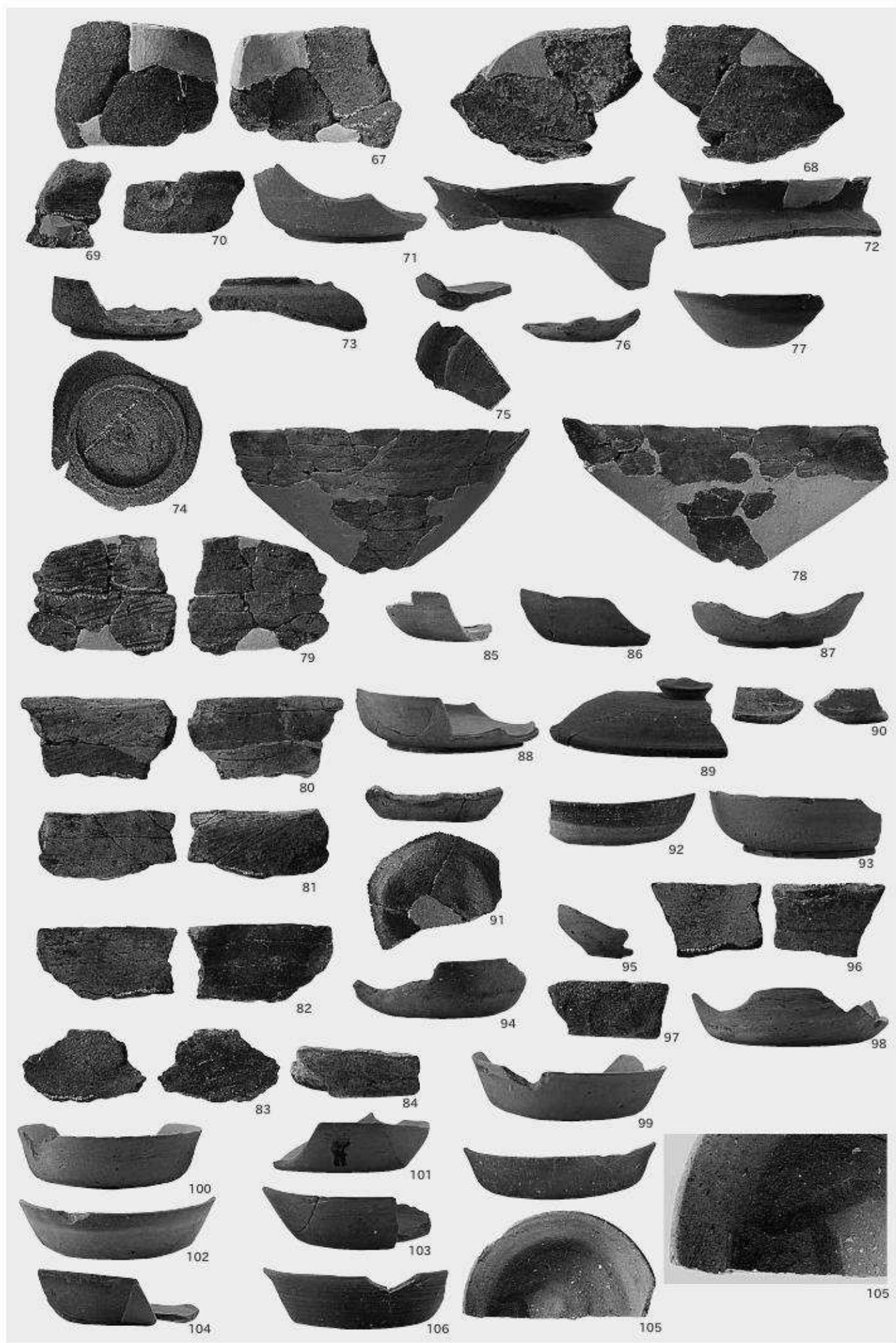


04SX066 断面（東から）



04SX066 完掘（東から）







報告書抄録

| ふりがな | ひがしさらまちいせき・しもおききたいせき に | | | | | | |
|---------------------|--|-------------|--|----------------------------|---|--------------------------|-----------------------|
| 書名 | 東原町遺跡・下沖北遺跡II | | | | | | |
| 副書名 | 一般国道8号 柏崎バイパス関係発掘調査報告書 | | | | | | |
| 巻次 | III | | | | | | |
| シリーズ名 | 新潟県埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第140集 | | | | | | |
| 編著者名 | 山崎忠良 波邊弘 河崎昭一 清田明子 近藤慎子 高橋知之 金内元 小村正之 | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 | | | | | | |
| 所在地 | 〒956-0845 新潟県新潟市金津93番地1 TEL 0250(25)3981 | | | | | | |
| 発行年月日 | 2005(平成17)年3月31日 | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 | 北緯 遺跡番号 | 東経 ° ° ° ° | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| ひがしさらまちいせき 東原町遺跡 | 新潟県柏崎市 東原町字原 19番地1ほか | 15205 | 710 | 37度 23分 30秒 (新座標) | 138度 35分 16秒 (新座標) 20030407 ~20031031 20040412 ~20040618 | 30,094 m ² | 一般国道8号柏崎 バイパス建設 |
| しもおききたいせき 下沖北遺跡 | 新潟県柏崎市 大字下方字下沖 38番地1ほか | 15205 | 708 | 37度 20分 55秒 (新座標) | 138度 33分 08秒 (新座標) 20040610 ~20041118 | 9,010 m ² | 一般国道8号柏崎 バイパス建設 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 時期 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 |
| 東原町遺跡 | 散布地 | 古代 | 溝(4条) | | 土師器、須恵器 | | |
| | 集落 | 中世(13~14世紀) | 掘立柱建物(4棟)、井戸(28基)、溝(92条)、土坑(55基)、ピット(400基以上)など | | 土師質土器、珠洲焼、越前焼、輸入陶磁器、石器、石製品、木製品、金属製品など | | 鍛冶関連工房、土師質土器の大量廃棄、埋納銭 |
| | 散布地 | 近世(17~19世紀) | 井戸(3基)、溝(11条)、土坑(17基)、ピット(3基)など | | 陶磁器、木製品、金属製品など | | 桶を使った墓 |
| 下沖北遺跡 | 集落 | 古代(8~9世紀) | 竪穴住居(1軒)、焼土(2基)、溝(40条)、土坑(9基)、ピット(23基)など | | 土師器、須恵器、製塩土器など | | 製塩土器が出土 |
| | | 中世(14世紀) | 水田跡、ピット(5基) | | 土師質土器、珠洲焼、木製品など | | 集落にともなう水田 |
| | 散布地 | 近世 | 溝など | | 陶磁器、金属製品など | | |

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第140集
一般国道8号 柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ
東原町遺跡・下沖北遺跡Ⅱ

平成17年3月25日印刷 編集・発行 新潟県教育委員会
平成17年3月31日発行 〒950-8570 新潟市新光町4番地1
電話 025（285）5511
財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市金津93番地1
電話 0250（25）3981
FAX 0250（25）3986
印刷・製本 長谷川印刷
〒950-2022 新潟市小針1丁目11番8号
電話 025（233）0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第140集『東原町遺跡 下沖北遺跡Ⅱ』 正誤表

2018年11月追加

| 頁 | 位置 | 誤 | 正 |
|----|----------|------------|------------|
| 抄録 | 東原町遺跡 北緯 | 37度23分30秒 | 37度23分17秒 |
| 抄録 | 東原町遺跡 東経 | 138度35分16秒 | 138度35分26秒 |
| 抄録 | 下沖北遺跡 北緯 | 37度20分55秒 | 37度20分59秒 |
| 抄録 | 下沖北遺跡 東経 | 138度33分08秒 | 138度33分16秒 |